

# 上竹野遺跡

## 第1・2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第234集



### 第一分冊 本文編

2019

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター





う　わ　た　け　の  
**上竹野遺跡**

第1・2次発掘調査報告書

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第234集

第一分冊 本文編

平成31年

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター







上竹野遺跡第1次調査区遠景（北から）



上竹野遺跡第2次調査区全景（北から）



1区北側縄文時代後期遺構群



2区弥生時代住居群（北から）



5区 SK514 再葬墓断面（北から）



SK514 出土合口土器棺



3区 SF60 出土土器



土偶·土制品

## 序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成 24 年 4 月 1 日に財団法人から移行）が発掘調査を実施した、上竹野遺跡の調査成果をまとめたものです。

上竹野遺跡は、山形県の北部に位置する大蔵村にあります。大蔵村は県内でも有数の豪雪地帯であり、長い歴史をもつ肘折温泉郷、日本の棚田百選にも選定されている「四ヶ村の棚田」など、温泉地や豊かな自然や景観を活かした村づくりが行われています。遺跡は、大蔵村清水字上竹野に所在し、最上川に合流する銅山川の左岸の段丘上に立地し、標高は約 70 m を測ります。山形大学による調査が行われており、山形県北地域の弥生時代遺跡として学史的に知られていました。

この度、一般国道 458 号道路改良事業に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、上竹野遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、縄文時代後期後葉の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などで構成される集落跡が明らかになりました。特に注目されるのは、弥生時代の前期から中期初め頃の集落跡が検出されたことです。当時期の県内ではまだ数少ない、竪穴住居跡や再葬墓などの遺構が確認されるなど、多大な成果を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成 31 年 3 月

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 廣瀬 涉

## 凡　例

- 本書は、道路改良事業（交付金）一般国道458号道路改良工事（本合海バイパス工区）に係る「上竹野遺跡」の発掘調査報告書である。
- 既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 調査は山形県最上総合支庁建設部道路建設課の委託により、公益財團法人山形県埋蔵文化財センター（平成24年4月1日に財團法人から移行）が実施した。
- 本書の執筆は、菅原哲文、長澤友明、三浦一樹が担当し、齋藤稔、黒坂雅人、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。本書の執筆分担は、以下のとおりである。

第I章	三浦一樹・菅原哲文
第II章	三浦一樹
第III章	三浦一樹・菅原哲文・長澤友明
第IV章	菅原哲文・長澤友明
第V章 第1・2節	(株) 加速器分析研究所
第V章 第3～5節	パリノ・サーヴェイ株式会社
第V章 第6節	遠藤英子
第V章 第7節	菅原哲文
第VI章	菅原哲文
付 編	小林 克
- 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。
- 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ST…堅穴住居跡	SB…掘立柱建物跡	SK…土坑	SP…ピット
SF…捨て場	SX…性格不明遺構	EU…埋設土器	
RP…登録土器・土製品	RQ…登録石器・石製品		
- 遺構・遺物実測図の縮尺は各図に示した。石器の自然面はドットで、節理面は斜線で表示した。その他の網点の用法は各図に示した。
- 基本順序および遺構覆土の色調記載については、2008年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。
- 発掘調査、整理作業および本書を作成するにあたり、下記の方々から御指導と御助言をいただいた。(敬称略)  
秋田県埋蔵文化財センター前斎長 小林 克 公益財團法人岩手県文化振興事業団 金子昭彦  
公益財團法人福島県文化振興財団 吉田秀享 北上市埋蔵文化財センター 君島武史  
流沢市埋蔵文化財センター 井上雅孝 仙台市教育委員会 荒井 格 東北歴史博物館 相原淳一  
東北大学名誉教授 須藤 隆 東北大学総合学術博物館 藤澤 敦 佐々木理 弘前大学 上條信彦  
国際教養大学 森岸 洋 明治大学 阿部芳郎 明治大学黒耀石研究センター 遠藤英子  
山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 渋谷孝雄 山形考古学会 佐藤庄一  
山形市立金井中学校 伊藤成賢 仙台市繩文の森広場 佐藤祐輔 佐藤信行 保角里志 秦 昭繁

## 調査要項

遺跡名	上竹野遺跡	
遺跡番号	365-004	
所在地	山形県最上郡大蔵村大字清水字上竹野	
調査委託者	山形県最上総合支庁建設部道路計画課	
調査受託者	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成24年度より）	
受託期間	平成27年4月1日～平成27年11月30日(H26繰越) 平成27年5月18日～平成28年3月31日 平成28年4月1日～平成28年7月20日(H27繰越) 平成28年5月27日～平成29年3月31日 平成29年4月1日～平成29年7月20日(H28繰越) 平成29年6月19日～平成30年3月31日 平成30年4月1日～平成30年6月30日(H29繰越) 平成30年7月1日～平成31年3月29日	
現地調査	平成27年6月1日～11月13日 平成28年6月27日～10月20日	
調査担当者	平成27年度 調査課長 齋藤敏行 調査課長補佐 須賀井新人 専門調査研究員 菅原哲文（調査主任） 調査員 安部将平 調査員 安達将行 平成28年度 業務課長 伊藤邦弘 業務課長補佐 須賀井新人 専門調査研究員 菅原哲文（調査主任） 調査員 三浦一樹 調査員 長澤友明 調査員 阿部明彦 平成29年度 業務課長 伊藤邦弘 業務課長補佐 須賀井新人 専門調査研究員 菅原哲文（整理主任） 調査員 長澤友明 平成30年度 業務課長 伊藤邦弘 課長補佐 須賀井新人 専門調査研究員 菅原哲文（整理主任） 調査員 長澤友明	
調査指導	山形県教育庁文化財・生涯学習課	
調査協力	大蔵村教育委員会	

山形県最上教育事務所

業務委託	地形・造構測量（俯瞰撮影）業務 株式会社ワクニ（平成 27 年度）
	地形・造構測量（俯瞰撮影）業務 国際航業株式会社（平成 28 年度）
	基準点測量業務 株式会社協同測量設計センター（平成 27・28 年度）
	遺物実測図作成業務 創和システム株式会社（平成 28 年度）
	株式会社アルカ（平成 28・29 年度）
	国際文化財株式会社（平成 30 年度）
	株式会社ラング（平成 30 年度）
理化学分析業務	株式会社加速器分析研究所（平成 27・28 年度）
	パリノ・サーヴェイ株式会社（平成 28・29・30 年度）
発掘作業員	池田タカ子 井関恭雄 大浦真也 黒坂敏夫 小屋千世子 小屋久好 今野博子 斎藤宗太郎 櫻井よう子 三條竹美 東海林るみ子 鈴木繁栄 鈴木忠幸 須藤和枝 高山信男 高山秀彦 高山有美子 長南 進 長浦昭子 羽賀康子 早坂喜美男 早坂松一 早坂節子 早坂武昌 早坂奈津美 森 芳子 矢口与義 八鍬なみ子 渡辺千代恵
	(五十音順)
整理作業員	池野 仁 遠藤 榮 遠藤和彦 大城麻衣 川瀬 哲 斎藤まゆみ 清水佳子 鈴木 薫 高野 優 高橋元伸 武田美和 半田 清 松田国明 三浦 豊 渡辺智美
	(五十音順)

# 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	1
3 整理作業の方法	3
II 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	6
III 調査成果	
1 遺跡の概要	12
2 検出された遺構	12
3 出土した遺物	33
IV 理化学分析	
1 上竹野遺跡における放射性炭素年代(AMS測定) および炭素・窒素安定同位体分析	288
2 上竹野遺跡における放射性炭素年代(AMS測定) および炭素・窒素安定同位体分析	295
3 上竹野遺跡理化学分析業務委託	304
4 上竹野遺跡理化学分析業務委託	313
5 上竹野遺跡の自然科学分析	326
6 上竹野遺跡ST202堅穴住居跡出土土器のレプリカ 法調査	335
7 上竹野遺跡出土土偶のX線CTスキャン撮影	338
V 総括	
1 繩文時代	341
2 弥生時代の遺構	342
3 弥生時代の遺物	344
付 編	
秋田県雄物川流域および日本海沿岸域の弥生初期相当 の墓制	361
報告書抄録	卷末
遺構平面図	付図

## 表

表 1 遺跡地名表	10	表 12 蛍光 X 線分析結果（化学組成）	305
表 2 土坑・性格不明遺構計測表	34	表 13 リン鐵・カルシウム分析結果	307
表 3 ピット・柱穴計測表	36	表 14 種実同定結果	308
表 4 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正値)	290	表 15 放射性炭素年代測定結果	314
表 5 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正値、曆年較正用 14C 年代、較正年代)	291	表 16 X 線回析測定条件	315
表 6 炭素・窒素安定同位体比及び含有量	291	表 17 種実同定結果	322
表 7 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正値)	297	表 18 放射性炭素年代測定結果	327
表 8 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正値、曆年較正用 14C 年代、較正年代)	298	表 19 スペクトル強度と判別指標値	329
表 9 炭素・窒素安定同位体比及び含有量	299	表 20 黒曜石原産地試料一覧	330
表 10 蛍光 X 線分析および岩石内眼鑑定試料一覧	304	表 21 黒曜石判定結果	332
表 11 測定条件	304	表 22 レプリカ法資料一覧	336
		表 23 地蔵田遺跡土器棺一覧	366

## 図 版

第 1 図 整理作業状況	5	第 26 図 1 区 SK66 ~ 68・71・153・154	63
第 2 図 調査区概要図	7	第 27 図 1 区 SK252・286・SL165	64
第 3 図 地形分類図	8	第 28 図 1 区 SX33・SX195・SK278	65
第 4 図 遺跡位置図	9	第 29 図 1 区 SX215・236・SP15 ~ 17・23・25・39・52・ 64・151	66
第 5 図 調査区全体図	42	第 30 図 1 区 SP152・155・156・245・157・159・162・ 210・211	67
第 6 図 遺構配置図 1	43	第 31 図 1 区 SP216・SF2(1)	68
第 7 図 遺構配置図 2	44	第 32 図 1 区 SF2(2)	69
第 8 図 遺構配置図 3	45	第 33 図 1 区 ST193	70
第 9 図 遺構配置図 4	46	第 34 図 1 区 ST193EL194・SP370・380・381・390 ~ 392・417・418	71
第 10 図 遺構配置図 5	47	第 35 図 1 区 SK302・309・310	72
第 11 図 遺構配置図 6	48	第 36 図 1 区 SK350・SP351 ~ 353・SK308・314	73
第 12 図 遺構配置図 7	49	第 37 図 1 区 SK348・354・359・360・362・364・365・ 374・SX312・SP333	74
第 13 図 1 区 東壁断面図	50	第 38 図 1 区 SK384・387	75
第 14 図 1 区 西壁・南壁断面図	51	第 39 図 1 区 SX315・325・SK363	76
第 15 図 1 区 ST1	52	第 40 図 1 区 SX326	77
第 16 図 1 区 ST1	53	第 41 図 1 区 SL301・304・SP282・336・355・366・ 371・388・411	78
第 17 図 1 区 ST1 楽土物分布図	54	第 42 図 1 区 SF136・ST193 檢出平面図	79
第 18 図 1 区 ST1 床面・住居内施設遺物分布図	55	第 43 図 1 区 SF136・ST193 断面図	80
第 19 図 1 区 ST38・SP55	56	第 44 図 1 区 SF136 平面図	81
第 20 図 1 区 ST38・SP86	57	第 45 図 1 区 SF136 断面図 2	82
第 21 図 1 区 ST38 遺物分布図	58		
第 22 図 1 区 SB95EB36・37・69・70	59		
第 23 図 1 区 SK14・19・21・26 ~ 28	60		
第 24 図 1 区 SK32・34・50・54・56	61		
第 25 図 1 区 SK58・59・61 ~ 63・65	62		

第 46 図	1 区 SF136 断面図	83	第 86 図	3 区 SF60 平面図	123
第 47 図	1 区 SF136F1a1 遺物平面図	84	第 87 図	3 区 SF60 断面図	124
第 48 図	1 区 SF136 北東部遺物平面図	85	第 88 図	3 区 SF60F1 ① 遺物平面図 1	125
第 49 図	1 区 SF136F1a2 遺物平面図	86	第 89 図	3 区 SF60F1 ②③ 遺物平面図 2	126
第 50 図	1 区 SF136F1b ①・② 遺物平面図	87	第 90 図	3 区 SF60F1 ④⑤ 遺物平面図 3	127
第 51 図	1 区 SF136F1b ③・④ 遺物平面図	88	第 91 図	3 区 SF60F2・F3 遺物平面図 4	128
第 52 図	1 区 SF136F2 遺物平面図	89	第 92 図	3 区 SF60F3 遺物平面図 5・断面図	129
第 53 図	2・4 区住居群平面図	90	第 93 図	3 区 SF135	130
第 54 図	2 区 ST202	91	第 94 図	5 区 東壁断面図	131
第 55 図	2 区 ST202 断面図	92	第 95 図	5 区 SK503・507・508・509	132
第 56 図	2 区 ST202 断面図	93	第 96 図	5 区 SK510・511・SX501	133
第 57 図	2 区 ST202 エレベーション	94	第 97 図	5 区 北側墓壙群・SK512・513	134
第 58 図	2 区 ST202F1 ① 遺物分布図	95	第 98 図	5 区 SK514	135
第 59 図	2 区 ST202F1 ② 遺物分布図	96	第 99 図	5 区 SK516・521	136
第 60 図	2 区 ST202F1 ③④ 遺物分布図	97	第 100 図	5 区 SK523・EU515	137
第 61 図	2 次調査 2 区 ST202F1 遺物分布図	98	第 101 図	5 区 SK525・528・529	138
第 62 図	2 区 ST202ED・EL・床面遺物分布図	99	第 102 図	1 区 ST1 出土土器 1	139
第 63 図	2 区 ST801・836・832・EL270・EP825・824・828	100	第 103 図	1 区 ST1 出土土器 2	140
第 64 図	4 区 調査区断面図	101	第 104 図	1 区 ST1 出土土器 3	141
第 65 図	4 区 遺構検出平面図	102	第 105 図	1 区 ST38 出土土器 1	142
第 66 図	4 区 遺物平面図	103	第 106 図	1 区 ST38・SK14・36・SB95EB69・70 出土土器	143
第 67 図	4 区 遺物平面図	104	第 107 図	1 区 SK14・19・21 出土土器	144
第 68 図	4 区 ST808	105	第 108 図	1 区 SK21・27・28 出土土器	145
第 69 図	4 区 ST808 断面図	106	第 109 図	1 区 SK34・54・56・58 出土土器	146
第 70 図	4 区 ST808 遺物平面図	107	第 110 図	1 区 SK59・61・65 出土土器	147
第 71 図	2 区 SK4・7・8・9・10・40	108	第 111 図	1 区 SK67・71・75・83・94・286・SP16・17・ 52・86 出土土器	148
第 72 図	2 区 SK51・106・138・143・147・168	109	第 112 図	1 区 SK18・22・30・31・33 出土土器	149
第 73 図	2 区 SK166・SP167・SK183・178・148・190・ SP191	110	第 113 図	1 区 SX73・77・78・SF2・SP264・北グリッド・表土 出土土器	150
第 74 図	2 区 SK196・197・230・SX140	111			
第 75 図	2 区 SX5・SP43・SP44～49	112	第 114 図	1 区 ST193・EL194・SK154 出土土器	151
第 76 図	2 区 西側断面図	113	第 115 図	1 区 SK153・302(1) 出土土器	152
第 77 図	2 区 SP137・141・142・169～172・176	114	第 116 国	1 区 SK302(2) 出土土器	153
第 78 図	2 区 SP177・179・180・181・199・232・SK161 .....	115	第 117 国	1 区 SK302(3) 出土土器	154
第 79 国	2 区 SF3 平面図	116	第 118 国	1 区 SK302(4) 出土土器	155
第 80 国	2 区 SF3 尖底状況	117	第 119 国	1 区 SK302(5)・303・308(1) 出土土器	156
第 81 国	2 区 SF133 遺物分布図 1	118	第 120 国	1 区 SK308(2)・309・310・314・316 出土土器	157
第 82 国	2 区 SF133 遺物分布図 2	119	第 121 国	1 区 SK327・334・347・348・351・359・360・ 362・374(1) 出土土器	158
第 83 国	2 区 SF133 下遺物分布・SK243・244・SL146・150 .....	120	第 122 国	1 区 SK374(2)・387・405・410・474・SP151・ 156・152 出土土器	159
第 84 国	3 区 遺構配図	121	第 123 国	1 区 SP155・158・159・162・210・214・216・ 234・245・246 出土土器	160
第 85 国	3 区 調査区断面図	122			

第124図	1区SP269・282・320・281・SK310出土土器・ 土製品···	161	第158図	2区SK238・243・244・256・271・SL150・ SP43・48・93・97出土土器···	195
第125図	1区SP321・324・331・335~337・341・355・ 366~368・370・371・377・388・393~395・ 401~403・411出土土器···	162	第159図	2区SP100・103・104・105・116・126・127・ 128・129・160・167・171・172・174・177・ 180出土土器···	196
第126図	1区SP411・415・416・419・424・426・427・ 429・432・436・439・442・444・446・449・ 451・454・473・482・483・SX195(1)出土土器···	163	第160図	2区SP184・191・219・232・257・272・274・ SX5・6・144・149・237・240・255出土土器···	197
第127図	1区SX195(2)・212・215・236・248出土 土器···	164	第161図	2区SF3出土土器1···	198
第128図	1区SX251・312・315・317・325・326(1)出土 土器···	165	第162図	2区SF3出土土器2···	199
第129図	1区SX326(2)・357・363出土土器···	166	第163図	2区SF133出土土器1···	200
第130図	1区SX376・397・430・431・SL165・グリッド・ 1次SF136出土土器1···	167	第164図	2区SF133出土土器2···	201
第131図	1区1次SF136出土土器2···	168	第165図	2区SF133出土土器3···	202
第132図	1区1次SF136出土土器3···	169	第166図	2区ST202・SF133出土土器4···	203
第133図	1区1次SF136出土土器4···	170	第167図	2区SF133出土土器5···	204
第134図	1区1次SF136出土土器5···	171	第168図	2区SF133出土土器6・遺構外出土土器1···	205
第135図	1区2次SF136出土土器1···	172	第169図	2区遺構外出土土器2···	206
第136図	1区2次SF136出土土器2···	173	第170図	4区ST801・808・EL270・EP817・830・ SP227出土土器···	207
第137図	1区2次SF136出土土器3···	174	第171図	4区ST808・832・ED810・819・826・834・ EL823・EP844・SP223・SF134・SX192出土土器···	208
第138図	1区2次SF136出土土器4···	175	第172図	4区SX192・SF134出土土器1···	209
第139図	1区2次SF136出土土器5···	176	第173図	4区SF134出土土器2···	210
第140図	2区ST202F1①出土土器1···	177	第174図	4区SF134出土土器3···	211
第141図	2区ST202F1②出土土器2···	178	第175図	4区SF134出土土器4···	212
第142図	2区ST202F1③出土土器3···	179	第176図	4区Ⅰ・Ⅳ層出土土器···	213
第143図	2区ST202F1③出土土器4···	180	第177図	4区Ⅱ層・表土・SF134出土土器···	214
第144図	2区ST202F1③出土土器5···	181	第178図	3区SF60出土土器1···	215
第145図	2区ST202F1③出土土器6・ST202F1②出土 土器1···	182	第179図	3区SF60出土土器2···	216
第146図	2区ST202F1②出土土器2···	183	第180図	3区SF60出土土器3···	217
第147図	2区ST202F1②出土土器3···	184	第181図	3区SF60出土土器4···	218
第148図	2区ST202F1②出土土器4···	185	第182図	3区SF60出土土器5···	219
第149図	2区ST202F1③出土土器1···	186	第183図	3区SF60出土土器6···	220
第150図	2区ST202F1③出土土器2···	187	第184図	3区SF60出土土器7···	221
第151図	2区ST202F1③出土土器3···	188	第185図	3区SF60出土土器8···	222
第152図	2区ST202Y・粘床出土土器···	189	第186図	3区SF60出土土器9···	223
第153図	2区ST202Y・周溝・柱穴・乳突出土土器···	190	第187図	3区SF60出土土器10・SF135(1)出土土器···	224
第154図	2区ST202出土土器・1・2区出土土製品···	191	第188図	3区SF60出土土製品···	225
第155図	2区SK4・7・8・9・110出土土器···	192	第189図	3区SF135(2)・SK261・263出土土器···	226
第156図	2区SK9・88・92・106・107・113出土土器···	193	第190図	5区SK503・507・511・512・519出土土器···	227
第157図	2区SK143・148・161・166・168出土土器···	194	第191図	5区SK513・516出土土器···	228
			第192図	5区EU515・SK514(1)出土土器···	229
			第193図	5区SK514(2)出土土器···	230
			第194図	5区SK514(3)出土土器···	231

第195図	5区 SK521(1) 出土土器	232	第234図	2区 SK4・9・139・143・148 出土石器	271
第196図	5区 SK521(2)・SK523・SP529 出土土器	233	第235図	2区 SK147・148・168・SL146・SP176 出土石器	272
第197図	5区 SK525 出土土器	234			
第198図	5区 SK528 出土土器	235	第236図	2区 SK238・SP45・46・128・160・218・276 出土石器	273
第199図	5区 SX501・SX506・SP522・グリッド(1) 出土土器	236	第237図	2区 SP199・232・257・266 出土石器	274
第200図	5区 グリッド(2) 出土土器	237	第238図	2区 SP232・SX149・255・237 出土石器	275
第201図	5区 グリッド(3) 出土土器	238	第239図	2区 SX149・237・SF3・133(1) 出土石器	276
第202図	1区 ST1・38 出土石器	239	第240図	2区 SF133(2) 出土石器	277
第203図	1区 ST38・193(1) 出土石器	240	第241図	2区 SF133(3) 出土石器	278
第204図	1区 ST193(2) 出土石器	241	第242図	2区 SF133(4) 出土石器	279
第205図	1区 ST193(3)・SK14・19・21 出土石器	242	第243図	2区 SF133(5)・136・グリッド出土石器	280
第206図	1区 SK27・34・54・59・65・68・71・SB95EB70 出土石器	243	第244図	4区 ST801・808 出土石器	281
第207図	1区 SK302・308・309・310・360 出土石器	244	第245図	4区 ST808 出土石器	282
第208図	1区 SP59・SK374・405 出土石器	245	第246図	4区 ST808・SF134(1)・SX192 出土石器	283
第209図	1区 SP151・156・162・234・245・281・282 出土石器	246	第247図	4区 SF134(2)・グリッド(1) 出土石器	284
第210図	1区 SP281・323・351・358・416・425・426・ 446・448 出土石器	247	第248図	4区 グリッド(2)・3区 SF60(1)・135(1)・SK53出土 石器	285
第211図	1区 SX195・215・SP462・465・473・477・ 478・485 出土石器	248	第249図	3区 SF60(2)・135(2)・5区 SK508・516・519・ SX506 出土石器	286
第212図	1区 SX195・215・251・312・315 出土石器	249	第250図	5区 SK507・508・514・520・523・525・グリッド 出土石器	287
第213図	1区 SX236・307・315・325・326・363 出土石器	250	第251図	層年較正年代グラフ(参考) 1	292
第214図	1区 SX315・326・363・SF2 出土石器	251	第252図	層年較正年代グラフ(参考) 2	293
第215図	1区 SF136 出土石器 1	252	第253図	炭素・窒素安定同位体比グラフ(参考)	294
第216図	1区 SF136 出土石器 2	253	第254図	層年較正年代グラフ(参考) 1	300
第217図	1区 SF136 出土石器 3	254	第255図	層年較正年代グラフ(参考) 2	301
第218図	1区 SF136 出土石器 4	255	第256図	炭素・窒素安定同位体グラフ(参考)	302
第219図	1区 SF136 出土石器 5	256	第257図	炭素安定同位体比 C/N 比グラフ(参考)	303
第220図	1区 SF136 出土石器 6	257	第258図	試料番号 1 の蛍光X線スペクトル(左: 励起電圧 15kv・右: 50kV)	305
第221図	1区 SF136 出土石器 7	258	第259図	試料番号 2 の蛍光X線スペクトル(左: 励起電圧 15kv・右: 50kV)	305
第222図	1区 SF136 出土石器 8	259	第260図	試料番号 3 の蛍光X線スペクトル(左: 励起電圧 15kv・右: 50kV)	305
第223図	1区 SF136 出土石器 9	260			
第224図	1区 SF136 出土石器 10	261	第261図	石製重飾品	311
第225図	1区 SF136 出土石器 11・グリッド出土石器	262	第262図	炭化種実	312
第226図	2区 ST202 出土石器 1	263	第263図	層年較正結果	314
第227図	2区 ST202 出土石器 2	264	第264図	X線回析図(1)	317
第228図	2区 ST202 出土石器 3	265	第265図	X線回析図(2)	318
第229図	2区 ST202 出土石器 4	266	第266図	FT-IRスペクトル(1)	319
第230図	2区 ST202 出土石器 5	267	第267図	FT-IRスペクトル(2)	320
第231図	2区 ST202 出土石器 6	268	第268図	電子顕微鏡写真	323
第232図	2区 ST202 出土石器 7	269			
第233図	2区 ST202 出土石器 8	270			

第 269 図 炭化種実	324	第 288 図 上竹野遺跡土器・石製品集成図	353
第 270 図 歴年較正結果	328	第 289 図 上竹野遺跡石器集成図 1	354
第 271 図 黒曜石产地一覧	331	第 290 図 上竹野遺跡石器集成図 2	355
第 272 図 出土骨	332	第 291 図 宮城県仙台市泉区赤津遺跡出土の大洞 A2 式土器	356
第 273 図 黒曜石产地推定結果（1）	333	第 292 図 宮城県栗原市青木畠遺跡出土の弥生時代前期の 土器	356
第 274 図 黒曜石产地推定結果（2）	334	第 293 図 宮城県栗原市山王圓遺跡層別土器集成図	357
第 275 図 上竹野遺跡レプリカ資料と頭髪鏡写真（1）	336	第 294 図 山形県の遺跡分布図	358
第 276 図 上竹野遺跡レプリカ資料と頭髪鏡写真（2）	337	第 295 図 上竹野遺跡縄文時代遺構分布図	359
第 277 図 X 線 CT撮影の実施状況	339	第 296 図 上竹野遺跡弥生時代遺構分布図	360
第 278 図 土偶 1 の X 線 CT 撮影による画像（上：正面・ 下：断面）	339	第 297 図 梨ノ木塚遺跡の地形と遺構配置	362
第 279 図 土偶 2 の X 線 CT 撮影による画像（上：正面・ 下：断面）	340	第 298 図 梨ノ木塚遺跡土器棺（SX160・SX161）	363
第 280 図 上竹野遺跡出土弥生時代壺の器面調整状況（左：外 面・右：内面）	340	第 299 図 梨ノ木塚遺跡土器棺（SX09）	364
第 281 図 上竹野遺跡縄文土器集成図 1	346	第 300 図 梨ノ木塚遺跡土器棺（SX53）	365
第 282 図 上竹野遺跡縄文土器集成図 2	347	第 301 図 梨ノ木塚遺跡土器棺（SX11）	365
第 283 図 上竹野遺跡弥生土器集成図 1	348	第 302 図 館の上遺跡、館の上遺跡の位置と地形	367
第 284 図 上竹野遺跡弥生土器集成図 2	349	第 303 図 館の上遺跡、土器棺墓の分布	367
第 285 図 上竹野遺跡弥生土器集成図 3	350	第 304 国 館の上遺跡土器棺および土壙墓内出土の重飾・ 玉類	368
第 286 図 上竹野遺跡弥生土器集成図 4	351	第 305 国 館の上遺跡 SR311 土器棺内 重飾出土状況	368
第 287 図 上竹野遺跡弥生土器集成図 5	352	第 306 国 館の上遺跡 入れ子になった土器棺 (190a・190)	368

## 写真図版

卷頭写真 1	上竹野遺跡第 1 次・2 次調査区遠景	卷頭写真 3	5 区 SK514 再構築断面・SK514 出土合口土器棺
卷頭写真 2	1 区北側縄文時代後期遺構群・2 区弥生時代住居群	卷頭写真 4	3 区 SF60 出土土器・土偶・土製品

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経緯

上竹野遺跡は、大蔵村清水・合海地区から南 1.6km の河岸段丘上にある。本遺跡は花車円端飾によって多くの遺物が収集されるなど、昭和初期より遺物の散布が確認されていた。その後、昭和 27 年の最上地歴学会の発掘調査、29 年の山形大学教育学部・致道博物館の共同発掘調査の計 2 度の発掘調査が行われ、現在では縄文時代晚期から弥生時代中期の遺跡として著名である。これらの発掘により、上竹野遺跡は昭和 38 年 3 月刊行の『山形県遺跡地名表 理蔵文化財包蔵地一覧』に縄文時代の集落跡（遺跡番号 741）及び弥生時代の集落跡（遺跡番号 744）として登録された（山形県教委 1963）。3 年後の昭和 41 年 3 月刊行『全国遺跡地図（山形県）』では、ともに散布地に変更されている（文化財保護委員会 1966）。

『山形県遺跡地名表』をみると縄文時代は大木 2 式・大洞 A 式・大洞 A' 式期、弥生時代は棚倉式期として認識されており、上竹野遺跡出土土器を分析した犬飼安太郎も、大洞 A' 式・福浦島下層式・棚倉式に併行する土器群としている（犬飼 1959）。

今回行った第 1・2 次発掘調査は、山形県最上総合支庁建設部道路建設課による道路改築事業国道 458 号バイパス工事に起因する。本事業に先立ち、県教育委員会によって平成 25・26 年度に試掘調査が行われた。平成 25 年度は国道付け替え部分に計 5 本のトレンチを設定したが、遺構・遺物とともに検出されなかった。平成 26 年度はバイパス本線上の試掘調査が行われ、計 7 本のトレンチを設定し、事業区南端以外の 6 本で縄文時代晚期から弥生時代の遺構・遺物が検出された。これにより、発掘調査範囲はバイパス本線上の 3,650 m<sup>2</sup>が対象となった。

これを受けて、公益財團法人山形県理蔵文化財センターが平成 27 年 6 月 1 日から 11 月 13 日まで記録保存のための第 1 次緊急発掘調査を行った。その結果、縄文時代後期の竪穴住居跡や弥生時代の捨て場・竪穴住居跡

が検出され、多量の遺物が出土したことから、調査期間の延長を打診、次年度に繰越すことになった。

また、平成 27 年度の発掘調査期間中、平成 25 年度に試掘調査を行った国道付け替え部にあたる、段丘斜面より遺物が出土するとの報告を受けた。これにより、山形県教育委員会によって、上竹野遺跡の東側近接地の追加試掘調査が行われた。事業予定地に計 3 本のトレンチを設けたところ、縄文時代の遺構・遺物が出土したため、上竹野遺跡の範囲修正及び調査範囲の拡張（約 700 m<sup>2</sup>）が必要となった。

これを受け、公益財團法人山形県理蔵文化財センターが平成 28 年 6 月 27 日から 10 月 20 日まで記録保存のための第 2 次緊急発掘調査を、前年度に引き続き行った。調査範囲は前年度の未調査部分を含め 1,469 m<sup>2</sup>である。本調査でも、多くの遺構・遺物を検出した。調査範囲は第 1 次と合わせると計 5,119 m<sup>2</sup>であった。

また平成 28 年度の第 2 次発掘調査期間中、上竹野遺跡より南 250m に遺物がまとめて出土するという報告を発掘作業員の三條竹美氏より受け、踏査を行った。その結果、縄文時代中期の石棒及び土偶・弥生時代の太型蛤刃と推測される石斧が出土したことを見認めた。その後、文化財保護法第 96 条により、大蔵村教育委員会から山形県教育委員会へ新規遺跡登録の申請をし、上竹野 2 遺跡（遺跡番号 365-013）が新たに登録されることとなった。

## 2 調査の方法と経過

第 1 次調査は、平成 27 年 6 月 1 日から開始した。調査区が広いために、期間の前半と後半で調査区を分け、前半が終了した段階で埋戻しを並行して行うという工程をとった。

まず、6 月 4 日から 1 区北側、8・9 日からは 2 区西・3 区東側の表土除去及び面整理を併行して行い、遺構検出を進めた。重機による表土除去は 10 日には終了した。よって 11 日からは各調査区の基本層序の断面図作成、土層注記を行った。また、遺構検出時に出土した遺物の

## I 調査の経緯

登録及び出土状況の写真撮影も併行して進めた。調査区全体の遺構検出は6月25日にはほぼ終了し、26日以降、遺構の精査及び遺物の取り上げ、遺構平面図・断面図の作成、遺構断面・俯瞰、遺物の出土状況の写真撮影などの記録作業を進めた。6月18日から委託による基準点測量を行い、23日に終了した。

遺構の精査は2区の遺物包含層や土坑を中心に進め、7月10日以降、1区の竪穴住居跡の精査も開始した。また、15日からは3区のSF60捨て場の精査を開始した。1区では27日に新たな住居跡、8月5日には掘立柱建物跡を検出、精査を行った。8月7日にはほぼ1区の調査を終えた。なお6日には調査区の空中撮影を行った。

8月8日には第1回となる現地説明会を開催し、50名以上の方々に参加していただいた。

8月20日までに1区北の調査終了区の西側を重機により埋め戻し、そこを残土置き場とした。また、21日からは1区南側、24日からは2区東側及び3区西、4区の表土除去を開始し、後半調査区の面整理を行った。それに併行して前半調査区の2区西側は埋め戻しを行い、駐車場を造成した。

8月27日には3区SF60から弥生時代と考えられる土偶が頭部を欠いた状態で出土した。表土除去が完了した1・2・4区の後半調査区からは遺物包含層を広範囲に検出した。2・4区にサブトレンチを入れたところ、層厚30cm以上あり、下位に遺構もみられることから調査期間の延長が必要と判断した。

調査区拡張に伴い、9月7日に委託による基準点測量を行った。同日より2・4区の包含層の精査を開始した。また、この頃より5区に遺物の散布が確認されたことにより、前項で述べた追加試掘調査が行われることとなつた。

10月21日、1区南にある包含層を掘り下げたところ石臼が検出されたためST193住居跡として登録した。また、2区の北側の包含層下でも周溝やかげ跡を確認したため、ST202住居跡として登録した。

10月23日には、大蔵村立大蔵小学校の児童らによる遺跡見学及び発掘体験を開催した。

10月31日には第2回となる現地説明会を開催し、50名以上の方々に参加していただいた。

11月5日には業務委託による空中写真撮影を実施、

また、6日までに調査区の全景写真を撮影した。

11月9日から次年度調査区を除く調査区の埋め戻しを開始し、11日には終了した。12日までに遺構の精査を終了し、13日に第1次調査を終了した。

第2次調査は、平成27年6月27日から開始した。前年度調査区である1区は面整理を進め、6月30日までに遺構検出が終了した。5区南側は7月5日までに重機による表土除去が終了、8日には遺構検出に至った。よって7月11日以降、遺構の精査及び遺物の取り上げ、遺構平面図・遺構断面図の作成、遺構断面・俯瞰、遺物出土状況の写真撮影などの記録作業を進めた。なお、5区北側は立木や電柱などにより重機による表土除去は難しいと判断し、人力による表土除去を精査と併行して行った。

7月14日には大蔵村立大蔵小学校の児童らによる現場見学と発掘体験を実施した。

7月24日以降、前年度調査区である2・4区間の表土除去、8月1日から精査を開始した。8月10日には、5区北側の表土・立木の除去がおよそ終了し、土器埋設遺構を4箇所ほど確認した。

9月2日、ピットから弥生時代と考えられる頭部・脚部欠損の土偶が出土し、また、第1次調査では包含層と認識していた4区において、壁の立ち上がりが明瞭に確認できたことにより、新たに弥生時代と考えられるST801竪穴住居跡として登録した。同月7日、2区竪穴住居跡に4条の周溝がめぐることを確認した。同月14日には4区西側に周溝の一部を確認したため、調査区の拡張を行い、新たにST808竪穴住居跡を検出した。このように遺構・遺物数の増加や天候の影響から、当初予定していた調査期間を約2週間延長し、10月20日までとした。

9月24日には現地説明会を開催し、70名以上の方々に参加していただいた。

9月30日には調査区全景の空中撮影を行った。図化用写真撮影は10月7日に行った。同日には、東北大名誉教授須藤隆氏に遺跡の調査指導を頂いた。10月12日、5区北側に新たに土器埋設遺構を検出し、合計10基となった。

10月20日までは精査を終了し、調査が終了した地区から埋め戻しを開始、また事務所機材の搬出を行い、

第2次調査は終了した。

なお、第1・2次調査とともに調査区内に設けたグリッドは4m四方とした。グリッドの方角は平面直角座標系第X系（世界測地系）に沿う。グリッドの名称はハイフンによって繋げられたアルファベット及びアラビア数字（AA-01）で表した。アルファベットは北に向かうごとに、AA、AB、AC…AZ、BA、BB…となり、アラビア数字は東西に増減する数字を示す。グリッド名が示す範囲は、それぞれの数字が示す南北軸と東西軸の交点の第一象限となる4m四方の16nfである。

遺物の出土土地点の記録については、遺構から出土したものは遺構と層位とグリッドにより、遺構外から出土したもののはグリッドと層位によった。

### 3 整理作業の方法

整理作業は、平成27～30年度に実施した。

平成27年度は、出土遺物の洗浄、注記、復元などの基礎整理作業を実施した。出土遺物には遺跡名と出土位置を注記した。また、遺構図面と遺構写真的整理を行った。その後、図面のトレースや写真の現像を行った。放射性炭素年代測定や炭素窒素安定同位体分析などの理化学分析業務も実施した。

平成28年度は、前年度に引き続き出土遺物の洗浄、注記、復元を進め、3区出土土器を中心で実測も進めた。また、石器・土器の遺物委託実測を依頼した。遺構図面のトレース及び写真的整理・現像を進め、ともに終了した。また、現場で採取した土壤サンプルの選別も実施した。前年と同様に、蛍光X線分析による石材同定や土壤理化分析などの理化学分析業務も実施した。

平成29年度は前年度に引き続き出土遺物の洗浄、注記、土器の復元を進めた。また、1区SF136捨て場・2区ST202竪穴住居跡などの遺構土壤のフルイ掛け(5mm×1mm メッシュ)を行い、微小遺物の回収を行った。1区、3区の土器の実測・トレース作業を行った。業務委託では、5区の土器を中心に遺物委託実測を行い、放射性炭素年代測定や炭素窒素安定同位体分析などの理化学分析業務を実施した。

平成30年度は石器と2・4区土器の実測・トレース作業、デジタルカメラによる遺物写真撮影・現像、遺構・遺物図の作成、土器・石器の遺物委託実測、遺物観察表

の編集を順次行いながら本文の執筆を進め、報告書の刊行を行った。

次に、上竹野遺跡の資料比較検討および調査指導について以下にまとめた。

平成27年度の資料比較検討について述べる。平成28年2月20日に北上市埋蔵文化財センターにおいて、弥生時代前期の北上市外山遺跡、立花南遺跡出土の土器と、九年橋遺跡の土偶・土製品、石製品の資料調査を行った。この地域の青木畠式土器の内容の把握に努めた。九年橋遺跡では縄文時代晩期の大量の石棒・石刀が出土しており、粘板岩を主とする石材が使用されていた。また平成28年2月21日に、岩手県立博物館において上竹野遺跡出土の土偶・土製品等について金子昭彦学芸員より御教示いただいた。頭部を欠く土偶については、刺突文土偶と考えられる事、時期は弥生時代前期に位置づけられると考えられるとの所見であった。

平成28年3月4・5日に、宮城県多賀城市の東北歴史博物館において、藏王町鍛冶沢遺跡出土の縄文後期後葉・晩期末・弥生時代初めにかけての、土器・土偶・石製品等を検討した。当遺跡では晩期末から弥生時代初めの再葬墓が調査されており、出土した土器棺の観察を行った。大崎市北小松遺跡出土の土偶・石製品等の検討を行った。北小松遺跡では上竹野遺跡と形態がよく類似した土偶が出土しており、大沼A'式に位置づけられている。ただ、中央に近い作りで文様に若干の相違が認められる。その他、石巻市山居遺跡出土の縄文後期を中心とした土器を観察した。上竹野遺跡でも後期初頭の宮城県内で出土しているものとの類似資料が確認された。

平成28年10月6・7日に、東北大名督教授須藤隆氏に上竹野遺跡の弥生時代の遺構・遺物について御指導いただいた。発掘調査現地にて、検出されていた埋設土器群は弥生時代の再葬墓であること、また再葬墓と弥生時代住居群の調査方法で御助言をいただいた。

平成29年7月6・7日にかけて、明治大学黒曜石分析センターの遠藤英子氏に来所いただき、上竹野遺跡の弥生土器における栽培植物の種子圧痕の調査とレプリカ法について御指導いただいた。内容の詳細については、第IV章第6節について御寄稿いただいた。

平成29年2月23日～4日にかけて、秋田県埋蔵文化財センターと横手市教育委員会において、上竹野遺跡

で出土した弥生時代遺物の比較検討を行った。秋田県埋蔵文化財センターでは上熊ノ沢遺跡、寒川Ⅰ遺跡、横手市教育委員会では梨ノ木塚遺跡、オホン清水A遺跡の遺物を実見した。秋田県海岸部の遺跡では、土器は上竹野遺跡との類似性が低く、津軽平野～北秋田、北上川流域の影響を強く受けている。また、横手市内の遺跡においては、土器埋設遺構やベンガラを散布した土坑など、上竹野遺跡の状況と類似した事例が見られた。土器については共通する点も多いが、鉢の変形工字文の技法や赤地文の有無などの相違点が見られた。

平成 29 年 8 月 23 日、大蔵村教育委員会において、山形大学調査資料（昭和 29 年実施）上竹野遺跡と隣に位置する白須賀遺跡の遺物との比較検討を行った。上竹野遺跡（昭和 29 年）については、発掘が行われたのはセンター調査 1 区より西側の範囲で、遺物は弥生時代前期～中期初め頃と見られ、センター調査の遺物とはほぼ同時期であると思われる。繩文土器も、時期的相違は見られなかった。白須賀遺跡については繩文時代中期の大木 8a・8b の時期で少量の大木 9・10 時期のもののが含まれる。白須賀遺跡の時期が上竹野遺跡で人の居住活動が希薄な時期に該当することが改めて確認された。

平成 29 年 11 月 15 日～17 日にかけて、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターで上竹野遺跡出土遺物との比較検討、滝沢市埋蔵文化財センターにて、弥生土器に認められる種子圧痕の比較検討を行った。岩手県埋蔵文化財センターでは金附遺跡の土器と土偶、石製品の実見を行った。北上市金附遺跡では大洞 A' 式～八起島式中・新段階の土器が出土しており、器形や明褐色の焼成、雲母が含まれる胎土、王字状・三角形状の文様など上竹野遺跡では認められない特徴を確認した。金附遺跡では多数の結髪土偶・刺突文土偶が出土しており、背面に「6」字状の文様を施し、腕や腰に刺突を充填するなど上竹野遺跡で出土した土偶との類似点が見られた。墓壙の副葬品として玉類も多数出土しているが、軟質な石材を使用していた。滝沢市埋蔵文化財センターでは湯舟沢遺跡出土の弥生土器について種子圧痕サンプルの観察を行った。弥生時代後期の土器を中心にして、ヒエ・キビ・アサ等の圧痕の観察を行った。井上雅孝氏によると、レプリカ法を用いて鑑定した結果、イネと目視で同定されたサンプルの大半は炭化した木材の誤認であった。

との情報をいただき、種子圧痕同定を行う際もレプリカ法を用いる必要性があることを改めて確認された。

平成 29 年 12 月 22 日に新庄ふるさと歴史センターで山形県文化財に指定されている上竹野遺跡出土の弥生土器の調査と、伝上竹野遺跡出土の刺突文土偶の頭部の写真撮影、実測図作成を行った。弥生土器の時期は砂沢式期～八起島式期と見られ、センター発掘調査で出土した遺物の時期と一致する。土偶頭部はセンター調査で出土した土偶とは別個体であるものの、頭頂部の結髪や刺突文などの特徴から弥生時代前期であると考えられる。

平成 30 年 3 月 19・20 日にかけて、前秋田県埋蔵文化財センター所長小林克氏に、上竹野遺跡の弥生時代前期から中期初めの遺構群と出土遺物を中心として調査指導をいただいた。再発掘に関しての事例を御教示いただき、秋田県内の事例に関して、付編に御寄稿いただいた。

平成 30 年 4 月 16・17 日において、国際教養大学の根岸洋氏に、上竹野遺跡の弥生土器について時期的や地域的な位置づけについて御教示いただいた。当遺跡に砂沢式土器の搬入品と考えられる土器の資料や、北陸系と考えられる遺物の存在を指摘された。

平成 30 年 10 月 2 日に伊藤成賢氏に、上竹野遺跡出土の石器石材について御指導いただいた。石器約 200 点について石材を同定していただいた。

平成 30 年 8 月 1・2 日にかけて東北歴史博物館、仙台市教育委員会において、弥生土器や石器類の比較検討を行った。東北歴史博物館では青木畠遺跡の遺物を実見し、弥生土器において上竹野遺跡の遺物とおおむね相違がないことを確認した。仙台市教育委員会では中在家南遺跡、郡山遺跡、高田 B 遺跡の弥生時代遺物の実見を行った。土器は仙台平野由来の文様が施されているが、器形や赤色など、上竹野遺跡との共通点が多数認められた。石器に関しては稻作に関わる石器が多数出土している。石包丁、大型板状石器など稻作に関する特徴的な石器が出土しているが、上竹野遺跡には確認されていない。また、仙台市教育委員会荒井格氏より、上竹野遺跡出土石器には、太形蛤刃石斧と、扁平石斧が確認される事、太形蛤刃石斧の未製品と思われる資料や、石斧加工に使用されたと考えられる敲石が出土している事を指摘され、上竹野遺跡で実際に石斧製作が行われ伐採や木製品の加工が行われていたと考えられている。



## II 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

上竹野遺跡が所在する大蔵村は、山形県のほぼ中央に位置し、北緯 38 度 43 ~ 29 分、東經 140 度 16 ~ 05 分の範囲にあり面積は約 213km<sup>2</sup> と南北に長い。新庄盆地の南西部に位置しており、本村西から南側には出羽山地の急峻な山々が連なっている。特に村南側である肘折地区周辺は、約一万年前に噴火した肘折火山の噴火口に位置しており、その周囲にある志賀山・地蔵盛山・三角山などの山々が外輪山となっている。このように本村の大部分は山岳地帯が占めている。

一方、村北部では最上川が南東側から流入し、北西方に向流しているほか、南からは銅山川や赤松川が最上川に向かって流れ込む。銅山川（別称鳥川）は本村南山の月山南東斜面に源を発し、月山を始めとする出羽山地から湧き出る豊富な水量をもつ累川として知られている。赤松川が銅山川に合流する通り地区から、最上川合流部付近には広大な沖積平野を形成しているほか、河岸段丘が発達している。

段丘は低位・中位・高位段丘に分けられており、地元ではそれぞれ一の台・二の台・三の台と呼ばれている。上竹野遺跡は銅山川の左岸、低位段丘に位置している。同一段丘上、約 250m 南東には新たに発見された上竹野 2 遺跡も位置する。上竹野遺跡では河岸段丘際に遺構が多く分布している。標高は 60 ~ 80m 程度で、現況は畑に利用されている。北に 500m ほど離れたところにある低位段丘上には縄文時代中期の白須賀遺跡が、1 km 北西の中位段丘上には中世の城館跡である清水城跡が位置している。これらの段丘下に広がる沖積平野には水田が広がっている。

本村は盆地に位置するため、一年を通して寒暖差が激しく、また年間降水量も多い。村北部と南部では気温差が 2 ℃ 程度あり、後者のほうが低い傾向にある。冬期の最低気温が -22.9 ℃（昭和 59 年）を記録したこともある。特に冬期の肘折地区は年間の降雪量が 10 ~ 20m に達し、昭和 49 年には 470cm もの最深積雪を記録す

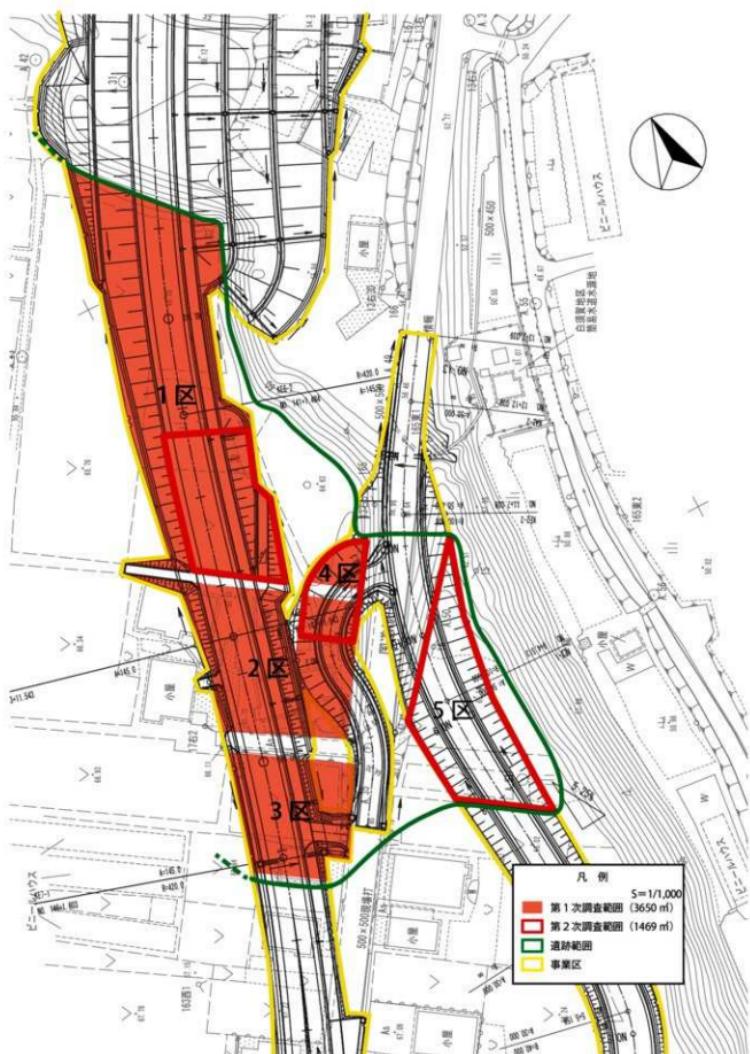
るほどで、特別豪雪地帯に指定されている。上竹野遺跡の位置する段丘上も同様に降雪量は多く、冬期の 1・2 月は常に 2m ほどの積雪がみられる。

### 2 歴史的環境

大蔵村には 12 箇所の遺跡の存在が確認されているに過ぎない。いずれも低位・中位段丘上に位置する傾向にある。今回の調査で新たに追加された上竹野 2 遺跡のように、未発見の遺跡が数多くあると考えられる。村内に位置する遺跡で発掘調査が行われたのは白須賀遺跡（4）・上竹野遺跡（1）・清水城跡（3）の 3 箇所にすぎない（括弧内の数字は第 3 図に対応する）。

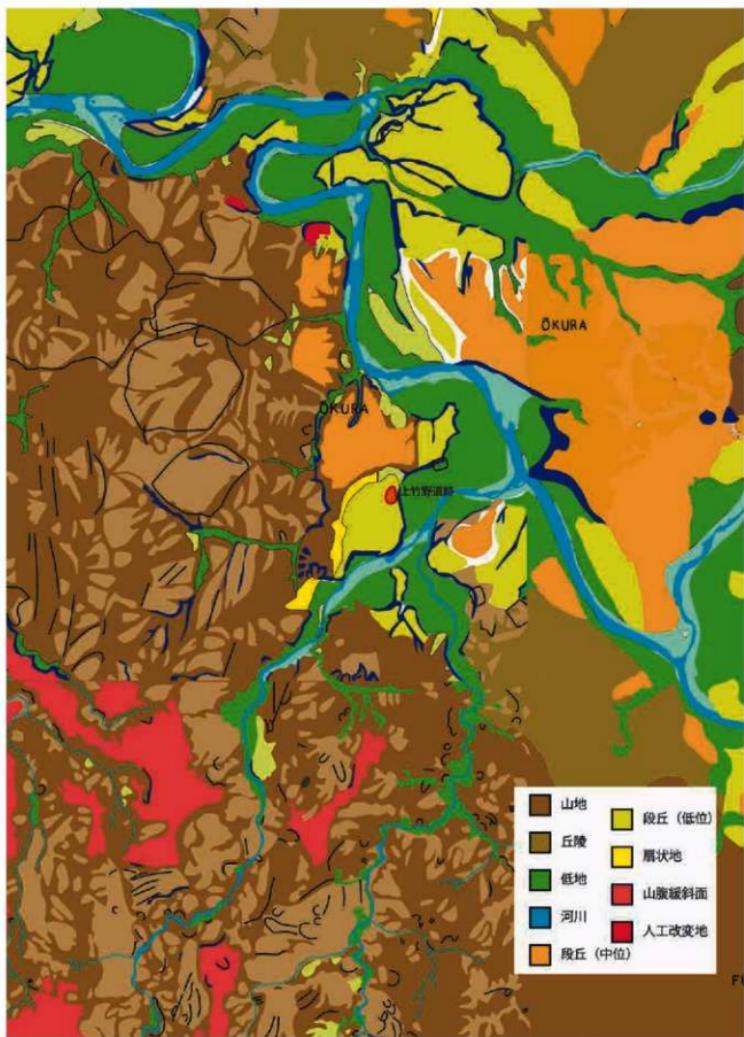
白須賀遺跡は先述の通り、上竹野遺跡より北に 500m ほどいった低位段丘上の突端に位置する。本遺跡は昭和 29 年に山形大学や致道博物館、さらに昭和 32 年には真室川高校の大友義助らが発掘調査をおこない、多量の遺物が出土した（赤塚 1961）。縄文時代中期の大木 8a ~ 10 式土器が出土し、特に大木 8a 式の往口土器は著名である。また、土偶の脚部や足形のついた土製品も出土している。土偶の脚部は、隣接する舟形町の西ノ前遺跡から出土した国宝「縄文の女神」とよく類似している。また、第 2 次調査では複式炉が検出している。財団法人山形県埋蔵文化財センター（以下、山形理文と呼ぶ）が調査を行った鮎川村小坂遺跡でも同時期と考えられる複式炉をもつ住居跡が 14 棟検出されているほか（水戸部ほか 2006）、同村庭月観音堂遺跡も確認調査によって中期末から後期初頭の配石遺構が検出されている（安彦 1989）。

白須賀遺跡からは縄文時代後期の土器も少量ながら出土している。また、今回の上竹野遺跡の調査でも後期前葉・後葉と考えられる土器が出土している。本遺跡からほど近い戸沢村の津谷遺跡では多数の土坑・ピット・埋設土器から後期前葉の南境 1・2 式併行の資料が出土した（小関・渡辺 1997）。最上町では 2000 年に山形理文が調査したかっぱ遺跡が著名である（水戸部 2003）。7 棟の掘立柱建物跡や竪穴住居跡、旧河道が検出されて



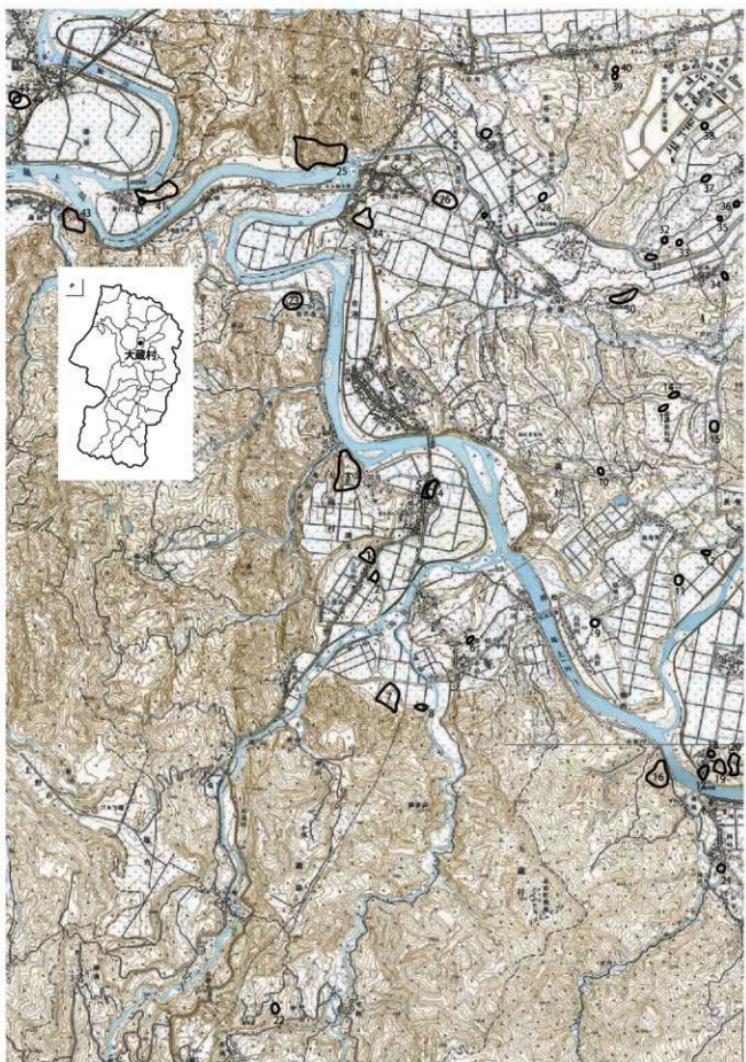
第2回調査区概要図

## II 遺跡の位置と環境



\*本図は「土地分類基本調査 新庄」(山形県企画調整部土地対策課 1979)、同じく『尾花沢』・『月山』・『清川』の「地形分類図」(2万5千分の1)を合成し、加筆したものである。

第3回地形分類図



※国土地理院発行2万5千分の1地形図「古口」・「肘折」・「舟形」・「海谷」を、5万分の1に縮小使用

第4図遺跡位置図

## II 遺跡の位置と環境

おり、特に掘立柱建物跡は県内でも例が少なく貴重である。時期は南境2式・宝ヶ峰1式併行と考えられている。最上地方の後期後葉のまとめた資料は出土しないものの、真室川町の小川内遺跡などが知られる。

上竹野遺跡は縄文時代前期及び晩期から弥生時代中期の遺跡として有名であったことは先述した通りである。同様に最上地方で縄文時代晩期の遺跡として著名なのは、真室川町大字釜淵字五郎前にある金沢C遺跡である。本遺跡からは国指定重要文化財に指定された晩期末の土偶が出土している。2001年には山形理文による発掘調査が行われている（黒坂・豊野2003）。晩期中葉の大洞C式土器が多く出土しているほか、白須賀遺跡とほぼ同時期の複式炉を伴う竪穴住居跡も検出されている。釜淵C遺跡のほかには、最上町にあるげんだい遺跡、新庄市の宮内遺跡、真室川町の小川内遺跡が知られる。

続く弥生時代の遺跡は上竹野遺跡のほかに最上地方でまとまって出土した例はみられない。地理的に比較的隣接している庄内地方には酒田市の生石2遺跡、村山地方北部は作野遺跡がある。ともに弥生時代前頭期の遺跡である。前者は酒田市の調査で複棺型再葬墓が検出されており（小野1987）、南東北から関東地方に主体的に広がる壺再葬墓の北限とされる。後者は山形理文によつて調査がなされ竪穴住居跡を1棟検出した（植松・後藤2011）。

古墳時代と古代の遺跡は本村では確認されていない。

表1 遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	上竹野遺跡	集落跡	縄文・弥生	24	本合海上野2遺跡	散布地	縄文
2	上竹野2遺跡	散布地	縄文・弥生	25	戸門跡	城館跡	中世
3	清水鍛跡	城館跡	中世	26	本合海上野遺跡	散布地	旧石器
4	白須賀遺跡	集落跡	縄文	27	仁寺寺道跡	集落跡	縄文
5	元船跡	城館跡	中世	28	所沢遺跡	散布地	縄文
6	宮岡遺跡	集落跡	縄文	29	宮野遺跡	集落跡	縄文・平安・近世
7	赤松遺跡	城館跡		30	要害跡	城館跡	
8	中島遺跡	集落跡	縄文	31	吉田F遺跡	散布地	縄文
9	馬形遺跡	集落跡	縄文	32	吉田E遺跡	散布地	縄文
10	ウト山遺跡	散布地	縄文	33	吉田D遺跡	散布地	旧石器・縄文
11	唐笛山遺跡	集落跡	縄文	34	清水下遺跡	散布地	縄文
12	新田遺跡	集落跡	縄文	35	宮田C遺跡	散布地	縄文
13	南野1遺跡	散布地	旧石器	36	宮田C遺跡	散布地	縄文
14	南野2遺跡	散布地	旧石器	37	宮田G遺跡	散布地	縄文
15	南野遺跡	集落跡	旧石器	38	仁間磯ノ沢C遺跡	散布地	縄文
16	手倉森遺跡	城館跡	中世	39	丸森B遺跡	散布地	旧石器
17	轟跡	城館跡	中世	40	丸森A遺跡	散布地	旧石器
18	新山發現遺跡	集落跡	縄文	41	F一アーン遺跡	城館跡	
19	荷渡遺跡	集落跡	縄文	42	木打井遺跡	集落跡	縄文・難倉
20	ホーヤ遺跡	散布地	縄文・奈良	43	栗原跡	城館跡	
21	東光寺前遺跡	集落跡	縄文	44	岩花跡	城館跡	
22	沼台小坂山遺跡	集落跡	縄文	45	タデ遺跡	散布地	縄文・平安
23	作之登遺跡	集落跡	縄文				

和銅5（712）年9月出羽国が建てられるが、この時は出羽・田川・飽海からなっており、翌月に陸奥国から最上・置賜の二郡を出羽国に編入したとされる。よって、現在の山形県域には置賜・村山・最上・出羽・田川・飽海の六郡があったとされる。「続日本記」には、天平9（737）年、陸奥按察使大野東人が多賀城から色麻柵を経て、大室塞に到着した。その後北へ進み、比羅保許山に陣を置いたとの記載がある。比羅保許山は最上地方であることは確かと考えられ、当方が中央の歴史書に現れる最初とされる。

中世に入ると、当時出羽国で勢力を拡大していた最上氏の庶族である、成沢城主成沢兼義の子満久が本村清水に派遣され、文明8（1476）年に清水城が築城された。以来、満久は土地の名を取り清水氏を名乗り、江戸時代の慶長19（1614）年まで七代138年に渡って最上地方南部を支配することとなる。清水氏時代の史料は七代義親を除くとほとんど残存していないが、同家のものには11人の館（権）主が従っていたよう、元館跡（5）・赤松館跡（7）がそれに該当する。

「清水家系図」によると七代清水義親は、山形城主最上義光の三男であり、成人の後、六代義氏の養子となり清水家を継いだとされる。また義親は幼少の頃、豊臣秀頼に仕え、関ヶ原の戦いでは密かに大坂方に通じていたとされる。この時、山形城主最上義光は徳川側についていた。その合戦後、徳川家康によって江戸幕府が開か

れ、幕府による厳しい大名統制が行われる。豊臣方についていたと噂される清水氏のことが知られれば、最上氏も存続が危ぶまれる可能性があることから、徳川秀忠に仕えていた最上家親は清水氏討伐を決断する。慶長19(1614)年、清水義親の庶兄である最上家親は、家臣の延沢遠江守と日野将監に清水城攻略を指示し、同年10月に落城、清水義親は33歳で死去した。これにより、清水氏は滅亡した。

清水氏滅亡後、新庄藩が誕生するまでの八年間は日野将監がその遺領を管理することになる。日野将監は清水城には入らず、新庄沼田城を居館とした。この頃の史料は極めて少なく不明なことが多いが、新庄城の拡張や城

下町の整備、領地経営に力を注いだとされる。しかし、元和3(1617)年の最上家親の急死を発端とする御家騒動に收拾がつかず、幕府は元和8(1622)年に山形藩の改易を行う。新庄城主日野将監もその例外ではなく、伊勢国津(三重県)へ流された。

この改易後、山形藩の遺領が戸沢政盛に六万石を与えられ、元和8(1622)年に新庄藩が誕生し、明治4(1871)年の廃藩置県まで存続する。廃藩置県後には新庄県となり、同年9月に山形県に編入、明治22年4月に市制・町村制が施行され、10月1日に大蔵村が誕生し現在に至る。

#### 引用・参考文献

- 赤塚長一郎 1961 「山形県白須賀遺跡第二次調査の報告」『山形史学研究』第3号  
 安藤好重 1989 「鮎川村延月觀音堂遺跡確認調査報告書」鮎川村文化財調査報告書  
 植松曉介・後藤枝里子 2011 「作野遺跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第194集  
 犬飼太郎 1959 「船上郡大蔵村上竹野出土遺物についての一考察」『山形考古』第4号 p.9~12 山形考古友の会  
 大蔵村史編さん委員会 1999 『大蔵村史 通史編』  
 小野 忍 1987 「生石2遺跡 一定地造成に伴う緊急発掘調査の概要」酒田市教育委員会  
 黒坂雅人・豊野潤子 2003 「金澤C遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第115集  
 小間眞司・渡辺廣 1997 「津谷遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第46集  
 文化財保護委員会 1966 「全国遺跡地図(山形県)」  
 水戸部秀樹 2003 「かっぱ遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第114集  
 水戸部秀樹ほか 2006 「小反遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第148集  
 山形県教育委員会 1963 『山形県遺跡地名表 理蔵文化財包藏地一覧』

### III 調査成果

#### 1 遺跡の概要

##### 遺構の分布

今回の調査では、縄文時代と弥生時代の遺構が検出された。縄文時代の主な遺構であるが、竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡1棟、土坑、柱穴、捨て場2カ所が確認された。弥生時代では、竪穴住居跡6棟、土器埋設遺構10基、土坑、柱穴、捨て場7ヶ所などである。遺構の全体の平面図と各調査区の平面図については、第5～12図に掲載している。

以下に調査区毎の分布状況について述べる。

1区は南北に調査区を分けている。北側は1次調査の前半で表土除去を行ったBGグリッドのラインより北側で、南側は後半に表土除去を行ったBGグリッドラインの南側でSF136捨て場が含まれる。北側では縄文時代後期とを考えられる竪穴住居跡2棟(ST1・ST38)、掘立柱建物跡1棟(SB95)が隣接して分布する。いずれの住居跡も、やや東側の段丘端部に位置する。また、縄文時代後期前葉、後葉の土坑や、弥生時代の土坑も点在している。1区南側にはSF136捨て場が広範な広がりをみせる。その下位には、弥生時代と考えられる竪穴住居跡1棟(ST193)とそれに隣接する形で西側にピット群が検出された。1区南側にもピットが集中している。

2区東側及び4区では弥生時代と考えられる竪穴住居跡5棟(ST202・ST801・ST808・ST832・ST836)が隣接して検出された。また2区では、多くの土坑、ピットが検出され、特に西側のピット群(SP44～47など)は円形にめぐる配置が見られ、建物の存在が想定される。2区の東側にはSF2捨て場が、西側にはSF133捨て場が検出され、ST202住居跡の上に一部重複している。4区でも住居跡の上に捨て場が形成され、SF134として遺物を取り上げている。

3区ではSF60捨て場が北側に検出され、完形に近い弥生土器が大量に出土した。捨て場下部からは土偶が出土している。3区南側の遺構の分布は希薄であった。

5区では北側に土壤や土器埋設遺構が密集する。これ

らは縄文時代晩期末から弥生時代にかけての再葬墓であり、土壤墓も伴い墓域を形成している。南側では土坑も数基みられるが、東側縁辺で検出される傾向にあった。中央部には楓倒木痕がみられる程度である。

##### 層序

調査区の基本層序は比較的一様である。堆積土は、いわゆる火山灰土壤と考えられ水はけがよく、表土やその下の層はクロボク土と呼ばれる類に相当すると思われる。基本的に、I層—黒色シルトを主体とする耕作土、II層—黒色シルトを主体とし、耕作の影響が及んでいない土壤、III層—黒褐色砂やシルト層、IV層—褐色のシルトや砂層と把握した。IV層には、肘折バニスが多く含まれる。遺構は、II層中から振り込みされていると考えられるが、黒色土のため検出は難しく、その下のIII層上面で検出されている。

1～5区についてこの層序を適用している。

#### 2 検出された遺構

##### A 1区(1次調査)の遺構

検出された遺構は、縄文時代に帰属するもの、弥生時代に帰属するものがあるが、土坑や柱穴などは遺物が出土するもののどちらの時期に帰属するのか判別が難しいものもある。捨て場も時期が重複するものもある。このため、時代・時期別記載ではなく、調査区毎に検出された遺構を記述し、時期は各遺構の項目で述べることとした。

##### 竪穴住居跡

###### ST1(第15～18図)

1区北側のBM～BO～14・15グリッドで検出された縄文時代後期後葉の竪穴住居跡である。平面形は計6.0mの円形を呈する。覆土下に硬化した貼床が認められた。周溝は床面上で検出されたが、柱穴の確認ができなかったため、貼床を除去し振り方まで下げたところ、柱穴を確認した。

主柱穴はEP206～209の4本が確認された。直徑25～30cm、深さ22～56cmである。振り方からの

検出のため、床面からの深さは更にあったと考えられる。長軸 2.4m、短軸約 2.2m の正方形状に配置される。周溝 ED164 は幅 20 ~ 60cm、深さ 15 ~ 25cm、周溝内には壁柱穴が認められる。

住居跡中央には EL247 灼跡が検出された。地床炉で、長軸 140cm、短軸 100cm の梢円形状の広がりをもつ。

覆土は概ね 1 ~ 3 層に分かれる。黒褐色・黒色シルトを主体とする。覆土中からは晚期中葉の遺物が多く出土し、後期前葉・後葉の遺物も含まれる。6 ~ 12 層は貼床となる。黒褐色砂を主体とし、堅くしまる。

住居跡の北東壁側にステップ状の盛り上がりが認められ、住居の出入口と推測される。

出土遺物であるが、第 102 ~ 104 図の縄文土器、第 202 図 1 ~ 14 の石器が出土している。覆土の遺物分布を第 17 図、床面や貼床、住居内施設の遺物分布を第 18 図に示した。

覆土中からは、後期前葉・後葉・晚期中葉の土器が出土している。後期前葉の十腰内 I 式土器が認められるが、破片であり出土にまとまりがない。晚期中葉では大洞 C I 式土器が出土しており、雲形文が施された深鉢・浅鉢・皿などが認められる。後期後葉では、瘤付土器第 II・III段階の資料が出土している。

EL247 の覆土上からは、第 104 図 18 の深鉢口縁が出土している。瘤付土器皿段階に相当すると考えられる。

床面からは、後期前葉と後期後葉の土器が出土している。後期前葉の土器は混入と考えられる。第 104 図 10 ~ 14 は、瘤付土器 II ~ III段階に含まれると考えられる。貼床内からは、第 104 図 19 ~ 22 の土器が出土した。

住居跡の時期は、床面出土遺物から判断して、後期後葉の瘤付土器第 III段階の時期と考えられる。

#### ST38 (第 19 ~ 21 図)

1 区北側の BQ ~ BR - 17 ~ 18 グリッドで検出された縄文時代後期後葉の竪穴住居跡である。平面形は長軸 4.7m、短軸約 3.8m の不整梢円形を呈する。住居跡の北端を大型の柱穴である SP86、南端を SP55 に切られる。この柱穴に関しては、掘立柱建物跡の項目で後述したい。

主柱穴は、EP203・204・205 の 3 本が確認された。直径は約 30cm、深さ 20 ~ 25cm である。

住居跡中央では EL277 石圓炉を検出した。直径は

60cm の円形で長さ 10 ~ 20cm の円錐や礫を配置する。

住居跡の覆土は 3 層に分かれる。黒褐色・黒色シルトを基調とする。床面上には部分的に貼床が認められた。

出土遺物であるが、第 105 図・106 図 1 ~ 9 の土器、第 202 図 15 ~ 18・第 203 図 1・2 の石器が出土している。遺物はが跡の南側に廃棄されており、ほとんどが F2 層からの出土である。

住居跡の時期は、遺物から判断して、後期後葉の瘤付土器第 III段階の時期と考えられる。

#### 掘立柱建物跡

##### SB95 (第 22 図)

1 区北側の BO ~ BQ - 16 ~ 18 グリッドで検出された掘立柱建物跡である。柱穴は 4 本確認された。EB36・37・69・70 で構成される。当初各柱穴を土坑と考えていたが、方形の配列により建物跡として登録したものである。柱穴の直径は、80 ~ 100cm、深さは 52 ~ 74cm である。EB36・37 は断面で柱痕を確認した。EB70 も、断面および平面で柱痕が確認される。直径は 30 ~ 40cm と推定される。建物跡の規模は、長軸約 4.2m、短軸約 4.0m のほぼ正方形を呈する。

出土遺物であるが、EB36 から第 106 図 10・11、EB69 から、第 106 図 12・13、EB70 から第 106 図 14 ~ 18 の土器が出土している。石器では、EB70 から第 206 図 8 の磨石が出土している。建物跡の時期は、後期後葉の瘤付土器第 II ~ III段階と考えられる。

#### 掘立柱建物跡に関連する柱穴 (第 6・19・20・29 図)

ST38 に重複して検出された SP55・SP86 は、ST38 より新しく掘立柱建物跡を構成していた柱穴の可能性が高いと考えられる。SP55 は直径約 70cm、深さ 124cm、SP86 は直径約 80cm、深さ 124cm である。柱痕が確認され、柱痕の直径は断面で 44cm である。柱間中心間の距離は、4.6 m となる。

その他、BN16 グリッドに位置する SP64 は、直径 125cm、深さ 90cm の規模がある柱穴で、柱痕も観察された (第 29 図)。あるいは SK54 を柱穴とする掘立柱建物跡も想定されるが、SK54 には柱痕は確認されていない。

#### 土 坑

1 次調査の 1 区北側では、39 基の土坑が検出されている。土坑には時期幅があり、後期前葉・後葉・弥生時

### III 調査成果

代に帰属するものがある。図に掲載した土坑については規模や覆土等について遺構観察表に記載した。なお、特筆すべき土坑についてここにとりあげたい。

#### SK14（第23図）

1区北側のBL13グリッドに位置する。直径100cm、深さ48cm、平面形は円形である。覆土中からは大量の円盤や土器を主とした遺物が出土した。人為的な廃棄によるものと考えられる。遺物は第106図19～22、第107図1～18の縄文土器と弥生土器、第205図3・4の石器、磨石が出土している。出土土器は、弥生時代前期の特徴を示す資料であり、この時期に土坑は帰属すると考えられる。

#### SK19（第23図）

1区のBI10グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は124×92cm、深さ20cmである。底面に凹凸が認められる。覆土は人為的な廃棄によると考えられる。

出土遺物は、第107図19～22の土器、第205図2の石核が出土している。土坑の時期は出土土器から判断して弥生時代前期に帰属すると考えられる。

#### SK27（第23図）

1区北側のBL11グリッドで検出された。平面形は概ね円形である。規模は128×120cm、深さ68cmである。壁の立ち上がりは急である。覆土3層中から遺物が出土している。人為堆積と考えられる。第108図5～8の縄文土器、第206図1石皿がある。第108図7は土坑底面からの出土で、後期前葉十腰内1式の壺と考えられる。体部上から口縁部を欠く。他の出土土器も同じ時期であり、土坑の時期を示すと考えられる。

#### SK28（第23図）

1区北側のBL12グリッドで検出された。平面形は不整円形であり、壁の立ち上がりは急である。規模は104×88cm、深さ52cmである。出土遺物は、覆土より第108図9～12の縄文土器が出土している。9・10は後期前葉十腰内1式に併行、11は南境1式に相当するものと思われる。12は扁付土器第II～III段階に位置づけられると思われる。土坑の時期であるが、構築場所や覆土の状況がSK27に類似しているため、後期前葉の時期と捉えておきたい。

#### SK21（第23図）

1区北側のBI13グリッドで検出された。土坑全体は

不整円形状で、規模は188×180cm、深さ132cmである。そのうち東側の部分が楕円形状に115×88cmの範囲で深く落ち込む。土坑内部はフ拉斯コ状に膨らむ。内部の最大径は、130×110cmである。出土遺物であるが、第107図23～34、第108図1～4の土器、第205図5の石器が出土している。第107図28は浅鉢で、口縁部から体部にかけて変形工字文が施され、瘤が発達している。胎土は明るい褐色で緻密である。砂沢式に併行するものであると考えられる。第108図1は高環で、脚部が外れている。沈線による変形工字文が施される。弥生時代前期頃に相当するものと思われる。土坑の時期は概ね弥生時代前期になるものと考えられる。

#### SK34（第24図）

1区北側のBJ14グリッドで検出された。平面形は円形で壁の立ち上がりは急である。規模は直径160cm、深さ84cmである。覆土は廃棄による人為堆積と考えられる。第109図1～5の縄文土器、第206図2の石器が出土している。覆土出土土器には、後期前葉、後期後葉、弥生時代の可能性がある資料が出土しているが、扁付土器II段階の時期に帰属すると推定される。

#### SK54（第24図）

1区北側のBM15、16グリッドで検出された。円形で断面形は皿状となる。規模は直径88cm、深さ36cmである。覆土は人為堆積と考えられる。出土遺物は、第109図6～10の縄文土器、第206図3の有孔石製品、第206図4石礫が出土している。第109図6は縱方向の稜状の隆背が貼り付けられ、隆背状に刻みが施される。後期初頭の時期と考えられる。第109図7～10は後期前葉十腰内1式土器に併行すると考えられ、土坑の時期もこの時期に帰属するものと思われる。

#### SK56（第24図）

1区北側のBQ・BR12グリッドで検出された。平面形は楕円形で、底面に不規則な凹凸が確認される。規模は128×96cm、深さ36cmである。廃棄による人為堆積と考えられる。出土遺物は、第109図11～17の土器が出土している。出土土器は後期前葉十腰内1式土器に併行すると考えられ、土坑の時期もこの時期に帰属するものと思われる。

#### SK58（第25図）

1区北側のBP14グリッドで検出された。平面形は不

整円形で、断面は皿形となる。規模は直径 56cm、深さ 24cm である。覆土は廃棄による人為堆積と考えられる。第 109 図 18 の縄文土器が出土しており、後期前葉南境 1 式に併行するものと考えられる。土坑の時期もこの時期に帰属すると思われる。

#### SK61（第 25 図）

1 区北側の BN12 グリッドで検出された。平面形は隅丸長方形で、断面は皿形となる。規模は 148 × 80cm、深さ 28cm である。第 110 図 11・12 の縄文土器が出土している。後期前葉の十腰内 1 式に併行するものと考えられ、土坑の時期もこの時期に帰属すると思われる。

#### SK59（第 25 図）

1 区北側の BN11 グリッドで検出された。平面形は円形で断面は皿形となる。規模は 112 × 104cm、深さ 44cm である。覆土は廃棄による人為堆積と考えられる。出土遺物は、第 110 図 1～10 の縄文土器、第 206 図 5 の石礫が出土している。出土土器は後期前葉十腰内 1 式に併行すると考えられ、土坑の時期もこの時期に帰属すると思われる。

#### SK65（第 25 図）

1 区北側の BQ13 グリッドで検出された。平面形は円形で壁の立ち上がりは急である。規模は直径 108cm、深さ 44cm である。覆土は廃棄による人為堆積と考えられる。覆土中からは遺物がまとめて出土している。出土遺物は、第 110 図 13～16 の縄文土器、第 206 図 9 の石礫が出土している。第 110 図 13 は、十腰内 1 式土器に類似する。第 110 図 16 は、口縁部に刺突による列点文、外側には弧状の沈線文が見られ文様間には磨り消しが見られる。内面には沈線による格子状の文様が入る。南境 1 式に併行するものと考えられ、土坑はこの時期に帰属すると思われる。

#### SK67（第 26 図）

1 区北側の BP16・17 グリッドで検出された。平面形は不整梢円形である。規模は 188 × 100cm、深さ 44cm である。断面形は皿形で、南側の立ち上がりは緩やかであるが、北側は急である。覆土は人為堆積の様相を呈する。出土遺物は、第 111 図 1・2 の縄文土器である。縄文後期と思われるが詳細時期は不明である。

#### SK71（第 26 図）

1 区北側の BP12 グリッドで検出された。平面形は円

形で、土坑中央部が一段深く落ち込み、底面は不規則である。規模は 104 × 92cm、深さ 44cm である。出土遺物は、第 111 図 3・4 の縄文土器、第 206 図 10 の石匙が出土している。出土土器の時期は縄文後期と思われるが、小破片のためはつきりしない。

#### SK153（第 26 図）

1 区南側の BF9 グリッドで検出された。平面形は不整梢円形で、断面形は皿状、底面は平坦である。規模は 92 × 76cm、深さ 28cm である。覆土は廃棄による人為堆積と考えられる。出土土器は縄文土器がまとまって出土している。第 115 図 1～11 の土器が出土しており、第 115 図 4 の上下二段に対向する匹字文の浅鉢が出土しており、大洞 A 2 式に位置づけられると考えられる。土坑の時期もこの時期に帰属すると思われる。

#### SK286（第 27 図）

1 区北側の BM13 グリッドで検出された。平面形は不整円形、浅い皿状で上部の多くの削平されている可能性がある。規模は 68 × 64cm、深さ 16cm である。土坑内からは、第 111 図 12 の縄文土器が出土している。大型の深鉢で口縁部から底部まで接合するが、残存率は 1/2 以下である。十腰内 1 式に併行すると考えられ、土坑の時期もこの時期となると思われる。

#### 焼土遺構

#### SL165（第 27 図）

1 区南側の BF10 グリッド、SF136 の上面に検出された。平面形は概ね円形である。規模は 72 × 65cm、深さ 10cm である。遺物は出土していない。SF136 の上層の時期は弥生時代中期前半の時期に相当するため、その時期もしくはそれ以降と考えられる。

#### 性格不明遺構

#### SX33（第 28 図）

1 区北側の BM11・12 グリッドで検出された。平面形は円形状で黒色シルトの堆積が認められた。規模は 392 × 340cm、深さ 5cm である。南側を現代の擾乱で切られている。検出面からの深さは浅く、5cm に満たない。内部は平坦であり特に施設は確認されていない。遺物は、第 112 図 22～25 の縄文土器が出土している。第 112 図 22 は弧状の沈線が入り、南境 1 式期と考えられる。第 112 図 23～25 は後期後葉に位置づけられる。第 112 図 25 は、瘤付土器第 II 段階の香炉型土器

### III 調査成果

と考えられる。遺構の時期はこの時期に帰属すると思われる。

#### SX195 (第 28 図)

1 区北側の BF10 グリッドで検出された。平面形は梢円形状で、断面は浅い皿形となる。規模は 456 × 260cm、深さ 20cm である。覆土は黒色シルトを基調とする。内部にピットや SK278 が検出されたが、覆土は当遺構と類似しており、この遺構に伴うのか前後関係があるのか不明である。出土遺物であるが、第 126 図 27 ~ 32、第 127 図 1 ~ 10 の土器が出土している。土器として、第 154 図 6 の耳飾りが出土した。石器では、第 211 図 7・8、第 212 図 1 の石製品が出土している。土器は、弧状や平行に押圧縦文を施した大木 7b 式土器と、押し引きの竹管による連続した爪形文などが施された新崎式土器が共伴している。遺構の時期は大木 7b 式期と考えられる。その他、第 127 図 9・10 については、晩期末から弥生時代に帰属すると思われるが、上からの掘り込み等による混入と考えられる。

#### SX215 (第 29 図)

1 区南側の BD9 グリッドで検出された。平面形は梢円形状で、ピット状の落ち込みが 2 か所認められる。規模は 140 × 104cm、深さ 36cm である。覆土は人為堆積である。出土遺物は、第 127 図 16 ~ 20 の土器、第 211 図 9・10、第 212 図 3 の石器、第 212 図 2 の有孔石製品が出土している。遺構の時期は、出土土器より弥生時代前期と考えられる。

#### ピット

1 区で検出されたピット・柱穴で、主なものについて表 3 に記載した。その他、特記すべき遺構について以下に述べる。

#### SP16 (第 29 図)

1 区北側の BG9 グリッドで検出された。梢円形状のピットで、北側を別のピットに切られる。規模は 54 × 44cm、深さ 24cm である。覆土の上層からは第 111 図 9 の跡が出土している。弥生時代前期と推定される。

#### SP17 (第 29 図)

1 区北側の BH9 グリッドで検出された。平面形は円形で、西側を別の浅いピット、SP39 に切られる。規模は 36 × 32cm、深さ 32cm である。断面形が深く落ち込むため、建物等の柱穴と考えられる。覆土 1 層の検出

面に、第 111 図 10 の壺が出土している。柱穴が機能を失った後に廃棄されたと考えられる。無文で口縁部を欠くが、その下は完形である。外面に赤彩が残る。晩期末から弥生前期の所産と考えられる。

#### SP151 (第 29 図)

1 区北側の BG09 グリッドで検出された。平面形は梢円形状で断面形は皿形状である。規模は 60 × 40cm、深さ 28cm である。覆土中や底面からは第 122 図 8・9 の深鉢、第 209 図 1 の磨石が出土している。遺構の時期は弥生時代に帰属するとと思われる。

#### SP162 (第 30 図)

1 区南側の BC11 グリッドで検出された。平面形は円形の柱穴である。規模は深さ 32cm、深さ 40cm である。柱穴覆土の上層から、第 209 図 3 の石刀が出土している。柱穴が機能を失った後に廃棄されたと考えられる。土器が共伴していないので時期決定が難しいが、縄文晩期末から弥生時代の中に含まれると考えられる。

#### 捨て場

#### SF2 (第 31・32 図)

1 区北側の BN ~ BR・16 ~ 18 グリッドで検出された。検出長は長軸約 17.5m、短軸 6.3 m 以上の広がりをもち、北西から南東に向かって傾斜している。深さは東側が深く、深い所は 36cm になる。上層は黒色シルト層を基調とし、下層は黒褐色・暗褐色シルト層となる。遺物の出土は多くはない、図化可能な遺物として、第 113 図 4 ~ 16 の縄文土器、第 214 図 9・10 の石器が出土している。第 113 図 5・6・8 ~ 11 のように、沈線文間に刻目を施したり、貼り瘤が見られるなど、後期後葉瘤付土器 II ~ III段階に相当すると考えられる土器が主であり、包含層の時期を示すものと考えられる。また、包含層の範囲内には、ST38 や SB95 など後期後葉に帰属する遺構が構築されており、これらに由来するものと考えられる。

### B 1 区（2 次調査）の遺構

#### ST193 積穴住居跡 (第 33・34・42・43 図)

1 区南側の BD・BE - 11・12 グリッドで検出された。弥生時代の SF136 捨て場を掘り下げたところ、石圓炉が検出され（第 42 図）、住居跡を確認するに至った。黒ボク土内から遺構の掘り込みがあるものと推定さ

れたが、平面の検出は、SF136 をほぼ除去した後に確認された。覆土は 2 層に分かれ、上層が黒色シルト、下層が黒褐色シルトに地山ブロックを含む。住居跡の平面形は楕円形と推測されるが、東側の立ち上がりが不明である。規模は、東側の SP370 までを範囲と考えれば、長軸 7.5 m、短軸 6.0 m である。検出面からの深さは 18cm であるが、壁面の立ち上がりがあり明瞭でない。EL194 炉跡は、石廻炉である。住居の範囲内には、SK374・SK384・SX463などの遺構が検出された。SL301 炉跡なども検出されているが、捨て場上面の構築のため、当住居跡と関連しないものと思われる。

住居の範囲内には、SP370・380・381・390・391・392・417・418などの柱穴が検出されている。この住居に確実に伴うのかどうかは不明である。

出土遺物であるが、第 114 図 1～15 の土器、第 203 図 3～7・第 204 図 1～5・第 205 図 1 の石器が出土している。住居跡床面の土器であるが、第 114 図 11・12 の縄文後期窯業付土器と、第 114 図 14 の弥生土器と考えられる壺、EL194 炉跡からは弥生土器と推定される第 114 図 15 壺が出土している。住居の時期は、新しい時期を鑑みて、弥生時代に帰属すると考えたが、EL194 の炭化物の放射性炭素年代測定では、縄文時代に入る年代が得られており、再度検討をする。

## 土 坑

2 次調査の 1 区南側では、25 基の土坑が検出されている。このエリアでは、縄文時代晩期末から弥生時代にかけての遺構が主である。以下、主だった土坑について述べる。

### SK302（第 35 図）

1 区北側の BH13 グリッドで検出された。平面形はやや楕円形状で、壁面は内部でオーバーハングするフ拉斯コ状土坑である。規模は 148 × 132cm、深さ 92cm である。覆土は 11 層に分かれ、人為堆積と考えられる。底面や下層からは弥生土器がまとめて出土している。出土遺物であるが、第 115 図 12～14、第 116 図 1～5、第 117 図 1・2、第 118 図 1・2、第 119 図 1～6 の土器、第 207 図 1・2 の石器が出土している。幾つかの特徴的な土器について、以下に補足したい。第 116 図 5 は口縁部が内湾する深鉢で、口縁部に変形工字文が施され、体部に三段の平行沈線文が廻る。外面には

炭化物が付着する。底部には網代痕がある。第 117 図 1 は、ほぼ完形の壺で、口縁部は無文、体部は縄文が施文される。体部下半には、赤彩によるヒトデ状の文様が描かれ、黒色の付着物が体部下にぐるりと付着している。底部にも赤彩が施されている。第 118 図 2 は口縁部が外反する大型の深鉢である。口唇部には縄文が施文される。外面・内面には炭化物が付着する。第 119 図 1 は大型の壺である。口縁部には隣帶をめぐらし、2 個一対の粘土による瘤を付ける。外面と口縁内面には赤彩が施され、内面上には輪積みした粘土紐を押さえした痕が連續して認められる。土坑の覆土 12 層出土の土器を見ると、弥生時代前期に該当すると考えられる。

### SK308（第 36 図）

BB12 グリッドに位置し、確認面で大型の浅鉢の破片が露呈していた。平面形は不整円形で長軸約 135cm、短軸約 125cm である。確認面からの深さは約 40cm ある。底部側面には 1 条の溝がめぐる。溝の幅は約 20～30cm 程度である。覆土は 5 層に細分された。人為堆積と思われる。

遺物は第 119 図 8～13・第 120 図 1～3 の、浅鉢・深鉢の土器片、第 207 図 3 磨石、4 石鐵などが出土した。浅鉢の破片は第 1 層及び底部直上でも出土している。石鐵は第 1 層で出土した。溝上部には大型の礫が埋られた。第 119 図 12 の浅鉢は外面・内面に炭化物が全体に付着しており、匹字文が見られる。大洞 A 2 式に相当するものと考えられる。第 120 図 3 は変形工字文が施される浅鉢で、弥生時代前期の時期に相当すると考えられ、土坑の時期を示すものであろう。

### SK309（第 35 図）

BB11 グリッドに位置し、平面形は不整形である。規模は 212 × 164cm、深さ 56cm である。北側が直径 1.2 m の円形状に落ち込み、この部分が土坑本体と考えられる。覆土は人為堆積と考えられ、多くの遺物が出土している。遺物であるが、第 120 図 4～18 の土器、第 207 図 5・7 の石器が出土した。土坑底面からは、第 207 図 18 の浅鉢が出土している。ほぼ完形で変形工字文が施されている。大洞 A 2 式に相当し、土坑の時期はこの時期に帰属すると考えられる。

### SK310（第 35 図）

BB11 グリッドに位置する。平面形はやや一方に突出

### III 調査成果

気味の不整円形を呈し、長軸約70cm、短軸約45cmある。確認面からの深さは約40cmを測る。覆土は3層に細分された。第1層及び2層は黒褐色シルトに地山土を粒状に多量に含む。人為堆積と考えられる。

遺構半断時には、直径約29cm程度の第207図6の石皿が1層中位に斜めに置かれ、その上に土偶の肩と思われる一部が確認された。その後1層を精査中に、頭部及び脚部を欠く土偶第124図11が礫石器と同様、斜めに置かれた状態で出土した。他に第120図19の無文の高环脚部が出土した。なお、2・3層からは遺物は出土していない。

第124図11の土偶は頭部が下側にあり、伏臥状態で置かれていた。土偶下部の第207図6の石皿であるが、端部は赤色を呈しており敲打痕が確認される。遺構の時期は、土偶や土器から判断すると弥生時代前期頃と考えられる。

#### SK359（第37図）

SF136F1b①精査後に、BF12グリッドで検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸約90cm、短軸約50cmほどである。確認面からの深さは約40cm程度ある。覆土は2層に細分された。人為堆積と考えられる。

第121図8～11の土器が出土している。弥生時代前期の所産と考えられる。

#### SK360（第37図）

SF136F2層精査後に、SX363に隣接するように検出された。SX363を切る。BE・BF13グリッドにまたがって位置する。長軸約111cm、短軸100cmの円形を呈し、断面形は台形状になる。確認面からの深さは約20cmある。覆土は2層に分層できたが、主体となるのは第1層の黒色シルトである。

遺物は第1層の上位で出土するものがほとんどであった。遺物は第121図12～17の土器、第207図8の石器が出土している。覆土7層の土器を見ると、弥生時代前期頃に帰属するものと考えられる。第121図17の円盤状土器製品は、繩文後期前葉の時期と考えられる。

#### SK362（第37図）

SF136F1b層精査後、BE14グリッドで検出された。SX363に隣接する。平面形はほぼ円形であり、長軸164cm、短軸123cmである。確認面からの深さは、約94cmある。壁の立ち上がりは急である。

覆土は10層に細別され、第1層はSF136F2層に相当する。第5層は地山土に相当し、壁の崩落による自然堆積と考えられる。遺物は第1層から第121図18の土器が出土している。晩期末から弥生にかけての時期と考えられる。

#### SK364（第37図）

SF136F2層精査後、BF13グリッドで検出された。長軸90cm、短軸82cmの円形を呈する。確認面からの深さは約10cmある。覆土は黒褐色を主体とする第1層のみであった。

#### SK365（第37図）

BG14グリッドで検出された。平面形は長軸80cm、短軸約70cmの楕円形を呈する。確認面からの深さは約28cmある。覆土は4層に細分された。人為堆積と考えられる。

#### SK374（第37図）

BE11グリッドに位置する。西側が張り出しているが、別の遺構と重複するものと思われ、不整円形を呈する。規模は80×72cm、確認面からの深さは約60cmである。覆土は5層に細分された。断面形はフラスコ状となる。遺物は第1層にまとめて出土する傾向にあった。遺物は、第121図19～22、第122図1～3の土器、第208図1・2・4・5・7の石器が出土している。第121図22の蓋は磨消繩文による文様が描かれ、弥生時代中期初め頃の時期と考えられる。遺構の時期も、この時期に帰属すると思われる。

#### SK384（第38図）

SF136精査中より巨石が露出しており、その下部で検出された。BE11・12にまたがって位置する。長軸98cm、短軸88cmの円形を呈する。確認面からの深さは約40cmある。

#### SK314（第36図）

1区南側のBA12グリッドで検出された。平面形は楕円形で、断面は皿形となる。規模は76×60cm、深さ20cmである。覆土1層中から遺物が出土している。遺物は、第120図20の土器が出土している。変形工字文が施文された浅鉢と考えられ、弥生時代前期になると考へられる。

#### SK348（第37図）

1区南側のBC13グリッドで検出された。平面形は

不整円形で底面には凹凸が認められる。規模は 96 × 76cm、深さ 28cm である。遺物は、第 121 図 6 の土器が出土している。晩期末から弥生時代前期頃に位置づけられると考えられる。

#### 性格不明遺構

##### SX312 (第 37 図)

1 区南側の BA12 グリッドで検出された。平面形は不規則な楕円形状を呈すると思われるが、ピット等と重複している。断面は皿形である。規模は 340cm × 196cm、深さ 60cm である。遺物は第 128 図 5 ~ 7 の土器、第 212 図 8 の石器が出土している。土器は弥生前期と中期中葉頃のものが出土している。

##### SX325 (第 39 図)

1 区南側の BC12 グリッドで検出された。平面形は楕円形で、断面は浅い皿形となる。規模は 172cm × 140cm、深さ 28cm である。底面には凹凸が認められる。SX326 を切ると思われ、SP345・396 と重複しているが、前後関係は不明である。遺物は第 128 図 24 ~ 26 の土器、第 213 図 4 ~ 5 の石器が出土している。遺物の時期は、弥生時代前期から中期初めと思われる。

##### SX363 (第 39 図)

SF136F2 層精査後に、SK360 に隣接する形で検出された。SF136 精査中の遺物集中区の範囲にほぼ合致する。BE・BF-13・14 グリッドにまたがって位置する。検出長は長軸 343cm、短軸 132cm ほどである。平面形は不整規楕円形を呈する。確認面からの深さは、約 4 ~ 12cm と部分的に非常に浅い。SK360 との重複関係は確認されなかった。

先述したように、SF136F1b ③の精査時には多量の遺物がまとまって出土したことから、本遺構の確認面は F1b ②の可能性が十分考えられる。また、遺物出土の傾向として北西部と南東部に分かれることから、別遺構に二分できる可能性も考慮し精査を行ったが、覆土の制限などから二分することはできなかった。

覆土は 2 層に分層できた。第 1 層は黒褐色シルトを主体とし、第 2 層は地山との漸移層である。ほとんどの遺物が 1 層から出土している。

遺物であるが、第 129 図 5 ~ 19 の土器、第 213 図 3 の石核などが出土している。遺物には、磨消繩文による文様が施される個体、第 129 図 9・10 などが認めら

れるため、弥生時代中期前葉頃の時期と思われる。

#### 焼土遺構

##### SL301 (第 41 図)

BE12 グリッドにあり、SF136F1b 層上面で検出された。長軸短軸ともに約 60cm の円形を呈する。確認面からの深さは約 12cm ある。覆土は 3 層に細分された。第 1 層は赤褐色を呈する焼土であり、下層 2 層は焼土ブロックを含む。

##### SL304 (第 41 図)

BF14 グリッドにあり、SF136F1b 層上面で検出された。長軸約 64cm、短軸約 46cm の楕円形を呈する。確認面からの深さは約 13cm ある。覆土は 2 層に細分された。

#### 集石遺構

##### SX315 (第 39 図)

SF136F1b 層の精査中、礫が集中的に出土し始めたことにより検出した。BF13 グリッドに位置する。SF136F2 層精査後に楕円形を呈するプランを確認できた。検出長約 130cm、幅約 50cm である。覆土は 10 ~ 20cm と薄い。

覆土は 3 層に分層した。第 1・2 層は SF136F1b 及び F2 層とほぼ同様である。1 層は SF136F1b 層に該当するため壁の立ち上がりも不明瞭だが、第 2・3 層は判別可能であった。

遺物は集石付近にまとまって出土する傾向にある。特に 1 層に含まれる遺物が多い。集石の中には、被熱痕がみられる礫や石器も含まれている。

遺物であるが、第 128 図 8 ~ 20 の土器、第 212 図 7・9 の石器が出土している。第 128 図 20 の蓋は、体部のみが残存し、内面と外面に赤色顔料を混ぜたと思われる赤色漆が付着している。漆塗布の際にパレットとして使用されたものと考えられる。第 128 図 8・20 から判断すると、時期は弥生時代中期前葉頃になると考えられる。

#### 捨て場

##### SF136 (第 42 ~ 52 図)

調査区 1 区南の BD → BG → 9 ~ 14 グリッドで検出された遺物包含層（捨て場）である。検出長は約 21m 以上、幅は約 8 ~ 12m を測る。北北西から東に向かって緩やかに広がり、調査区外へと伸びる。確認面からの深さは約 4 ~ 26cm と非常に浅い地点もある。

### III 調査成果

覆土は3層(F1～3層)に大別し、さらにF1層を色調及び含有物から3層(F1a1・2,F1b層)に細別した。2015年度調査によりF1b層以下は厚く堆積していると想定されたことから、3～5cm毎の段下げ方式を取った。F1b層は4回、F2層は2回に分けて掘り下げている。なお、1回目の掘り下げは①、2回目の掘り下げは②などとし、遺物に注記している。

本包含層からは、縄文時代後期前葉、後期後葉、晚期後葉、弥生時代前期～中期の遺物が出土した。特にF1層から多く出土したが、F1a・F1b層は時期が混在する傾向にある。下位になるにつれ、弥生時代前期～中期の遺物がまとまる傾向にあるが、後述するように、黒褐色シルトを主体とする覆土により遺構を検出できなかつた可能性がある。出土遺物は1個体と判断できるものや、文様などにより時期比定の可能な資料を登録した(RP・RQ)。それ以外のものはグリッド一括として取り上げている。しかし、遺物がまとまって出土する箇所についてはこの通りではなく、遺構に歸属する可能性も考慮し、まとめて遺物登録し取り上げたものもある。

なお、調査期間中に大蔵村立大蔵小学校の児童らによる発掘体験(「松の実塾」)を開催した。その際に、BD～BF12・13グリッドのF1b層を長さ約9m、幅約3m程度の範囲を約5～10cm掘り下げている。出土した遺物は基本的にグリッド上げとし、時期比定可能な資料は登録し取り上げた。

F1a層は捨て場最上層で、下層のF1b層より赤味が強い黒褐色シルトの層である。第1次調査時に西側で検出された広がりをF1a1層、第2次調査で東側に検出された併行すると思われる層をF1a2層とした。

#### F1a層(第47図)

BE～BF～10～12グリッドに広がりをもつ。検出長は約7.5m、幅は約3～5mを測る。平面形は不整形で、確認面からの深さは約4～10cmと浅い。黒褐色シルトを主体とする。

遺物は、第130図12～27・第131図1～6の土器、第215図4・19・20・第216図9・10・第217図3・第218図1の石器が出土した。土器は弥生土器が主体で、弥生前期から中期前葉にかけての時期と考えられる。

#### F1a2層(第49図)

BE～BF～13・14で検出された。検出長は約4.2m、

幅は約1.1～3.2mを測る。西から東に向かって蛇行しながら伸び、収束する。西側も同様と考えられる。確認面からの深さは約4～10cmと浅い。覆土は黒褐色シルトに褐色シルトを多量に含むことから、やや明褐色を呈する。拳大程度の礫を少量含む。

遺物は、BE13・14グリッド境南側及び、BF13グリッド中央部に比較的集中して出土する傾向にある。下位の遺構に関係する可能性も否めない。出土遺物であるが、縄文時代後期後葉及び弥生時代前期～中期前葉頃の資料が混在している。第135図1～17の土器、第217図4・8・第218図3・5・第223図2の石器を掲載している。

#### F1b層(第48・50・51図)

BD～BG～10～15グリッドで検出された。検出長及び幅は本包含層とほぼ同様であり、広く分布する。本層はBFグリッド以北で20cm以上堆積する傾向があるが、南にいくにつれて薄くなる。黒褐色シルトを主体とし、2～10mm程度の黄褐色及び白色の礫や拳大程度の礫、大型の礫・軽石を多量に含む。BE～BF～13・14では礫・軽石の集中区がみられたが、黒褐色シルトを主体とすることから遺構の検出ができなかつた。下層で検出したSX315やSK360、SX363が本層を掘り込み形成された可能性もある。

遺物も下位の遺構に対応するかのようなまとまりをもって出土する傾向にある。F1b層1回目(以下F1b①、②と記載)は、遺物がまとまりをもつよう出土する傾向はなく、広がりをもって出土していた。F1b②でも同様の傾向であった。明確に分布にまとまりをもつようになったのはF1b③・④であり、特にSX363に対応するかのように出土していた。このことから、下位の遺構確認面はF1b②の可能性もある。

本層の登録遺物は計141点ある。特にF1b③では非常に遺物量が多かったことから、登録遺物は66点と大半を占める。F1b層の出土遺物は、土器について第135図19～27・第136・137図・第138図1～32に、石器は、第215図6～13・15・17・18・23・第216図1～4・第217図1・2・5・第219図1・第222図2・7に示した。

第48図に、第1次調査時のSF136のBF～BI14、BF～BH15の主な遺物の分布を示した。ここでは、石刀(第225図1)が出土している。また、BG15グリ

ッドから土偶の足（第 154 図 10）が出土している。

第 50 図に、F1b ①・②の主な遺物分布を示した。第 136 図 8・12～18 は後期前葉の十腰内 I 式土器に併行するものと考えられ、この包含層に一定量含まれている。土器については、縄文晩期末となる第 136 図 31 の高环、第 136 図 26 の鉢、弥生時代中期前葉と考えられる第 136 図 20・23 の浅鉢、弥生時代中期中葉と考えられる壺（第 137 図 2）と時期幅がある。

第 51 図に F1b ③・④の主な出土遺物の分布を示した。遺物の分布は BE13～15、BF13～15 に認められる。

晩期末の浅鉢第 138 図 3、弥生中期と考えられる第 137 図 28 の浅鉢、第 138 図 19 の深鉢などが出土している。第 138 図 11 の高环脚部は、内面に赤色の漆と思われる膜状の付着物が認められる。

#### F2 層（第 52 図）

BE -10～-14 グリッド以北を中心広がりをもつ。BD グリッドなど包含層南側には部分的にみられる程度で、非常に薄い。F1 層よりもやや明るい黒褐色シルトが主体となり、5～10mm 程度の黄褐色織を多量に含む。

遺物は F1 層よりは少なく、登録遺物は計 42 点ある。F1 層と同様に、SX363 に対応するようにまとまり、F2 層の登録遺物のほぼ全てがその遺構範囲のなかに含まれている。

第 52 図に SF136F2 出土遺物の主な分布を示した。出土した遺物は、土器を第 138 図 33～35、第 139 図 1～14 に示した。石器は、第 218 図 2・第 224 図 6 に示した。主な土器は、浅鉢（第 139 図 5）、第 139 図 7 の平底で口縁部が外反する大洞 A 式の浅鉢、第 139 図 12 の小型壺、第 139 図 11 の無文の壺などが出土している。晩期末から弥生時代までの遺物が含まれている。

#### F3 層

F2 層と地山との漸移層である。部分的にみられる程度で薄い。F2 層にバミスや黄褐色ブロックなどを含み、全体的に黄褐色を呈する。遺物は小破片が数点のみ出土した。

### C 2・4 区の遺構

調査では、2 区の北東側および 4 区にかけて、弥生時代と考えられる竪穴住居群と柱穴が集中して検出されて

いる（第 8・9 図）。また、2 区西側や、南東側には弥生時代を中心とする捨て場や土坑・柱穴群が検出された（第 53 図）。以下に各遺構について述べる。

#### 竪穴住居跡

##### ST202（第 54～62 図）

2 区北側の AU～AW-14・16 グリッドで検出された竪穴住居跡である。一部 4 区にまたがる。当初は遺物包含層と認識していたが、円形のプラン及び焼土を検出したため住居跡として認定した。住居跡南側はプランが鮮明だったが、第 2 次調査で拡張した 2・4 区間は不明瞭であり、床面で確認できた周溝も途切れる。また、住居の半分が調査区外のため正確な平面形は不明だが、円形または楕円形を呈すると推測される。床面は西から東へ緩やかに傾斜しており、東側の覆土は約 30～40cm と西側よりも厚い。床面からは周溝、地床炉、柱穴、多数のビットを検出した。

覆土は黒褐色シルトを主体とし、20～40cm 程度堆積する。本住居上に遺物包含層 SF133 があり、その堆積土も黒褐色シルトを主体とすることから、住居の覆土との判別が曖昧な点は否めない。住居内覆土 1 層（第 56 図 2 区拡張区東西断面図の 1b）が最も厚く堆積するものの、分層には至っていない。よって、北・南側の立ち上がりは確認できていないが、周溝を検出した西～南側の壁の立ち上がりは約 20cm と明瞭である。やや外傾しながら斜めに立ち上がる。覆土 2 層は（同図の 2）層厚が 10cm 未満で上層より若干褐色である。

周溝は 5 本確認した。外側から ED803、804、805、806 を登録した。柱穴は深さがあり確実に主柱穴になるものを EP840・816・843・845・839・846・847 で登録した。

炉は 2ヶ所検出した。EL802（古）→ EL807（新）の新旧関係がある。西側のほうが新しい。地床炉と考えられるが、炉上の EL802 覆土に礫の集積があるため当初は石囲炉だった可能性がある。なお、本住居のすぐ東側に国道が走っており東側の 1/3 は壊されている。

この住居跡は、少なくとも 6 段階の拡張や建て替えが行われている。以下、各住居の変遷を述べる。

重複する住居内で最も古い段階と想定されるのは、ED806 周溝を作った ST202a である。周溝の幅は 15～25cm、深さは浅く 5cm に満たない。規模は推定で直径

### III 調査成果

6.5m 程度になるものと考えられる。一部周溝内に壁柱穴と思われる小柱穴がある。

その外側には壁柱穴と思われる小柱穴列があり、ST202d と把握した。柱穴は直径 10 ~ 20cm 程度、深さは 10cm 程度である。ST202a を拡張したものと思われる。

その外側には周溝 ED805 と柱穴列があり、ST202c と捉えた。周溝は幅 10 ~ 30cm、西側が途切れている。また、壁柱穴と思われる小柱穴列が周溝の中や、溝が切れている箇所に認められる。推定される直径は、7.7m 以上と考えられる。

さらに外側には、3 条の周溝が検出されている。

その中で最も内側の ED804 は、幅 10 ~ 30cm、深さ 5cm 程度である。周溝内に柱穴 3 基が確認される。この周溝を備える住居跡を ST202d と捉えておく。直径は約 8m になるとと考えられる。

その外側には 2 条の周溝が重複してめぐる。内側を ED803a とし、この周溝を伴う住居跡を ST202e としておく。周溝の幅は 10 ~ 30cm、深さは 22cm である。

最も外側の周溝は ED803b で、この周溝を伴う住居跡を ST202f と捉えておく。周溝の幅は約 20cm、深さ 16cm、推定される。直径は約 9m と考えられる。

これらの住居跡に伴う跡や柱穴については、変遷回数が多く推測の域を出ないが、例えば ST202a, b, c は EL802 を伴い、外側の ST202d・e・f は EL807 を伴っていたと推測する。

柱穴については、一案として EL807 に伴う柱穴を EP839, 840, 847、また残り一つは調査区外とする 4 本柱構成、そして東側の出入口に関係する柱穴として EP833 とその北側の 2 本が想定される。また、EP843, 845 も別時期の住居に伴う柱穴と考えられる。

EL802 に伴う柱穴配置として、EP816, 846 の柱穴が想定される。東側には調査区外に 2 基の柱配置があるものと想定される。

以上のように ST202 は 6 段階の変遷が確認されたが、個々の住居の変遷は、断面より前後関係は把握することができなかった。住居跡は、内側を古い段階の住居、外側を新しい段階の住居群と推測し、除去に拡張していくものと捉えておきたい。

出土遺物であるが、第 58 図～62 図に、覆土と床面

出土遺物の主な分布を示した。遺物の取り上げは、覆土 1 層 (F1) が厚さがあり、大量の遺物が出土するため一気に取り上げるのが困難であったため、3 ~ 5cm 単位に掘り下げを行い、1 回目の掘り下げを①、2 回目を②として注記している。

第 58 図に F1 層 1 回目 (F1 ①) の遺物分布と、主な遺物を示した。土器については第 140 ~ 144 図、145 図 1 ~ 13 に示した。石器は、第 226 図 2・7・16、第 227 図 4、第 229 図 1 が出土している。内容の詳細については、遺物の項目について述べるが、深鉢には磨消繩文による意匠が施された、弥生時代中期前葉と考えられる深鉢 (第 140 図 6・第 142 図 4) が認められる。また、外面や内面に顯著に炭化物が付着する浅鉢 (第 143 図 1・3) が認められる。蓋 (第 145 図 1) は大型で、変形工字文が施される。

第 59 図に、F1 層 2 回目 (F1 ②) の遺物分布と、主な遺物を示した。土器については、第 145 図 14 ~ 18・第 146 ~ 148 図・第 149 図 1 ~ 14 に示した。石器は、第 226 図 13・15・20・21・第 227 図 3・第 228 図 1 ~ 3・第 231 図 2・3 が出土している。

土器を見ると、変形工字文が施された浅鉢 (第 148 図 1)、平行双線文を上下から抉りを入れてコブ状にした文様の浅鉢 (第 147 図 10)、高环の脚 (第 148 図 27・28)、磨消繩文による文様を施した蓋 (第 149 図 4) が出土している。蓋の文様に注目すれば、弥生時代中期前葉の資料という事になる。

第 60 図には、F1 層 3・4 回目掘り下げの遺物分布と主な遺物を示した。出土遺物は、土器を第 149 図 15 ~ 18・第 150 図 1 ~ 20・第 151 図 1 ~ 24・第 152 図 27 に示した。石器では、第 226 図 1・3・4 第 226 図 8 ~ 10・第 227 図 2・第 231 図 6・第 232 図 3・第 233 図 3・4 が出土している。

変形工字文が施された深鉢 (第 150 図 8) がある。第 150 図 20 は、砂沢式の新しい時期で、搬入品の可能性がある (根岸氏の指摘による)。他の浅鉢類は、変形工字文が主で、瘤の発達は顯著ではない。青木畠式に類似する資料が主と考えられる。

第 61 図は 2 次調査時に覆土中の遺物の残りや、2・4 区の間のベルト部分を掘り下げた際の遺物分布を示したものである。

第62図は、床面や周溝、柱穴、か跡など住居内施設の遺物分布を示したものである。出土遺物は、第152図・153図・第154図1・3に示した。石器は、第226図6・11・12・14・17・19・第227図1・第229図3・第230図1～6・第231図4・5・7・8・第232図2・4・5・7・第233図1が出土している。

住居内遺構の土器を検討してみると。EL802からは、第153図23～26の土器が出土している。23・24は、砂沢式の新しい段階や青木烟式に併行するものと思われる。第154図1は蓋で、EP833、ED804から破片が出土している。磨消繩文による文様から弥生中期前葉頃になるものと推測され、ST202d住居跡の時期に関連があるものと思われる。ED804からは第153図8～16の土器が出土している。浅鉢類は、やや太めの沈線により変形工字文などの文様が施される。弥生時代前期の中を考えられる資料と思われる。

断片的な資料であるが、これらの事から判断すると、外側のST202dは弥生時代中期前葉頃の時期で、ST202e・fも同じかそれ以降の時期に、ST202c・ED804は弥生時代前期の時期、古い時期のか跡は弥生時代前期の時期、内側の住居群ST202a・bもこの時期になる可能性が高いと思われる。

#### ST801（第63～67図）

4区のAW15～17、AX15～17グリッドに位置する。1次調査時に、SF134捨て場、SX194包含層を検出し、掘り下げていたところ、EL270か跡を検出した（第65図）。翌年の2次調査で精査を進めたところ、東側に壁の立ち上がりを検出したため、住居跡と認識したものである。北東側は黒色土のため壁の立ち上がりは把握できなかったが、地表面で周溝を検出したためこれが北東側の範囲になると推測される。規模は長軸が8m以上、短軸7.3mになる。検出面からの深さは、20cmであるが、本来はより深いものと思われる。覆土は上層が暗褐色砂質シルトで礫が多く入り、下層は黒色シルト層となる。

住居跡中央には地山を掘り込んだ炉跡EL270が配される。概ね円形で広がりは1.95×1.7mである。地床炉と思われるが、検出時に礫のまとまりが認められたため、石囲炉が壊されている可能性もある。主柱穴は、EP227・228・825・828の4基と推定された。柱穴の直径は30～40cm、深さは38～62cmである。

北西側壁際には浅い周溝が認められる。また壁柱穴と思われるEP824などの小ピットが壁際に幾つか検出された。床面は平坦で、薄い貼床も認められた。

出土遺物であるが、覆土からは第170図1～11、床面からは第170図12～15、炉跡からは第170図16～19、柱穴からは第170図20～22の土器が出土している。石器では、第244図1・4・6が出土している。覆土中の土器では、第170図9の土器は高环であり、青木烟式に類似する。第170図2・3・11は浅鉢類で変形工字文などが施され、青木烟式に併行するものと思われる。床面やか跡資料では文様がはっきりと把握できる資料はないが、第170図14は太い沈線が施される浅鉢、15は高台径が大きい高环であり、弥生時代前期に入る資料と思われる。

#### ST808（第68～70図）

4区のAW・AX14・15グリッドで検出された。周溝ED810が検出された事から住居であることが認識された。1/2の範囲の検出で、西側は調査区外となる。平面形は概ね円形と思われ、直径は約6.3mである。上部を搅乱などで削平されていると思われ、南東側はほぼ床面が露出している。覆土の深さは、深いところで40cmほどである。床面には貼床が認められた。

西側の壁際には、地床炉のEL823が検出された。直径は約40cmである。周溝は深くはっきりしている。深さは25cmである。柱穴はEP811～814・820～822・844の9基を検出した。このうち、EP812・820は規模や深さから判断すると主柱穴になるものと思われる。出土遺物であるが、覆土から第170図23～35、第171図6～15、床面から第170図36・37、周溝ED810の覆土から第171図1・2、EL823から第171図3・4・EP844から第171図5の土器が出土している。石器では、第244図2・3・5・第245図1～7、第246図1の石器が出土している。

住居覆土中の資料には、第170図27は磨消繩文による三角形・菱形状の文様が施され、弥生中期前葉になるとと思われる。第170図37の床面出土土器は弥生前期に含まれるものと思われる。

#### ST836（第63図）

ST801やST202の床面を精査したところ、これらの住居跡とは別遺構となる周溝を検出したため、ST836

### III 調査成果

として登録した。2か所の周溝、ED834とED819・826で構成される。南側のED834はAV・AW16グリッドで検出され、幅35～50cm、東側の壁面で確認された深さは15cm程度である。平面では新旧の周溝があるように見受けられる。南側のED819・ED826は、AX16・17グリッドで検出された。平面の状況では、ED826が古く、ED819が新しいように見受けられる。ED826は、幅が30～50cm、ED819は幅約25cmである。東壁で観察された断面では両者の切り合いは判断がつかなかった。深さは、ED819が15cm、ED826が25cmである。住居規模であるが、2か所の周溝の東側が道路によって切られているため不明であるが、直径8.2m以上の規模になるものと推測される。柱穴であるが、住居範囲内にあるEP817・829・850などが伴う可能性があるが断定はできない。他の住居跡との重複関係であるが、ST202とST801に重複している。ST202との前後関係は不明である。ST801については、この住居の周溝がST801にかかっていない事から、ST801の方が新しい遺構であると推測した。

この住居跡に伴う出土遺物であるが、第171図17・18・20・21の土器が出土している。第171図18は大洞B式土器と考えられ、混入の可能性がある。その他の資料については、小破片で時期の特定が難しく、晚期末から弥生時代の時期に入るものと見ておきたい。

#### ST832（第63図）

4区AX・AY17グリッドで検出された。当初、落ち込み状の遺構で住居跡と認識していなかったが、掘り下げたところ、2条の周溝、ED837、838を確認したため、住居跡として登録した。部分的な検出で、大部分が調査区外となるため、全体の平面形は不明である。東側壁面で認められる住居の深さは約30cmほどであるが、壁面での壁の立ち上がりはあまり明瞭ではない。覆土は黒色砂質シルトを主体とする。

住居跡壁際の周溝ED838は、幅25～35cm、深さ20cmである。その内側のED837は、壁面にかかり幅は不明であるが深さ20cmである。

出土遺物であるが、住居跡覆土から第171図16の土器が出土している。沈線による弧状の文様が描かれ、弥生時代に含まれると思うが、詳細時期については不明

である。住居跡の時期は、弥生時代前期から中期前葉頃になるものと捉えておきたい。

### 土 坑

2区では、42基の土坑が検出された。以下、主な物について説明を加えたい。

#### SK4（第71図）

2区AW・AX08グリッドで検出された土坑で長さ184cm、幅104cmの不整梢円形を呈する。2か所ピット状の落ち込みがある。深さは28cmで覆土はシルト混じりの黒褐色砂質層が主体である。東側の落ち込み付近から弥生時代の蓋（第155図1）が出土しており、弥生時代の土坑と考えられる。

#### SK7（第71図）

2区AW09グリッドで検出された土坑で長さ92cm、幅76cm、円形を呈する。深さは48cmで黒色シルト層が主体であり、西南端が壊乱により切られている。瘤付土器の注口土器や深鉢の土器片（第155図2・3）が出土しており、時期は縄文時代後期後葉と思われる。

#### SK8（第71図）

2区AX09グリッドで検出された土坑で、長さ120cm、幅108cmの円形を呈する。土坑中心付近の底面に直径25cm程度のピット状の落ち込みがある。深さは48cmで覆土は黒色シルト層が主体である。深鉢、鉢の土器片（第155図4・5）が出土しており、時期は縄文時代後期後葉と考えられる。

#### SK9（第71図）

2区AY08グリッドで検出されたフラスコ状の土坑で長さ164cm、幅124cmの梢円形を呈する。深さは76cmで覆土は黒色シルトが主体である。深鉢、浅鉢、壺、高环の脚部などの土器片（第155図7～17・第156図1～3）、円盤状石製品（第234図3）、石核（第234図4）、四石（第234図5）が出土している。四字文が施された個体が複数見受けられ、時期は縄文時代晚期大洞A～A'式期と考えられる。

### 土器埋設遺構

#### SK106（第72図）

2区AY09グリッドで検出された遺構で長軸129cm、短軸120cmの不整円形を呈する。深さは52cmで黒褐色シルトの单層である。深鉢（第156図6）埋設された形で出土しており、深鉢上部の土器片群には一部四字

文と思われる文様のある鉢（第156図7）が含まれていた。このため上部は削られているが合口土器柄であった可能性が高い。土器から推定すると縄文晩期末～弥生時代の遺構と考えられる。

#### SK143・147（第72図）

SK143は2区AR10・AS10グリッドで検出された。長さ176cm、短軸120cmの楕円形を呈し、深さは28cmである。覆土は黒色シルトが主体である。SK147は、SK143の北端を一部切っている。楕円形で長軸66cm、短軸50cm、深さ20cmである。遺物であるが、SK143からはハケメ状の条線文が施された深鉢や高环（第157図1～3）やツール（第234図6）が、SK147からは、石核（第235図1）が出土している。第157図3は匹字文が施された高环で、大洞A2式と考えられる。

#### SK148（第73図）

2区AU13・AU14グリッドで検出された土坑で長さ256cm、幅156cmの不整楕円形を呈する。深さは52cmで黒褐色の砂混じりシルト層が主体である。土坑の南側が落ち込んでおり、落ち込みの上層部から深鉢、鉢、壺（第157図4～11）や凹石・磨石（第234図2・第235図3）出土している。変形工字文を施した浅鉢が認められ弥生時代前期と考えられる。

#### SK166・SP167（第73図）

2区AV13グリッドで検出された土坑で長さ156cm、幅80cmの不整円形を呈する。東側に向かって落ち込んでおり、深さは32cmで覆土は黒褐色のシルト混じりの砂が主体である。SK166の南側に隣接してSP167が検出されている。長さ56cm、幅40cmの不整楕円形を呈し、深さは64cmで黒褐色のシルト混じりの砂が主体である。柱痕が確認され柱穴と考えられる。SK166からは深鉢、鉢（第157図13～20）、SP167からは深鉢の土器片（第159図13）が出土している。第157図18は変形工字文が施される。SK166は弥生時代前期に帰属すると思われる。

#### SK168（第72図）

2区AV13グリッドで検出された。長さ96cm、幅84cmの円形を呈する。土坑の中心よりやや南東側に直径10cm程度のビット状の落ち込みがある。深さは64cmで上部を黒色シルト、落ち込みを黒褐色砂質シル

トが占める。壺の体部と思われる土器（第157図21）や敲石（第235図2・4）出土している。出土土器は弥生時代中期で、この時期の土坑と考えられる。

#### SK190・SP191（第73図）

2区AR12グリッドで検出された土坑である。SK190は長さ64cm、幅60cmの円形を呈する。深さは24cmで黒色シルトが主体である。SP191は長軸51cm、短軸40cmの不整円形を呈する。深さは18cmで黒褐色シルトの单層である。SK190がSP191の南西端を切っている。SK190からは遺物が出土していないが、SP191から平行沈線文のある浅鉢（第160図2）が出土しており、縄文晩期末～弥生時代の遺構と推定される。

#### SK243・SK244（第83図）

2区AR12・13グリッドで検出された土坑である。SK243は長さ152cm、幅104cmの円形を呈する。SK244は長さ112cm、幅92cmの不整円形を呈しSK243の北東端を切っている。SK243からは第158図3・4の土器が、SK244からは第158図5が出土している。第158図4の浅鉢には匹字文が施されており、大洞A2式に相当するものと思われる。

#### 柱穴・ピット

2区は2区北東部、南西部、南東部、西側壁付近の4か所に多数のピットが集中するピット群が見られる。これららの箇所では柱穴と見られる遺構もあり、何らかの建築物があった可能性がある。特に西側壁付近には弧状に並ぶ柱穴群があり、建物跡があつた可能性が高い。

#### 2区西側柱穴群 SP43～47・49（第75図）

2区東側AU07、08・AV07グリッドを中心に分布する柱穴群である。遺構登録したものは6基である。深さは40cmから52cmと似たような深さで、柱痕が確認されることから柱穴であると思われる。SP43・44・45・46・47・49を関連あるものと捉えた。これらの遺構は同時期のものである可能性が高い。登録したもの以外に、その外側にも浅いピット群が取り囲むように分布する。複数回建物が建てられていた可能性がある。以下、個別の柱穴について記述しておく。

SP43は2区AU08グリッドで検出され、長さ104cm、幅60cmの不整楕円形、深さは56cmである。土器片（第158図16・17）が出土しており、弥生前期頃と推定される。

SP44 は 2 区 AU07 グリッドで検出され、平面は長軸 36cm、短軸 28cm の不整円形を呈す。深さは 52cm で黒色の砂質シルトの単層である。遺物の出土はない。

SP45 は 2 区 AU07・08 グリッドで検出された柱穴で長さ 92cm、幅 52cm の不整円形を呈す。深さは 48cm で黒色の砂質シルトが主体である。柱痕が確認された。第 236 図の 2 の磨石が出土した。

SP46 は 2 区 AU07・08 グリッドで検出された。長さ 44cm、幅 40cm の円形を呈す。深さは 44cm で黒色のシルト混じりの砂が主体である。柱痕が確認された。第 236 図 3 の磨石が出土した。

SP47 は、2 区 AU07 グリッドで検出された柱穴で長さ 44cm、幅 40cm の円形を呈す。深さは 48cm で黒色のシルト混じりの砂が主体である。柱痕が確認された。遺物の出土はない。

SP49 は 2 区 AU07 グリッドで検出され、長さ 60cm、幅 52cm の円形を呈す。深さは 48cm で黒褐色のシルト混じりの砂が主体である。柱痕が認められる。遺物の出土はない。

これらの一連の柱穴が同じ遺構を構成しているとすれば、弥生時代前期の遺構になるものと思われる。

## 2 区その他の柱穴・ピット

### SP137 (第 77 図)

2 区 AS12 グリッドで検出された柱穴で長さ 112cm、幅 92cm の円形を呈す。北側と南側が落ち込み、それぞれ柱痕があるため別の柱穴と思われる。北側の柱穴は深さ 44cm、南側の柱穴は 38cm である。遺物の出土はない。

### SP141 (第 77 図)

2 区 AS12 グリッドで検出された。平面形は円形で長さ 104cm、幅 96cm、深さ 84cm で、覆土は黒色シルトが主体である。遺構上部から円礫、角礫がまとまって出土しており、人為的な廃棄と考えられる。

### SP169・170・171 (第 77 図)

2 区 AW12 グリッドで検出された柱穴・ピットである。SP170 は長さ 44cm 幅 40cm の円形を呈する。深さは 52cm で地山ブロックの混ざる黒褐色シルト層が主体である。柱穴痕が見られるため柱穴であると考えられる。土器の小片が出土しているが時期は不明である。SP171 は SP170 の西南端を切る形で検出された柱穴である。

長さ 56cm、幅 48cm の楕円形を呈す。深さは 68cm で黒色シルトが主体である。柱穴痕が見られるため柱穴であると考えられる。浅跡の土器片（第 159 図 14・15）が出土しており、時期は弥生時代と考えられる。SP169 は SP170 の東側に隣接するピットである。長さ 44cm、幅 28cm の楕円形を呈す。深さは 28cm で黒色の砂質シルトが主体である。遺物の出土はなく時期は不明である。

### SP172 (第 77 図)

2 区 AW12 グリッドで検出された柱穴で長さ 64cm、幅 52cm の不整円形を呈す。深さは 56cm で黒色の砂が主体である。柱穴痕が F1 に見られるため柱穴であると考えられる。口縁にキザミが施された深跡（第 159 図 16）が出土している。時期は弥生時代と考えられる。

### SP177 (第 78 図)

2 区 AW12 グリッドで検出された柱穴で長さ 84cm、幅 64cm の円形を呈す。北側が落ち込んでおり、深さ 44cm で黒褐色のシルト層が主体である。深跡の底部と見られる土器片（第 159 図 18）や小片が出土しているが、遺構の詳細な時期は不明である。

### SP179・180・181 (第 78 図)

SP180 は 2 区 AU11 グリッドで検出された柱穴で長さ 124cm、短軸 84cm の楕円形を呈す。深さは 44cm で黒色シルト層が主体である。柱痕が見られるため柱穴であると思われる。柱穴付近で入れ子状の深跡と壺（第 159 図 19・20）が出土している。時代は弥生と考えられる。SP179 は SP180 の北西側で検出されたピットである。直径 40cm の円形を呈す。深さは 24cm で黒色シルトの単層である。土器の小片が出土しているが、時期は不明である。SP181 は SP180 の南東側で検出されたピットで長さ 84cm、幅 72cm の円形を呈す。深さは 24cm で黒色シルト層が主体である。土器の小片が出土しているが遺構の詳細な時期は不明である。

### SP199 (第 78 図)

2 区 AT11 グリッドで検出されたピットで長さ 54cm、幅 38cm の楕円形を呈す。深さは 52cm で黒色シルトの単層である。円礫が縦に埋設されたような状態で出土している。土器の小片も出土しているが時期は不明である。

### 性格不明遺構

**SX5・SP48** (第 75 図)

2 区 AV08・09、AW08・09 グリッドで検出された遺構で、長さ 428cm、幅は 176cm、深さは 44cm である。遺構は東西から中心に向かって段状に落ち込んでいる。また東端には 3 か所ビット状の落ち込みが見られる。覆土上層は黒褐色シルト層、下層は黒褐色砂質層で構成される。遺構からは壺の頸部～体部の土器片（第 160 図 9）が出土している。遺物から弥生時代の遺構であると推定される。SX5 の西端に隣接して SP48 が検出された。長軸 64cm、短軸 48cm の不整円形で深さは 48cm である。黒色の砂質シルト層が主体で柱痕が見られるため柱穴であると考えられる。遺構からは高環の脚部片（第 158 図 19・20）が出土しており、弥生時代の柱穴であると推定される。

**捨て場****SF3** (第 79・80 図)

2 区西側の AR～AT・8～9 グリッドに分布する。現代の水道管や建物の基礎などの撹乱を受けている。覆土は、厚い所で約 20cm、黒色・黒褐色シルトである。

遺物の出土はそれほど多くないが、AS08、AT08、AS09、AT09 グリッドに集中している。捨て場を掘り下げた下には、柱穴群が検出された。当捨て場の遺物は、下の遺構に関連している可能性がある。

出土遺物であるが、第 161・162 図の土器、第 239 図 4 の石核が出土している。特徴的な遺物について触れてみたい。第 161 図 12 は深鉢で、体部に磨消繩文によるヒトデ状の文様が入る。弥生時代中期前葉と考えられる。第 162 図 10・12 の蓋も同じ時期と思われる。第 162 図 8 は高環の脚部で、下に平行沈線文と楕円文が入る。内面には黒色の付着物が付いており、漆の可能性がある。第 162 図 13 は無文の壺で口縁部に突帯があげられる。内面には輪積み痕と指頭圧痕が見られる。

**SF133** (第 81～83 図)

2 区東端に南北へ広がる状態で検出された。全体の平面は第 8 図の遺構平面図で把握できる。AR・AS-12・13 グリッド、AT14、ST202 と重なる AU・AV15 に分布する。ここでは特に遺物の分布密度が多かった AR・AS-12・13 グリッドについて述べたい。

SF133 の断面を第 82 図下に示した。西から東にかけて傾斜する。覆土は F1 と F2 に分かれれる。F1 は、黒色

シルトの層で層厚は 10～35cm、東端が最も厚い。F2 は黒褐色シルトでバミス粒が上層より多く入る。層厚は 5～10cm である。F1 は、3～5cm 程度の深さで 3 回に分けて掘り下げを行い、その際に検出面で出土した遺物を上メン（上面）1 回目掘り下げで出土した遺物を①、2 回目を②などとして注記を行っている。

第 81 図に SF133F1 ①②の主な遺物分布を示した。F1 の上面出土遺物について、土器を第 163 図に示した。石器では、第 240 図 5・7・第 241 図 1・6・第 242 図 4 などが出土している。F1 ①の出土遺物については、土器を第 164・165 図、石器を第 239 図 7・第 240 図 2・6・8・9・第 241 図 3・5・第 242 図 1 に示した。上面出土土器では、磨消繩文による文様が施される第 163 図 8・9・26 などの土器や、変形工字文や匝字文が施される浅鉢（第 163 図 16・23）などが見られ、弥生前期から中期前葉にわたる資料が見られる。また一部繩文晩期末と考される遺物もある。F1 ①の出土土器では、弥生時代中期前葉と考えられるもの（第 164 図 17・第 165 図 22）、弥生時代前期に含まれるもの（第 164 図 22・第 165 図 1・14・19）、繩文晩期末に含まれるもの（第 165 図 23）など、時間幅がある。

SF133F1 ②の出土遺物については、土器を第 166 図、石器を第 239 図 6・第 240 図 1・3・第 242 図 3 に示した。

F1 ②出土土器であるが、弥生時代前期～中期中葉に位置づけられる土器、繩文時代晩期末になる土器、また少量の繩文中期前葉と思われる土器なども出土している。

第 81 図下に、SF133F1 ③出土の主な遺物分布を示した。出土遺物は、土器を第 167 図 1～12 に、石器を第 239 図 5・第 242 図 6・第 243 図 1 に示した。土器では、変形工字文が施される弥生時代前期と考えられる浅鉢類（第 167 図 7・9・11）、平行沈線文に上下からの抉りが入る文様の高环で晩期末と思われるもの（第 167 図 3）などが認められる。

第 82 図上に、SF133F2 出土の遺物分布を示した。出土遺物については、土器を第 168 図 1～5、石器を第 239 図 9・第 242 図 7 に示した。

出土土器は第 168 図 5 が弥生時代前期に含まれる可能性がある資料、第 168 図 2・3 が弥生時代中期前葉に該当すると思われるもの、第 168 図 4 が弥生時代中

### III 調査成果

期中葉に該当すると思われる資料で、時間幅がある。

SF133に関しては、どの層についても縄文時代晩期末～弥生時代中期に該当する遺物が出土しており、層位的に時間差が認められるものではない。恐らくは捨て場を掘り込んで構築されている遺構の影響があるものと考えられる。

#### SF134・SX192（第65図）

SF134は、4区AW～AX-15～17グリッドで検出された。2区のSF133に対応する捨て場であるが、地区が変わるためにSF134と新たに登録したものである。捨て場を掘り下げたところ、ST801竪穴住居が下に検出されたため、恐らくはST801の覆土遺物の多くがSF134の中に含まれると考えられる。覆土（F1）は、黒色シルトを主体とする層で、第64図4区東壁の2、4区北壁の3に相当する。掘り下げ時に、3～5cm単位で掘り下げて遺物の取り上げを行い、それぞれ①、②などと注記を行っている。

SX192は、4区AW・AX-15・16グリッドで検出された包含層で、第64図4区北壁断面図の2に該当する。褐色砂層で、地山由来の角礫を多く含む。SF134の上の層である。なお、主な遺物については位置の記録を行って取り上げを行っており、第66図に示した。

SX192の出土遺物であるが、土器は、第171図23～27・第172図1～8が出土している。石器では第246図7・8が出土している。変形工字文が施された鉢（第171図27）、高杯（第172図10）などが出土しており、弥生時代前期の遺物が中心になると思われる。

SF134の出土遺物であるが、土器は第172図11～16・第173～175図が出土している。また、4区のII層出土とした遺物も、SF134の遺物とみなしてよい。4区II層出土の土器は、第176図8・11～33・第177図1～10が該当する。石器では第246図2～6・9・第247図1～4が出土している。またII層出土とした、第247図5・6、第248図2も該当する。

第66図に掲載した遺物であるが、第173図4は深鉢（F1①）、第173図21は磨消縄文による文様の蓋（F1①）、第174図3は深鉢（F1②）、第174図8は深鉢（F1②）、第174図9は深鉢（F1②）、第174図10・第175図1は、変形工字文が施された浅鉢（F1②）、第175図24は深鉢（F1③）である。F1①、F1②とも、

弥生前期から中期前葉の遺物の出土が認められる。

#### D 3区の遺構

##### 捨て場

###### SF60（第86図～92図）

3区の北側の、AN09、AO07～09、AP07～09グリッドに位置する。AN09、AO09グリッド部分に、南北4.4、東西2.8mの不整梢円形状に落ち込む箇所があり、本来であれば別遺構として登録も考えたが、覆土は周辺の堆積土と変わらないため、SF60として遺物の取り上げを行っている。出土遺物の大部分がこの落ち込み部分から出土している。

覆土であるが（第87・92図）、F1層が、黒色～黒褐色シルト層で、落ち込み部分から大量の遺物が出土した。F2層は、褐色砂を主体とする層である。F3層は、黒色シルト層に地山ブロックを斑状に含む層である。

F1層は層厚が深いところでは40cmに達したが、その中で細かい分層は難しかったため、上から3～5cm単位で掘り下げ、各掘り下げをF1①、F1②として遺物を記録し取り上げを行った。F1層は、6回に分けて掘り下げを行っている。F1層の各掘り下げの遺物分布を、第88図～第91図に示した。

第88図に、F1①の遺物分布を示した。主にAN09・AO09グリッドで遺物が出土しており、北端部分で遺物が集中している。

F1①出土の遺物であるが、第178図1～8・第179図3の土器が出土している。変形工字文が施された浅鉢（第178図1・2・6）・匹字文が施された浅鉢（第178図7）が出土している。

F1②出土の遺物分布を第89図上に、F1③出土の遺物分布を第89図下に示した。

F1②出土遺物は、第180図1～5・10の土器、第248図8の石器が出土した。

F1③出土遺物は、第180図6～9・11～14・第181図1・2の土器、第248図10の石器が出土している。

第180図2、第180図10も深鉢である。変形工字文や匹字文などの文様が施される。5は無文の壺の体部で、内側に黒色の塊状の付着物や赤色の顔料が見られ、内容物を加熱したと思われる痕が認められる。

第180図7は小型の深鉢である。第180図11～14は、浅鉢や高环の口縁部である。変形工文を中心とした文様が施される。繩文晩期末から弥生時代前期に帰属すると思われる。第181図2は蓋で、沈線による梢円文が施される。内面には炭化物の付着が顕著である。弥生時代中期前葉の可能性がある。

第90図に、F1④・⑤の主な遺物の分布を示した。F2④出土の遺物として、第181図4・5、第182図2、第185図3、第186図4の土器、石製品として、第248図13の玉が出土している。玉は、SF60の覆土をフルイ掛けした際に出土したものである。

第181図4は鉢で、対面に縱方向の赤彩された文様がある。第182図2は、高环である。口縁部に変形工字文が、脚部に鋸歯文とその間に刺突が充填される。弥生前期と思われる。

F1⑤出土の遺物として、第182図4・第183図1・2・第183図3が出土している。石器では第248図12が出土した。第182図4は匹字文が施された浅鉢、第183図2は丸底の口縁部が外反する鉢、第183図3は小型の壺で、横方向の方形文が施される。内面に黒褐色塊状の付着物が残っており、外面には加熱した痕跡が残る。F1⑤は、弥生前期から中期前葉までと遺物に時間幅がある。

F1⑥・F2とF3出土遺物の分布を第91図に示した。

F1⑥・F2の遺物として、第181図3・第183図4～8・第184図1・3～6がある。第184図1は壺で口縁部に匹字文が施され、体部は無文である。第183図7は丸底の鉢で平行沈線文間に上下から抉りが入る文様が施される。概ね弥生前期の遺物と考えられる。F2出土の第181図3は、丸底の鉢で匹字文が施される。

F3出土遺物の分布を第91図下に示した。第179図1・第180図8・9・第182図5・第183図4・第184図7・8・第185図1・4・6・7・第186図1・2・4～19・第187図1～5・第187図14の土器、第248図11・第249図4の石器が出土している。分布図の主な土器について述べる。第179図1は波状口縁の高环で、全体に赤彩が施される。口縁部には変形工字文、脚部には流水文や波状文が施される。青木烟式の高环と類似するものである。第184図7は丸底の浅鉢で底はやや扁平である。口縁部や体部に平行沈線文に匹字文状の文様

が施される。第187図1は波状口縁の浅鉢で、上半に変形工字文が施される。第182図5は波状口縁の深鉢で体部に変形工字文が展開する。第186図9は大型の浅鉢である。匹字文が施され、全体に炭化物が付着する。第187図5は波状口縁の蓋で、変形工字文が施される。使用による炭化物が付着する。一部古い様相のものが認められるが、概ね弥生時代前期に相当する資料と考えられる。

第92図に、SF60F3下層の遺物分布を示した。この面が遺物が出土する最下層となる。土偶が出土した層である。断面を第92図上に示した。F3は左上の断面図の1に該当する。元々は点線ラインまで堆積していたものである。この層の下は、長軸1.7m、短軸1.2m、深さ48cmの梢円形の土坑状に落ち込む。出土遺物であるが、第188図1の土偶がほぼ水平な状態で出土した。土偶は頭部を欠くが、その下はほぼ完形である。肩の部分は隆帶により肩バット状に隆起し、その上に刺突が充填される。刺突土偶と呼ばれるタイプである。背面上には肩の部分に平行沈線文があり、背中には「6」字状の沈線文が入る。腰の部分には帯状の突帯がめぐる。足先にはキザミにより指の表現がある。全体に赤彩が施される。土偶の西脇には第186図18黒色の小型壺が出土している。頭部に沈線文がめぐる。口縁部を欠く。その他、第186図13の浅鉢が出土している。土偶の時期については、同一層出土土器の内容などから弥生時代前期に位置づけられると思われる。

#### SF135（第93図）

3区は、2回にわけて調査区を設定し、後半の調査区でSF60の西側の続きとなる捨て場を検出した。この捨て場は名称を変えてSF135とした。AM～AQ06、AN～AQ07グリッドで検出された。覆土F1層は黒色シリトを基調する層で、深さは15～25cmである。遺物の分布は散漫である。F1層は、3回に分けて掘り下げを行い、F1①、F1②などと表記している。

第93図に遺物分布の平面図を示した。出土遺物は、第187図17～26、第189図1～26の土器、第248図3～5、第249図3・5・6の石器がある。

#### 3区のその他の遺構

3区の捨て場以外の遺構について簡略に述べる。

SF60と重複して、SK53が検出された（第86図）。

### III 調査成果

SF60 を掘り下げたところ検出されたものである。長軸 2.0 m、短軸 1.7 m の不整円形で深さは 20cm である。覆土は黒褐色シルトで遺物の出土はない。

また、SF135 下より、SK261、262 の 2 基の土坑が検出された（第 93 図）。SK261 は長軸 104cm、短軸 40cm の梢円形、SK262 は長軸 44cm、短軸 56cm の梢円形となり、覆土は SF60 と類似する。これらの土坑については、時期が判別できる遺物は出土しなかった。

## E 5 区の遺構

### 土 坑

#### SK503（第 95 図）

5 区北側の AO18 グリッドで検出された。平面形は円形で断面形は皿状を呈する。覆土は廃棄による人為堆積と考えられる。覆土中からは遺物がまとまって出土している。出土遺物は、第 190 図 1～4 の縄文土器が出土している。第 190 図 1 は、外面に撚糸文が施され、内面に格子目状に沈線が入る。2 は外面は撚糸文が施され、沈線による文様が入る。時期は後期前葉南境 1 式期になると考えられる。

#### SK507（第 95 図）

5 区北側の AK20 グリッドで検出された。平面形は円形で一部は調査区外となる。断面形は台形状を呈する。覆土は廃棄による人為堆積と考えられる。覆土中からは遺物がまとめて出土した。出土遺物は、第 190 図 5・10 の土器、第 250 図 8 の大型石皿が出土している。石皿は、破損した状態で出土したが、破片を接合するとほぼ完形となった。第 190 図 10 の土器は縄文が施される深鉢で、弥生時代に帰属する可能性があると思われる。

#### SK508（第 95 図）

5 区南側の AK20 グリッドで検出された。現代の溝に上面を切られる。平面形は円形で、断面は井戸状に深く落ち込む。覆土は黒色砂混じりシルトを基調とし、覆土中からは遺物が出土しているが、まとまりはない。なお、土坑の底面近くの層からは赤色顔料が混じった砂が確認されたと、担当した作業員からの所見があったが、ベンガラが散布されていたのか、酸化鉄の蓄積によるものなのか不明である。出土遺物は、土器片と第 249 図 9・10 の石器が出土した。

#### SK511（第 96 図）

5 区南側の AL20 グリッドで検出された。平面形は円形で東側の一部は調査区外となる。断面はほぼ垂直に近いが、部分的にオーバーハングになる。覆土は短期間に埋められた人為堆積の様相を呈する。出土遺物であるが、第 190 図 6～9 の土器が出土している。第 190 図 2（RP1302）は完形の深鉢であり、覆土 3・4 層上面で口縁を下に斜面で出土した。弥生時代前期に位置づけられると考えられる。他に後期後葉の縄文土器片が出土しているが、土坑の時期は弥生時代に帰属するものと思われる。

### 性格不明遺構

#### SX501（第 96 図）

5 区南側の AM・AL20 グリッドで検出された。東側の一部が調査区外に広がる。SK511 と重複しており、断面観察ではこれを切っているものと考えられる。平面形は不整形であるが北側が円形の土坑状に落ち込み、北側壁がオーバーハングする。覆土は人為堆積と考えられる。出土遺物は、第 199 図 1 の縄文土器が出土しており、縄文晩期中葉大洞 C1 式期になると考えられる。土坑の時期であるが、出土遺物は縄文土器であるものの、SK511 より新しいという重複関係より、弥生時代以降の可能性が考えられる。

### 土器埋設遺構群（第 97 図上）

5 区の北側、AS・AT-19～21 グリッドに集中して検出された土器埋設遺構群である。計 10 基の遺構を検出した。このため調査区の拡張を余儀なくされた。基本層第 I・II 層削削面には非常に多くの遺物が出土したことから、土器埋設遺構の範囲は北西方向にも広がっていたものと考えられる。なお、調査区北東部は崖となっており、遺構は確認されなかった。また、5 区北の道路側及び崖側からは昭和 22 年と銘記された茶碗などが捨てられており、その当時はこの遺構上部がゴミ捨て場となっていたと思われる。以下に、本遺構群を検出した経緯を簡単に述べる。

まず、5 区北側は電柱や立木により重機による掘削が不可能であった。よって、人力により表土及び立木の除去を行った。そして基本層第 II 層の除去中に、SK512・513・516・521 及び EU515 の土器の一部を発見し、II 層除去後にはおおよそのプランが検出された。そして、SK513 などの検出写真撮影などを行うため、未着手で

あった北西部の表土除去を行った。その際にSK514の一部を検出し、先と同様に撮影を行うために南西部の表土除去も開始した。SK523の壺はその際に発見された。また、EU515付近は遺物が多く出土することから同様に表土除去を行ったところ、SK525・528を検出した。SP529も表土除去中に遺物が集中することから検出された。後述するように、SK513・514・523周辺は立木が遺構に絡むような状態であり、ほとんどプランは確認できなかった。

本遺構群の特徴は、2個セットの土器が埋設されている点と棺身と蓋の組みあわせで出土する点である。亞同士の組み合わせや深鉢同士の組み合わせがみられる。特に、SK514では壺と鉢の合口が2セット並置されていた。以下にそれらの概要を述べる。

#### SK512（第97図）

AS20グリッドに位置する。基本層第II層を掘削中に、口縁部とみられる土器片を発見したことにより検出した。長軸約120cm、短軸約100cmの不整円形を呈する。断面形は逆台形で確認面からの深さは約40cmある。

覆土は4層に細分した。深鉢が埋設されていたのは第1層である。各層とも5~10mm程度の褐色礫が少量含まれる傾向にある。

第190図12（RP1309）の深鉢は、やや傾くように出土した。体部下半が残存し、口縁部や体部上半を欠く。第190図11は高環の脚部である。変形工字文が施され、よくミガキ調整されている。12の土器の内部から出土したものである。両方の土器の欠損部は、以前の開発により破壊されたものと考えられる。これらの土器は、土坑底面より浮いた状態で出土し、恐らくは深鉢と高環が合口状となって埋設されていた可能性が高いものと考えられる。ただし、他の土器墓埴と考えられる資料よりサイズが小さい。時期は弥生時代前期に位置づけられると考えられる。

#### SK513（第97図）

AS20グリッドにあり、SK512及び514・516に囲まれるように位置する。SK512と同様、基本層第I・II層掘削中に壺の口縁部が2つ並列していることから検出された。胴部最大径や下まで下げたところ、掘り方プランを検出した。検出長は長軸約80cm、短軸約73cmのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは約

25cmある。

覆土は3層に細分された。第1・2層は黒褐色シルトを主体とする。第3層は灰黄褐色を呈する。また、1層に比べ2・3層は強くしまる傾向にある。また、土坑底部南西側には径約10cm程度の礫があったが、地山由来のものと思われる。

検出した2つの壺はともに北東側にやや傾いていた。RP1303がRP1304にもたれかかるような出土状況であった。先述のSK512も同様の方位に傾くことを考慮すると、調査以前の開発ないし人為行動、土圧などにより土器が傾いた可能性もある。当初は正位で埋設されていた可能性も否定できない。しかし他の遺構のように合口状態で埋設された可能性は低いと思われる。合口であれば壺以外の口縁部や底部の破片が出土するはずであるが、本遺構には見られなかった。

また、前者は土坑底面よりも1cm程度浮いて埋設されている。一方後者は第3層の上に置かれる。第3層が遺構東側に流入することから、順序としては前者から後者の順に埋設されたと推測される。

第191図1（RP1303）は壺で、口縁部は無文で波状となり、体部に繩文が施文される。2（RP1304）は平口縁の壺で、体部に同じく繩文が施文される。時期は、弥生時代に位置づけられると考えられる。

#### SK514（第98図）

AS20グリッドに位置し、SK513に隣接する。SK513の撮影のため北西側の表土除去を行ったところ、鉢と壺が合口の状態で発見されたため、さらに拡張をおこない検出に至った。そして基本層第II層を掘削後、プランが不明瞭であったため壺の体部最大径よりや下まで掘り下げたところ、掘り方のラインを検出した。SK520と重複関係にあり、SK514が新しい。検出長は長軸約112cm、短軸約60cmで、卵形を呈すると思われる。確認面からの深さは、約33cmである。

覆土はSK520の第4層と同様に、褐色シルトに地山土を少量含むものが主体となる。

北側の合口土器棺について、上に蓋となっている鉢をRP1308、下の壺をRP1316として登録した。南側の合口土器棺は、蓋の部分となっている鉢をRP1306、下の壺を1317として登録した。

北側の土器棺を第192図2、第194図1に示した。

南側の土器棺を第 193 図 1 (RP1317)、第 194 図 2 (RP1306) に示した。この土器棺の内部からは、石製品として第 250 図 6 の平玉が出土している。軟質な凝灰岩を用いている。

これらの土器棺の時期であるが、型式的には、第 193 図 1 壺および第 194 図 2 の浅鉢は、弥生中期前葉頃と思われ、第 192 図 2 は、弥生前期頃と思われる。第 194 図 1 鉢は、型式的にはより古い様相があるとの指摘もあるが、壺との共伴関係により弥生時代に入るものと見ておきたい。ただ、この 2 つの土器棺は、時間差をもって後から土器棺を追加して埋めた、という様相は見られず、2 基とも同時に埋納したと考えられた。

#### SK516 (第 99 図)

AS20 グリッドにあり、SK513 に隣接する。当初、木の根が刺さっている逆位の深鉢 (RP1307) を検出した。遺構とは認定していなかったが、下位に黒い堆積土が確認できることから、遺構と想定し半截したところ、土坑底部に赤色顔料が敷かれている様子が確認された。また、深鉢下位にもほぼ完形の土器 (RP1315) が確認されたことから、木の根を伐採し、東側では比較的明瞭なプランを確認できた。しかし、西側は非常に不明瞭であった。検出長は長軸 141cm、短軸 68cm の長楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは 33cm ほどある。

覆土は 2 層に細分された。第 1 層は黒褐色シルトを主体とし、第 2 層は暗赤褐色砂の中に赤色顔料が多量に含まれる。RP1315 壺は 2 層の上に正位で埋設されていた。立木により上部の深鉢 RP1307 は斜位になっていたが、当初は深鉢と壺の合口で埋設されたと推測される。

第 191 図 3 は体部に縄文が施された深鉢である。外面、内面に使用による炭化物の付着が多い。第 191 図 4 は口縁部が無文で体部が縄文の壺である。時期が限定できる特徴があまり無いが、弥生時代に帰属しておきたい。また、この土坑内の覆土を回収し、フリイにかけてみたところ、第 249 図 7 の石礫が確認された。軟質な白色の頁岩を用いており、副葬品となる可能性がある。

#### SK521 (第 99 図)

AS20 グリッドにあり、立木を挟んで SK512 の北側にある。基本層第 II 層掘削中に深鉢の底部及び口縁部破片が集中はじめしたことにより検出した。木の根が土器

を圧迫し、逆位の深鉢の口縁部はほぼ破片となっていた。平面形は隅丸三角形を呈し、長軸 110cm、短軸 102cm である。確認面からの深さは約 37cm ある。覆土は黒褐色砂混じりシルトが主体となる。

RP1312 が南側から、RP1313 が北側から出土しており、他の遺構の出土状況を考慮すると、当初はこの 2 個体の土器が合口で埋設されたと想定される。第 196 図 1 (RP1312) は、当初は蓋となっていた浅鉢、第 195 図 1 (RP1313) は土器棺本体の深鉢である。第 196 図は四字文が施されており晩期末から弥生前期頃の時期が考えられる。

#### SK523 (第 100 図)

AR・AS-19 グリッドにまたがって位置する。基本層第 II 層掘削中、口縁部を欠いた体部がほぼ完形の状態で発見されたことにより検出した。平面形はおよそ楕円形を呈し、長軸 122cm、短軸 70cm である。確認面からの深さは約 50cm ある。

覆土は 3 層に分層された。第 1 層は木の根による搅乱が確認され、第 2・3 層は黒色ないし黒褐色シルトに地山土と考えられる砂がやや含まれる。RP1311 の壺は 2 層中位に埋設されていた。また土坑底部西側からは菅玉 1 点が出土している。

第 196 図 2 は壺で、口縁部の多くを欠く。口縁上に沈線文による文様が認められるが欠損部が多く全体の意匠は不明瞭である。内面に膜状の黒色付着物があり、赤外分光分析にかけたところ、炭化物由来する物ではないか、という所見が得られている（第 IV 章 4）。この内面付着物の放射性炭素年代測定では、弥生時代という結果が得られている（第 IV 章）。出土した菅玉は（第 250 図 4）、分析の結果（第 IV 章 3）、翡翠製であることが明らかになっている。

#### SK525 (第 101 図)

5 区北側の AT20 グリッドで検出された。土坑平面形は楕円形で、規模は 92cm × 68cm、深さ約 35cm である。北側で SK528 と重複し、これを切っている。内部に合口土器棺となる EU525 埋設土器が埋納されていた。検出時には、蓋となっている鉢 (RP1322) が破損していたため、若干の搅乱の影響を受けたものと思われる。土坑の覆土には礫が入る。出土土器を第 197 図 1 ~ 5 に示した。第 197 図 1 の鉢と第 197 図 2 は合口土

器棺の土器である。どちらも全体に炭化物が付着している。1は口縁部に平行沈線文をめぐらし、上下からの抉りが入る。2は口縁部を無文にし、体部には横方向の繩文が入る。この深鉢付着の炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果（第IV章2）、概ね弥生時代前期に位置づけられると考えられる年代が得られている。

#### SK528（第101図）

1区北側のAT20グリッドで検出された。南側をSK525に切られる。平面形は不整形で西側は道路法面接するため失われているものと思われる。規模は98cm×68cm、深さ28cmである。土坑内には、合口土器棺（EU527）が埋設されていた。埋設上の蓋は後世の搅乱により土器の半分が失われていた。また、下の深鉢も口縁部を欠いている。掘り方覆土は黒褐色シルトが主体で、礫が含まれる。埋設土器は、第198図1の鉢、第198図2の深鉢である。1の口縁部には匁字文が施される。2は口縁部を欠き、全体に繩文が施される。底部は穿孔されている。この2の土器の炭化物について、放射性炭素年代測定を行った（第IV章2）。その結果、繩文時代晩期末と考えられる年代が示された。

#### EU515（第100図）

AS20グリッドに位置し、SK514の検出により、調査区の再拡張を進めていたところ、逆位の深鉢が出土した。掘り方や覆土は確認できなかつた。深鉢は底部を欠く状態で出土したが、現代の搅乱で底部を破壊されたものと思われる。

第192図1は、復元された埋設土器である。口縁部を外側から棒状工具による縱方向の押圧を施し、波状口縁状に仕上げている。体部の横方向の繩文から判断すれば、弥生時代に帰属すると思われる。

#### SP529

5区北端のAT21で検出された。平面形は円形で、直径は48cm、深さ28cm、断面は皿状になる。内部に、土器が横位になって出土した。完形ではない。第196図3の壺が出土している。時期決定の特徴に乏しいが、弥生時代に帰属するものと見られる。

### 3 出土した遺物

#### A 繩文土器

上竹野遺跡では、繩文時代前期・中期・後期・晩期の

縩文土器が出土している。出土箱数は、弥生土器と合わせて125箱である。図に掲載した土器についてそれぞれ解説するのは困難であるので、第二分冊の土器観察表に個々の特徴を記したので参照されたい。

ここでは、土器について時期的な分類を行い、内容の概略や特徴的な個体があれば触れておくこととする。

#### I 群土器

繩文時代前期の土器に相当するものである。

#### IA群土器（第281図ⅠA）

繩文時代前期初頭の上川名II式土器に該当する。胎土には織維が含まれ、矢羽状沈線や押圧縩文が施される個体と、太い縩文原体を用いて羽状縩文にする個体などが認められる。当遺跡では明確に遺構に伴って出土しておらず、出土量もごく少量である。

#### II群土器

縩文時代中期に位置づけられる土器である。

#### II A群土器（第281図ⅡA）

中期前葉に位置づけられる土器である。押圧縩文や隆帯を主体とした文様を施す大木7b式土器、それと併行すると考えられる、竹管文による爪形状や押し引きした沈線文が主体となる北陸方面の新崎式土器をこの群に含めた。大木7b式土器をII A1群（第126図27・第126図28・第127図1・第127図4）、新崎式土器をII A2群としておく（第127図2・第127図5・第127図6）。当遺跡ではSX195でII A群がまとまって出土している。

#### II B群土器（第281図ⅡB）

中期中葉に位置づけられる土器である。当遺跡では大木8a式が該当する。出土量は少なく破片資料である。遺構に伴うものではない。第113図25は口縁部がキャリバー状になり、橋状把手や波状の無調整隆帯文で装飾されている。第199図6は小型の浅鉢で波状の無調整隆帯文が見られる。

#### II C群土器

中期後葉、末葉に位置づけられる土器である。当遺跡では大木10式土器が出土しているが、わずかな破片資料しか認められない。

#### III群土器

縩文時代後期に位置づけられる土器である。

#### III A群土器（第281図ⅢA）

## III 調査成果

表2 土坑・性格不明遺構計測表

遺構番号	地区	グリッド	平面形	計測値(cm)			覆土・備考	出土遺物	重複関係	時期
				長さ	幅	深さ				
SK14	I	BG10	円	104	100	48	人為的窪窓	土器 106-19-22・107-1-18・石器 205-3・4		弥生前期
SK19	I	BL10	楕円	124	92	20		土器 107-19-22		弥生前期
SK21	I	BL13	不整円	188	180	132	プラスコ状	土器 107-23-34・108-1-4・石器 205-5	SX22→SK21	弥生前期
SK26	I	BL11	楕円	88	60	24				
SK27	I	BL13	円	128	120	68	人為堆積	土器 108-5-8・石器 206-1		十腰内I
SK28	I	BL12	不整円	104	88	52		土器 108-9-12		縄文後前期
SK32	I	BL12	円	76	66	40				
SK34	I	BJ14	円	160	160	84	人為堆積	土器 109-1-5・石器 206-2		癡付土器II
SK50	I	BM11	楕円	76	36	32				
SK54	I	BM15・16	円	88	88	36	人為堆積	土器 109-6-10・石器 206-3・4		十腰内I
SK56	I	BQ・BR12	楕円	128	96	36	人為堆積	土器 109-11-17		十腰内I
SK58	I	BP14	円	56	56	24	人為堆積	土器 109-18		南境I
SK59	I	BN11	円	112	104	44	人為堆積	土器 110-1-10・石器 206-5・208-3		十腰内I
SK61	I	BN12	楕円	148	80	28		土器 110-11-12		十腰内I
SK62	I	BN13	楕円	74	36	20				
SK63	I	BP13	円	76	64	20				
SK65	I	BQ13	円	108	108	44	人為堆積	土器 110-13-16・石器 206-6・9		南境I
SK66	I	BM14	円	88	84	40				
SK67	I	BP16・17	不整円	188	100	44	人為堆積	土器 111-1-2		縄文後期前葉?
SK68	I	SF22 BP17	円	96	92	28		土器 115-1-11		大同A2・ 弥生前期
SK71	I	BP12	不整円	104	92	44		土器 111-3-4・石器 206-10		縄文後期
SK153	I	BF09	円	92	76	28		土器 115-1-11		大同A2
SK154	I	BF09	円	76	48	24		土器 114-16		縄文中期
SK252	I	BA10	円	172	140	36				
SK286	I	BM13	不整円	68	64	16		土器 111-12		十腰内I
SX33	I	BM11・12	円	392	340	5		土器 112-22-25		癡付土器II
SX195	I	BF10	整楕円	456	260	20		土器 126-27-32・127-1-10・ 石器 211-7・8・212-1		木本7b・ 新鷗
SX215	I	BD9	楕円	140	104	36	人為堆積	土器 127-16-20・石器 211-9・10・212-2・3		弥生前期
SX236	I	BB10	楕円	232	96	40		土器 127-21・石器 213-1		
SK350	I	BB14	不整円	164	76	20				
SK302	I	BH13	楕円	148	132	92	プラスコ状・ 内部の最大径 124	土器 115-12-14・116-1-5・ 117-1・2・118-1・2・119-1-6・ 石器 207-1・2		弥生前期
SK308	I	BB12	円	135	125	40	人為堆積	土器 119-8-13・120-1-3・石器 207-3・4		大同A2
SK309	I	BB11	不整円	212	164	56	人為堆積	土器 120-4-18・石器 207-5・7		大同A2
SK310	I	BB11	不整円	70	45	45		土器 120-19・土偶 124-11・石器 207-6		弥生前期
SK314	I	BA12	円	76	60	20		土器 120-20		弥生前期
SK348	I	BC13	不整円	96	76	28		土器 121-6		晩期末・ 弥生時代前期
SK354	I	BC12	円	120	108	80				
SK359	I	BF12	楕円	90	50	40		土器 121-8-11		弥生前期
SK360	I	BE13	円	111	100	20		土器 121-12-17・石器 207-8		弥生前期
SK362	I	BE14	不整円	164	123	94		土器 121-18		晩期末・ 弥生
SK364	I	BF13	円	90	82	10				
SK365	I	BG14	円	80	70	28	人為堆積			
SK374	I	BE11	不整円	80	72	60	プラスコ状	土器 121-19-22・122-1-3・ 石器 208-1・2・4・5・7		弥生中期初
SK384	I	BE11・12	円	98	88	40	大型窪			

遺構番号	地区	グリッド	平面形	計測値(cm)			覆土・備考	出土遺物	重複関係	時期
				長さ	幅	深さ				
SX312	1	BA12	不整楕円	340	196	60	土器 128-5-7・石器 212-8			弥生前期-中崩前葉
SX315	1	BF13	不整楕円	130	50	20	土器 128-8-20・石器 212-7・9 ・213-9・214-5			弥生中期前葉
SX363	1	BE・BF13・14	不整楕円	343	132	12	土器 129-5-19・石器 213-3 ・214-1-4・7・8			弥生中期前葉
SX325	1	BC12	円	172	140	28	土器 128-24-26・石器 213-4・5			弥生前期-中期前葉
SX326	1	BC12	不整楕円	580	572	36	土器 129-1-3・石器 213-6-8 ・214-6・218-27-29			弥生中期-大洞 A2
SK4	2	AX08	不整楕円	184	104	28	土器 155-1・石器 234-1			弥生
SK7	2	AW09	円	92	76	48	土器 155-2・3			國文後期後葉
SK8	2	AX09	円	120	108	48	土器 155-4-6			弥生
SK9	2	AY08	楕円	164	124	76	土器 155-7-17・156-1-3・石器 234-3-5			大洞 A-A'
SK10	2	AW09	円	116	96	48				
SK40	2	AX10	円	80	72	32				
SK51	2	AX09	円	88	76	44				
SK106	2	AY09	不整円	128	124	56	土器 156-6・7			晩末-弥生
SK138	2	AS12	円	88	84	48				
SK143	2	AR10	楕円	176	120	28	土器 157-1-3・石器 234-6	SK143→ SK147	大洞 A2	
SK147	2	AS10	楕円	66	50	20	石器 235-1	SK143→ SK147		
SK148	2	AU13・14	不整楕円	256	156	52	土器 157-4-11・石器 234-2・ 235-3			弥生
SK166	2	AV13	不整円	156	80	32	土器 157-13-20			
SK168	2	AV13	円	96	84	64	土器 157-21・石器 235-2・4			弥生中期
SK183	2	AS12	楕円	168	108	84				
SK190	2	AR12	円形	64	60	24				191→190
SK196	2	AR13	円	96	88	96				
SK197	2	AR13	円	136	128	100				
SK230	2	AU12	隅丸方形	204	120	84				230→140
SX140	2	AU13・AT12	不整円	276	220	84				230→140
SK5	2	AW09～AV09溝状	428	176	44	ビット状落込有	土器 160-9			弥生
SK243	2	AS11	円	152	104	68	土器 158-3・4	243→244大洞 A2		
SK244	2	AS11	不整円	112	92	64	土器 158-5	243→244		
SK503	5	AO18	円	84	84	28	土器 190-1-4			南墳 1
SK507	5	AK20	円	136	124	52	土器 190-5・10・石器 250-8			弥生
SK508	5	AK20	円	184	164	168	石器 249-9・10・250-2			
SK509	5	AK19	楕円	152	68	32				
SK510	5	AL17	円	108	100	32				
SK501	5	AL・AM20	不整	340	188	92	人為堆積	土器 199-1	SK511→ SX501	弥生？
SK511	5	AL20	円	192	184	128	土器 190-6-9			弥生前期
SK512	5	AS20	不整円	120	100	40	墓壙	土器 190-11・12		弥生前期
SK514	5	AS20	楕円	112	60	33	内葬墓 2基	土器 192-2・193-1・194-1・2	SK520→ SK514	弥生前期-中崩
SK520	5	AS20	楕円	100	98	28	墓壙か	石器 250-7a・7b		弥生？
SK513	5	AS20	円	80	73	25	内葬墓 2基	土器 191-1・2		弥生前期
SK516	5	AS20	楕円	141	68	33	墓壙	土器 191-3・4・石器 249-7		弥生？
SK521	5	AS20	隅丸三角	110	102	37	内葬墓	土器 191-4・195-1・196-1		弥生前期
SK523	5	AS20	楕円	122	70	50	墓壙覆土上に壹	土器 196-2・石器 250-4		國文時期末
SK525	5	AT21	楕円	92	68	35	内葬墓	土器 197-1-5・198-1・石器 250-SK528→ 5	SK525	弥生前期
SK528	5	AT20	不整	98	68	28	内葬墓・EU527人		SK528→ SK525	國文時期末
SP529	5	AT21	円形	48	48	28	心	土器 191-3・198-1・2	SK525	弥生？

## III 調査成果

表3 ピット・柱穴計測表

遺構番号	地区	グリッド	平面形	計測値(cm)			備考	出土遺物	重複関係	時期
				長さ	幅	深さ				
SP15	1	BG9	円	24	24	24				
SP16	1	BG9	楕円	54	44	24		土器 111-9		弥生前期
SP17	1	BG9	楕円	36	32	32	柱穴	土器 111-10・11	SP39→ SP17	晩期・弥生
SP23	1	BK10	円	44	44	20				
SP25	1	BL11	円	44	40	28				
SP52	1	BL12	不整楕円	52	32	36		土器 111-13		癒付土器田
SP55	1	BQ17	円	76	72	124				
SP86	1							土器 111-14		縄文前期初期
SP151	1	BG09	楕円	60	40	28		土器 122-8・9・石器 209-1		弥生
SP152	1	BG09	円	64	60	16		土器 122-14～16		弥生前期
SP155	1	BF09	不整楕円	68	52	88		土器 123-1		弥生前期
SP156	1	BE09	円	88	80	32		土器 122-10～13・石器 209-2		十腰内 I・晩期 末～弥生?
SP245	1	BF09	不整楕円	64	52	32		土器 123-15・石器 209-8		
SP157	1	BE09	円	56	52	88				
SP159	1	BE09	円	108	92	88		土器 123-5・6		弥生前期?・弥生? ?
SP163	1	BC11	円	32	32	40	柱穴	石製品 209-3		縄文晩期末～弥生
SP210	1	BE9	不整楕円	88	76	36		土器 123-8		弥生
SP211	1	BE9	不整楕円	44	40	72				
SP216	1	BC09	不整楕円	140	88	88		土器 123-10～13		晩期末・弥生
SP282	1	BF11	円	84	80	40		土器 124-3・石器 209-9		晩期末・弥生
SP387	1	BE10	円	64	52	28				
SP388	1	BF11	円	64	52	52		土器 125-20		弥生中期?
SP336	1	BB11	楕円	108	60	32		土器 125-7		
SP355	1	BE14	不整楕円	84	56	52		土器 125-10		弥生
SP366	1	BE12	円	40	40	20		土器 125-12～14		弥生中期
SP371	1	BD11	円	36	36	48	柱穴	土器 125-17		
SP411	1	BC13	円	48	44	20		土器 125-28・29・126-1		弥生
SP167	2	AV13	不整楕円	56	40	64		土器 159-13		
SP191	2	AR12	円	51	40	18		土器 160-2	191→190晩期末～弥生	
SP48	2	AW08	不整円	64	48	48	柱穴	土器 158-18-20		弥生
SP43	2	AU08	不整楕円	104	60	56	柱穴	土器 158-16・17		弥生前期
SP44	2	AU07	不整円	36	28	52	柱穴			
SP45	2	AU07・08	不整楕円	92	52	48	柱穴	石器 236-2		
SP46	2	AU08	円	44	40	44	柱穴	石器 236-3		
SP47	2	AU07	円	44	40	48	柱穴			
SP49	2	AU07	円	60	52	48	柱穴			
SP137	2	AS12	円	112	92	44	柱穴			
SP141	2	AS12	円	104	96	84	縫が集中			
SP169	2	AW12	楕円	44	28	28				
SP170	2	AW12	円	44	40	52	柱穴		170→171	
SP171	2	AW12	円	56	48	68	柱穴	土器 159-14・15	170→171	弥生
SP172	2	AW12	不整円	64	52	56	柱穴	土器 159-16		弥生
SP176	2	AU11	楕円	112	76	52		石器 235-6		
SP177	2	AU12	円	84	64	44	柱穴	土器 159-18		
SP179	2	AU11	円	40	40	24				
SP180	2	AU11	楕円	60	42	64	柱穴	土器 159-19・20		弥生
SP181	2	AU11	円	84	72	24				
SP199	2	AT12	楕円	54	38	52		石器 237-1		
SP232	2	AU12	不整楕円	124	80	80		土器 160-4・石器 237-3・238-		弥生前期
							I			

縄文時代後期初頭に位置づけられると考えられる土器である。出土量は少量で、遺構に伴うものではない。第109図6は稜線状の降帯を貼り付け、上に刻みを施す文様の土器、第199図11は降沈線による文様で、墺帶上に刺突が施される。

### III B群土器（第281図III B）

後期前葉南境1式期に併行する土器である。土坑などに伴って出土している。縄文を施した上に沈線による曲線状の文様を施し、一部磨削消しなども見られる。第110図16は、内面に格子目状の沈線文や連続した刺突文が認められる。

### III C群土器（第281図III C）

後期前葉南境2式、北東北の十腰内1式に併行する土器である。上竹野遺跡では1区を中心に土坑群に伴って出土が確認される。器種は主に深鉢、浅鉢、壺が確認される。深鉢は波状口縁で、沈線による入組文を主とした文様が施される。

### III D群土器（第282図III D）

後期後葉の瘤付土器に該当する土器である。瘤付土第2段階をD1、3段階をD2としておく。当遺跡では、ST1やST38からまとめて出土している。器種は、深鉢、鉢、注口土器、壺、香炉形土器、ミニチュア土器が認められる。深鉢は、底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる器形のもの（第104図8・第105図1・2）、体部中央で締まり、口縁部が外反すると思われるものの（第102図14・第104図18ほか）がある。文様は、平行沈線文や弧状沈線文間に瘤の貼り付けが認められ、第Ⅲ段階では文様間に刻み目が連続して施される（第105図4・第104図18・第111図13）。

### IV群土器

晚期に位置づけられる土器である。

#### IV A群

晚期前葉に位置づけられる土器である。当遺跡では、大洞B式土器が出土しているが、出土量はわずかで混入しているものと思われる。

#### IV B群（第282図IV B）

晚期中葉に位置づけられる土器である。当遺跡では大洞C1式土器が出土している。1区ST1の覆土上層より出土している（第102図22・第103図7・8）。ただし、この時期に帰属される明確な遺構はない。深鉢、

浅鉢、壺が確認され、雲形文や平行沈線文間の刻みなどの文様が施されている。

#### IV C群（第282図IV C）

晚期後葉・末葉の土器群である。大洞A式土器をIV C1群（第120図18・第165図23・第155図10・第158図4）、大洞A'式土器（第155図11）をIV C2群としておく。

### B 弥生土器

当遺跡で出土した弥生土器は、弥生時代前期・中期前葉・中葉にわたる時期である。ここでは、弥生時代前期から中期前葉にわたる土器型式をもとに、V～VI群土器を設定し該当させた。各土器群は、一括性をもった資料として出土しているのはほとんどなく、それぞれの土器群が混在している状況である。また、時間幅はあるものの、量的にまとまりをもったSF60やST202出土土器について説明を加えたい。

#### V群土器

弥生時代前期の最初に位置づけられる土器である。県内では、生石2遺跡で主に出土している。北東北の砂沢式土器、宮城県の山王廻遺跡IV a・k層出土土器群（第293図）に併行する時期と捉えられる。当遺跡の一括性がある遺構出土土器として、1区SK302の下層出土土器がこの時期に該当するものと考えられる。

第283図にSK302出土土器を示した。口縁部に平行沈線文をめぐらし、発達した貼り瘤を付ける壺、幅広の変形工字文による文様帯を設ける深鉢、平口縁で体部に横走る縄文が施される深鉢が認められる。その他、3区SF60出土土器にも当期の土器が含まれる。

#### VI群土器

宮城県の青木畠式土器（第292図）に併行する土器をVI群とした。山形県内では、生石2遺跡のB地点で主に出土している土器群である。砂沢式土器の新段階とされている土器も併行する。この時期だけまとまつた出土状況を呈する資料は当遺跡にはない。3区SF60や、2区ST202などから前後する群の土器が混じた状態で出土している。

#### VI群土器（第283図）

弥生時代中期前葉に位置づけられる土器である。山王III層式土器、谷起島式土器と呼ばれる土器型式に併行す

ると考えられるものである。また、宮城県南部の越後式と呼ばれる磨削文を主体とする文様構成をもつ土器もこの中に包括した。

#### V群土器（第283図）

弥生時代中期中葉に位置づけられる土器である。楕円形團式と呼称されていた土器であるが、近年は仙台市中在家南遺跡や高田B遺跡から良好が資料が出土している。

#### 3区 SF60 捨て場出土土器（第284・285図）

縄文時代晩期末のIV C群土器が少量含まれ、弥生時代のV・VI群土器を主体とし、VII群土器が少量含まれる。出土した土器は復元率が高く、密集した出土状況を呈していたので入為的な廃棄によるものである。層位は、F1～3を設定しているが、層位的に土器の変遷をとらえる事ができなかった。

器種は、浅鉢、高环、壺、蓋、深鉢で構成される。浅鉢は、器形が外傾する浅鉢は幅広の変形工字文が見られ、瘤が発達するものと発達しないものがある。口縁部が内湾する浅鉢は、四字文が施される。中・小型品の他に大型品が存在し、大型品は外面や内縁に炭化物が付着し、煮炊きなどに使用されたものと思われる。また、底部が丸底となり、体部中央で屈曲し、口縁部が大きく外反するものが多い。土器群の位置づけであるが、第181図5などはIV C群、第178図1、第178図2、第178図6、第182図1はV群に相当すると考えられる。VI群土器に相当すると思われるものは、第183図2などである。内湾する浅鉢は、時期の限定が難しい。大半がV・VI群に伴うものと考えられる。

鉢に相当する個体は少ないが、第181図4はV～VI群へ、第186図は、V群と考えられる。

高环の主なものは、第182図2、第179図1がある。第182図2は、口縁部の変形工字文と脚部の刺突文よりV群に、第179図1は、VI群に相当すると思われる。蓋は第187図5、第181図があり、前者はV群、後者は楕円文などによりVII群になると考えられる。

第285図に深鉢を集成した。小型で縄文のみの深鉢、沈線による文様が施された中型品、縄文のみの大型品が認められる。器形は口縁部が短く外反するもの、底部から緩やかに立ち上がるものの、口縁部が内湾して、口縁端が短く外反するものがある。文様がある深鉢については、第182図5がIV D群、第180図10がIV D～V群、第

181図1がV群に相当するものと思われる。縄文のみの深鉢は概ねV・VI群に伴うものであろう。壺は小形品と大型品が認められる。第184図1・第187図12は、文様などからV群に伴うものと推定される。第183図3は、横位の楕円文状の文様より、VII群に相当するものと思われる。無文の184図5と、第186図18はV・VI群に伴うものと推定される。

また、SF60出土土器の浅鉢、高环、壺、装飾的な深鉢の多くに赤彩が施されている。また、縄文部分に縱方向に垂下する帯状の彩文が見られる個体がある。同様な彩文は、より新しい時期であるが、仙台市の中在家南遺跡で確認されている。

#### 2区 ST202 穴立住居跡出土土器（第286・287図）

ST202住居跡の覆土中からは、大量の弥生時代前期から中期前葉にかけての土器が出土している。ほとんどがF1層出土である。F1層でもF1①・②の出土土器と、それより下層の出土土器の内容に違いがある。ただし、当住居跡は幾度も拡張されるなど使用期間が長く、古い時期の遺物の混入もある程度あるものと思われる。

ST202F1層①・②出土土器では、浅鉢・高环・深鉢・壺が認められる。主にVI・VII群土器が混在した状態で出土している。浅鉢は、直線的に外傾する器形と、口縁部が内湾する器形のもの、底部が丸底状で、口縁部が外反すると推定されるものがある。文様は、変形工字文が施されるもの为主で、文様の交点部分の瘤は発達しておらず、平行沈線文を上下から抉りを入れる文様がよく見受けられる。文様間に縄文を入れる手法も見られる。その他に磨削文の文様や、波状文なども認められる。第143図17・第144図5・第148図1はVI群に、第143図14・第148図23はVII群に相当すると考えられる。高环は第144図16・148図27・28などがある。VI群に該当すると思われる。蓋は、小型品と大型品などバリエーションがある。磨削文による文様が入る第144図20、第145図1はVII群に相当すると思われる。壺は、第145図9はVI群、第149図9はVII群に相当すると思われる。深鉢は小型・中型・大型のものがあり、口縁部が内湾するものと、短く外反するものがあるが、内湾するものが多いようである。文様がある深鉢は、磨削文により三角形や菱形状（第140図6）、鍵形状（第142図4）などがあり、これらはVII群に度相当する。その他、

頭部に列点文があるもの（第145図16）がある。

F1③および床面などからの出土土器であるが、全体的に磨消繩文が入った深鉢や蓋はあまり認められない。この資料には、砂沢式の新しい段階とされる浅鉢（第150図20）が含まれる。浅鉢の器形は上層と同じ3タイプが認められる。文様は変形工字文が主であり、文様間に一部繩文を充填するなどの手法が見られる（第152図8）。平行沈線文を上下から抉りを入れる手法も認められる（第150図17・第151図3）。蓋は小型品が認められ、口縁部に平行沈線文をめぐらすものや（第152図25）、磨消繩文と刺突文を施すもの（第154図1）がある。深鉢は、体部に繩文を施し、口縁部が短く外反するものと、口縁部が内湾し、端部が短く外反するものがある。これらの資料は、VI群が主で、一部V・VII群が含まれるものと考えられる。

### C 土製品

今回の調査で出土した土製品は9点で耳飾1点、土版3点、鐸形土製品1点、土偶4点、不明土製品2点、その他円盤状土製品が出土している（第288図上）。これらは繩文中期～弥生時代のものである。以下、種類毎に内容を述べる。

#### 耳 飾

1点出土した。第154図6は性格不明遺構SX195から出土しており、時期は繩文中期前葉頃に伴うものと推定される。

#### 土 版

3点出土した。第154図3は2区ST202床面より出土し、弥生時代と推定される。表面には同心円状に沈線と刻み目がある。裏面は黒色でミガキがあり光沢がある。第154図4・5は遺構外の出土であるが、刺突が施されていることから、弥生時代に入るものと思われる。第154図4は中心付近に2カ所一对の穿孔があり、第154図5は中心に1つ穿孔されている。

#### 鐸形土製品

1点出土した（第154図7）。無文で上に紐かけ状の穴が付く。繩文時代後期前葉と考えられる。内部は黒色のスヌ状の付着がある。県内では遊佐町小山崎遺跡などで出土している。

#### 土 偶

4点出土した。頭部欠損の土偶が1点（第188図1）、土偶の胸部が1点（第124図11）、土偶の足が2点（第154図10・11）である。第188図1は刺突文土偶と考えられる。中空である。SF60捨て場底面から仰向けて水平の状態で出土した。股下には穿孔があり、内部の空洞部に続いている。表側の文様であるが、粘土の貼り付けにより、胸、肺状の表現が見られる。両肩の上に瘤状の貼り付けがある。腰の部分には隆帯により帯状の貼り付けが1周めぐるが表側は剥落している。裏側は黒色を呈し、上部には平行沈線文を上下に2条ずつ配し、中心を一ヵ所縱沈線でつなぐ。背中の中央は6字状の沈線が入る。表と同様に肩部にバット状の隆帯が貼りつけられ、上に刺突が施される。全体に赤彩が認められる。

図124図11は頭部と体部下半を欠く刺突文土偶である。SK310土坑内でやや斜位に入った扁平な碟の上に若干の間隔を挟み、碟の上に乗った状態で出土した。全体に刺突が施され中空である。肩の部分に粘土を貼り付け、バット状に隆起させ沈線を沿わせる。上も刺突で埋められている。表面には粘土粒貼り付けによる胸と肺状の表現があり、体部の中心に沈線が一本通る。裏面は背面の上部に2本の平行沈線文を施し、そこから垂下する6字状の沈線文が見られる。体部の両脇に弧線文が入る。表・裏面に赤彩が残る。体部内面には、幅約2cmほどの輪積み痕が確認される。体部下の割れ口が摩耗している。土偶頭部は出土していないが、参考資料として新庄ふるさと歴史センターの頭部資料を掲載した。

第154図3・4は土偶の足でSF136包含層から出土した。ともにF1b層の下層で出土した。F1b層は弥生時代前期から中期の遺物が出土するため、第154図3・4も同時期と考えたい。しかし少量ながら繩文時代後期・晩期の遺物も混入するため断定はできない。

#### 不明土製品

2点出土した。第154図8は指形が付いた土製品である。1区SF136-F1b層より出土しているため、弥生時代前期～中期頃の可能性が考えられる。第154図9は三角形の突起状の土製品である。2区AW14グリッド、ST808上の擾乱から出土しており、ST808に由来する可能性もある。形は独石臼を模したような形態であるが、残存部では判断が難しい。

## D 石器・石製品

### 石器（第289～290図）

上竹野遺跡では石器・石製品が1次調査、2次調査を合わせてコンテナで52箱出土している。出土した石器・石製品について、時期が特定できる住居跡を中心に時代別に記述する。その他特徴的な石器・石製品についてはまとめて記述した。

### 縄文時代後期後葉の石器

#### ST1 出土石器（第202図1～13）

石礫5点（第202図1～4）、石匙1点（第202図11）、搔器2点（第202図5・6・8）、削器3点（第202図7・9・13）、凹石3点（第202図10・12・14）を図示した。縄文時代後期後葉の住居跡であるが、覆土に縄文時代晚期・後期前葉の土器が含まれており、この時期の遺物が混じっている可能性がある。

石礫は凸基のみが認められる。第202図2・3は未製品の可能性がある。第202図4は基部の接着に使用したと見られる黒色のアスファルト状の付着物が付く。

#### ST38 出土石器（第202図15～18・第203図1・2）

石錐2点（第202図15・18）、石匙2点（第202図16・17）、二次加工のある剥片1点（第203図2）、石皿1点（第203図1）が出土した。第202図16のつまみ部には黒色の付着物がつく。後期後葉のまとめた時期の資料である。

### 弥生時代の石器

#### ST202 出土石器（第226図1～第233図4）

石礫8点（第226図1～6・9・12）、石錐5点（第226図7・8・10・11・15）、石窓1点（第226図14）、搔器1点（第227図2）、削器2点（第226図16・20）、二次加工のある剥片7点（第226図13・17～19・21・第227図1・第230図6）、石核13点（第227図3・4・第228図1～3・第229図1～3・第230図1～5）、磨石8点（第231図1・4～7・第232図2・3・6）、敲石3点（第232図5・7）、凹石6点（第231図2・3・8・第232図1・4・第233図2）、石皿2点（第233図1・3）、石製品1点（第232図8）、調整具1点（第233図4）が出土した。時期は弥生前期～中期前葉が主である。第226図1・2・5のような大型の石礫が複数出土している。石錐・石窓・搔器・削

器は組成に加わっている。石核が多く出土し、石器製作が盛んにおこなわれていたと推測される。磨石・凹石類が多い。また、敲石に分類しているが、石斧製作の際の敲打に使用されたと思われる多面体石器（第232図5）が出土している。

#### ST801 出土石器

石斧1点（第244図1）、石核1点（第244図6）、凹石1点（第244図4）を図示した。第244図1は閃綠岩の礫を打ち欠いたツールのようにも見えるが、先端部と体部に加工が見られることから石斧の未製品であると思われる。

#### ST808 出土石器

石礫1点（第244図2）、石核3点（第244図5・第245図1・3）、二次加工のある剥片1点（第244図3）、凹石2点（第245図4・5）、石製品1点（第245図6）、石皿1点（第245図7）、調整具1点（第245図2）、砥石1点（第246図1）が出土した。第245図7の石皿は破片の状態で出土し、接合したが完形にはならなかった。両面に磨面があり中央に向かって窪んでいる。火を受け黒色に変色している箇所もある。また第246図1は長さ約30cmの大型砥石で片面が砥面になってしまおり、複数の抵跡が見られる。

#### SF60 出土石器

石礫2点（第248図6・7）、石錐1点（第248図8）、石窓1点（第248図12）、搔器2点（第248図10・11）、ツール（第249図1）、二次加工のある剥片1点（第249図2）、玉類1点（第248図13）、石製品1点（第249図4）、凹石1点などが出土している。第248図13の玉は現場より持ち帰った覆土をフリイがけしたところ検出された。SF60下層である。第249図4は凝灰岩製の石製品である。石礫は凸基で細身である。

### その他の石器について

#### 石斧

17点を図示した。内訳は打製石斧1点（第205図5）、磨製石斧（未成品含む）14点（第203図5・第206図2・第207図7・第209図7・第210図5・第212図5・第222図2・第233図5・第225図6、第241図4～6・第243図3・7・第244図1）、環状石斧2点（第243図8・9）である。第205図5はSK21から出土した。打製石斧としているが、使用した痕跡が見られない

ため未完成の可能性がある。第 211 図 5 は SP478 ピットより出土した。小型の石斧で形状から扁平片刃石斧に分類している。共伴した土器が無いため詳細な時期は不明だが、弥生時代と捉えておきたい。第 241 図 4 は 2 区 SF133 より出土した。形状から大型蛤刃石斧と推定される。弥生時代に帰属するものである。第 243 図 8・9 はそれぞれ SF133・134 と 2 区 ST202 住居跡上の遺物包含層から出土している。製作途中に破損したものと考えられる。

#### 敲 石

5 点出土した（第 208 図 7・第 211 図 4・7・第 232 図 5・第 248 図 2）。敲石に分類しているが、堅果類を割る用途ではなく、石斧製作時の敲打に使用したと思われる礫石器である。多面体石器と呼称されている。頁岩など硬い石材であることが特徴である。

#### 石棒・石刀（第 288 図）

石棒は 4 点（第 204 図 3・第 224 図 3・4・5）出土した。破損品であり、全体の形状がわかるものはない。第 204 図 3 は ST193 が跡から出土している。表、裏が磨かれており被熱による煤の付着が見られる。住居跡の時期は弥生時代としているが、後期後葉の遺物の混入が多いため、その時期に帰属する可能性もある。第 224 図 3・4・5 は SF136 より出土している。どれも被熱による煤などの付着が見られる。

第 224 図 3 は薄く、刃部が確認できる箇所が喪失しているが、石棒としては薄いため石刀や石劍になる可能性がある。第 224 図 4・5 は接合しないが同一の石材で製作されており、同一個体の可能性が高い。

石刀は 3 点（第 209 図 3・第 225 図 1・第 243 図 10）出土している。第 209 図 3 は 1 区 SP162 より出土した。あまり整形されていないがよく磨かれており、片側にのみ刃部がある。第 226 図 1 は 1 区 SF136 より出土している。時期は縄文時代晚期～弥生時代前期と推定される。珪化木製である。第 243 図 10 は 2 区の拡張部から出土した。2 区 ST202 住居の範囲内であります。時期は前中期～中期前葉頃と思われる。

#### 玉類（第 288 図）

6 点（第 225 図 3・第 248 図 13 ※ SF60 で記載・第 250 図 4～7）出土した。第 250 図 4～7 は 5 区の埋

設土器群にて出土しており、副葬品と考えられる。第 250 図 4 は SK523 の床面より出土した翡翠製の管玉である。両端から穿孔されている。第 250 図 5 は SK525 第 197 図 2 深鉢内から出土した翡翠製の玉である。よく研磨され素材の形状をあまり変える事なく製作している。端部を穿孔している。第 250 図 6 は SK514 から出土した緑色凝灰岩製の玉である。SK514 の RP1317 壁内部の土をフリイ掛けしたところ発見された。第 250 図 7 は SK520 より出土した。SK520F2 層の土をフリイ掛けしたところ発見された。緑色凝灰岩製で 2 個体出土しており接合はしないが、同一個体と考えられる。

#### 大型石皿（第 250 図 8）

5 区 SK507 より出土した。破片は 3 つに分かれしており、1 つは表土より発見された。残り 2 つは SK507 覆土より出土している。偏平で接合後の長さは 64.1cm、幅は 44.2cm でほぼ完形である。断面には 1 か所凹凸に見られるような瘤みがある。

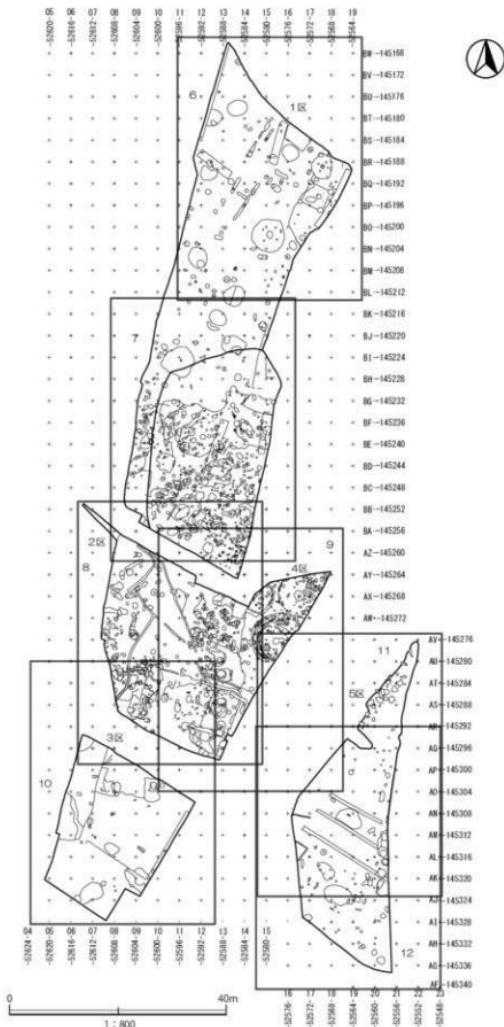
#### 有孔石製品

4 点（第 206 図 3・第 212 図 2・第 213 図 2・第 247 図 4）出土した。第 206 図 3 は 3 つ穿孔のある石製品でどれも貫通していない。後期前葉頃のものと思われる。第 212 図 2・第 247 図 4 は中心に表裏両側から穿孔されたドーナツ型の石製品である。環状石斧とするには小型で刃も施されていないため有孔石製品に分類した。時期は共に縄文時代晚期～弥生時代のものと考えられる。第 213 図 2 は、孔は自然のものと思われるが球状に整形している。

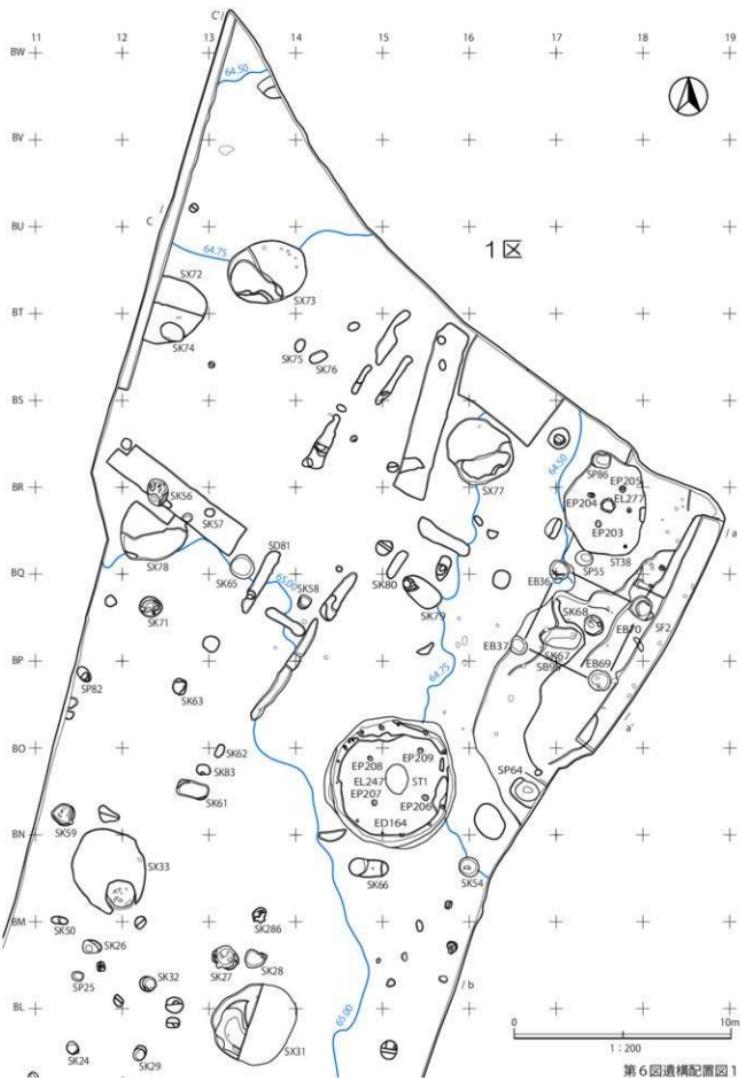
#### 不明石製品

5 点（第 212 図 9・第 224 図 6・第 232 図 8・第 245 図 6・第 249 図 4）出土した。加工痕が見られるものの、実用的な用途と考えられないものを分類した。第 212 図 9 は長さ 4.2cm 幅 3.4cm 程度の台形状の石製品である。第 224 図 6 は凝灰岩製五角形状の石製品で裏面に磨痕が残る。第 232 図 8 は珪化木製の石製品で整形途中のものと思われる。第 245 図 6 は凝灰岩製で橢円形状の石製品が破損したものと思われる。石製品中央部に向かって U 字形に瘤みでいる。第 249 図 4 は凝灰岩製の石製品で両面が磨かれている。

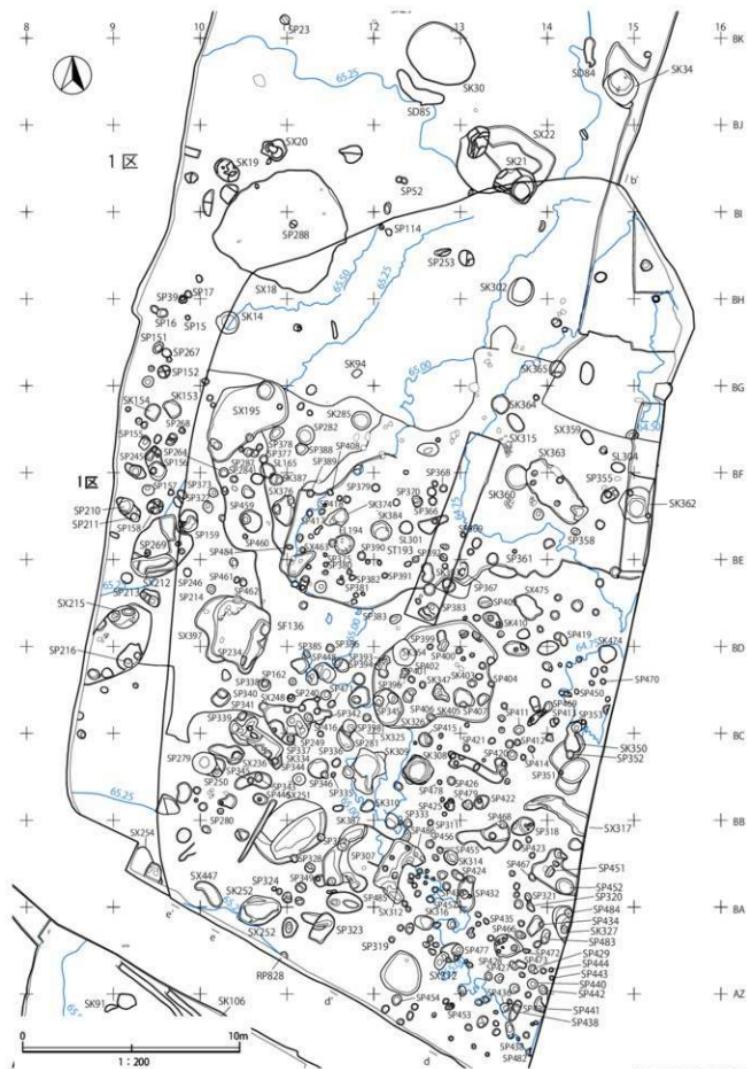
III 調査成果



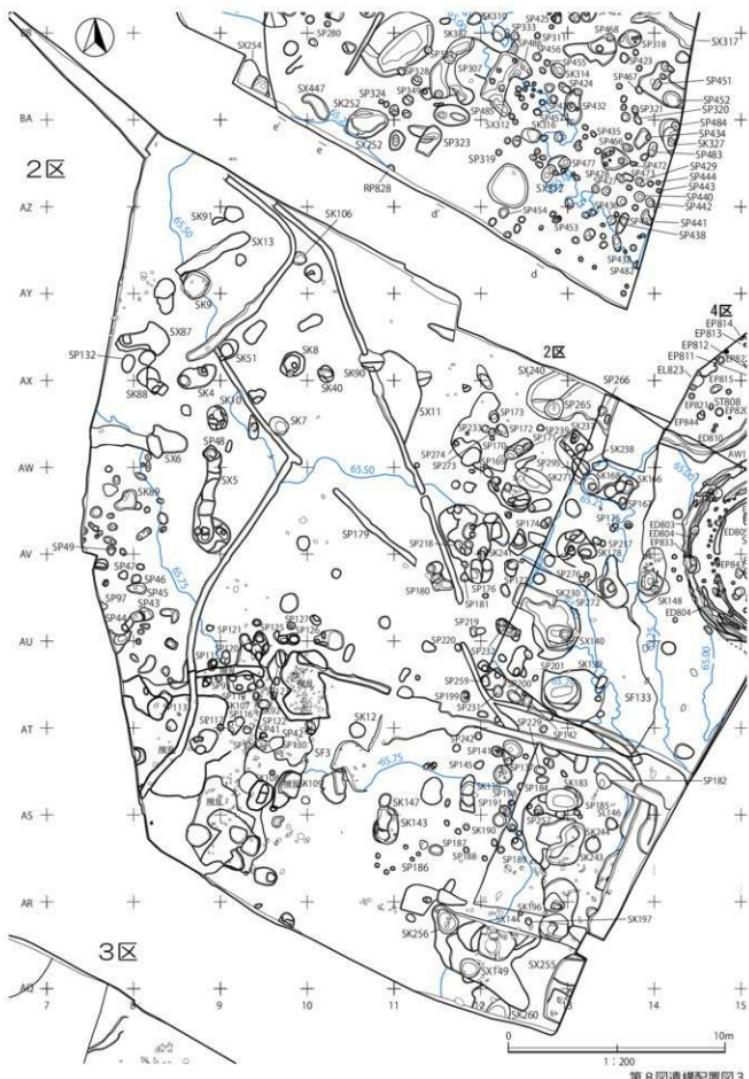
第5回調査区全体図



III 調査成果



第7回図構造配置図2

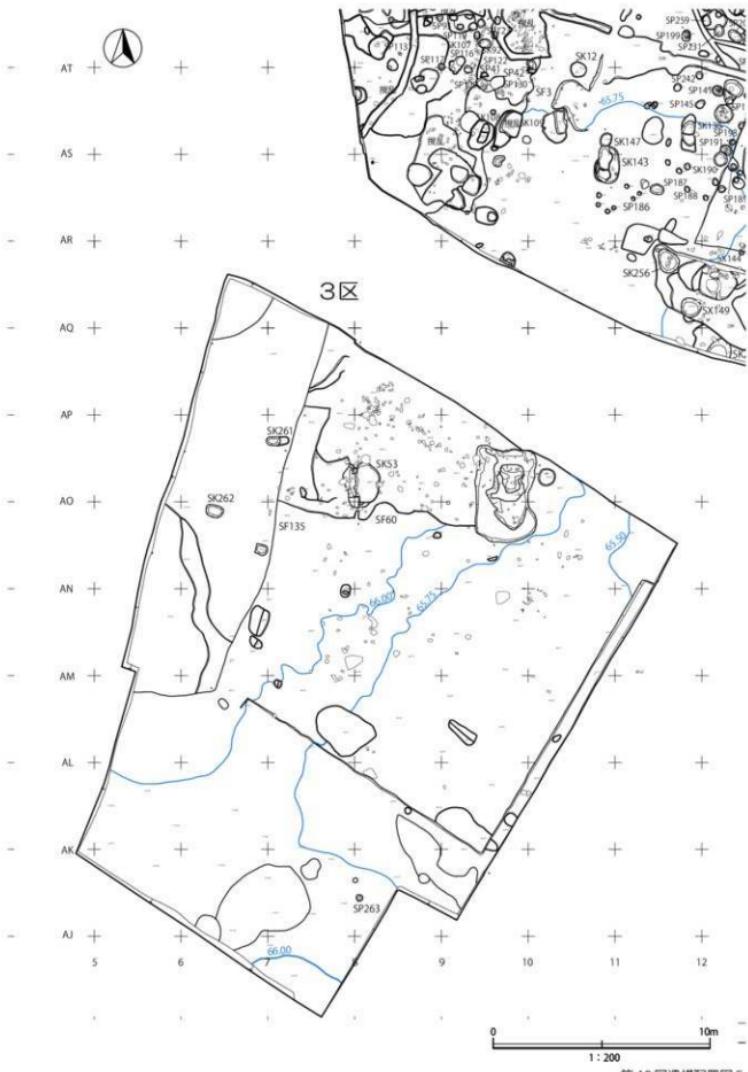


第8図 遺構配置図 3

III 調査成果

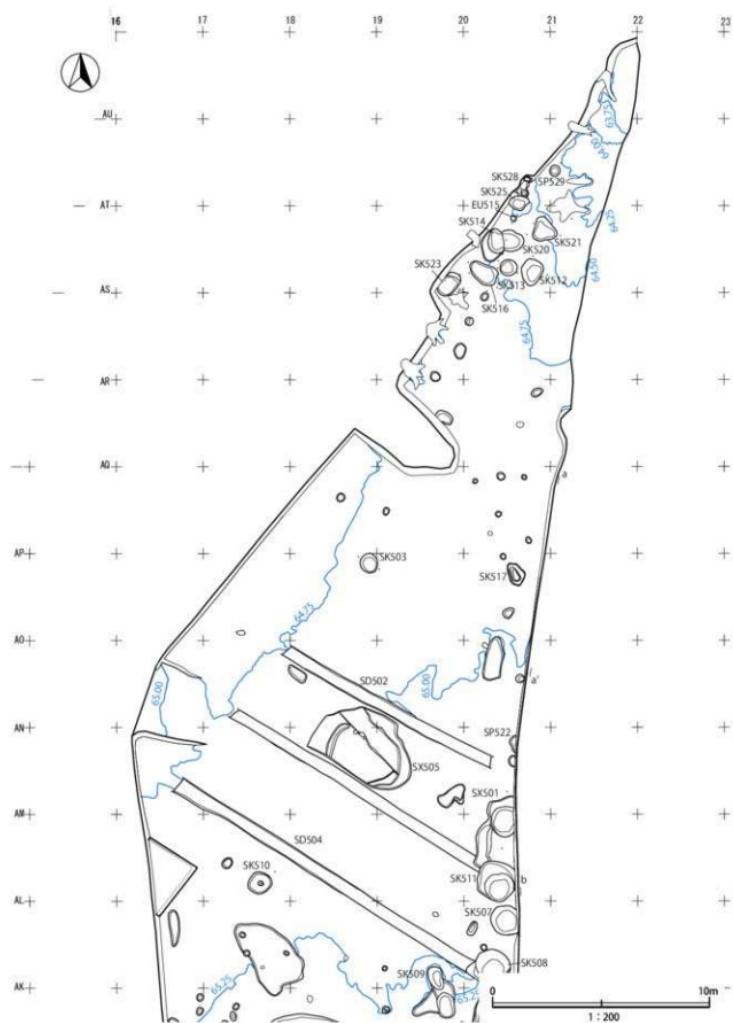


第9図 遺構配置図4

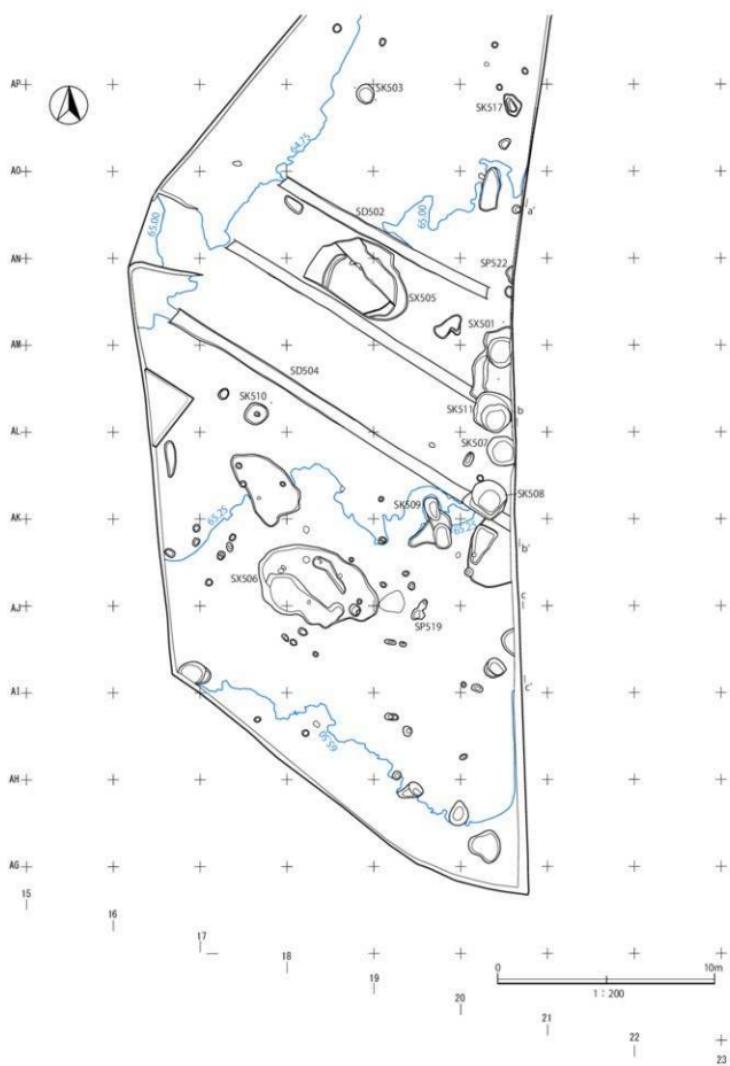


第10回遺構配置図5

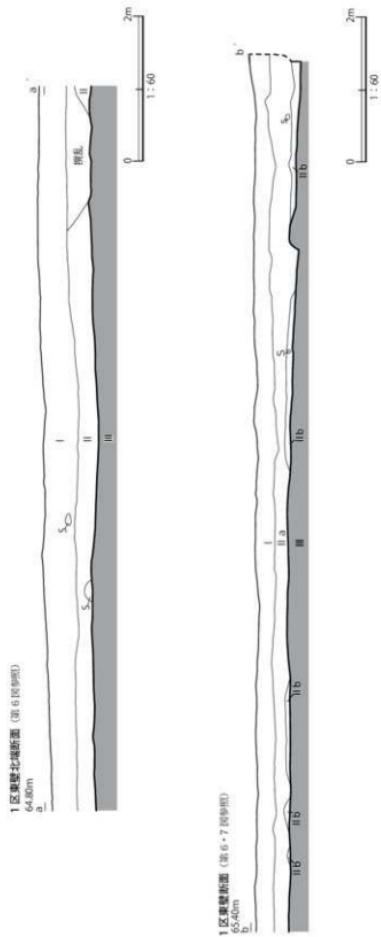
III 調査成果



第 11 図 固構配置図 6



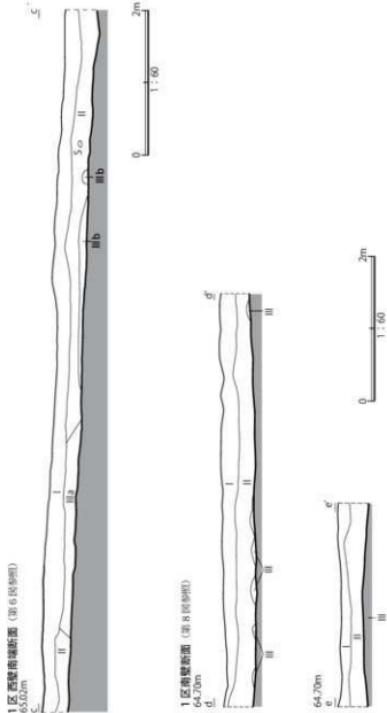
第12図遺構配置図7



**1区東壁北端**  
 I. 10YR2/1 黄褐色風化じシルト  
 しまりや軽度、粘性弱、  
 粘着性や強め、直徑3～5mmのハミス粘土を5%含む、表土  
 II. 10YR2/1 黒色じシルト  
 しまりや強め、粘着性  
 III. 10YR2/2 黑褐色砂  
 しまりやや強め、  
 粘着性弱

**1区東壁中央部**  
 I. 10YR3/1 黄褐色じシルト  
 しまり弱め、粘性弱、  
 直徑1～1.5mm程度の小粒粘土と地山ブロックを斑状に1～3%含む  
 II.a. 10YR2/2 黑褐色じシルト  
 しまり強め、粘性強、直徑1～50mm程度の礫少量と地山ブロックを斑状に5%含む  
 II.b. 10YR2/2 黑褐色じシルト  
 しまり強め、粘性強、地山  
 N. 10YR6/6 黑褐色じシルト  
 しまり強め、粘性強め、地山

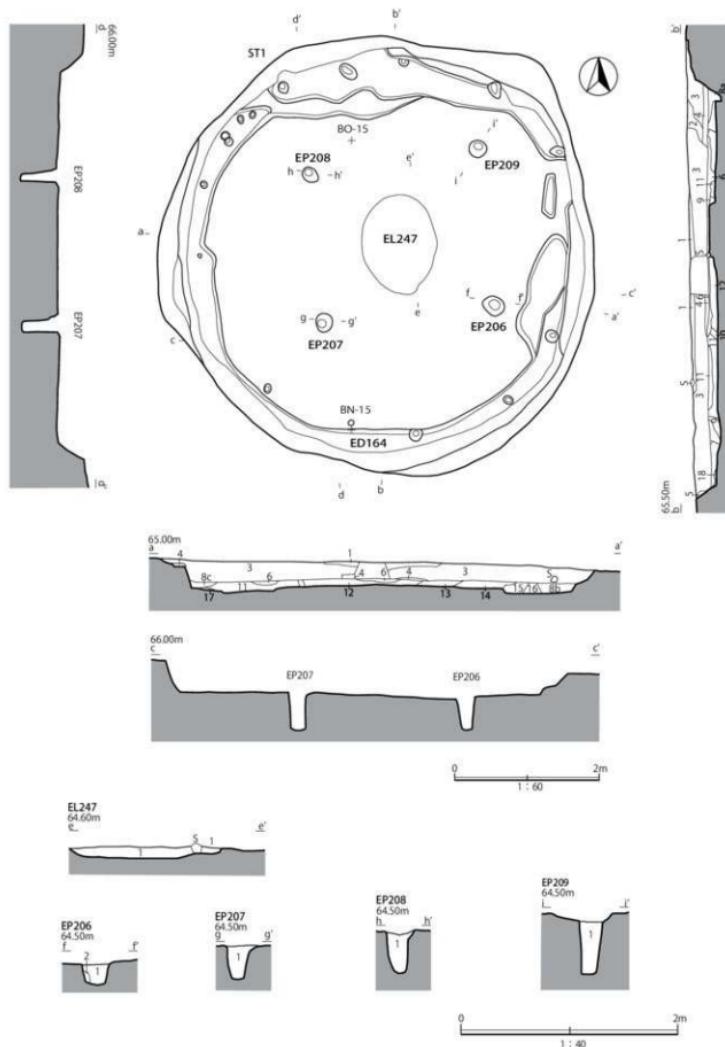
第13図 1区東壁断面図



- 1区西壁南壁  
 I. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりやや強、粘性弱、耕作土  
 II. 10YR2/3 黒褐色シルト しまり強、粘性強、耕作土  
 III. 10YR3/2 黒褐色シルト しまり強、粘性強、施肥の影響で色が濃くなる  
 III-a. 10YR5/4 に至る 黑褐色シルト しまり中程度、粘性弱、  
 10YR3/2 黑褐色シルト
- 1区西壁  
 I. 10YR2/1 黑褐色シルト しまりやや強、粘性弱、耕作土  
 II. 10YR2/2 黑褐色シルト しまりやや強、粘性弱、耕作土  
 III. 10YR2/3 黑褐色シルト しまり強、粘性強、施肥の影響で色が濃くなる  
 III-a. 10YR5/4 に至る 黑褐色シルト しまり中程度、粘性弱、  
 10YR3/2 黑褐色シルト

第14図 1区西壁・南壁断面図

III 調査成果



第15図1区ST1

## 1区 ST1

1. 10YR3/1 黒褐色シルト しまり強い、粘性弱い、直徑 5mm 程度の炭化物を 1% 含む、焼土を含むと思われる
2. 10YR3/2 黒褐色シルト しまり中程度、粘性弱い、10YR2/1 黒色シルトをブロック状に 20%
- 直徑 5 ~ 10mm 程度の礫を微量に含む
3. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 10%、直徑 1 ~ 5mm 程度。小礫を少量含む
4. 10YR2/1 黑色シルト しまり中程度、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 3% 含む
5. 10YR6/6 明黄褐色細砂 しまり強い、地山

## 1区 ST1(結果)

6. 10YR2/2 黑褐色砂混じりシルト しまり強い、粘性やや弱い、直徑 5 ~ 10mm のバミス粒を 3% 含む
- 10YR3/2 黑褐色シルトブロック直徑 10 ~ 20mm を 1% 含む
7. 10YR2/1 黑色シルト混じり砂 しまりやや強い、粘性やや弱い、バミス粒直徑 5 ~ 20mm を 5% 含む
8. a. 10YR2/2 黑褐色砂 しまりやや弱い、直徑 5 ~ 10mm のバミス粒を 3% 含む
- 10YR4/4 黑褐色ブロック (直徑 3mm) を 3% 含む
8. b. 10YR2/1 黑褐色混じりシルト しまりやや弱い、粘性やや弱い、直徑 5 ~ 10mm のバミス粒を 2% 含む
8. c. 10YR2/1 黑色砂 しまりやや弱い、バミス粒 (直徑 5 ~ 10mm) を 3% 含む
9. 10YR2/2 黑褐色砂 しまりやや弱い、バミス粒 (直徑 5mm) を 1% 含む
10. 7.5YR2/1 黑色シルト混じり砂 しまりやや弱い、粘性弱い、バミス粒 (直徑 5 ~ 30mm) を 5% 含む
11. 10YR2/3 黑褐色砂 (シルトがりじご) しまり強い、粘性弱い、バミス粒 (直徑 5 ~ 10mm) を 3% 含む
12. 10YR2/3 極暗褐色シルト混じり砂 しまり強い、粘性弱い、堆土、直徑 5 ~ 10mm 大のバミス粒を 5% 含む、炉跡か
13. 10W2/2 黑褐色砂 しまりやや弱い、バミス粒 (直徑 5 ~ 10mm) を 5% 含む
14. 10YR2/2 黑褐色砂 しまりやや弱い、バミス粒 (直徑 5 ~ 10mm) を 5% 含む、黑色シルトブロック (直徑 30 ~ 50mm) を 10% 含む
15. 10W2/2 黑褐色砂 しまりやや弱い、バミス粒 (直徑 5 ~ 10mm) を 3% 含む、直徑 20 ~ 30mm の褐色砂ブロックを 3% 含む
16. 10YR2/2 黑褐色砂 しまり強い、バミス粒 (直徑 5 ~ 10mm) を 5% 含む
17. 7.5YR2/3 極暗褐色砂 しまりやや弱い、燒土、上層に黒褐色砂を含む
18. 10YR5/3 にぶい暗褐色砂 しまり強い、地山

## 1区 ST1E247

1. 10YR2/2 黑褐色砂質シルト しまり強い、粘性弱い、炭化物を 7%、地山粒を 5%、直徑 1 ~ 2 mm 程度のバミス粒を 3%、燒土粒を 1% 含む

## 1区 ST1E206

1. 10YR2/3 黑褐色砂 しまりやや強い、炭化物 (直徑 3mm) を微量含む
2. 10YR4/4 黄色砂 しまりやや弱い、暗褐色砂ブロックを 10% 含む

## 1区 ST1EP207

1. 10YR2/3 黑褐色砂 しまりやや強い

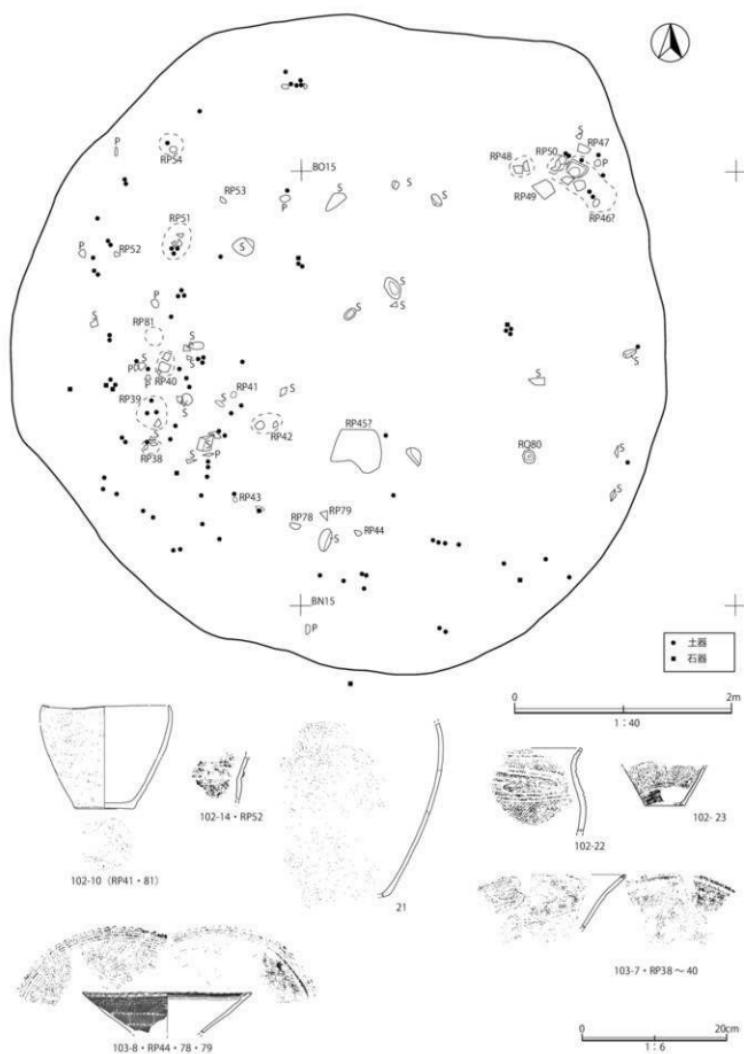
## 1区 ST1EP208

1. 10YR2/3 黑褐色シルト混じり砂 しまりやや弱い

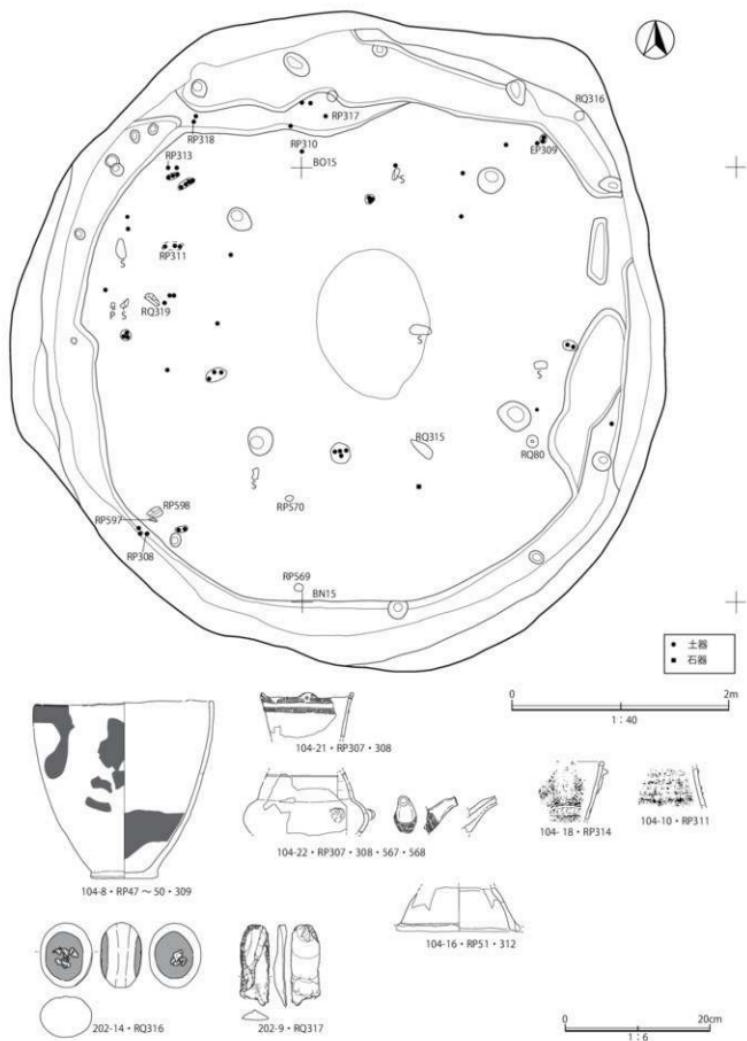
## 1区 ST1EP209

1. 10YR2/3 黑褐色シルト混じり砂 しまりやや強い、粘性弱い

III 調査成果

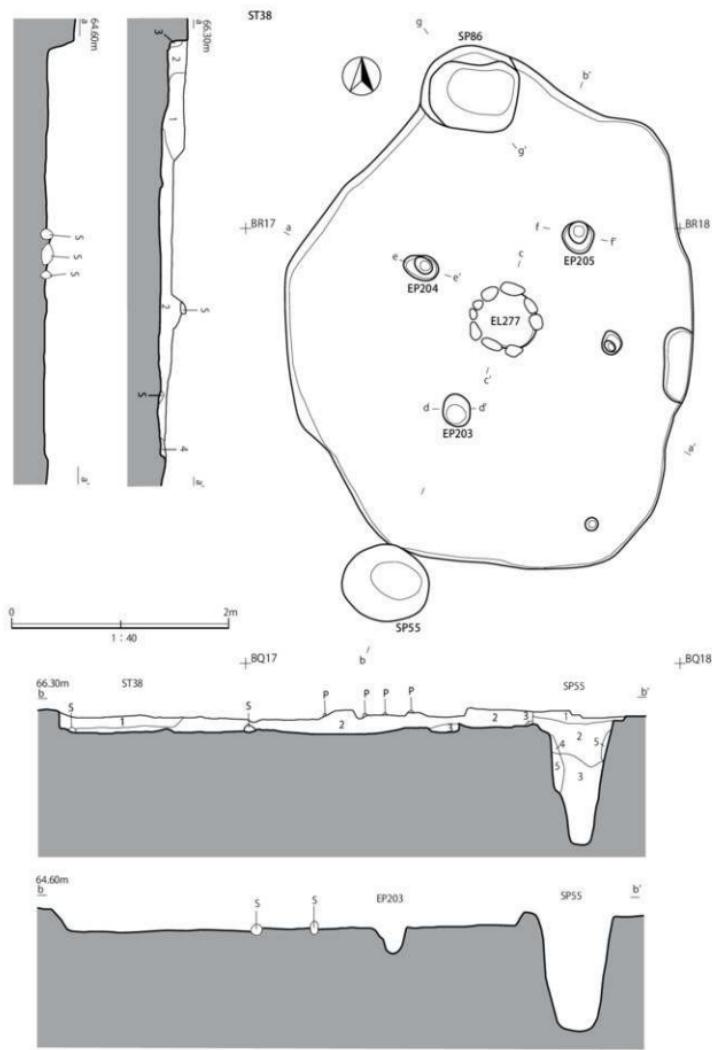


第17図1区ST1覆土遺物分布図

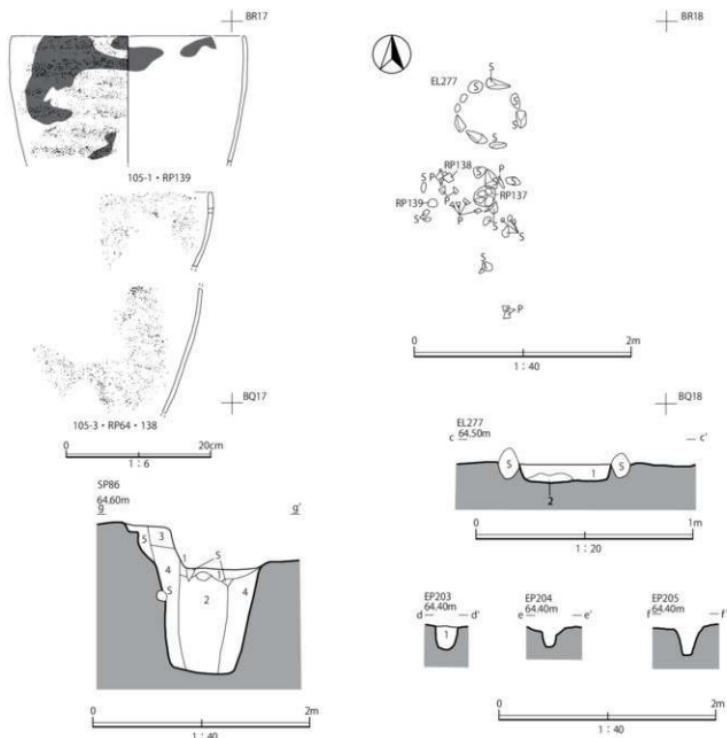


第18図 1区 ST 1床面・住居内施設遺物分布図

III 調査成果



第19図1区 ST38・SP55

**1区 ST38**

1. 5YR3/3 單赤褐色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを 10%含む
2. 10YR2/1 黒色シルト しまり中程度、粘性弱い、地山ブロックを 5%含む
3. 10YR1.7/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを 20%含む
4. 10YR3/3 單赤褐色シルト しまり強い、粘性弱い

**1区 ST38E1277**

1. 5YR3/3 單赤褐色シルト しまり強い、粘性弱い、焼土粒を 5%、直徑 1 ~ 3mm 程度のバミス粒を 2%，炭化物を 1%含む
2. 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト しまり強い、粘性弱い、10YR2/2 黑褐色シルトブロックを 3%含む

**1区 ST38E1270**

1. 10YR2/1 黑色砂混じりシルト しまりやや強い、粘性やや弱い、赤褐色ブロック（直徑 20 ~ 40mm）を 10%含む

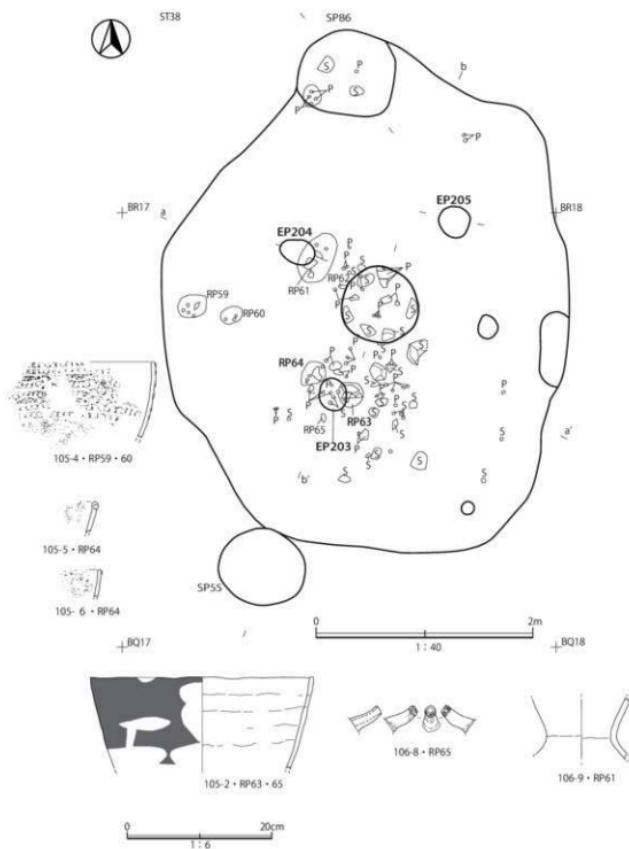
**1区 SP55**

1. 10YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性やや弱い、直徑 5 ~ 10mm のバミス粒を 2%含む
2. 10YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性やや弱い、直徑 5 ~ 30mm のバミス粒を 5%含む
3. 10YR2/2 黑褐色シルト しまり強い、粘性やや弱い、直徑 5 ~ 50mm のバミス粒を 5%含む
4. 10YR2/3 黑褐色砂質シルト しまり強い、粘性弱い、直徑 5 ~ 10mm のバミス粒を 5%含む
5. 10YR2/3 黑褐色砂混じりシルト しまり強い、粘性弱い、直徑 5 ~ 30mm のバミス粒を 5%含む

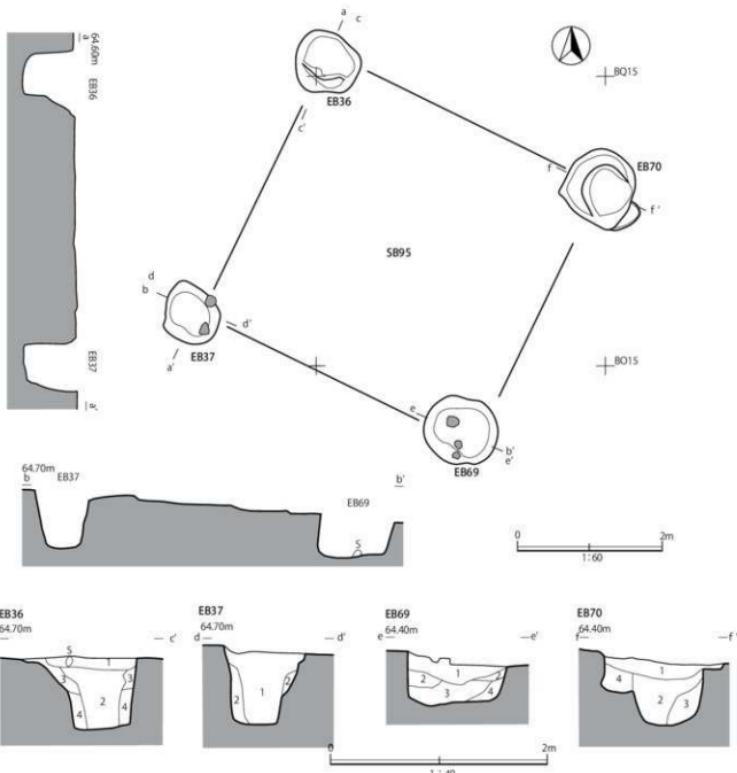
**1区 SP86**

1. 10YR2/1 黑色砂混じりシルト しまりやや強い、粘性やや弱い、直徑 5 ~ 30mm のバミス粒を 10%含む、直徑 10 ~ 15mm の軽石入り
2. 10YR2/1 黑色砂混じりシルト しまりやや弱い、粘性やや弱い、直徑 10 ~ 30mm のバミス粒を 5%含む
3. 10YR2/1 黑色シルト混じり砂 しまり強い、直徑 5 ~ 10mm のバミス粒を 5%含む
4. 10YR2/2 黑褐色シルト混じり砂 しまり強い、直徑 5 ~ 10mm のバミス粒を 3%含む
5. 10YR2/3 黑褐色砂 しまり強い、直徑 5 ~ 10mm のバミス粒を 5%含む

第20図 1区 ST38 + SP86



第21図1区ST38遺物分布図

**1区 SB95EB36**

1. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 5% 含む
2. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 20% 含む
3. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを 10% 含む
4. 10YR3/1 黒褐色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを 7% 含む

**1区 SB95EB37**

1. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い、10YR3/2 黑褐色シルトをブロック状に 20%、直徑 20mm 程度の小礫を少量含む
2. 10YR2/2 黑褐色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを 5%、20mm 程度の小礫を微量含む

**1区 SB95EB69**

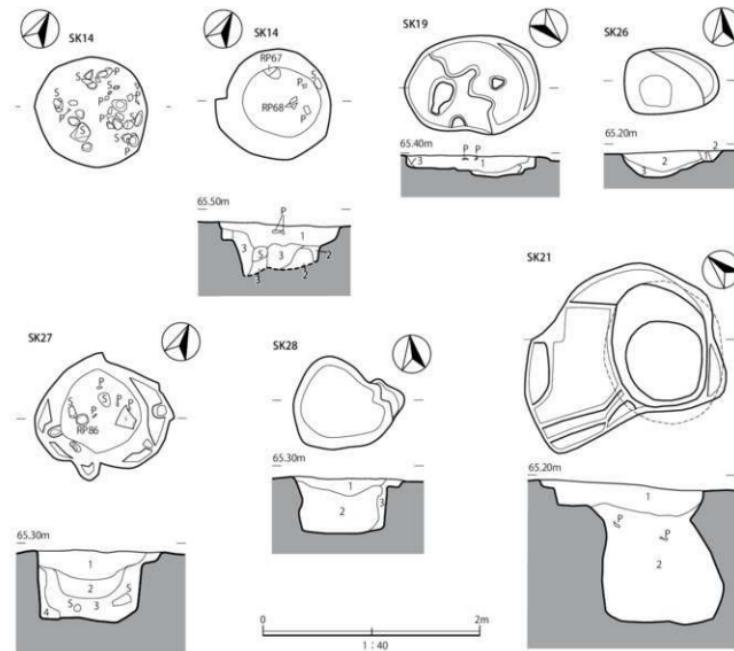
1. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い、炭化物を微量含む
2. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 7% 含む
3. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 5% 含む
4. 10YR1.7/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 5% 含む

**1区 SB95EB70**

1. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを 10% 含む
2. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 5% 含む
3. 10YR3/1 黑褐色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを 3% 含む
4. 10YR3/1 黑褐色シルト しまり強い、粘性弱い、直徑 10 ~ 50mm 程度の礫を少量含む

第22図 1区 SB95EB36・37・69・70

### III 調査成果



#### 1区 SK14

1. 10YR2/1 黒褐色シルト しまりやや強い、粘性やや弱い、直径3~5mm程度のバミス粒を1%含む、層下面に凹陥を含む
2. 10YR2/1 黒褐色シルト しまりやや強い、粘性やや弱い、含有物少ないと想定
3. 10YR2/2 砂混じシルト しまりやや強い、粘性やや弱い、地山由来の褐色砂ブロックを1%含む

#### 1区 SK19

1. 10YR2/1 黒褐色シルト しまりやや強い、粘性やや弱い、直径5~10mmのバミス粒を3%含む、10YR3/3 船舶色砂ブロック（直徑10mm）を3%含む
2. 10YR2/1 黑褐色シルト しまりやや強い、粘性やや弱い、10YR3/3 喷褐色砂ブロック（直徑10~20mm）を30%含む
3. 10YR3/3 喷褐色シルト 混じり砂 しまり強い、地山

#### 1区 SK21

1. 10YR3/1 黒褐色シルト しまり弱い、粘性弱い、直径5~15mm程度の礫を少量含む
2. 10YR2/1 黑褐色シルト しまり強い、粘性弱い

#### 1区 SK26

1. 10YR3/2 黒褐色シルト しまり強い、粘性弱い
2. 10YR2/1 黑褐色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に5%含む
3. 10YR6/6 明黄橙色シルト 地山

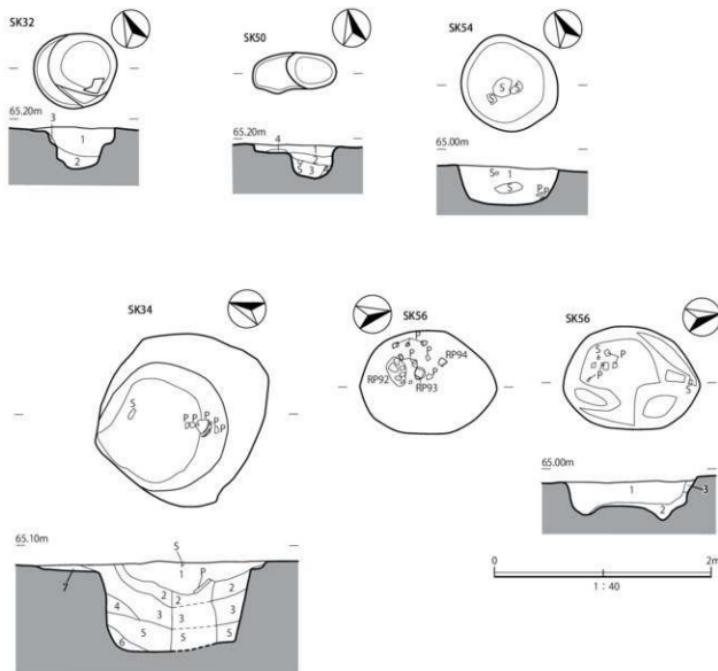
#### 1区 SK27

1. 10YR2/1 黑褐色シルト しまり中程度、粘性弱い、地山ブロックを斑状に3%含む
2. 10YR2/1 黑褐色シルト しまり中程度、粘性弱い、地山ブロックを斑状に1%含む
3. 10YR3/1 黑褐色シルト しまり中程度、粘性弱い、地山ブロックを5%含む
4. 10YR6/6 明黄橙色細砂 地山

#### 1区 SK28

1. 10YR2/1 黑褐色シルト しまり中程度、粘性弱い、地山ブロックを斑状に3%含む
2. 10YR2/1 黑褐色シルト しまり中程度、粘性弱い、地山ブロックを10%含む
3. 10YR6/6 明黄橙色細砂 しまり強い、地山

第23図 1区 SK14・19・21・26～28

**1区 SK32**

1. 10YR2/1 黒褐色シルト しまり中程度、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 5% 含む
2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまり中程度、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 3% 含む
3. 10YR6/6 明黄褐色細砂 しまり強い、地山

**1区 SK34**

1. 10YR3/1 黒褐色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 7% 含む
2. 10YR2/1 黒褐色シルト しまり弱い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 3%、炭化物を少量含む
3. 10YR3/1 黒褐色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 15% 含む
4. 10YR3/2 黑褐色砂質シルト しまり強い、粘性弱い
5. 10YR2/1 黑褐色砂質シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 10% 含む
6. 10YR3/1 黑褐色細砂 しまり弱い
7. 10YR6/6 明黄褐色細砂 地山

**1区 SK50**

1. 10YR2/1 黒褐色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 3% 含む
2. 10YR2/1 黑褐色シルト、しまり弱い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 1% 含む
3. 10YR3/1 黑褐色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 10% 含む
4. 10YR6/6 明黄褐色細砂 しまり強い、地山

**1区 SK54**

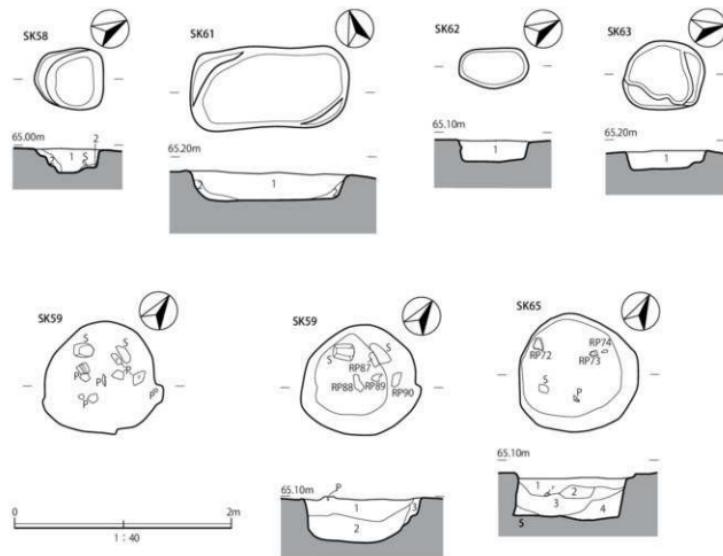
1. 10YR2/1 黒褐色シルト しまり中程度、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 10% 含む

**1区 SK56**

1. 10YR2/1 黒褐色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 2% 含む
2. 10YR1/7/1 黑褐色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを 30% 含む
3. 10YR6/6 明黄褐色細砂 しまり強い、地山

第24図 1区 SK32・34・50・54・56

### III 調査成果



#### 1区 SK58

1. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い、10YR3/1 黒褐色シルトブロックを 10%、地山ブロックを斑状に 3% 含む
2. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを 5% 含む

#### 1区 SK59

1. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い、にぶい黄褐色シルトをブロック状に 5%、地山ブロックを斑状に 1% 含む
2. 10YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 3% 含む
3. 10YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い

#### 1区 SK61

1. 10YR2/1 黑色シルト しまりやや強い、粘性やや弱い、直径 5mm のバニス粒を 2% 含む
2. 10YR2/2 黑褐色砂泥じりシルト しまりやや弱い、粘性弱い、10YR3/3 黑褐色砂ブロックを 10% 含む

#### 1区 SK62

1. 10YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い、直径 10mm 未満の小礫を少量含む

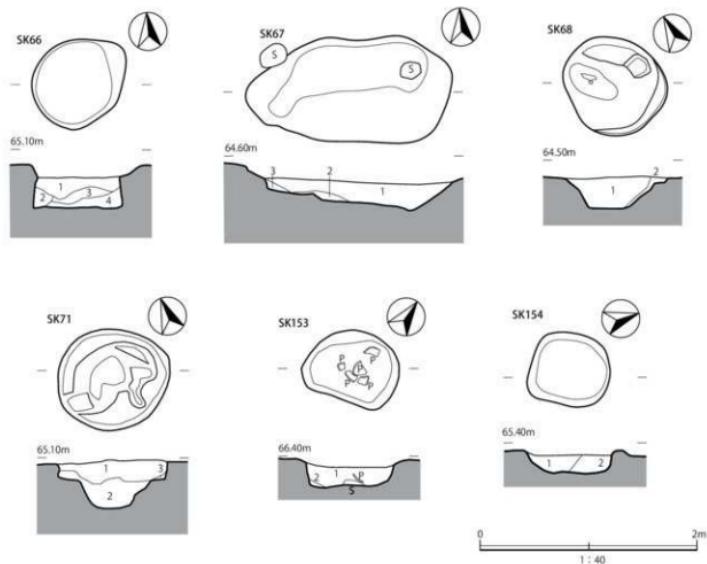
#### 1区 SK63

1. 10YR2/1 黑色シルト しまり中程度、粘性弱い、10YR3/1 黑褐色シルトブロックを 20%、地山ブロックを 5% 含む

#### 1区 SK65

1. 10YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 2% 含む
2. 10YR3/1 黑褐色シルト しまり強い、粘性弱い、10YR2/1 黑色シルトブロックを 10% 含む、地山ブロックを斑状に 7% 含む
3. 10YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 5% 含む
4. 10YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い、10YR3/1 黑褐色シルトブロックを 3% 含む
5. 10YR6/6 明黄褐色細砂 しまり強い、粘性なし、地山

第 25 図 1区 SK58・59・61～63・65

**1区 SK66**

1. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い、炭化物を少量含む
2. 10YR1/7 1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い
3. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを 5% 含む
4. 10YR6/6 明黄褐色細砂 しまり強い、地山

**1区 SK67**

1. 10YR2/1 黒色シルト しまり弱い、粘性弱い、地山ブロックを斑状に 10% 含む
2. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを 20% 含む
3. 10YR6/6 明黄褐色細砂 しまり強い、地山

**1区 SK68**

1. 10YR2/1 黒色シルト しまり中程度、地山ブロックを斑状に 10% 含む
2. 10YR6/6 明黄褐色細砂 しまり強い、地山

**1区 SK71**

1. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを 1% 含む
2. 10YR3/1 黑褐色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを 10% 含む
3. 10YR6/6 明黄褐色細砂 しまり強い、地山

**1区 SK153**

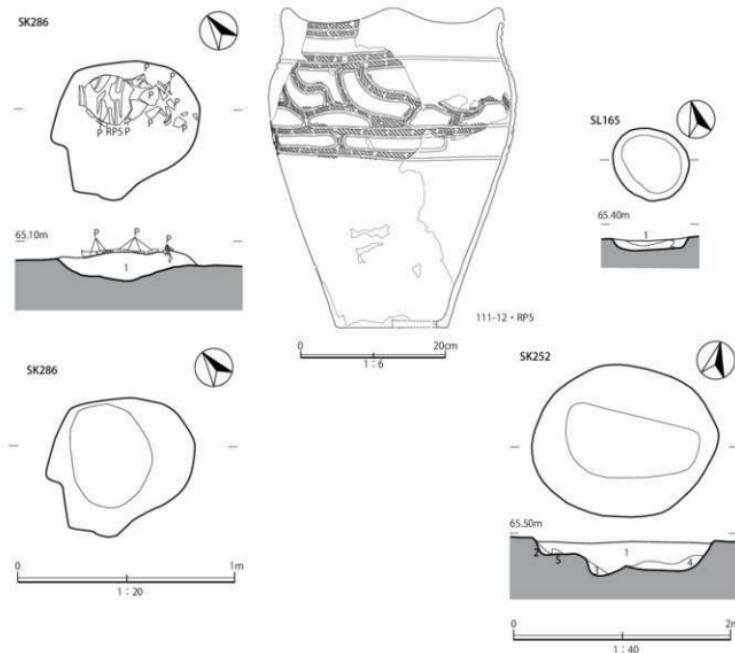
1. 10YR2/1 黒色シルト混じり砂 しまりやや強い、粘性やや弱い、直径 5 ~ 10mm のバミス粒を 5% 含む
2. 10YR4/3 にぼい黄褐色砂、地山

**1区 SK154**

1. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性やや弱い、直径 5mm のバミス粒を 1% 含む
2. 10YR2/1 黒色砂混じりシルト しまり強い、粘性やや弱い、直径 3 ~ 5mm のバミス粒を 3% 含む

第26図 1区 SK66 ~ 68・71・153・154

### III 調査成果



#### 1区 SK252

1. 10YR2/1 黒褐色シルト しまり弱い、粘性中程度。地山粒を 5%、直徑 2mm 未溝のバミス粒を 2% 含む
2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまり強い、粘性弱い、直徑 1mm 程度のバミス粒を 1% 含む
3. 10YR2/1 黒褐色シルト しまり中程度、粘性弱い
4. 10YR2/1 黒褐色シルト しまり中程度、粘性弱い。地山ブロックを 10%、直徑 2mm 未溝のバミス粒を 1% 含む

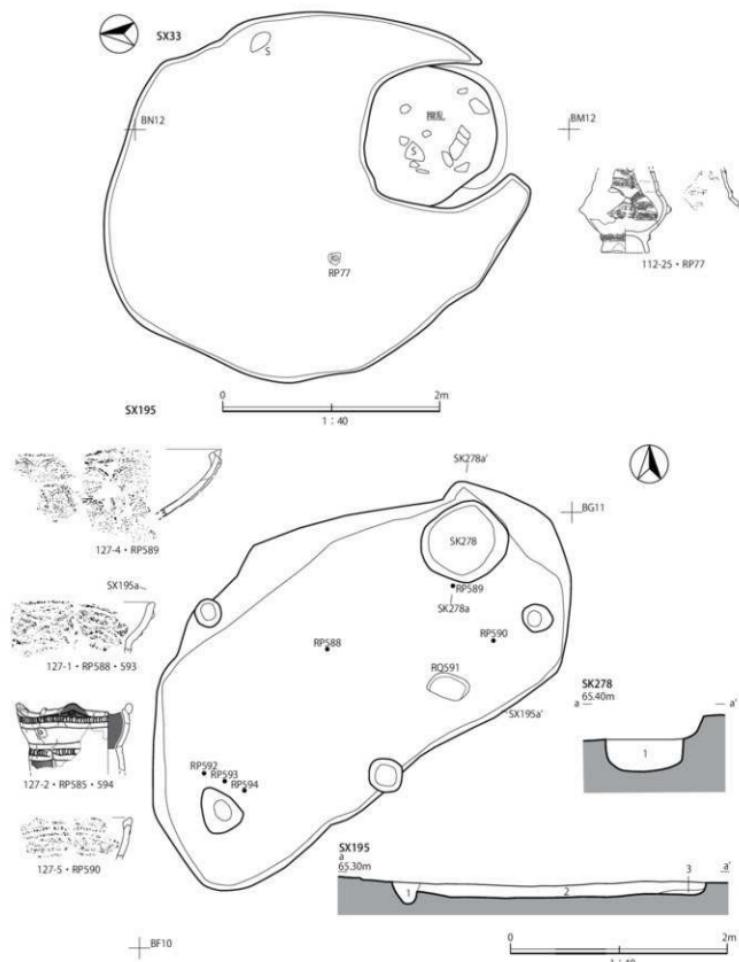
#### 1区 SL165

1. 7.5YR4/3 褐色シルト しまり中程度、粘性弱い。10YR2/1 黒褐色シルトブロックを 7%、直徑 2mm 未溝のバミス粒を 1% 含む
2. 10YR2/1 黒褐色シルト しまり中程度、粘性弱い。10YR3/1 黑褐色シルトブロックを 10%、直徑 1mm 程度のバミス粒を 3%、炭化物を 1% 含む

#### 1区 SK286

1. 10YR3/1 黑褐色シルト しまり強い、粘性弱い。地山ブロックを 2% 含む

第 27 図 1 区 SK252・286・SL165

**1区 SX195**

1. 10YR2/1 黒色シルト しまりやや強い、粘性やや弱い、直径5mmのバミス粒を2%含む
2. 10YR2/1 黒色シルト しまりやや弱い、粘性やや弱い、直径5~20mmのバミス粒を5%含む
3. 7.5YR3/3暗褐色砂 しまり強、10YR2/2黒褐色シルト混じり砂ブロックを10%含む

**1区 SK278**

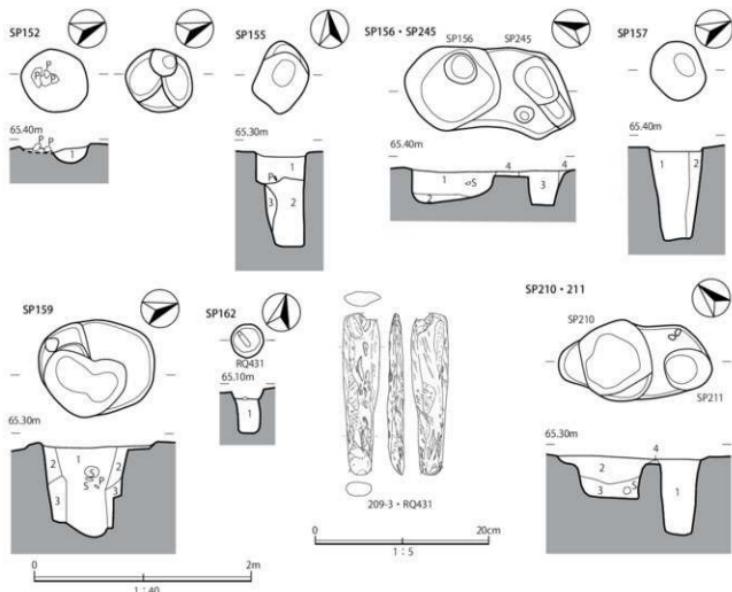
1. 10YR2/1 黒色シルト しまりやや強い、直径約5~10mmのバミス粒を1パーセント含む

第28図 1区 SX33・SX195・SK278

### III 調査成果

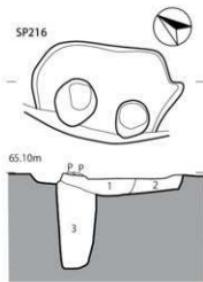


第 29 図 1区 SX215・236・SP15～17・23・25・39・52・64・151



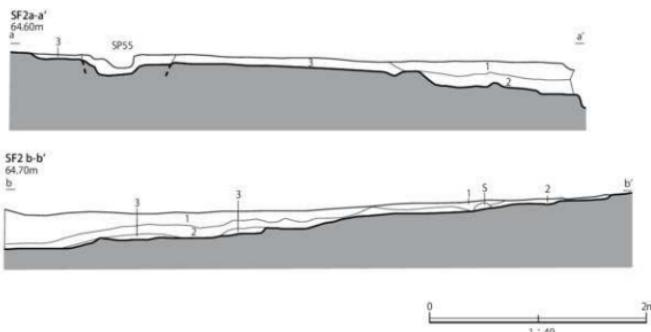
第30図 1区 SP152・155・156・245・157・159・162・210・211

### III 調査成果



#### 1区 SP216

1. 10YR2/1 黒色シルト しまり中程度、粘性弱い、直径2mm程度のバミス粒を1%含む
2. 10YR2/1 黒色シルト しまり中程度、粘性弱い、地山ブロックを7%、直径1mm程度のバミス粒を1%含む
3. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い、地山ブロックを20%、直径3mm未満のバミス粒を3%含む



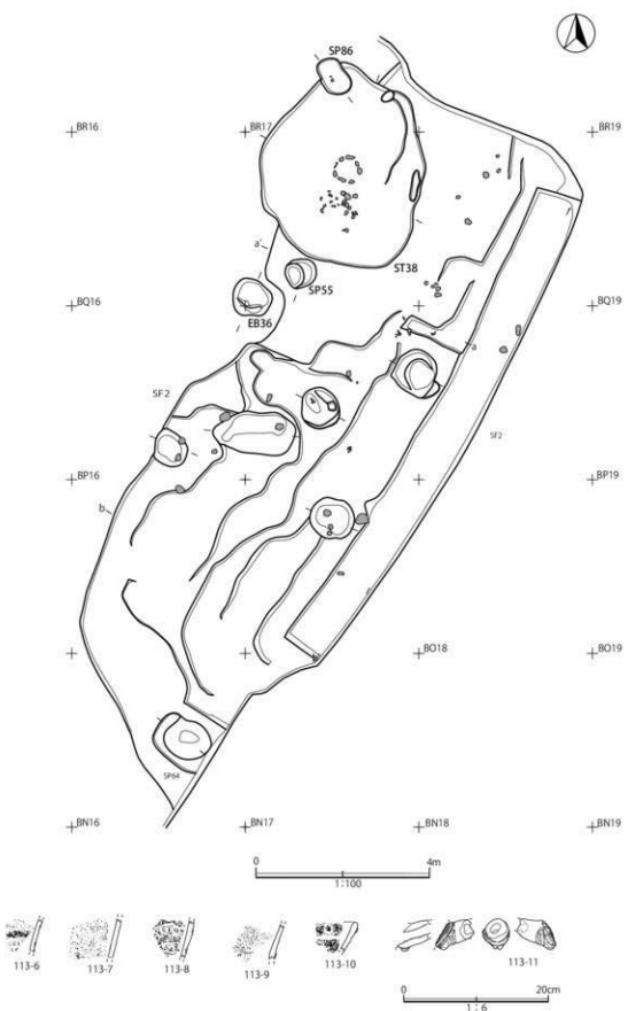
#### 1区 SF2 南側

1. 10YR2/1 黒色シルト しまりやや強い、粘性やや弱い、直径5mm程度のバミス粒を1%含む
2. 10YR2/1 黒色シルト しまりやや強い、粘性やや弱い、直径5~10mmのバミス粒を3%含む
3. 10YR2/3 黒褐色砂質シルトブロック しまり強い、粘性やや弱い、10YR2/1 黒色シルトブロック（直径10~30mm）を10%含む、地山由来のバミス粒を3%含む

#### 1区 SF2 北側

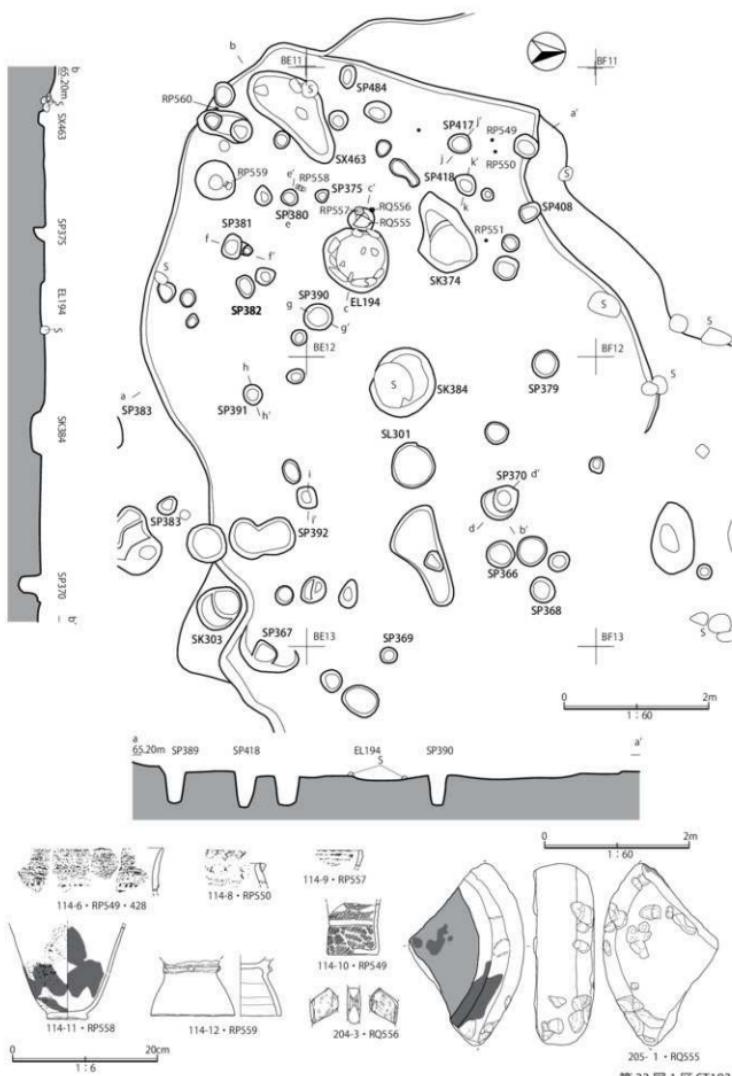
1. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性やや弱い、直径5~20mmのバミス粒を3%含む
2. 10YR2/2 黒色シルト しまり強い、粘性やや弱い、直径5~50mmのバミス粒を10%含む
3. 10YR3/3 黑褐色シルト しまり強い、粘性やや弱い、直径5~50mmのバミス粒を10%含む

第31図 1区 SP216・SF2 (1)

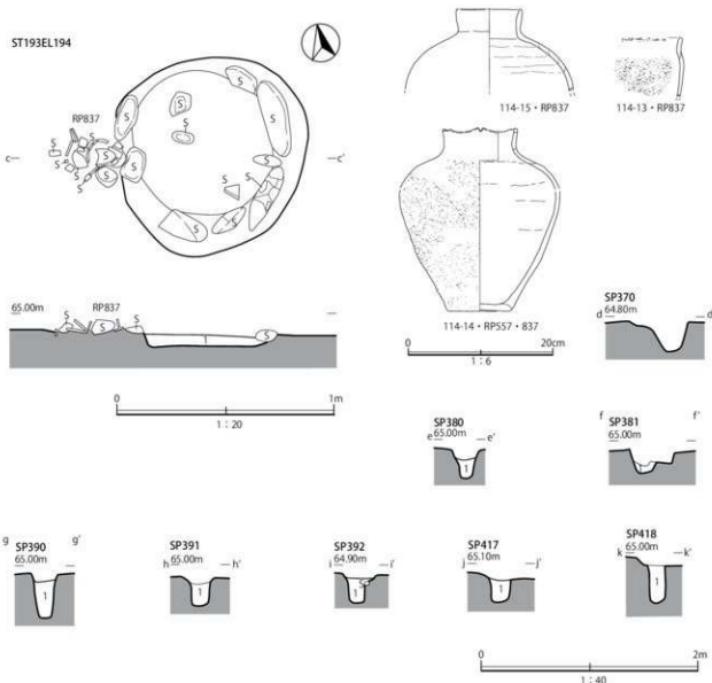


第32図1区SF2(2)

III 調査成果



第33図1区ST193

**ST193EL194**

1.10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強、しまり中、暗褐色シルト（純上）10% 含む

**SP380**

1.10YR3/1 黑褐色シルト 粘性中、しまり中、直徑 2 mm程度の褐色礫を 1% 含む

**SP381**

1.10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強、しまりやや強、直徑 10 mm程度にぶい黄橙シルトブロックを 1% 含む

**SP390**

1.10YR2/1 黒色シルト 粘性中、しまり中、直徑 3 mm程度にぶい黄橙シルトブロックを 1% 含む

**SP391**

1.10YR3/2 黑褐色シルト 粘性中、しまりやや強、直徑 2 mm程度にぶい黄橙シルトブロックを 3% 含む

**SP392**

1.10YR2/1 黒色砂混じりシルト 粘性中、しまりやや強、直徑 5 mm程度の褐色礫を 1%、直徑 2 mm程度の灰白礫を 1% 含む

**SP417**

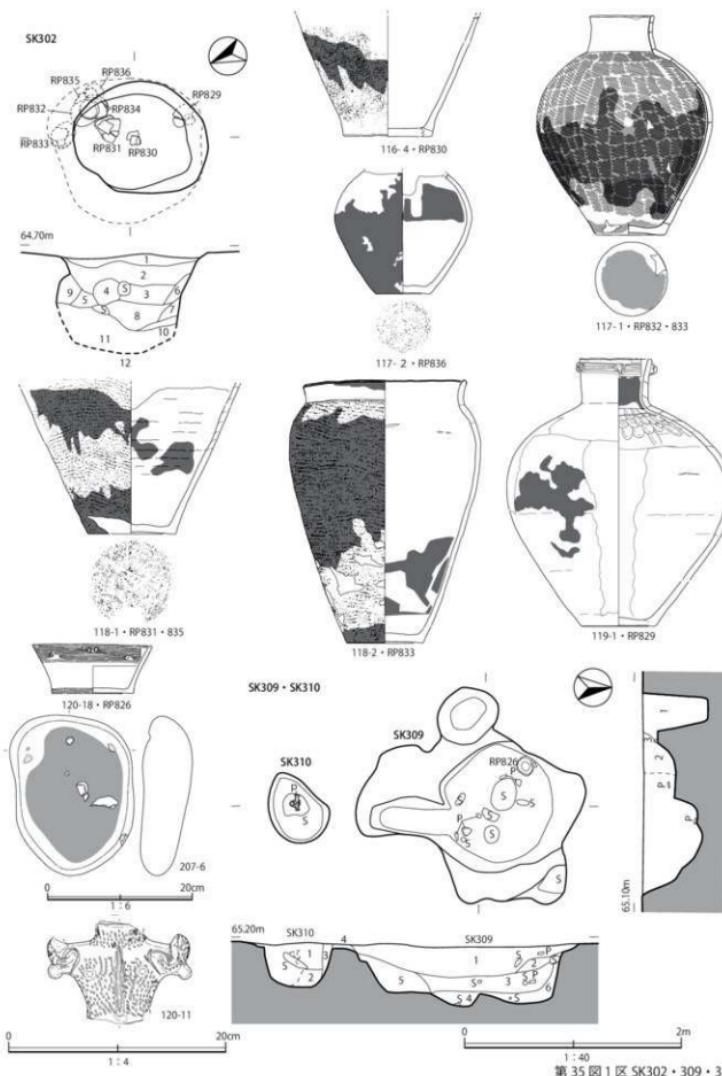
1.10YR3/1 黑褐色砂混じりシルト、粘性やや弱、しまり中、直徑 2 mm程度にぶい黄橙シルトブロックを 3% 含む

**SP418**

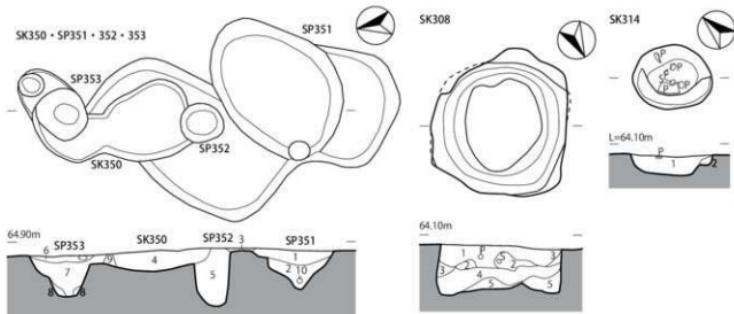
1.10YR2/1 黑色砂混じりシルト 粘性中、しまり中、直徑 1 mm程度の褐色礫を 1% 含む

第 34 図 1 区 ST193EL194 • SP370 • 380 • 381 • 390 ~ 392 • 417 • 418

III 調査成果



第35図1区 SK302・309・310

**SK302**

- 1.I0YR2/1 黒褐色シルト 粘性やや弱。しまり中。直徑 5 mm程度の褐色謹を 2% 含む
- 2.I0YR2/3 黒色シルト 粘性中。しまり中。直徑 5 mm程度の褐色シルトブロックを 3% 含む
- 3.I0YR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱。しまり中。褐色砂混じりシルトを 10% 含む
- 4.I0YR2/2 黒色シルト 粘性中。しまりやや弱。直徑 3 mm程度の明黃褐色シルトブロックを 1% 含む
- 5.2.5Y3/1 黑褐色砂混じりシルト しまりやや弱。粘性やや弱。直徑 3 mm程度の褐色謹を 1% 含む
- 6.1.0YR3/2 黒色シルト 粘性やや弱。しまりやや弱。直徑 3 mm程度の褐色謹を 3% 含む
- 7.1.0YR2/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱。しまりやや弱。直徑 3 mm程度の褐色謹を 3% 含む
- 8.1.0YR3/2 黑褐色シルト 粘性やや強。しまり中。褐色砂混じりシルトを 5% 含む
- 9.1.0YR4/4 褐色砂混じりシルト 粘性やや弱。しまり弱。3 mm程度の灰黄褐色謹を 1% 含む
- 10.1.0YR4/4 褐色砂混じりシルト 粘性やや弱。しまり弱 10 mm程度の褐色謹を 5% 含む
11. 砂 しまり弱。直徑 5 mm程度の褐色謹を 5% 含む
12. 砂

**SK308**

- 1.I0YR2/2 黑褐色シルト 粘性やや弱。しまり弱。直徑 5 mm程度の明黃褐色シルトブロックを 1% 含む
- 2.I0YR2/3 黑褐色シルト 粘性弱。しまり弱。直徑 3 mm程度の明黃褐色シルトブロックを 40% 含む
- 3.I0YR2/2 黑褐色シルト 粘性弱。しまり中。直徑 0.5 mm程度の明黃褐色シルトブロックを 1% 含む
- 4.I0YR2/2 黑褐色シルト 粘性弱。しまりやや弱。5 mm程度の褐色謹を 2%。明黃褐色シルトを 30% 含む
- 5.1.0YR4/4 褐色シルト 粘性弱。しまり弱。5 mm程度の褐色謹を 1% 含む

**SK309**

- 1.I0YR2/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱。しまりやや強。直徑 4 mm程度の明黃褐色シルトブロックを 1%。直徑 2 mm程度の褐色謹を 1% 含む
- 2.1.0YR2/1 黑褐色砂混じりシルト 粘性弱。しまり弱。直徑 2 mm程度の褐色謹を 3% 含む
- 3.1.0YR3/1 黑褐色シルト 粘性やや弱。しまり中。直徑 6 mm程度の褐色謹を 1%。直徑 3 mm程度のにぶい黄褐色シルトブロックを 1% 含む
- 4.1.0YR4/4 褐色砂混じりシルト 粘性弱。しまり弱。直徑 10 mm程度の褐色謹を 1% 含む
- 5.1.0YR2/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性弱。しまり中。褐色砂混じりシルトを 20% 含む
- 6.1.0YR2/1 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱。しまりやや弱。直徑 2 mm程度の褐灰色シルトブロックを 1% 含む

**SK309 東西**

- 1.I0YR2/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱。しまり中。直徑 3 mm程度の明黃褐色シルトブロックを 5% 含む
- 2.I0YR2/1 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱。しまりやや弱。直徑 4 mm程度の明黃褐色シルトブロックを 1%。2 mm程度の褐色謹を 1% 含む
- 3.1.0YR4/4 褐色砂混じりシルト 粘性弱。しまり弱。直徑 10 mm程度の褐色謹を 1% 含む

**SK310**

- 1.I0YR2/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱。しまりやや弱。直徑 5 mm程度のにぶい黄褐色シルトブロックを 1% 含む
- 2.1.0YR2/1 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱。しまりやや弱。直徑 5 mm程度のにぶい黄褐色シルトブロックを 1% 含む
- 3.1.0YR4/4 褐色砂混じりシルト 粘性やや弱。しまりやや弱。直徑 3 mm程度の褐色謹を 5% 含む

**SK314**

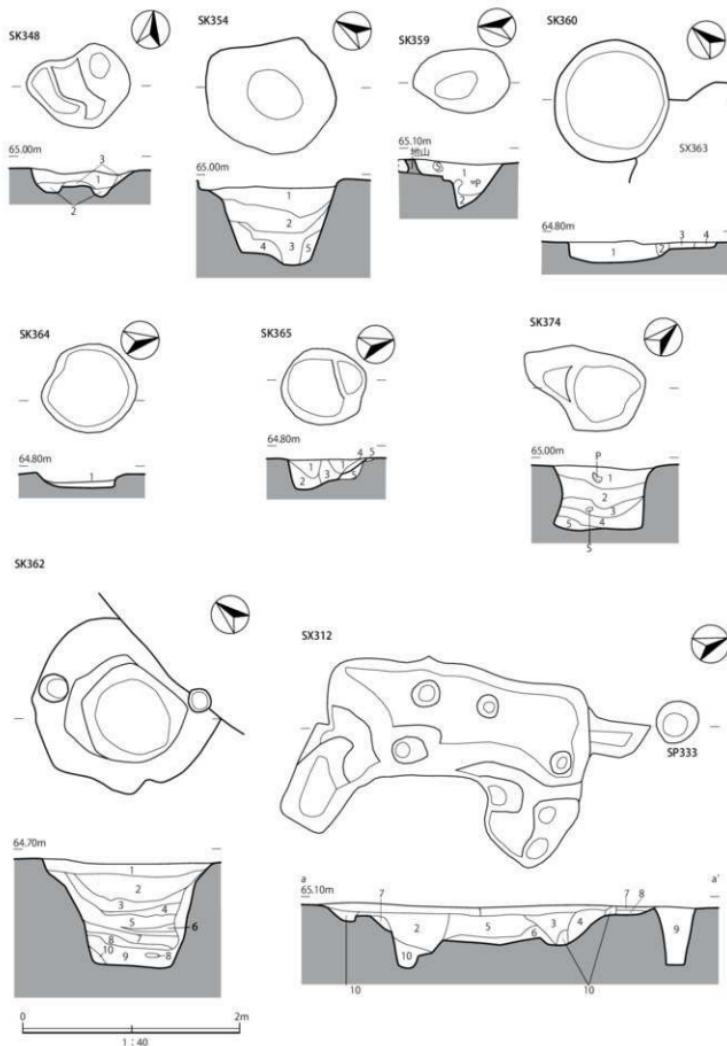
- 1.I0YR2/2 黑褐色シルト 粘性弱。しまり中。直徑 5 mm程度の褐色謹を 1% 含む
- 2.I0YR5/6 黄褐色シルト 粘性弱。しまり弱。直徑 5 mm程度のにぶい黄褐色謹を 2% 含む

**SK350・SP351・352・353**

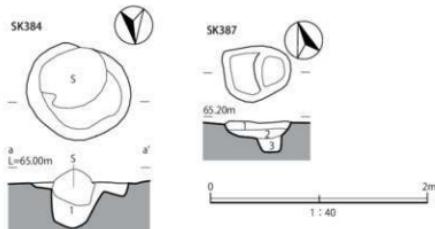
- 1.1.0YR3/1 黑褐色シルト 粘性やや弱。しまり中。直徑 5 mm程度の褐色謹を 2% 含む
- 2.1.0YR2/3 黑褐色シルト 粘性中。しまり中。直徑 5 mm程度の褐色シルトブロックを 3% 含む
- 3.1.0YR2/2 黑褐色シルト 粘性やや弱。しまり中。褐色砂混じりシルトを 10% 含む
- 4.1.0YR2/2 黑褐色シルト 粘性中。しまりやや弱。直徑 3 mm程度の明黃褐色シルトブロックを 1% 含む
- 5.2.5Y3/1 黑褐色砂混じりシルト しまりやや弱。粘性やや弱。直徑 3 mm程度の褐色謹を 1% 含む
- 6.1.0YR3/2 黑褐色シルト 粘性やや弱。しまり弱。直徑 3 mm程度の褐色謹を 3% 含む
- 7.1.0YR2/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱。しまり中。褐色砂混じりシルトを 5% 含む
- 8.1.0YR4/4 褐色砂面じりシルト 粘性やや弱。しまり弱。3 mm程度の灰黄褐色謹を 1% 含む
- 10.1.0YR4/4 褐色砂面じりシルト 粘性やや弱。しまり弱 10 mm程度の褐色謹を 5% 含む

第36図1区 SK350・SP351～353・SK308・314

III 調査成果



第37図 1区 SK348・354・359・360・362・364・365・374・SX312・SP333

**SK348**

- 1.10YR2/2 黒褐色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまりやや弱、直径 2 mm 程度の褐色礫を 1% 含む  
2.2.5 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまりやや弱  
3.10YR4/4 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまりやや弱、直径 3 mm 程度の褐色礫を 5% 含む

**SK354**

- 1.10YR2/1 黒色砂混じりシルト 粘性弱、しまり弱、直径 5 mm 程度に似る黄褐色シルトブロックを 2% 含む  
2.10YR3/1 黑褐色シルト 粘性中、しまり中、直径 8 mm 程度に似る黄褐色シルトブロックを 10% 含む  
3.10YR1/1 黑色砂混じりシルト 粘性中、しまりやや弱、直径 10 mm 程度に似る黄褐色シルトブロックを 15% 含む  
4.10YR2/2 黑色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまりやや弱、直径 3 mm 程度に似る黄褐色シルトブロックを 1%、2 mm 程度の褐色礫を 1% 含む  
5.10YR4/4 黑褐色砂混じりシルト 粘性弱、しまり弱、直径 10 mm 程度の浅黄褐色を 1% 含む

**SK359**

- 1.10YR2/1 黑色シルト 粘性やや弱、しまり中、直径 5 mm 程度に似る黄褐色シルトブロックを 1%、8 mm 程度の褐色礫を 1% 含む  
2.10YR4/3 に似る黄褐色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまりやや弱、直径 10 mm 程度に似る黄褐色シルトブロックを 1% 含む

**SK360**

- 1.10YR2/1 黑色シルト 粘性中、しまり中、直径 1 mm 程度の褐色シルトブロックを 1% 含む  
2.10YR2/2 黑褐色シルト 粘性中、しまり中、直径 3 mm 程度の褐色シルトブロックを 1% 含む  
3.10YR3/2 暗褐色砂混じりシルト 粘性中、しまり弱、直径 10 mm 程度の浅黄褐色シルトブロックを 3%、2 mm 程度の褐色礫を 1% 含む  
4.10YR2/1 黑色砂混じりシルト 粘性中、しまりやや弱、直径 3 mm 程度の浅黄褐色シルトブロックを 3%、  
5.10YR4/6 黑褐色砂混じりシルト 粘性弱、しまり弱、直径 5 mm 程度の褐色礫を 1%、直徑 2 mm 程度の褐色礫を 1% 含む  
6.10YR2/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性弱、しまり弱、直径 3 mm 程度の褐色礫を 1% 含む  
7.10YR2/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性弱、しまり弱、直径 3 mm 程度の褐色礫を 1% 含む  
8.10YR4/6 黑褐色砂混じりシルト 粘性弱、しまり弱、直径 2 mm 程度の褐色礫を 1% 含む  
9.10YR4/2 从黄褐色砂混じりシルト 粘性中、しまり中、直径 4 mm 程度に似る黄褐色シルトブロックを 1% 含む  
10.10YR4/6 黑褐色砂混じりシルト 粘性弱、しまり弱、直径 2 mm 程度の褐色礫を 1% 含む

**SK364**

- 1.10YR2/1 黑色シルト 粘性中、しまり中、2 mm 程度に似る黄褐色シルトブロック 3% 含む

**SK365**

- 1.10YR3/1 黑褐色シルト 粘性中、しまりやや強、直径 5 mm 程度に似る黄褐色シルトブロックを 1%、直径 10 mm 程度の褐色礫を 1% 含む  
2.10YR2/1 黑褐色シルト 粘性やや強、直径 2 mm 程度に似る黄褐色シルトブロックを 1% 含む  
3.10YR2/2 黑褐色シルト 粘性やや強、しまりやや強、直径 5 mm 程度に似る黄褐色シルトブロックを 1% 含む  
4.10YR3/2 黑褐色シルト 粘性やや強、しまりやや強、直径 3 mm 程度の褐色礫を 2%、直径 5 mm 程度に似る黄褐色シルトブロックを 1% 含む  
5.10YR4/4 黑褐色シルト 粘性やや強、しまりやや弱、直径 3 mm 程度の白褐色シルトブロックを 1%、直径 5 mm 程度の黄褐色シルトブロックを 1% 含む (地山)

**SK384**

- 1.10YR2/2 黑褐色シルト 粘性やや強、しまり中、直径 10 mm 程度に似る黄褐色シルトブロックを 1% 含む

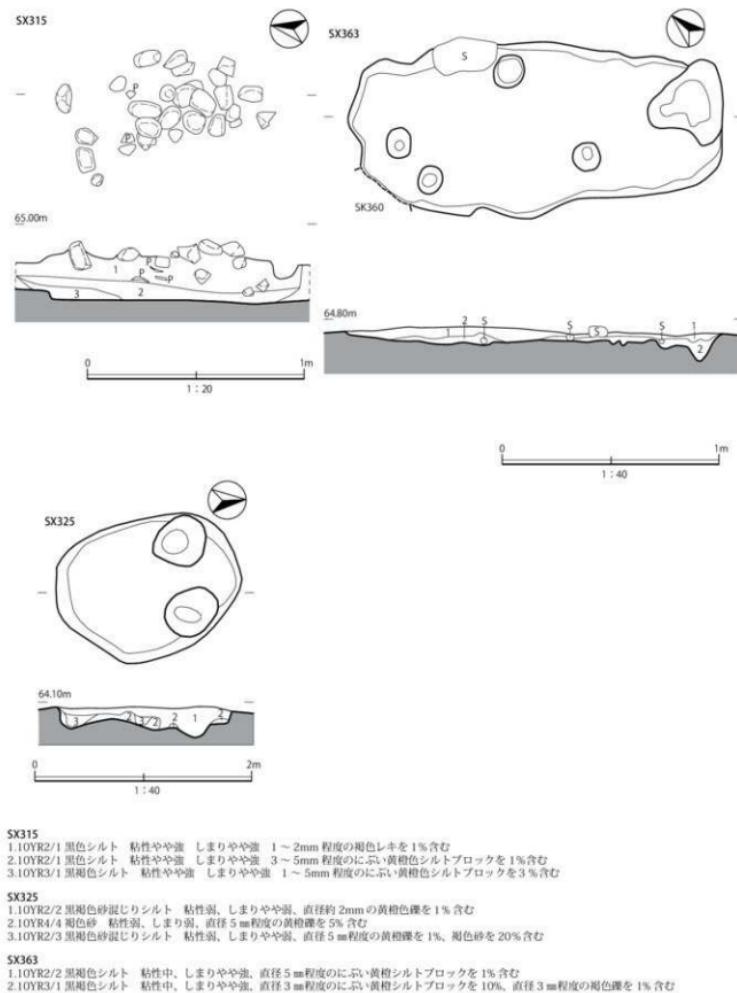
**SK387**

- 1.10YR2/3 黑褐色シルト 粘性中、しまりやや弱、直径 3 mm 程度に似る黄褐色シルトブロックを 5%、直径 5 mm 程度の褐色礫を 1% 含む  
2.10YR3/1 黑褐色シルト 粘性中、しまり中、直径 3 mm 程度に似る黄褐色シルトブロックを 5%、直径 5 mm 程度の褐色礫を 1% 含む  
3.10YR2/3 黑褐色砂混じりシルト 粘性中、しまりやや弱、直径 5 mm 程度の褐色礫を 1% 含む

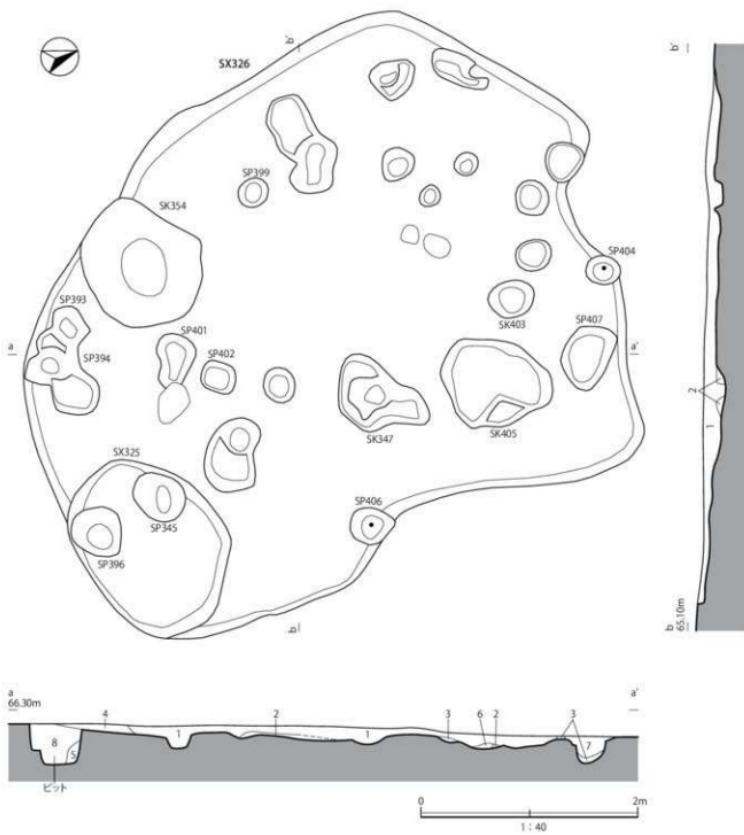
**SK312 - SP333**

- 1.10YR2/2 黑褐色シルト 粘性中、しまり中、直径 3 mm 程度の褐色礫を 3% 含む  
2.10YR3/1 黑褐色シルト 粘性中、しまり中、直径 2 mm 程度の灰黄褐色シルトブロックを 3% 含む  
3.10YR2/3 黑褐色シルト 粘性中、しまり中、直径 5 mm 程度の褐色礫を 1% 含む  
4.10YR2/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性中、しまりやや弱、直径 5 mm 程度の灰黄褐色シルトブロックを 5% 含む  
5.10YR2/2 黑褐色シルト 粘性やや弱、しまりやや弱、直径 2 mm 程度の灰黄褐色シルトブロックを 3% 含む  
6.10YR2/1 黑褐色シルト 粘性中、しまりやや弱、直径 10 mm 程度の褐色礫を 1% 含む  
7.10YR2/3 黑褐色砂混じりシルト 粘性弱、しまり弱、灰黄褐色を 20% 含む  
8.10YR3/2 黑褐色シルト 粘性弱、しまりやや弱、直径 5 mm 程度の褐色礫を 5% 含む  
9.10YR3/1 黑褐色砂混じりシルト 粘性弱、しまりやや弱、直径 5 mm 程度の灰黄褐色シルトブロックを 1% 含む  
10.10YR4/4 黑褐色砂混じりシルト 粘性弱、しまり弱、直径 5 mm 程度の褐色礫を 3% 含む (地山)

### III 調査成果



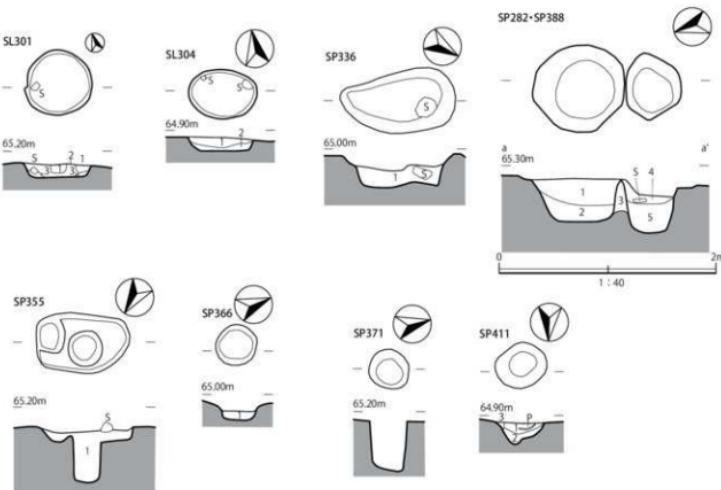
第39図1区 SX315・325・SX363

**SX326**

- 1.10YR2/1 黒色シルト、粘性やや弱、しまり中、直径5mm程度の黄褐色混じりシルトブロックを1%含む
- 2.10YR4/6 黄褐色混じりシルト、粘性弱、しまり弱、直径6mm程度の黄褐色塊を3%含む
- 3.10YR2/1 黄褐色シルト、粘性やや弱、しまり弱、直径2mm程度のにふい黄褐色塊を1%含む
- 4.10YR2/2 黑褐色シルト、粘性やや弱、しまりやや弱、直徑3mm程度のにふい黄褐色混じりシルトブロックを1%含む
- 5.10YR3/1 黄褐色シルト、粘性やや弱、しまりやや弱、褐色砂混じりシルトを3%含む
- 6.10YR2/2 黑褐色シルト、粘性やや弱、しまりやや弱、直徑4mm程度のにふい黄褐色塊を2%含む
- 7.10YR2/2 黑褐色シルト、粘性やや弱、しまり中、直徑5mm程度の黄褐色を1%含む
- 8.10YR2/2 黑褐色シルト混じりシルト、粘性やや弱、しまりやや弱、5mm程度のにふい黄褐色を3%含む

第40図1区 SX326

### III 調査成果



#### SL301

1.5YR4/3 にぶい赤褐色シルト 粘性中、しまりやや強、焼上  
2.7.5YR2/1 黒色シルト 粘性中、しまりやや強、直径 20-30 mm 槌上ブロック 3% 含む  
3.7.5YR2/1 黒色シルト 粘性中、しまりやや強、直径 10 mm の撓上ブロックを 1% 含む

#### SL304

1.5YR3/4 暗赤褐色シルト しまり中、粘性やや弱い 10 ~ 40mm の 5YR2/1 黒色シルトブロックを 10% 含む  
2.10YR2/1 黒色シルト しまりやや強、粘性中 10 ~ 20mm の撓上ブロックを 3% 含む

#### SP282・388

1.10YR2/1 黄色シルト 粘性中、しまりやや強、直徑 5 mm 程度のにぶい黄褐色シルトブロックを 3% 含む  
2.10YR2/2 黑褐色シルト 粘性中、しまりやや強、直徑 5 mm 程度のにぶい黄褐色シルトブロックを 5% 含む  
3.10YR4/4 黒褐色砂混じりシルト 粘性弱、しまり弱、直徑 3 mm 程度の黄灰褐色を 3% 含む  
4.10YR2/2 黑褐色シルト 粘性やや弱、しまりやや強、直徑 2 mm 程度のにぶい黄褐色シルトブロックを 1% 含む  
5.10YR3/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまり中、直徑 10 mm 程度の褐色礫を 1%、5 mm 程度の黄褐色シルトブロックを 1% 含む

#### SP336

1.10YR2/1 黑色シルト 粘性中、しまり中直徑 2-3 mm 程度のにぶい黄褐色シルトブロックを 3% 含む

#### SP355

1.10YR2/1 黑色シルト 粘性やや弱、しまり中、直徑 5-10 mm 程度の黄褐色シルトブロックを 2%、3 mm 程度の褐色礫を 1% 含む

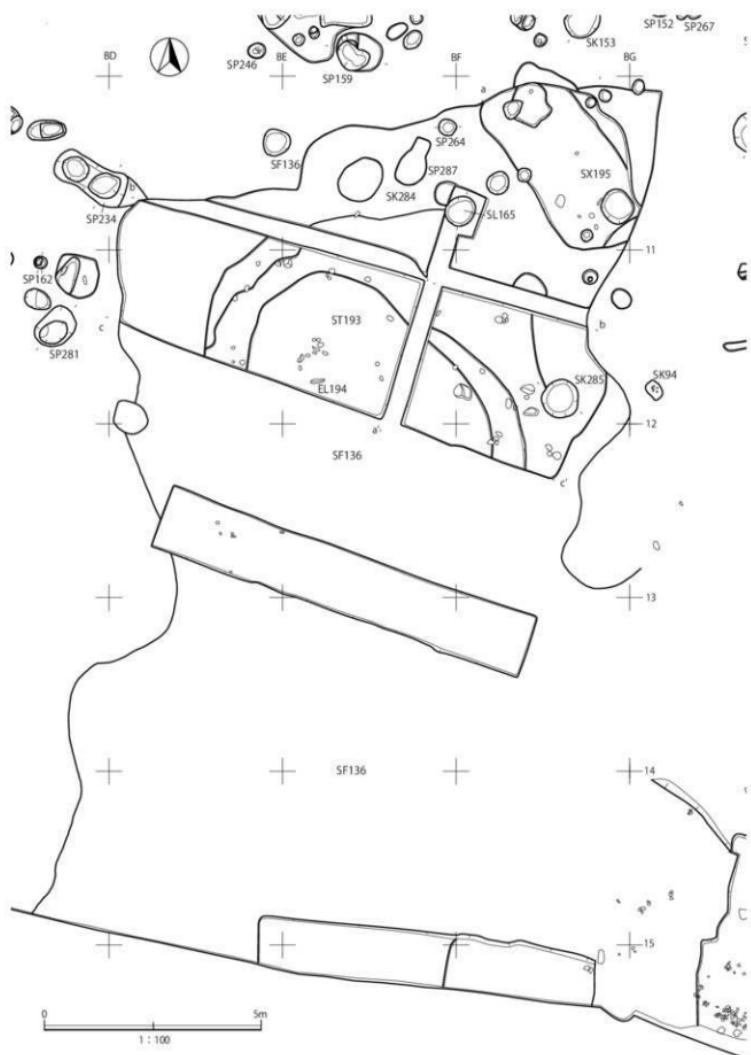
#### SP366

1.10YR2/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまり弱、直徑 2 mm 程度の褐色礫を 1% 含む  
2.10YR4/4 黑褐色砂混じりシルト 粘性弱、しまり弱、直徑 10 mm 程度のにぶい黄褐色を 5% 含む (地山)

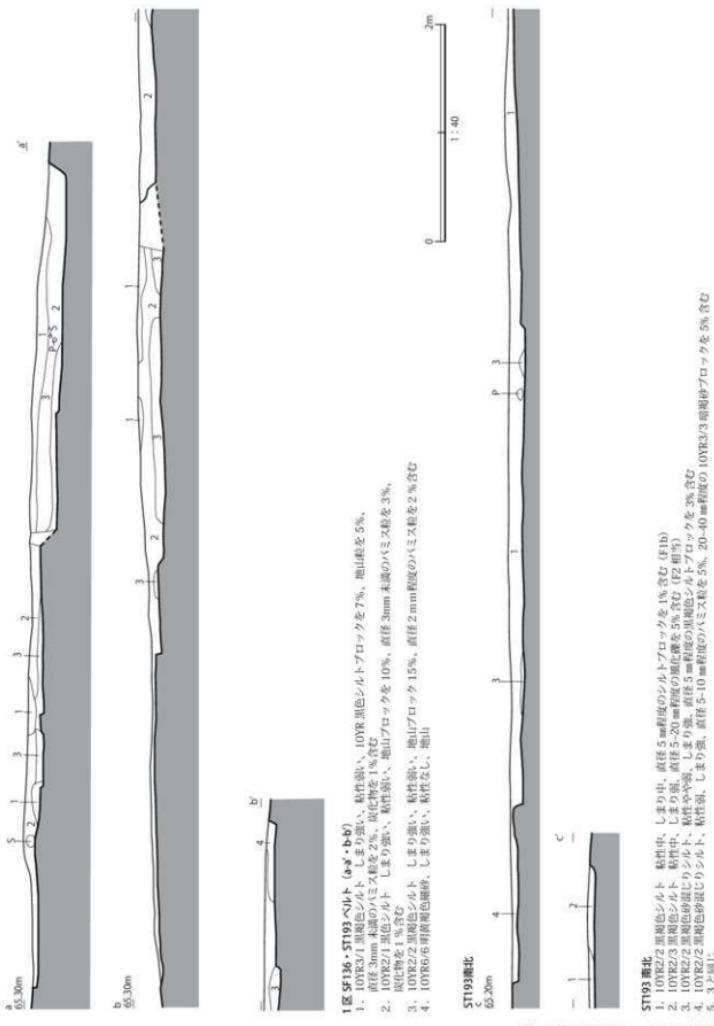
#### SP371

1.10YR2/2 黑褐色シルト 粘性中、しまりやや強、直徑 1-5 mm 程度の褐色礫を 1% 含む  
2.10YR3/3 暗褐色砂混じりシルト 粘性中、しまり中、直徑 1-2 mm 程度の褐色礫を 1% 含む  
3.10YR4/4 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまりやや弱、直徑 1-3 mm 程度の灰白礫を 1% 含む

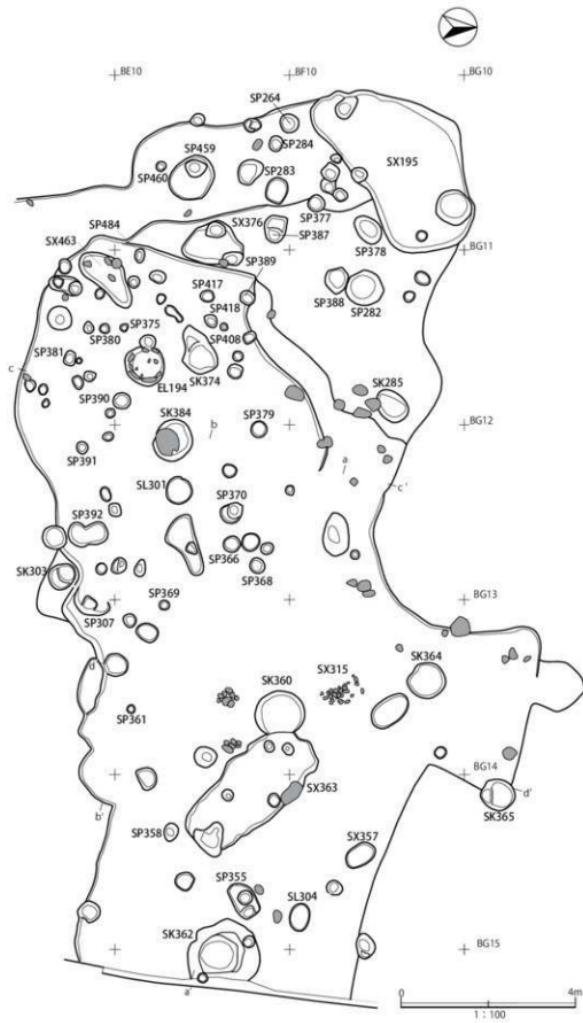
第 41 図 1 区 SL301・304・SP282・336・355・366・371・388・411



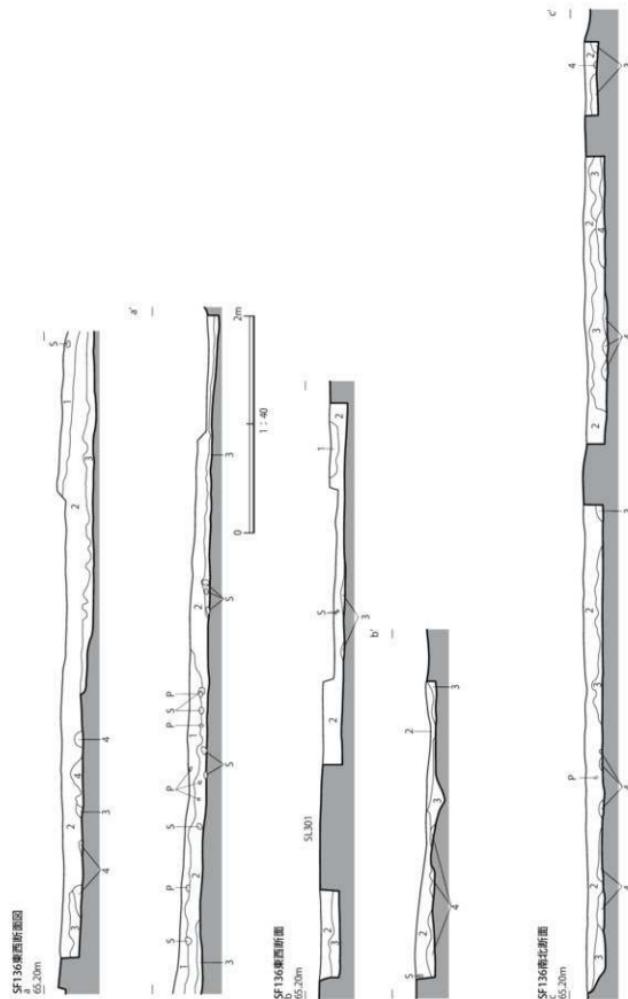
第42図 1区 SF136・ST193 検出平面図



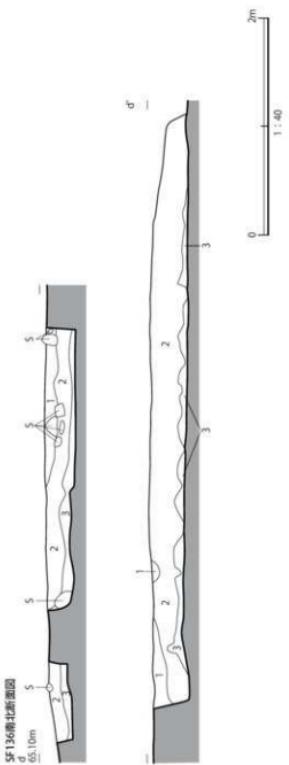
第43図 1区 SF136・ST193断面図



第44図1区SF136平面図



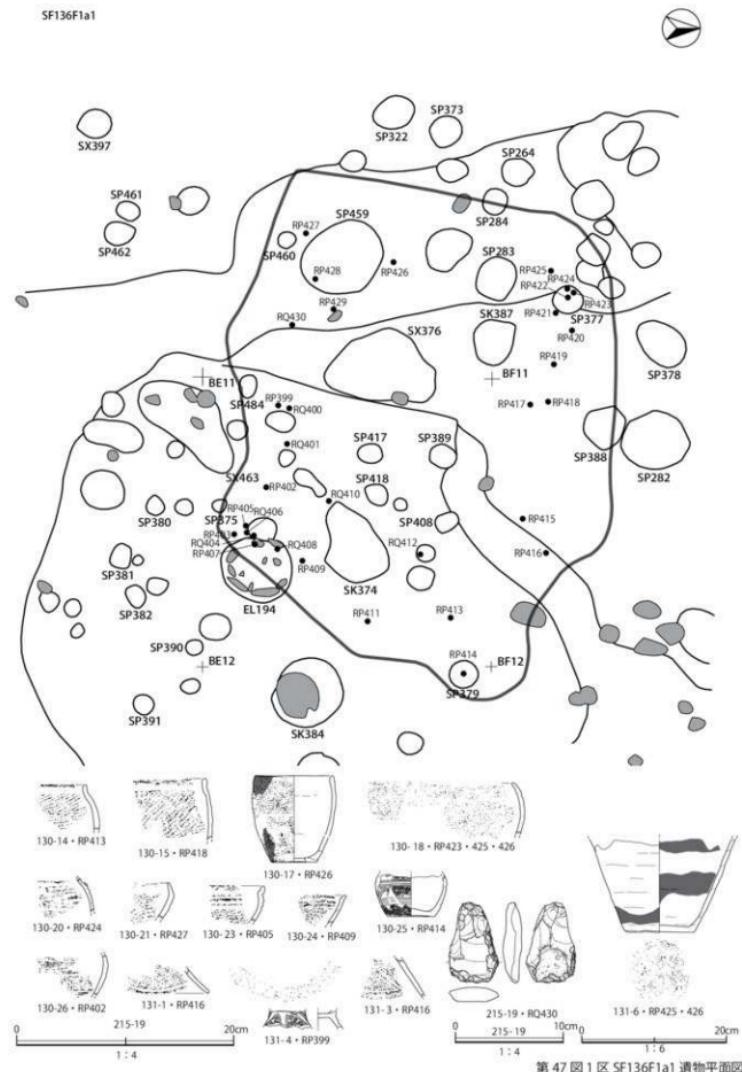
第45図1区 SF136断面図2

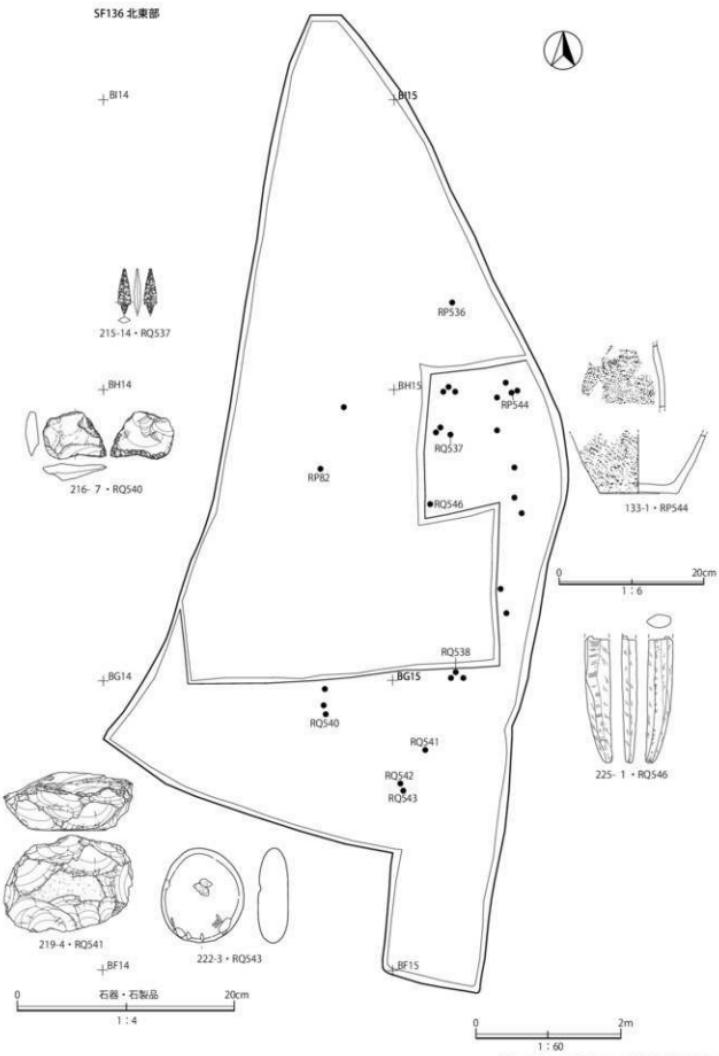


- SF136
1. 10YR3/1 黒褐色シルト (7.5YR4/3 黑褐色シルト層) 粘性強、しまり強、直徑 5 mm程度の灰褐色塊、直徑 1 mm程度の白色シルト、炭化物を含む
  2. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性強、しまり強、直徑 2-10 mm程度の黄褐色塊と 2-5 mm程度の白褐色塊を多量含む
  3. 7.5YR3/2 黒褐色シルト 粘性強、しまり強、直徑 5-10 mm程度の灰褐色塊と 2-5 mm程度の白褐色塊を多量含む
  4. 10YR5/6 黒褐色シルト 粘性強、しまり強、直徑 1-5 mm程度の白色シルト塊を微量含む、1 m以下のおよそローム層を微量含む

第 46 図 1 区 SF136 断面図 2

III 調査成果

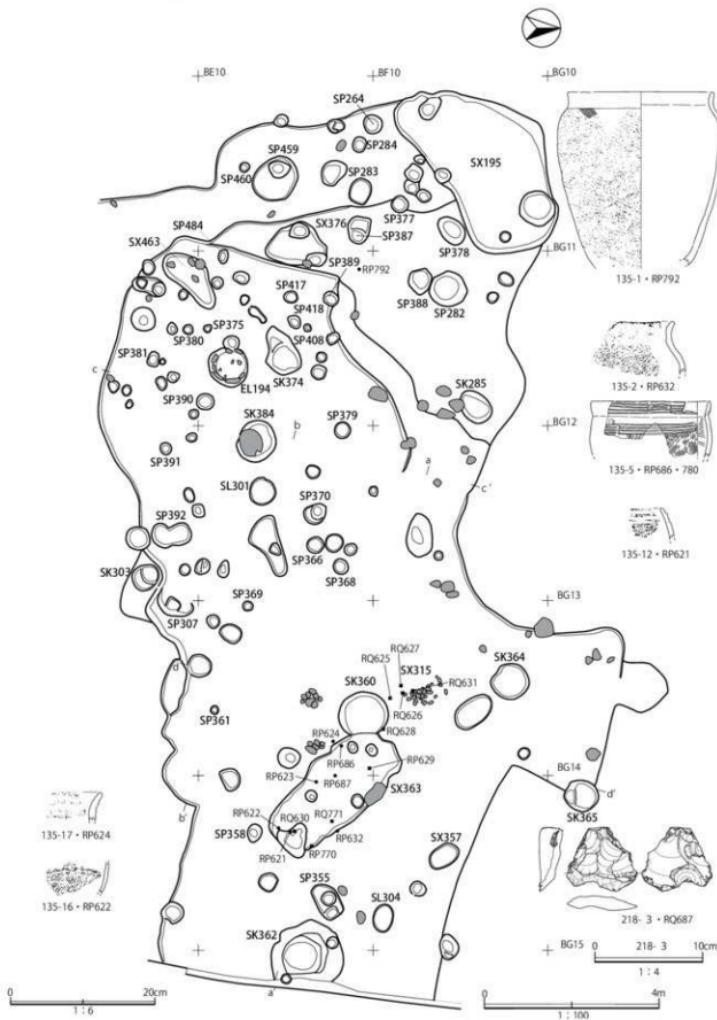




第48図 1区 SF136 北東部遺物平面図

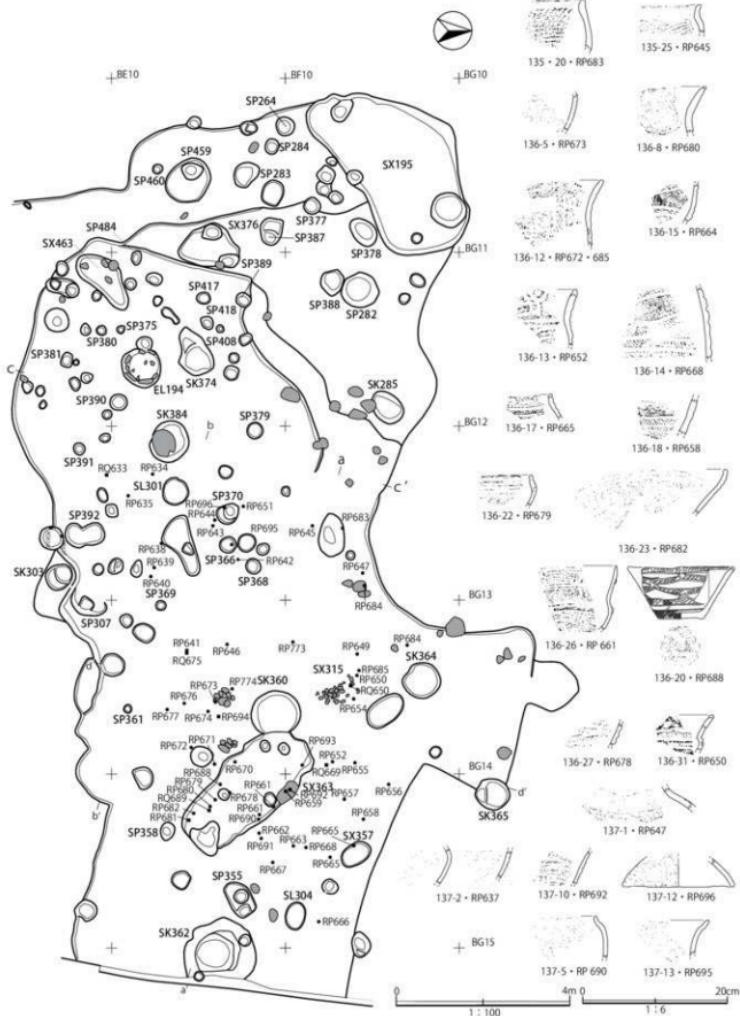
III 調査成果

SF136-F1a2遺物分布図



第49図1区 SF136F1a2 遺物平面図

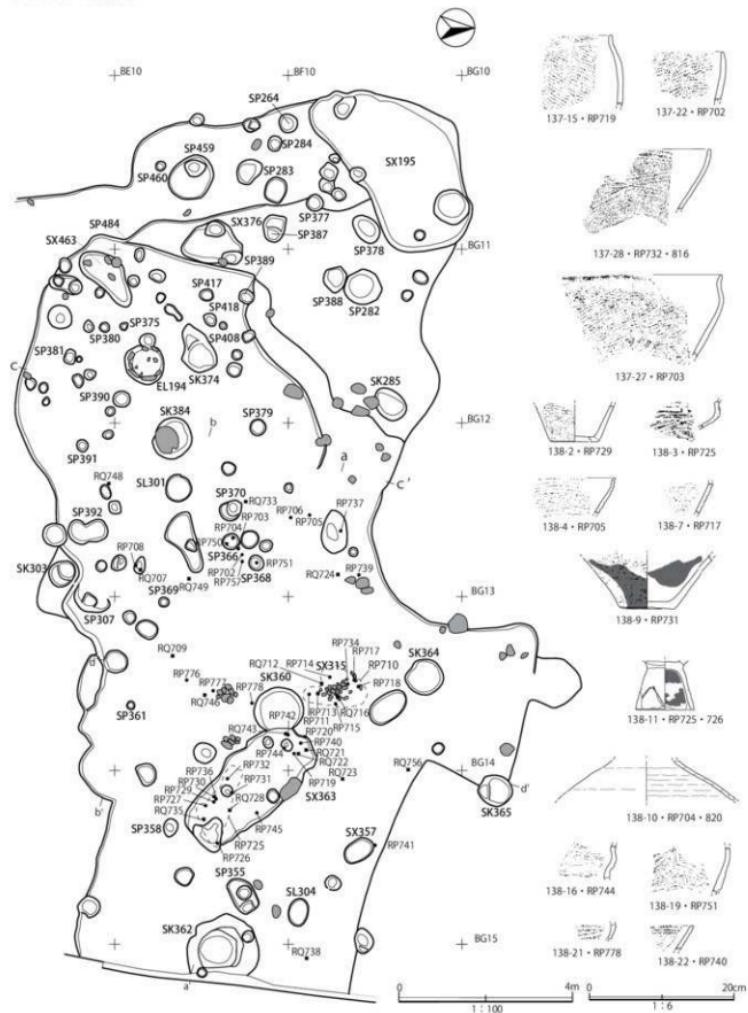
SF136F1b1-b2遺物分布図



第50図1区SF136F1b①・②遺物平面図

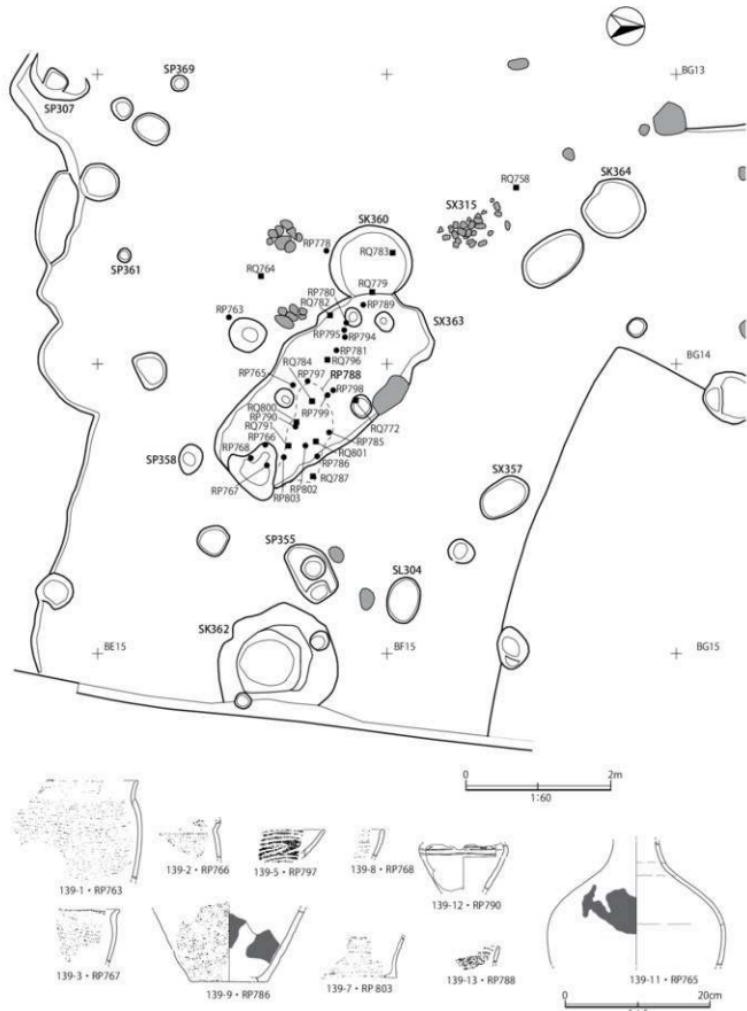
III 調査成果

SF136F1b3・b4遺物分布図



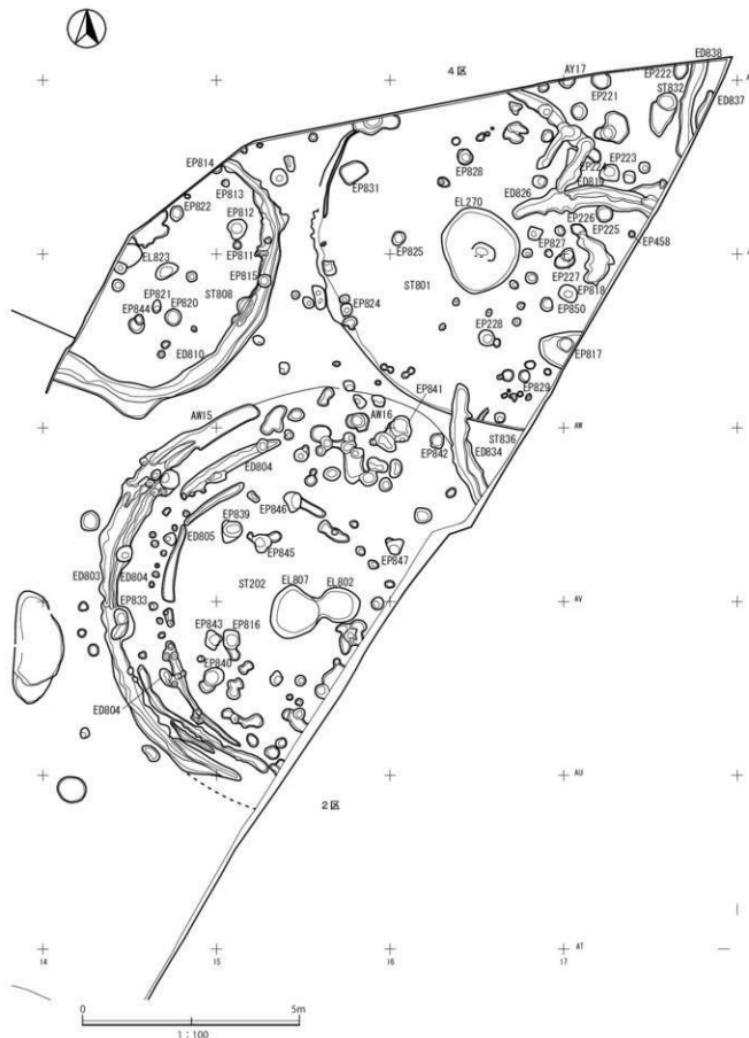
第51図1区 SF136F1b③・④遺物平面図

SF136F2遺物分布図

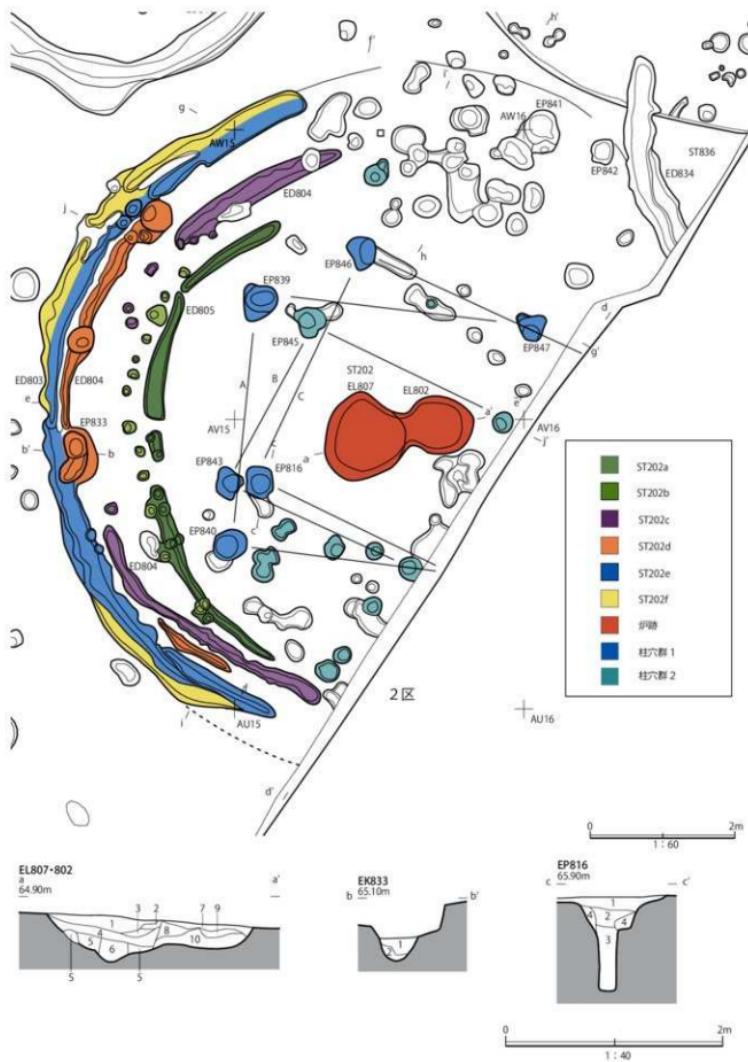


第52図1区 SF136F2 遺物平面図

III 調査成果



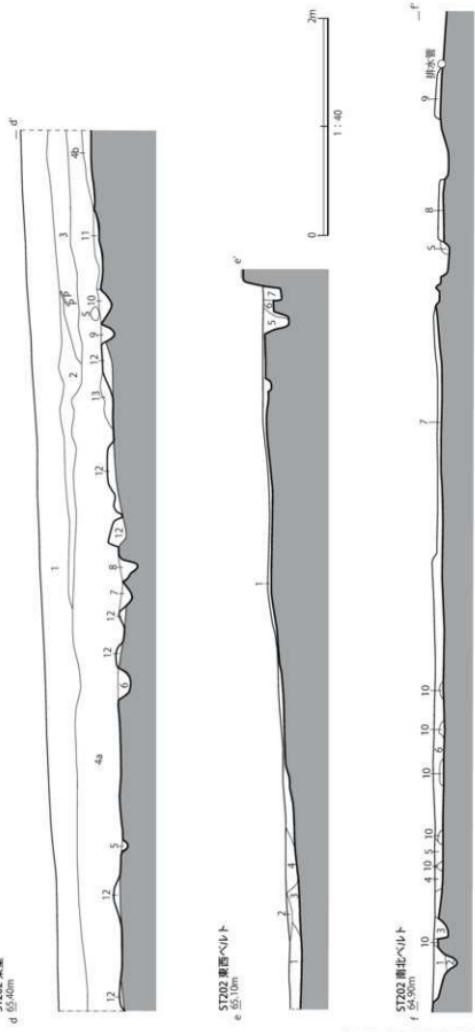
第53図2・4区住居群平面図



第54図 2区 ST202

EL802 - 807

1. 7.5mR3/4 細色シルト 粘性中、しゃりやや強、直徑 5 mm 領域の灰白色シルトブロックを含む
2. 7.5mR3/4 黄褐色シルト 粘性中、しゃりやや強、直徑 10 mm 領域の灰白色シルトブロックを含む
3. 10mR3/3 黄褐色シルト 粘性やや強め、直徑 5 mm 領域の灰白色シルトブロックを含む
4. 10mR3/3 黄褐色シルト 粘性やや強め、直徑 5 mm 領域の灰白色シルトブロックを含む
5. 10mR2/4 黄褐色シルト 粘性やや強め、直徑 5 mm 領域の灰白色シルトブロックを含む
6. 10mR2/3 黄褐色シルト 粘性やや強め、直徑 5 mm 領域の灰白色シルトブロックを含む
7. 7.5mR2/2 黑褐色シルト 粘性やや強め、直徑 5 mm 領域の灰白色シルトブロックを含む
8. 10mR2/1 黑褐色シルト 粘性中、3~5 mm 領域の(に)5~7 mm 領域の灰白色シルトブロックを含む
9. 10mR2/2 黑褐色シルト 粘性中、しゃりやや強、直徑 5 mm 領域の灰白色シルトブロックを含む
10. 前掲地層じシルト 粘性やや強、しゃり中、3~5 mm 領域の(に)5~7 mm 領域の灰白色シルトブロックを含む
11. 10mR2/1 黑褐色シルト 粘性やや強、しゃり中、直徑約 10mm の小礫を 3% 含む
12. 10mR3/3 前掲地層じシルト 粘性やや強、しゃり中、黑褐色シルトブロックを 30% 含む

ST202 東壁  
d 65.10m

第 55 図 2 区 ST202 断面図

**EPB16**

1. IOYR2/1 黒色シルト 粘性や弱い、しまりやや強、直径 5-10 mm のバミス粒を含む
2. IOYR2/2 黒褐色砂質じりシルト 粘性弱い、しまり中、直径 b 5 mm 程度のバミス粒を含む
3. IOYR2/2 黒褐色砂質じりシルト 粘性弱い、しまり中
4. IOYR2/2 黒褐色砂質じりシルト 粘性弱い、しまりやや強い、直径 5 mm 程度のバミス粒を含む

**ST202 東側断面**

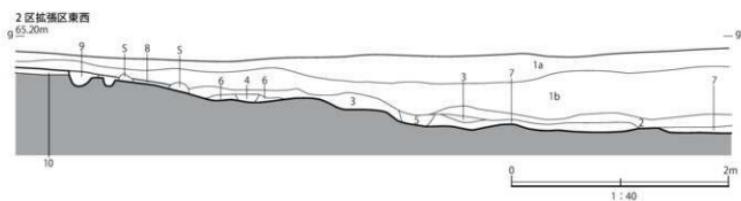
1. IOYR2/1 黒色砂質シルト 黒ボク（表土）
2. IOYR3/1 黒褐色砂質シルト 1 より粒子が細かく均一、砂粒混入が少ない
3. IOYR1.7/1 黑色砂質シルト 粒子が細かく均一
- 4a. IOYR1.7/1 黑色砂質シルト 上部小片。軽石や小片などを被覆含む（ST202 を覆う上層）
- 4b. IOYR1.7/1 黑色砂質シルト 黒ボク主体、地山由来の黑色砂礫の影響を受ける
5. IOYR2/2 黑褐色砂質シルト 黒ボク上
6. IOYR1.7/1 黑色砂質シルト 柱穴の覆土、均一な黒ボク上
7. IOYR1.7/1 黑色砂質シルト 柱穴の覆土、均一な黒ボク上
8. IOYR1.7/1 黑色砂質シルト 柱穴の覆土、均一な黒ボク上
9. IOYR1.7/1 黑色砂質シルト 1番目の削溝面上
10. IOYR1.7/1 黑色砂質シルト 3-4番目の削溝面上（ここから東側は地形傾斜の関係からか掘り込みがほとんど無くなる）
11. IOYR1.7/1 黑色砂質シルト 地面または地山の一部や床面に削れた地山黃褐色層の一部
12. IOYR2/3 黑褐色砂質シルト

**ST202 東西ペルト**

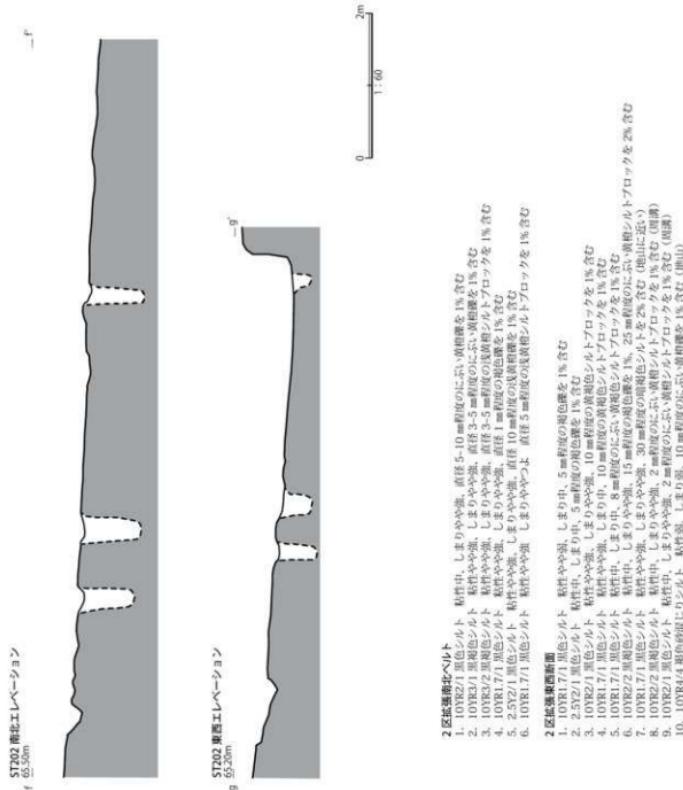
1. IOYR2/1 黒色シルト 粘性やや強、しまりやや強、直径 3-5 mm 程度の浅黄褐色シルトブロックを 1% 含む
2. 7.5VR2/1 黑色シルト 粘性やや強、しまりやや強、直径 2-3 mm 程度の浅黄褐色シルトブロックを 1% 含む
3. 7.5VR3/2 黑褐色シルト 粘性やや強、しまりやや強、直径 3 mm 程度の粗礫を 1% 含む
4. 7.5VR2/2 黑褐色シルト 粘性やや強、しまりやや強、直径 5-8 mm 程度の褐色シルトブロックを 1% 含む
5. IOYR2/1 黑色砂質じりシルト 粘性中、しまりやや強、直径 2-5 mm 程度の粗礫を 1% 含む
6. IOYR5/6 黄褐色砂質じりシルト 粘性弱、しまりやや強、直径 5 mm 程度の褐色れきを 1% 含む
7. 7.5VR2/2 黑褐色砂質じりシルト 粘性中、しまりやや強、直径 3-5 mm 程度の褐色シルトブロックを 1% 含む

**ST202 南北ペルト**

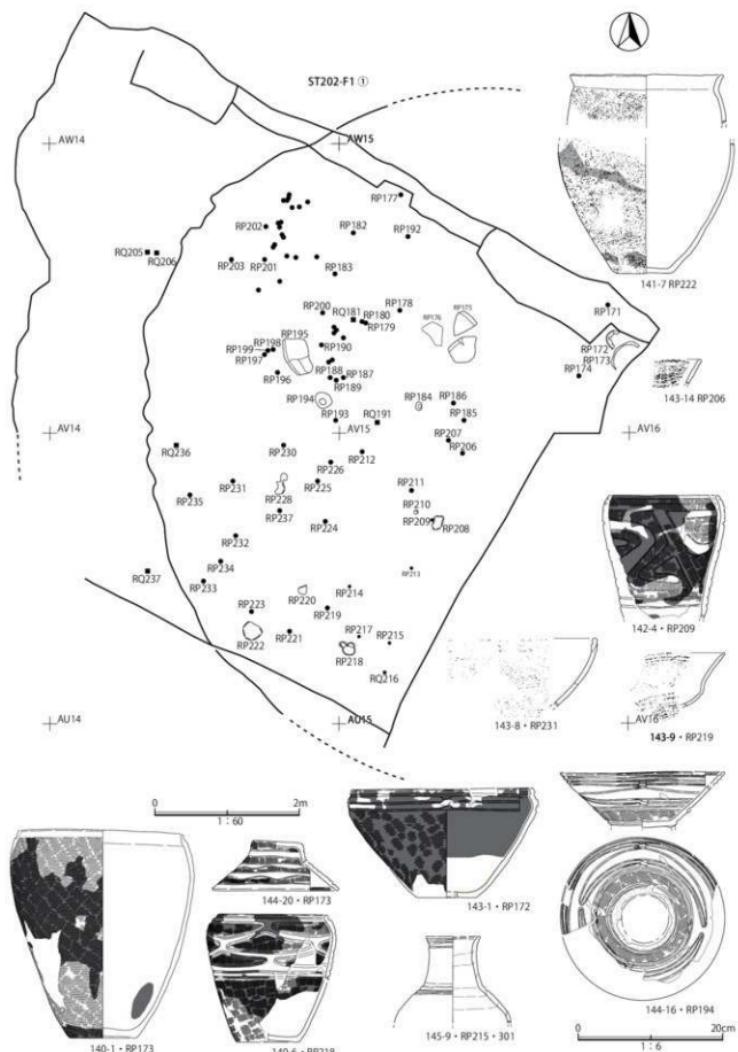
1. IOYR2/1 黒色シルト 粘性中、しまりやや強、直径 3-5 mm 程度の黄褐色シルトブロックを 1% 含む
2. IOYR3/1 黑褐色シルト 粘性中、しまりやや強、直径 3 mm 程度の黄褐色シルトブロックを 1% 含む
3. IOYR2/1 黑色シルト 粘性中、しまりやや強、直径 3 mm 程度の黄褐色シルトブロックを 1% 含む
4. IOYR2/1 黑色シルト 粘性中、しまりやや強、直径 1 mm 程度の黄褐色シルトブロックを 1% 含む
5. IOYR2/2 黑褐色シルト 粘性中、しまりやや強、直径 5-10 mm の褐色礫を 1% 含む
6. IOYR2/2 黑褐色砂質じりシルト 粘性中、しまりやや強、直径 2-10 mm 程度の黄褐色シルトブロックを 1% 含む
7. IOYR3/2 黑褐色砂質じりシルト 粘性中、しまり中、直径 2-10 mm 程度の黄褐色シルトブロックを 3% 含む
8. IOYR3/2 黑褐色砂質じりシルト 粘性強、直径 3 mm 程度の褐色礫を 1% 含む
9. IOYR2/1 黑色シルト 粘性やや強、しまりやや強、直径 1-5 mm 程度の浅黄褐色シルトブロックを 1% 含む
10. IOYR4/3 にぶい 黄褐色砂質じりシルト 粘性やや強、しまりやや強、直径 3-20 mm 程度の浅黄褐色シルトブロックを 5% 含む



第 56 図 2 区 ST202 断面図

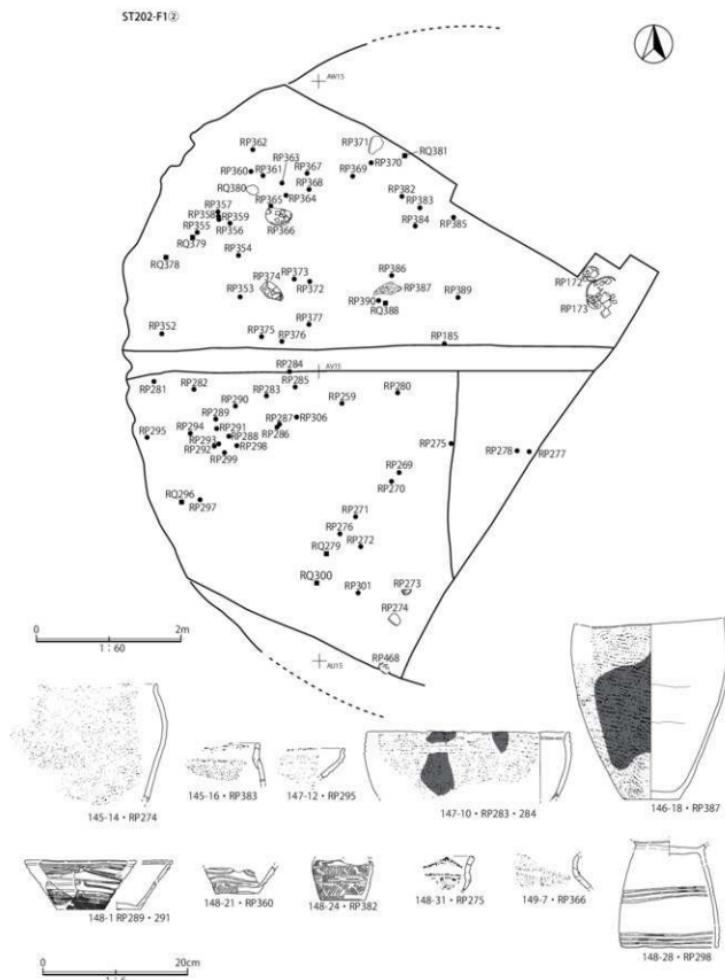


第 57 図 2 区 ST202 エレベーション

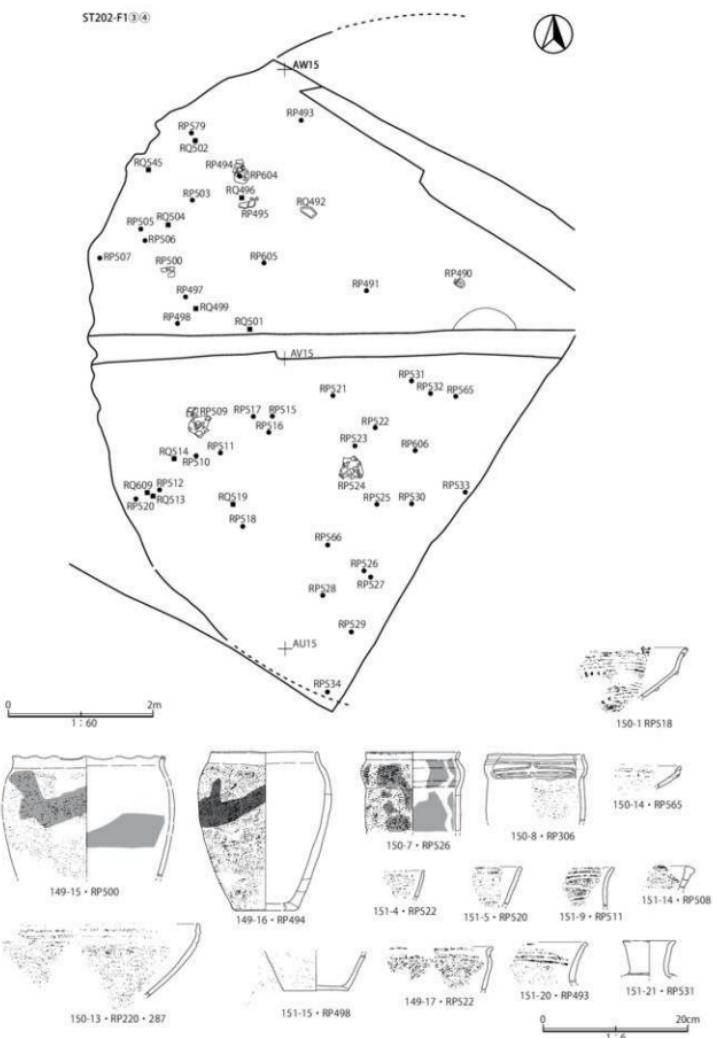


第58図2区 ST202F1①遺物分布図

III 調査成果

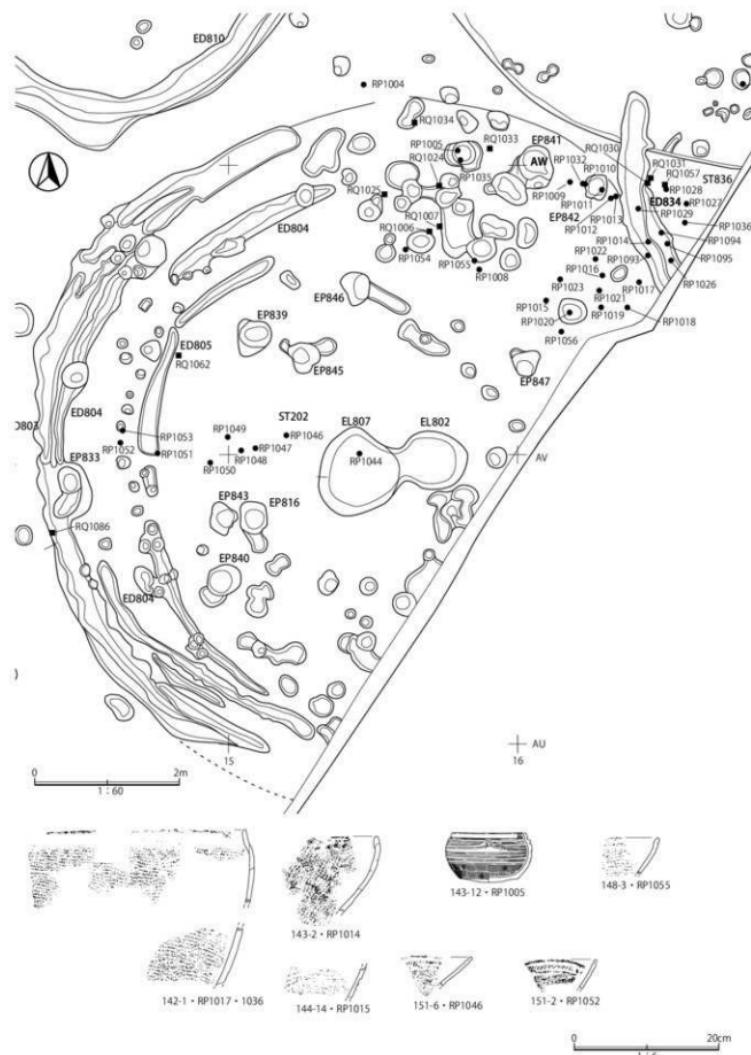


第 59 圖 2 区 ST202F1(2)遺物分布図

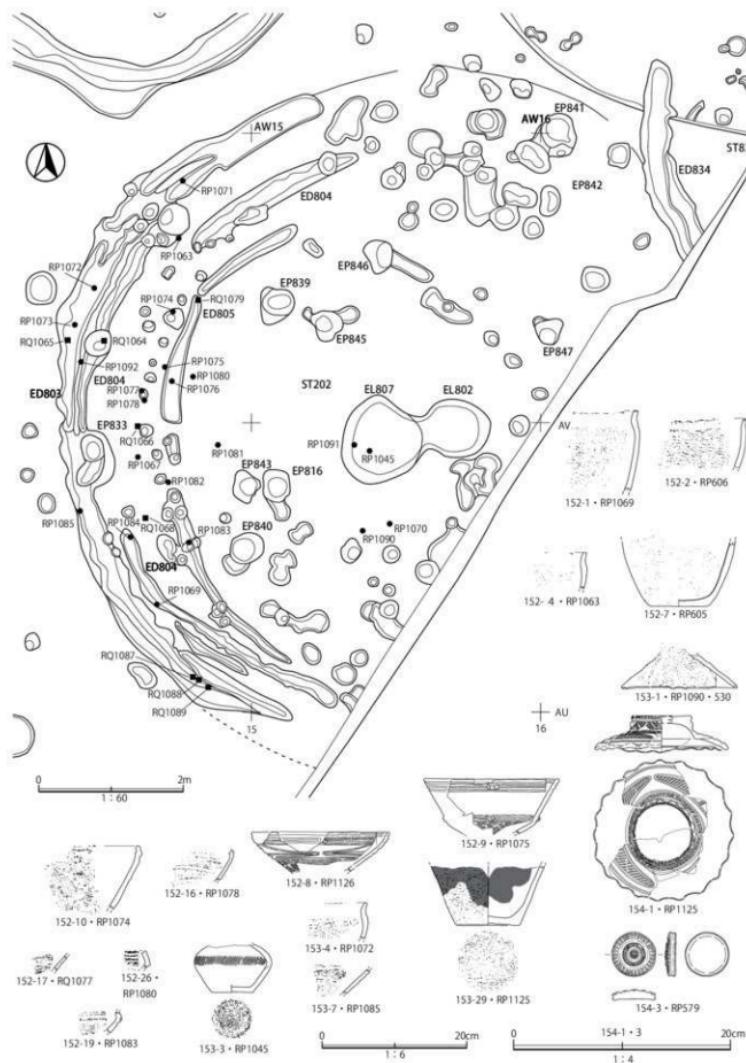


第60図 2区ST202F1 ③④遺物分布図

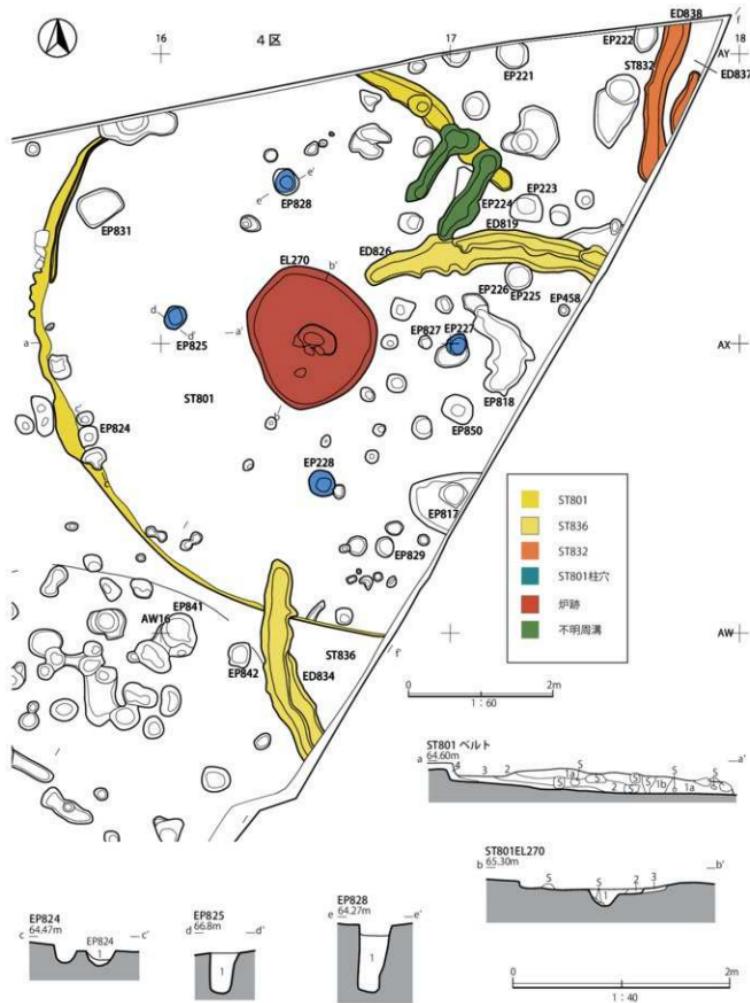
III 調査成果



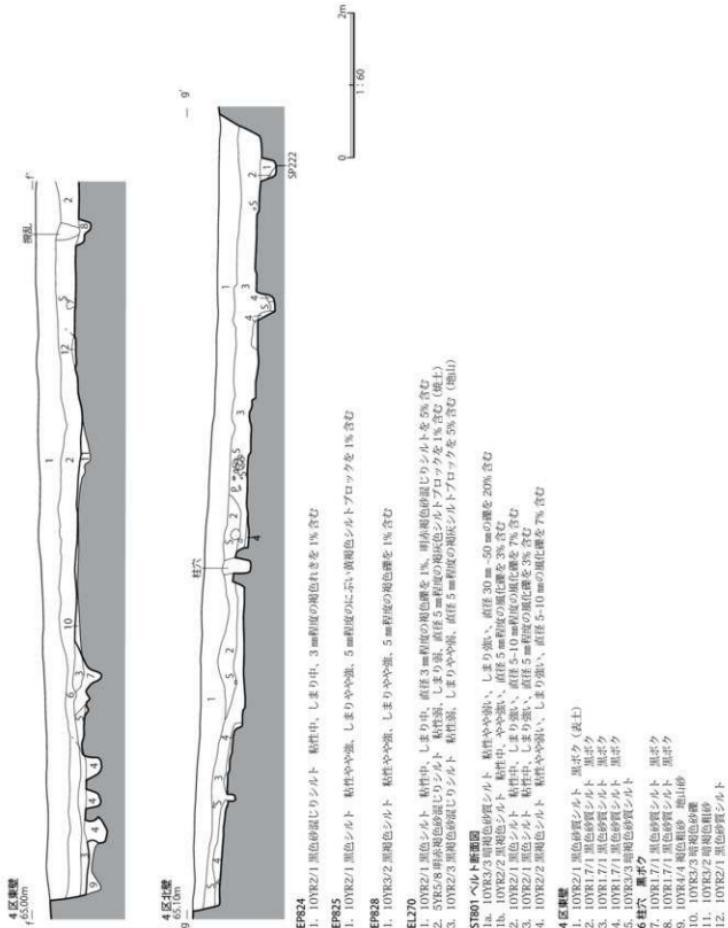
第61図 2次調査2区 ST202F1 遺物分布図



第62図 2区 ST202ED・EL 床面遺物分布図

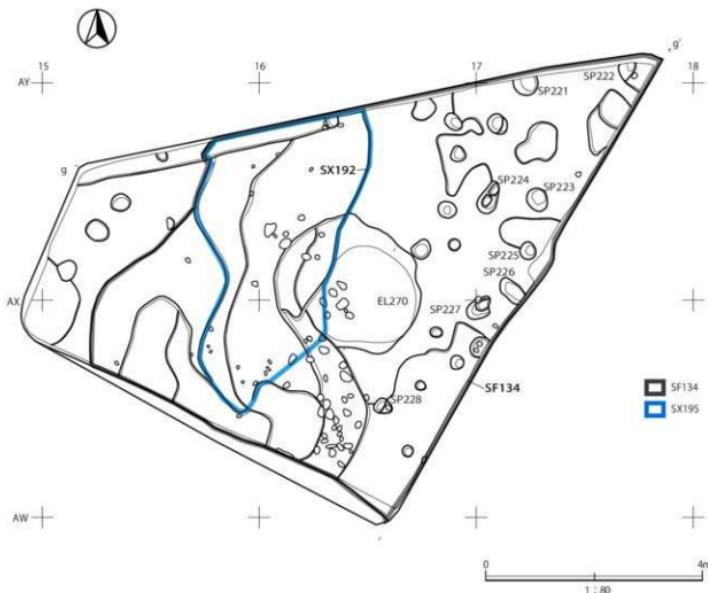


第63図 2区 ST801・836・832・EL270・EP825・824・828



第 64 図 4区調査区東壁断面図

III 調査成果



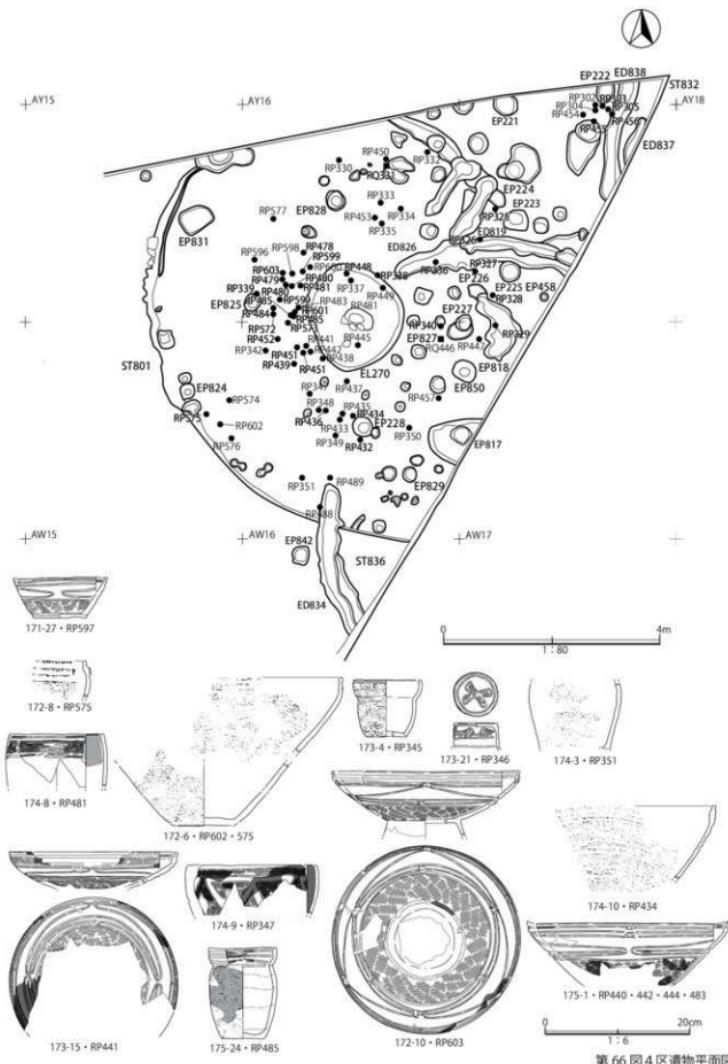
4区北壁

1. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性弱、しまり強、地山粒を3%含む
2. 10YR4/6 黒褐色細砂 粘性なし、しまり強、10YR2/1 黒色シルトブロックを25%含む
3. 10YR2/1 黒色シルト 粘性弱、しまり中、地山粒を3%、直径1-3mm程度のハミス粒を1%含む
4. 10YR6/8 明黄褐色シルト 粘性弱、しまり弱(地山)

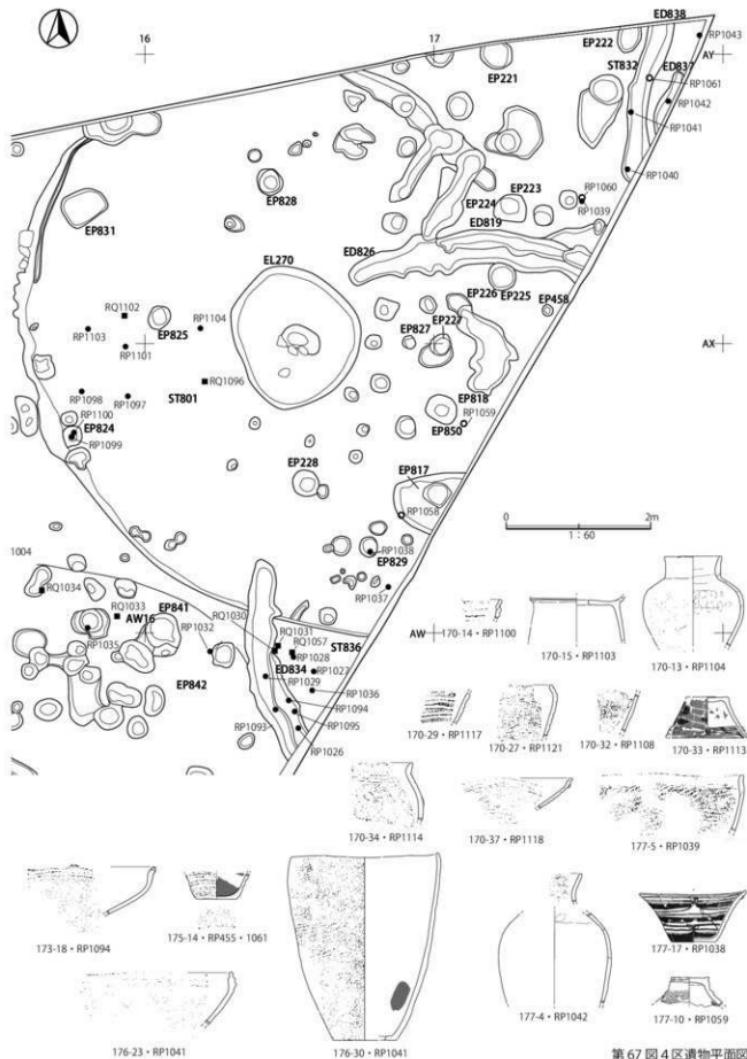
SP222

1. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性弱、しまり中
2. 10YR6/8 明黄褐色細砂 粘性なし、しまり強(地山)

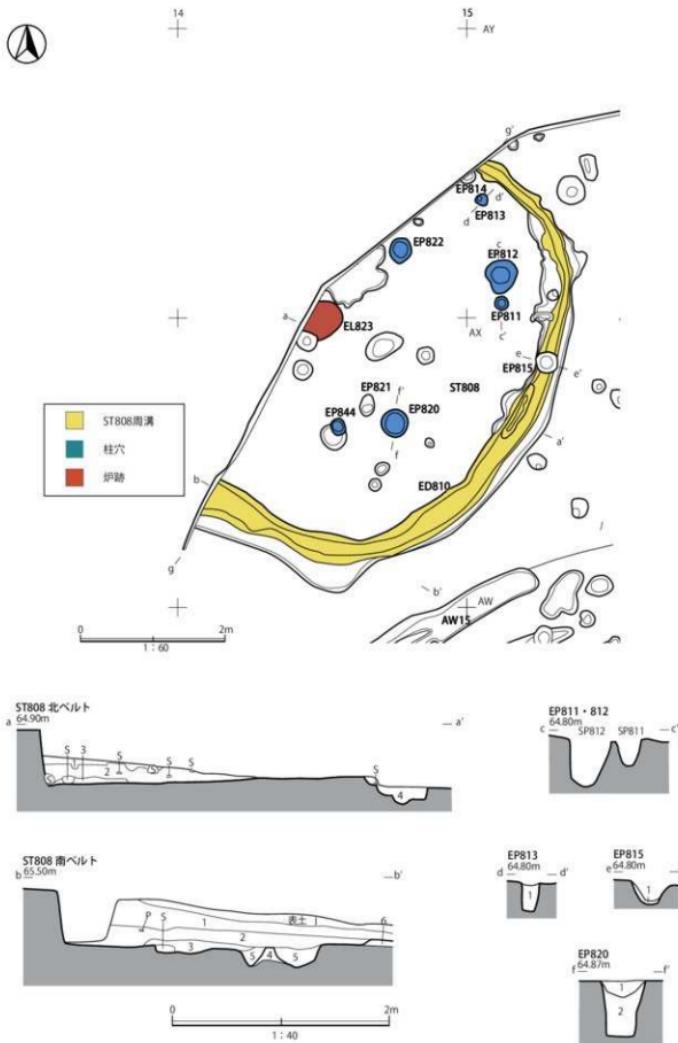
第65図 4区遺構検出平面図



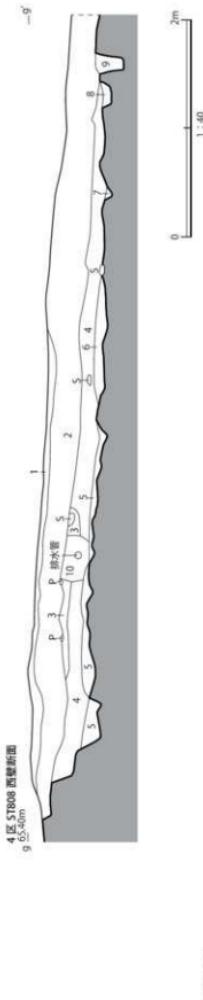
第 66 図 4 区遺物平面図



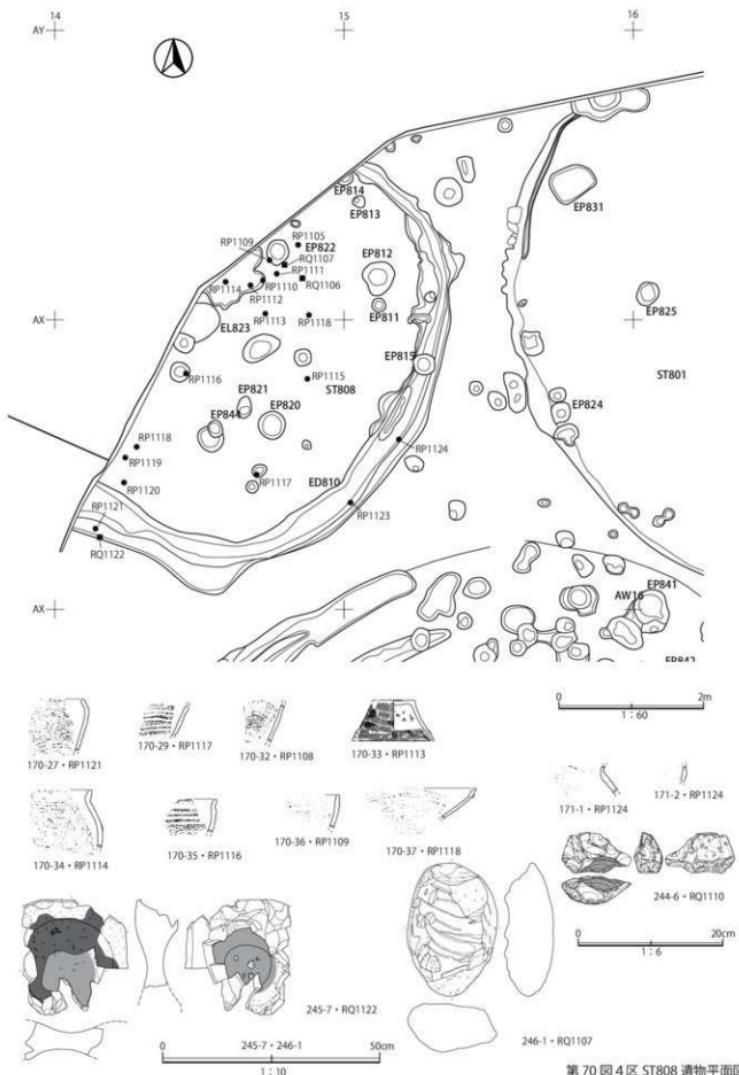
第67図4区遺物平面図



第68図4区 ST808

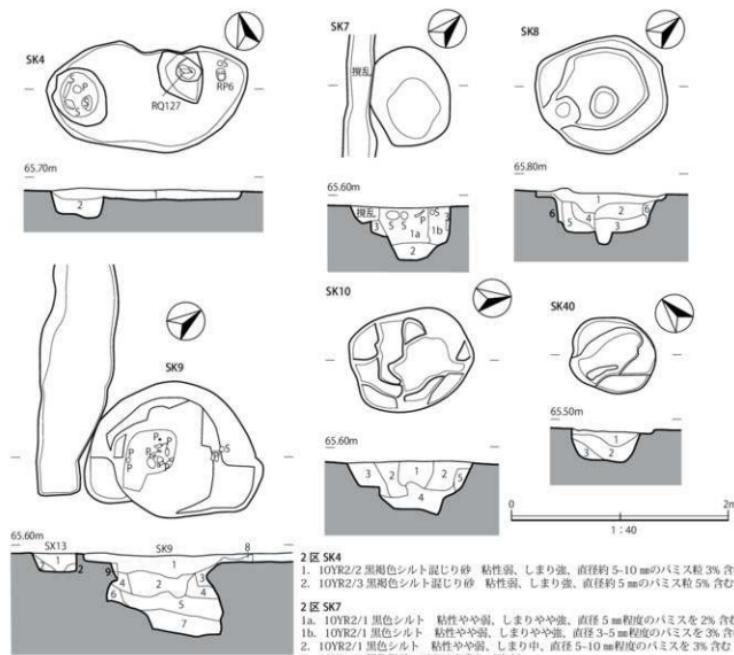


第 69 図 4 区 ST808 断面図



第70図4区 ST808 遺物平面図

### III 調査成果



#### 2区 SK8

1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強、しまりやや強。直徑5-10mm程度のバミス粒を2%含む
2. 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや強、しまりやや強。直徑5mm程度のバミス粒を3%含む
3. 10YR2/3 黒色シルト 粘性やや強、しまりやや強。直徑5-10mm程度のバミス粒を3%含む
4. 10YR2/3 黑褐色粗砂 粘性やや強、しまりやや強。直徑5-10mm程度のバミス粒を3%含む
5. 10YR2/2 黒色シルト混じり砂 粘性弱、しまり中。直徑10-20mm程度の小礫を5%、地山由来の黒褐色砂ブロックを10%含む
6. 10YR2/2 シルト混じり砂 粘性弱、しまり中。褐色砂バミス粒直徑10-30mm程度を3%含む

#### 2区 SK9

1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱、しまりやや強。直徑3-5mm程度のバミス粒を2%含む
2. 10YR1.7/1 黒色シルト 粘性やや強、しまりやや強。直徑3-5mm程度のバミス粒を2%含む
3. 10YR2/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまりやや強。直徑5-10mm程度のバミス粒を2%含む
4. 10YR2/1 黑色シルト 粘性弱、しまりやや強。直徑3mm程度のバミス粒を2%含む
5. 10YR2/1 黑色シルト 粘性やや弱、しまりやや強。直徑20-30mm程度の黒褐色砂ブロックを5%含む
6. 10YR2/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまりやや強。直徑10-20mmの黒褐色砂ブロックを10%含む
7. 黑褐色の混じりシルト 粘性やや強、しまりやや強。直徑10-30mmの黒褐色砂ブロックを10%含む
8. 10YR4/3 に赤い黄褐色粗砂 粘性弱、しまり中。バミス粒を含む直徑10-20mmの黒褐色シルトブロックを10%含む
9. 10YR4/3 に赤い黄褐色粗砂 粘性弱、しまり中。バミス粒を含む（地山）

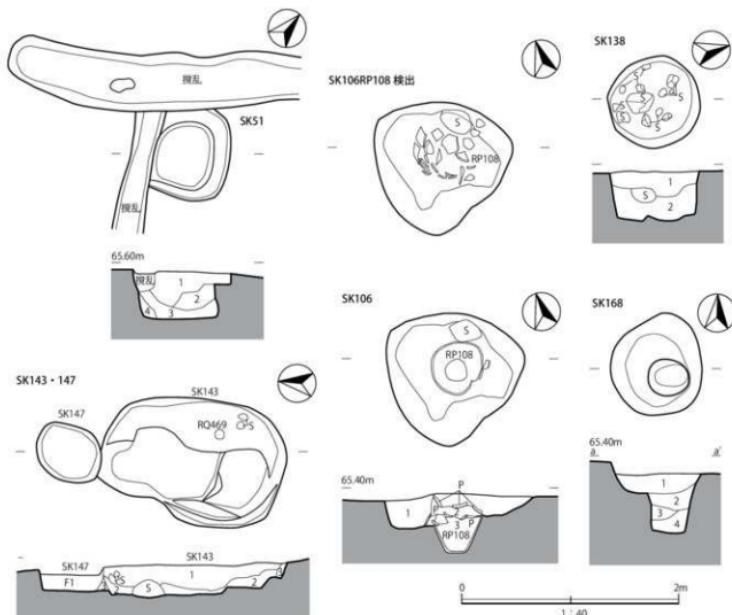
#### 2区 SK13

1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性弱、しまりやや強。直徑5mm程度のバミス粒を3%含む
2. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性やや弱、しまりやや強。直徑5mm程度のバミス粒を5%含む

#### 2区 SK10

1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性弱、しまりやや強。直徑5mm程度のバミス粒を3%含む
2. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性やや弱、しまりやや強。直徑5-10mm程度のバミス粒を3%、直徑10-20mm程度の10YR4/4 黒色砂ブロックを5%含む
3. 10YR2/3 黑褐色シルト 粘性弱、しまりやや強。直徑10-30mmの10YR4/4 黑色砂ブロックを10%含む
4. 10YR2/3 黑褐色砂 粘性弱、しまりやや強。直徑10-30mm程度の黒褐色シルトブロックを10%含む
5. 10YR4/4 黑褐色粗砂 しまり強

第71図 2区 SK4・7・8・9・10・40



## 2 区 SK40

1. IOYR2/1 黒褐色シルト 粘性弱、しまりやや弱、直径 5-10 mm程度のバミス粒を 2% 含む
2. IOYR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱、しまりやや強、直径 5-10 mm程度のバミス粒を 5% 含む
3. IOYR5/4 にぶい 黄褐色砂 (地山)

## 2 区 SK51

1. IOYR2/1 黒褐色シルト 粘性弱、しまり強、地山ブロックを複数に 5% 含む
2. IOYR2/1 黑褐色シルト 粘性弱、しまり強、地山ブロックをブロック状に 10% 含む
3. IOYR17/1 黑褐色シルト 粘性中、しまり強、地山ブロックを斑状に 3% 含む
4. IOYR6/6 明黄褐色細砂 粘性なし、しまり強 (地山)

## 2 区 SK106

1. IOYR2/2 黑褐色シルト 粘性弱、しまりやや弱、半褐色粗砂を 3% 含む
2. IOYR2/1 黑褐色シルト 粘性中、しまりやや弱、半褐色粗砂を 1% 含む

## 2 区 SK138

1. IOYR2/1 黑褐色シルト 粘性弱、しまりやや強、直径 2-5 mm程度のバミス粒を 2% 含む
2. IOYR2/2 黑褐色砂質シルト 粘性弱、しまり強、直径 5-20 mm程度のバミス粒を 3%、地山由来で直径 20-30 mm程度の IOYR5/6 黄褐色砂質混じりシルトブロックを 5% 含む

## 2 区 SK143

1. IOYR2/1 黑褐色シルト 粘性やや弱、しまりやや強、直径 5-30 mm程度のバミス粒を 3%、直径 5 mm程度の炭化物を微量含む
2. IOYR2/1 黑褐色砂質シルト 粘性弱、しまり強、直径 5-20 mm程度のバミス粒を 3%、地山由来で直径 20-30 mm程度の IOYR5/6 黄褐色砂質混じりシルトブロックを 5% 含む

## 2 区 SK147

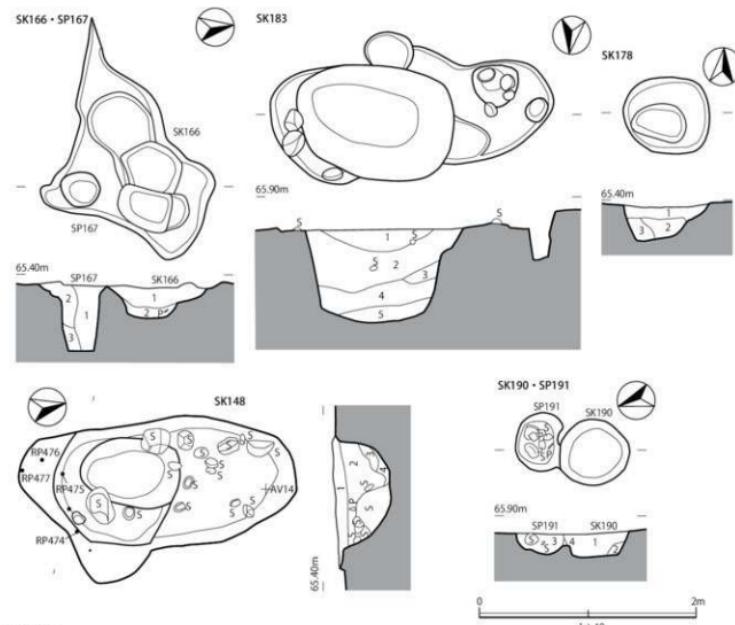
1. IOYR3/1 黑褐色シルト 粘性中、しまりやや強、直径 5-10 mmのバミス粒を 3% 含む、現代の擾乱と思われる

## 2 区 SK168

1. IOYR2/1 黑褐色シルト 粘性弱、しまり弱、地山粒を 7% 含む
2. IOYR3/1 黑褐色砂質シルト 粘性弱、しまり中、直径 1-3 mm程度のバミス粒を 2% 含む
3. IOYR6/6 明黄褐色細砂 粘性なし、しまり強
4. IOYR2/2 黑褐色砂質シルト 粘性弱、しまり中

第 72 図 2 区 SK51・106・138・143・147・168

### III 調査成果



#### 2区 SK148

1. SF133 打上断層
2. IOYR2/1 黒褐色シルト混じり砂 岩性弱、しまり強、直徑 5-10 mm 程度のバミス粒を 5% 含む
3. IOYR2/2 黒褐色シルト混じり砂 岩性弱、しまりやや強、直徑 5-10 mm 程度のバミス粒を 10% 含む
4. IOYR4/4 にぶい黄褐色、しまりやや強、暗褐色シルトブロックを 20% 含む

#### 2区 SK166

1. IOYR2/2 黒褐色シルト混じり砂 岩性弱、しまりやや強、直徑 5-10 mm 程度のバミス粒を含む
2. IOYR3/3 黒褐色シルト混じり砂 岩性弱、しまりやや強、地山の小塊、細砂を 10% 含む

#### 2区 SP197

1. IOYR2/2 黒褐色シルト混じり砂 岩性弱、しまり強、直徑 5 mm 程度のバミス粒を 1% 含む
2. IOYR2/3 黑褐色シルト混じり砂 岩性弱、しまり強、地山山稜の粗砂を 10% 含む
3. IOYR4/3 にぶい黄褐色砂、しまりやや強、直徑 10-30 mm 程度の黒褐色シルトブロックを 10% 含む

#### 2区 SK183

1. IOYR2/1 黒色シルト 岩性弱、しまり中、地山粒を 7%、直徑 1-3 mm 程度のバミスを 2% 含む
2. IOYR2/1 黒色シルト 岩性弱、しまり強、地山粒を 15%、直徑 1-5 mm 程度のバミス粒を 5% 含む
3. IOYR2/2 黒色シルト 岩性弱、しまり中、直徑 1-3 mm 程度のバミス粒を 3% 含む
4. IOYR1.7/1 黒色シルト 岩性弱、しまり中、地山ブロックを 10% 含む
5. IOYR2/1 黒色シルト 岩性弱、しまり中、地山粒を 7%、直徑 1-3 mm 程度のバミスを 1% 含む

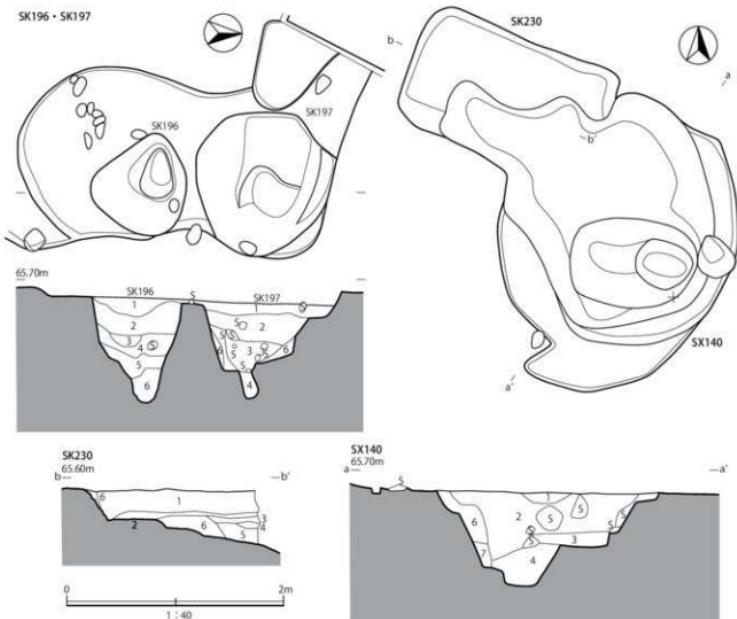
#### 2区 SK178

1. IOYR2/2 黒褐色シルト混じり砂 岩性弱、しまり中、直徑 5-10 mm 程度のバミス粒を 2% 含む
2. IOYR3/1 黑褐色シルト 岩性弱、しまり強、直徑 3-5 mm 程度のバミス粒を 3% 含む
3. IOYR2/1 黑色シルト 岩性弱、しまり中、地山粒を 5% 含む

#### 2区 SK190 + SP191

1. IOYR2/1 黑色シルト 岩性弱、しまり中、7.5YR5/8 明褐色シルトをブロック状に 7%、直徑 1-2 mm 程度のバミス粒を 1% 含む
2. IOYR3/1 黑褐色シルト 岩性弱、しまり強、地山ブロックを 10%、直徑 1 mm 程度のバミス粒を 1% 含む
3. IOYR3/1 黑褐色シルト 岩性弱、しまり中、直徑 1-3 mm 程度のバミス粒を 1% 含む
4. IOYR6/8 明褐色細砂 岩性なし、しまり強（地1）

第73図 2区 SK166・SP167・SK183・178・148・190・SP191

**2区 SK196**

1. IOYR2/1 黒色シルト 粘性弱、しまり中、地山ブロックを 3%、直径 1~5mm程度のバミス粒を 2% 含む
2. IOYR2/1 黒色シルト 粘性弱、しまり中、地山ブロックを 10%、直径 1~3mm程度のバミス粒を 3% 含む
3. IOYR2/2 黒色シルト 粘性弱、しまり強、地山ブロックを 5% 含む
4. IOYR2/2 黒色シルト 粘性弱、しまり中、地山ブロックを 15%、直径 1~3mm程度のバミス粒を 1% 含む
5. IOYR1/7/1 黒色シルト 粘性弱、しまり中、地山ブロックを 5%、直径 1~3mm程度のバミス粒を 1% 含む
6. IOYR7/6/1 黄褐色細緻 粘性なし、しまり強（地山）

**2区 SK197**

1. SK196 と同様
2. SK196 と同様
3. IOYR2/1 黒色シルト 粘性弱、しまり強、地山ブロックを 2%、直径 1~2mm程度のバミス粒を 1% 含む
4. IOYR1/7/1 黑色シルト 粘性弱、しまり中
5. IOYR3/1 黄褐色シルト 粘性弱、しまり強、地山粒を 3% 含む
6. SK196 と同様（地山）

**2区 SK230**

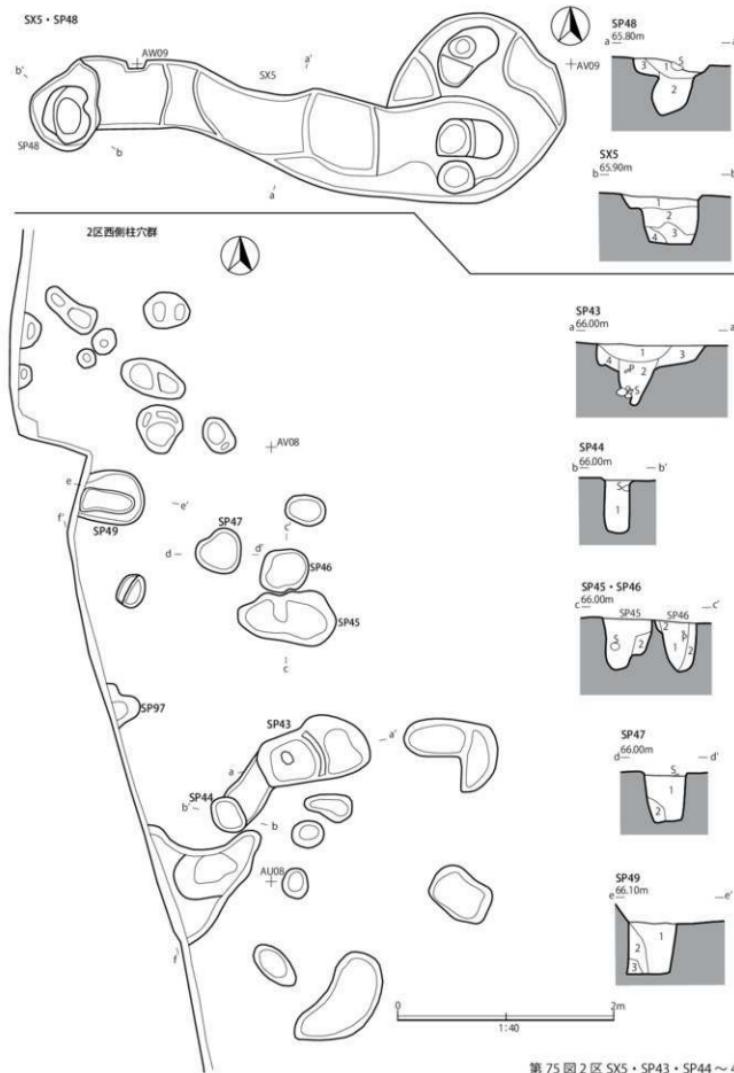
1. IOYR2/1 黒色シルト 粘性弱、しまり中、地山粒を 2%、直径 1~2mm程度のバミス粒を 1% 含む
2. IOYR2/1 黑色シルト 粘性弱、しまり中、IOYR2/1 黑色シルトを 10% 含む
3. IOYR2/1 黑色シルト 粘性弱、しまり中、地山粒を 7%、直径 1~10mm程度のバミス粒を 1% 含む
4. IOYR7/8 黄褐色細緻 粘性なし、しまり中、IOYR2/1 黑色シルトを ブロック状に 5% 含む
5. IOYR2/1 黑色シルト 粘性弱、しまり中、地山ブロックを 10%、直径 1mm程度のバミス粒を 1% 含む
6. IOYR6/2 明黄褐色細緻 粘性なし、しまり強（地山）

**2区 SX140**

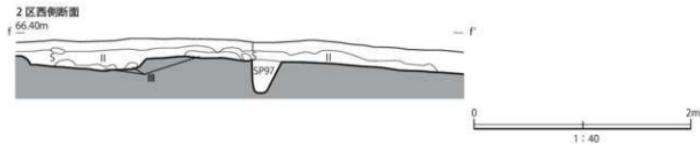
1. IOYR3/3 喻褐色シルト 粘性弱、しまり強、直径 10~20mmの角礫を 1% 含む
2. IOYR2/1 黑色シルト 粘性弱、しまり強、直径 5~10mmのバミス粒を 3% 含む
3. IOYR2/1 黑色砂緻じシリト 粘性弱、しまり強、直径 5~10mmのバミス粒を 3% 含む
4. IOYR2/2 黄褐色シルト混じり砂 粘性強、直径 20~50mm程度の角礫、地山由来で直径 10~30mmの暗褐色砂ブロックを 5% 含む
5. IOYR2/2 黄褐色砂緻じシリト 粘性弱、しまりや強、直径 5~10mm程度のバミス粒を 3% 含む
6. 5 と同様
7. IOYR3/3 喻褐色砂 しまり強、黒色シルトブロックを 30% 含む

第 74 図 2区 SK196・197・230・SX140

III 調査成果



第75図2区 SX5・SP43・SP44～49

**2区 SX5**

1. IOYR2/2 黒褐色砂混じりシルト 粘性弱、しまりやや強。直徑5mm程度のバミス粒を3%含む
2. IOYR2/3 黒褐色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまりやや強。直徑5mm程度のバミス粒を5%含む
3. IOYR3/2 黒褐色砂 しまり強、黒色シルトブロックを少量含む
4. IOYR5/6 黄褐色砂 しまり強

**2区 SP43**

1. IOYR2/1 黒褐色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまり強。直徑5mm程度のバミス粒を3%含む
2. IOYR2/1 黒褐色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまりやや強。直徑3-5mm程度のバミス粒を2%含む
3. IOYR2/3 黑褐色シルト混じり砂 しまり強、直徑6-10mm程度のバミス粒を5%含む
4. IOYR2/1 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまりやや強。直徑3-5mm程度のバミス粒を1%含む

**2区 SP44**

1. IOYR2/1 黒褐色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまりやや強。直徑5mm程度の炭化物を微量。直徑3-5mm程度のバミス粒を3%含む

**2区 SP45**

1. IOYR2/1 黒褐色砂混じりシルト 直徑5mm程度のバミス粒を3%含む
2. IOYR2/2 黑褐色シルト混じり砂 IOYR4/4 黄褐色砂ブロック直徑3-5cmを10%含む

**2区 SP46**

1. IOYR2/1 黑褐色シルト混じり砂 直徑5-10mm程度のバミス粒を3%含む
2. IOYR2/3 黑褐色砂 直徑3-5mm程度のバミス粒を3%含む

**2区 SP47**

1. IOYR2/2 黑褐色シルト混じり砂 しまりやや強。直徑10cm程度の角礫、直徑5-20mm程度のバミス粒を2%含む
2. IOYR2/2 黑褐色砂 しまりやや強

**2区 SP48**

1. IOYR2/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまりやや強。直徑3-5mmのバミス粒を2%含む
2. IOYR2/1 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまり強。直徑3-5mmのバミス粒を2%含む
3. IOYR3/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱。しまり強。直徑50-100mm程度の明黄褐色砂ブロックを60%含む

**2区 SP49**

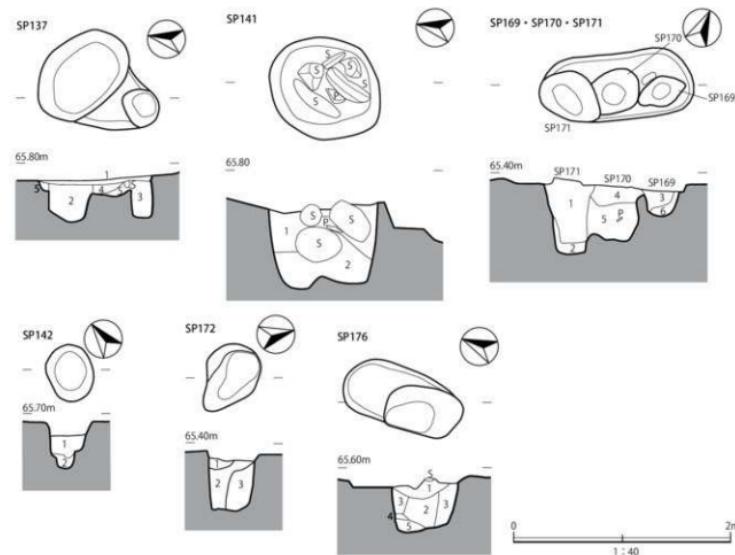
1. IOYR2/2 黑褐色シルト混じり砂 粘性やや弱、しまりやや強。直徑5mm前後のバミス粒を2%含む
2. IOYR2/3 黑褐色シルト混じり砂 粘性弱、しまりやや強。地山由来の10YR5/4に似る黄褐色砂ブロックを5%含む
3. IOYR2/3 黑褐色砂混じりシルト 粘性弱、しまりやや強。地山由来の10YR5/4に似る黄褐色砂ブロックを10%含む

**2区西側断面**

- I. IOYR2/1 黑褐色シルト 粘性弱、しまり強。直徑5mm程度の小礫を3%含む
- II. IOYR3/1 黑褐色シルト 粘性弱、しまり強。直徑10-20mm程度の礫を5%含む
- III. IOYR6/6 明黄褐色砂層 粘性なし、しまり強

第76図 2区西側断面図

### III 調査成果



#### 2区 SP137

1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性弱、しまり中、地山ブロックを斑状に 2% 含む
2. 10YR2/1 黒色シルト 粘性弱、しまり強、地山ブロックをブロック状に 10% 含む（柱穴）
3. 10YR3/1 黒色シルト 粘性弱、しまりやや弱（柱穴）
4. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性弱、しまり中
5. 10YR5/6 黄褐色細砂 粘性なし、しまり強（地山）

#### 2区 SP141

1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱、しまり中、直径 10~30 mm の 10YR3/2 黑褐色砂ブロックを 10% 含む
2. 10YR2/1 黑褐色混じりシルト 粘性やや弱、しまり中、直径 100~300 mm の大粒の礫が入る

#### 2区 SP142

1. 10YR2/1 黒色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまりやや強
2. 10YR2/1 黑褐色混じりシルト 地山由来のぶい黄褐色砂ブロックを 10% 含む

#### 2区 SP169 + 170 + 171

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性弱、しまり中、直径 1~2 mm 程度のバミス粒を 1% 含む
2. 10YR2/2 黑褐色質シルト 粘性弱、しまり中
3. 10YR2/2 黑褐色質シルト 粘性弱、しまり中
4. 10YR2/2 黒色シルト 粘性弱、しまり中
5. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性弱、しまり強、地山ブロックを 10% 含む
6. 10YR6/6 明黄褐色細砂 粘性弱、しまり強（地山）

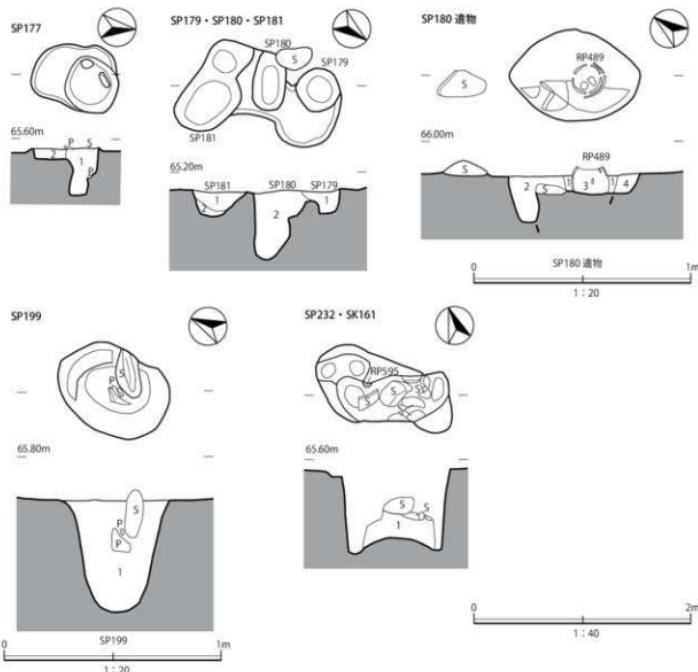
#### 2区 SP172

1. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性弱、しまり弱、直径 1~3 mm 程度のバミス粒を 1% 含む
2. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性弱、しまり中、直径 1~2 mm 程度のバミス粒を 2%、地山粒を 1% 含む
3. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性弱、しまり中、地山ブロックを 20%、直径 1~5 mm 程度のバミス粒を 2% 含む
4. 10YR3/3 黑褐色砂質シルト 粘性弱、しまり強、地山ブロックを 10% 含む
5. 10YR6/6 明黄褐色細砂 粘性なし、しまり強（地山）

#### 2区 SP176

1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性弱、しまり弱、直径 1~3 mm 程度のバミス粒を 1% 含む
2. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性弱、しまり中、直径 1~2 mm 程度のバミス粒を 2%、地山粒を 1% 含む
3. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性弱、しまり中、地山ブロックを 20%、直径 1~5 mm 程度のバミス粒を 2% 含む
4. 10YR3/3 黑褐色砂質シルト 粘性弱、しまり強、地山ブロックを 10% 含む
5. 10YR6/6 明黄褐色細砂 粘性なし、しまり強（地山）

第 77 図 2 区 SP137・141・142・169～172・176

**2区 SP177**

1. 10YR2/2 黒褐色シルト混じり砂 粘性やや弱、しまり強。直径 10~20 mm程度のバミス粒を 5% 含む
2. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性中、しまり強、直径 10~30 mm程度のバミス粒を 5% 含む

**2区 SP179・180**

1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性弱、しまり強。地山ブロックを 5% 含む
2. 10YR3/1 黑褐色シルト 粘性弱、しまり中。地山粒を 7%、直径 1~3 mm程度のバミス粒を 2% 含む

**2区 SP181**

1. 10YR3/1 黑褐色シルト 粘性弱、しまり中。直径 1~5 mm程度のバミス粒を 3% 含む
2. 10YR6/6 明黄褐色細砂 しまり強。地山

**2区 SP180 遺物**

1. 10YR2/2 黒褐色シルト混じり砂 粘性やや弱、しまりやや強。直径 5~10 mmのバミス粒を 3% 含む
2. 10YR2/1 黑色シルト 粘性やや弱、しまり強い。直径 5~10 mm程度のバミス粒を 3% 含む
3. 10YR2/2 黑褐色シルト混じり砂 粘性弱、しまりやや弱。直径 5 mm程度のバミス粒を 3% 含む
4. 10YR3/4 黑褐色砂 しまり強、暗褐色シルトブロックを 5% 含む

**2区 SP181**

1. 10YR3/1 黑褐色シルト 粘性弱、しまり中。直径 1~5 mm程度のバミス粒を 3% 含む
2. 10YR6/6 明黄褐色細砂 粘性なし、しまり強（地山）

**2区 SP199**

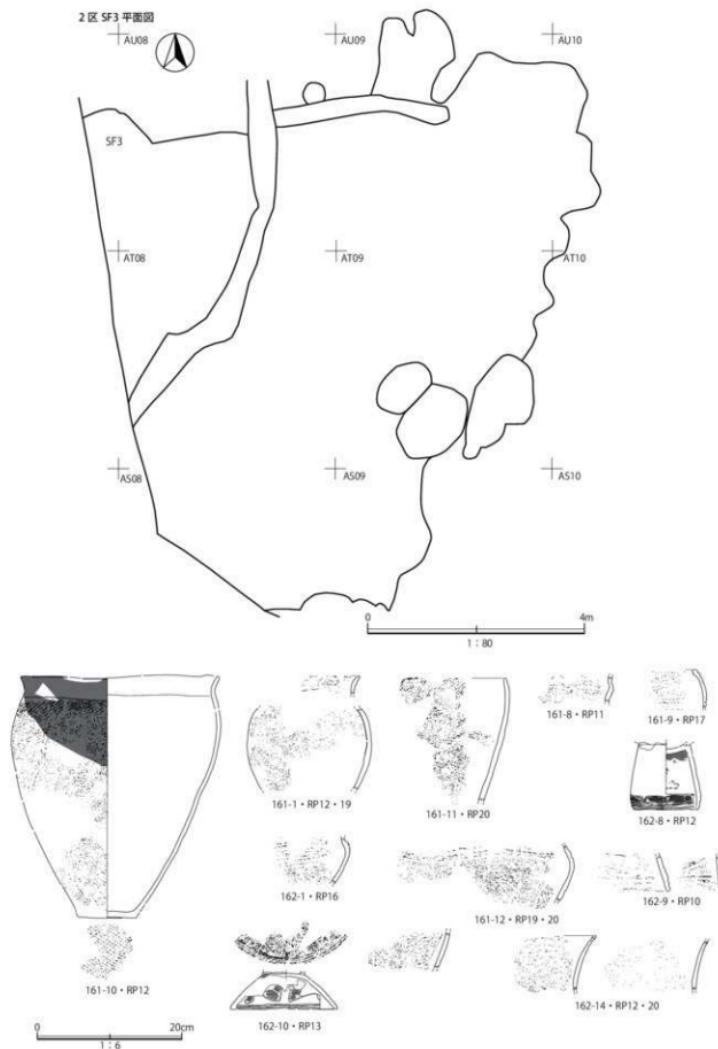
1. 10YR2/1 黑色シルト 粘性弱、しまり強。地山ブロックを 10% 含む

**2区 SK161**

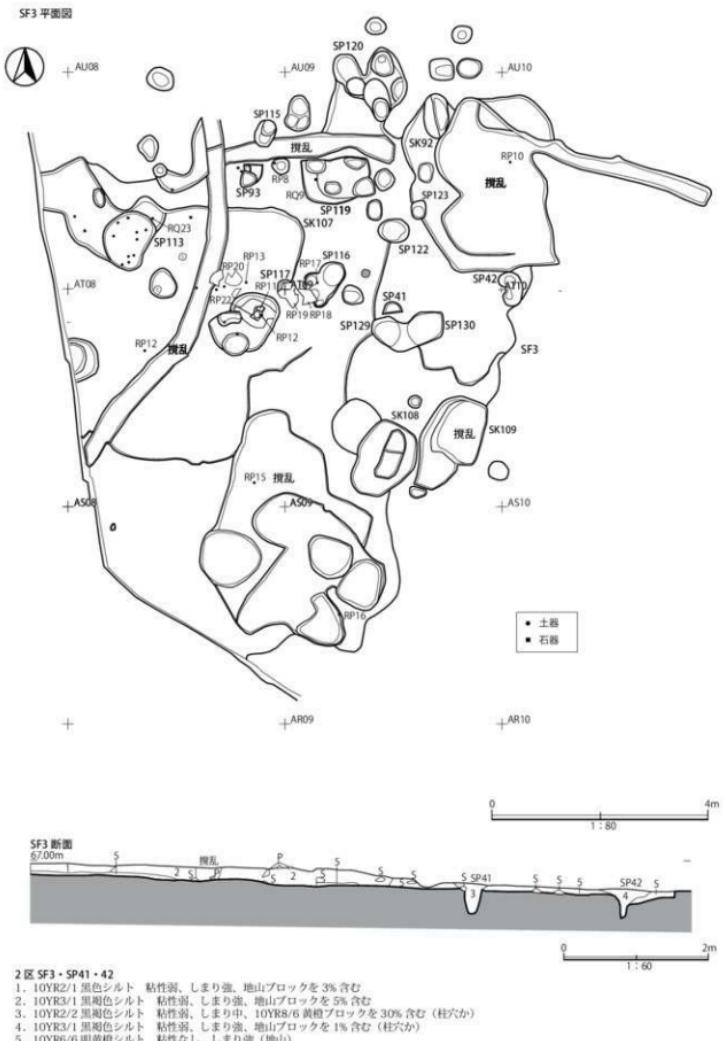
1. 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性弱、しまり強、直径 5~10mmのバミス粒を 5% 含む

第 78 図 2 区 SP177・179・180・181・199・232・SK161

III 調査成果

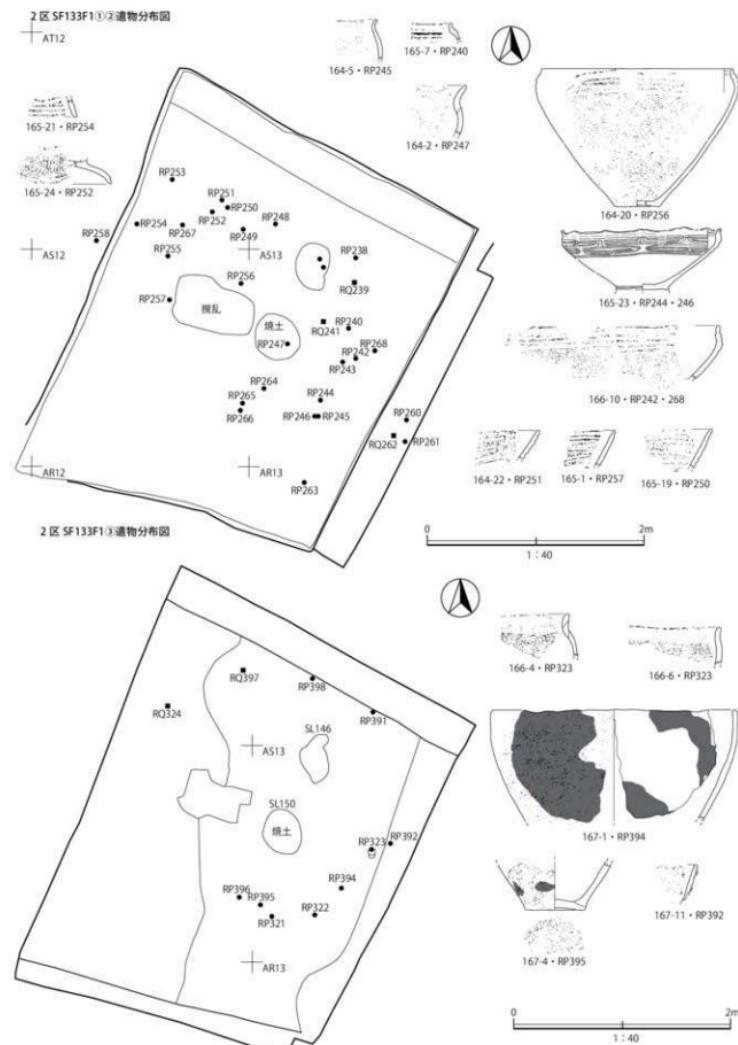


第79図 2区 SF3 平面図

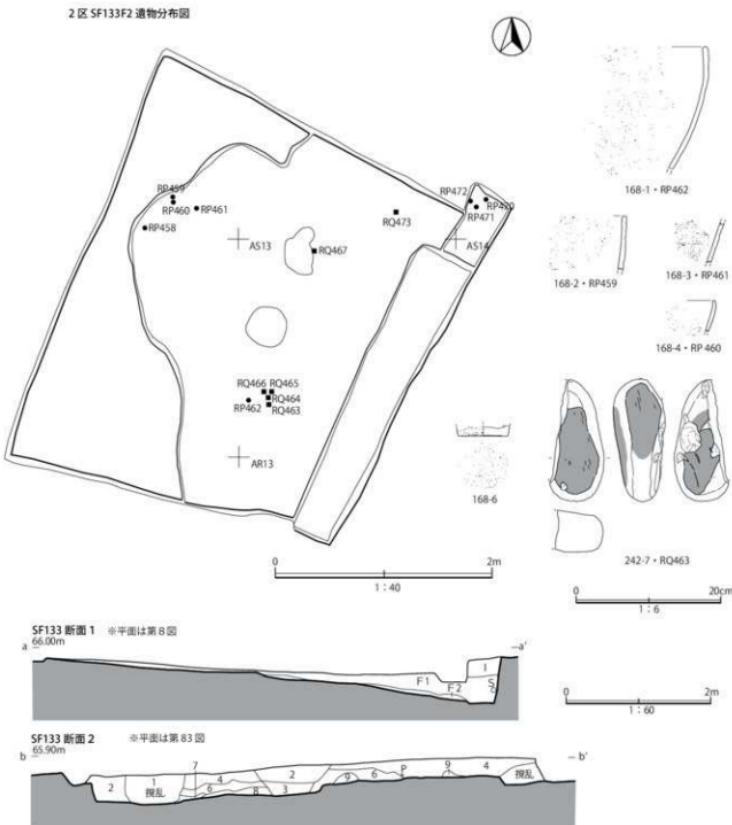


第 80 図 2 区 SF3 完掘状況

III 調査成果



第81図 2区 SF133 遺物分布図1



## 2区 SF133 断面1

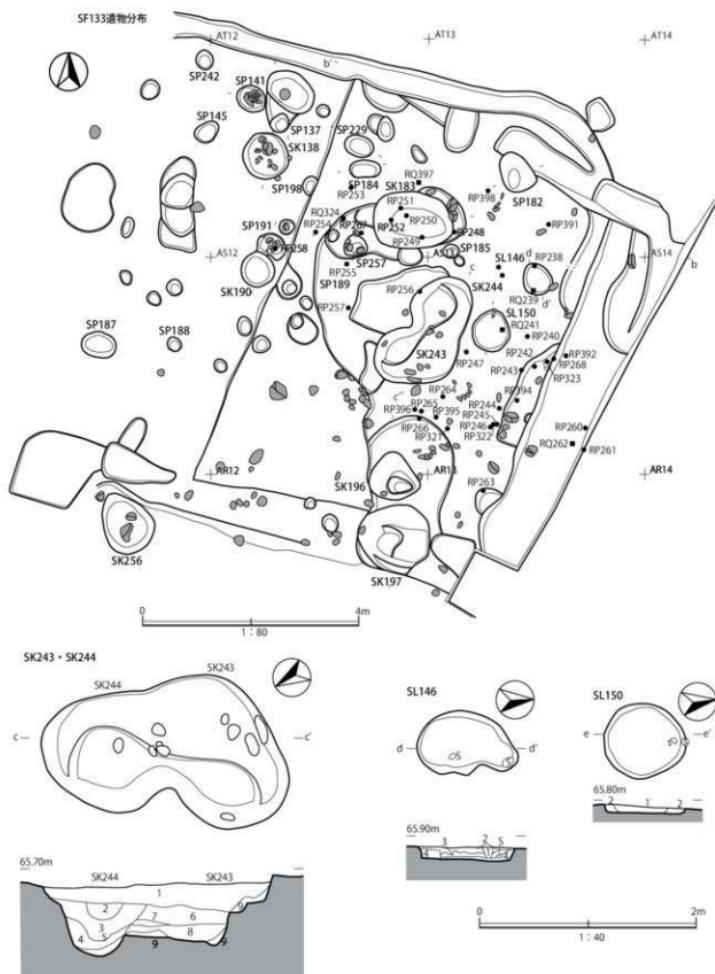
1. 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性弱、しまり中、直径 5-10 mm程度のバミス粒を 2% 含む
2. 10YR2/1 黒色シルト 粘性弱、しまり中、地山ブロックを挟むに 3% 含む (上層)
3. 10YR2/1 黒色シルト 粘性弱、しまり中、直径 1-3 mm程度のバミスを 1% 含む (F1)
4. 10YR2/1 黒色シルト 粘性弱、しまり強、地山ブロックを挟むに 1% 含む (F2)
5. 10YR2/1 黒褐色シルト 粘性弱、しまり強 (F2)
6. 10YR3/1 黑褐色シルト 粘性強、しまり強、地山ブロックを挟むに 7% 含む
7. 10YR2/1 黑色シルト 粘性弱、しまり強、地山ブロックを挟むに 1% 含む
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、しまり中、地山ブロックを挟むに 20% 含む
9. 10YR6/6 明黄褐色細砂 粘性なし、しまり強。10YR2/1 黒色ブロックを 10% 含む (地山)

## 2区 SF133 断面2

1. 10YR2/1 黒色シルト 粘性弱、しまり強、地山ブロックをブロック状に 10% 含む (擾乱)
2. 10YR2/1 黑色シルト 粘性弱、しまり中、地山ブロックを挟むに 3% 含む (上層)
3. 10YR2/1 黑色シルト 粘性弱、しまり中、直径 1-3 mm程度のバミスを 2% 含む (F1)
4. 10YR2/1 黑色シルト 粘性弱、しまり強、地山ブロックを挟むに 1% 含む (F2)
5. 10YR2/1 黑褐色シルト 粘性弱、しまり強 (F2)
6. 10YR3/1 黑褐色シルト 粘性強、しまり強、地山ブロックを挟むに 7% 含む
7. 10YR2/1 黑色シルト 粘性弱、しまり強、地山ブロックを挟むに 1% 含む
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性弱、しまり中、地山ブロックを挟むに 20% 含む
9. 10YR6/6 明黄褐色細砂 粘性なし、しまり強。10YR2/1 黒色ブロックを 10% 含む (地山)

第82図 2区 SF133 遺物分布図2

III 調査成果



2区 SL146

1. 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性中、しまり弱
2. 5YR6/8 棕色シルト 粘性弱、しまり強、10YR2/1 黒色シルトブロックを 3%、炭化物を微量含む（焼土）
3. 10YR2/2 黒褐色細砂 粘性なし、しまり強、直径 1-3 mm程度のバミスを 1% 含む

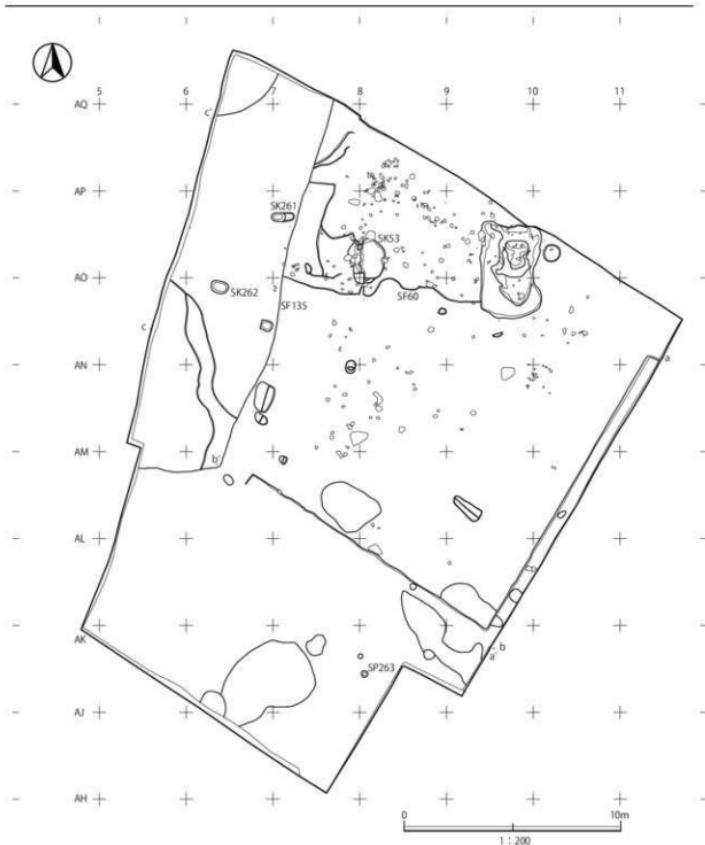
第 83 図 2 区 SF133 下遺物分布・SK243・244・SL146・150

## 2 区 SL150

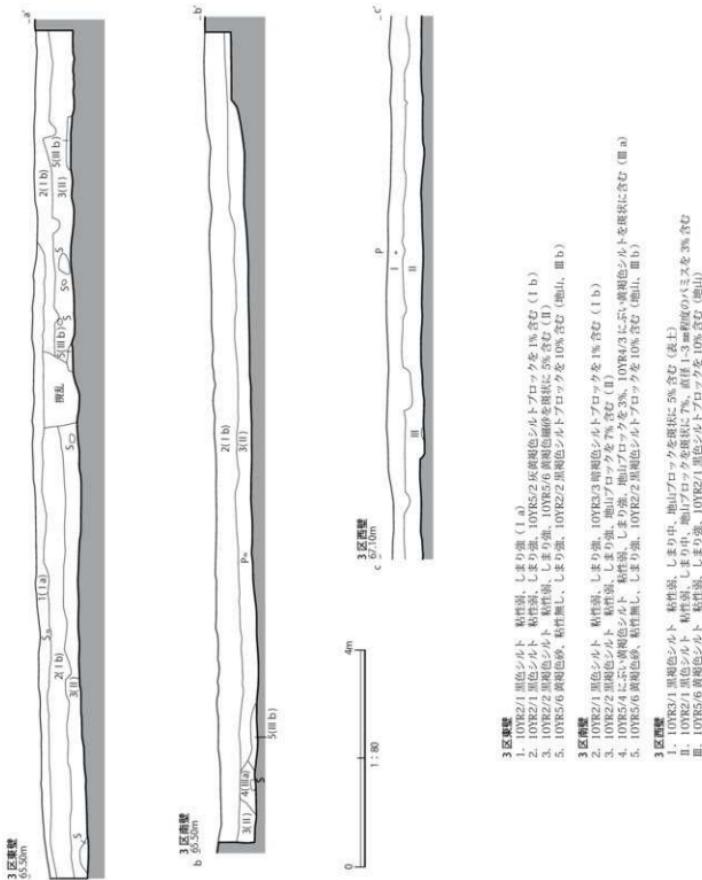
1. IOYR2/4 黒褐色シルト 粘性弱、しまり強、直徑 5 mm 程度のバミス粒を 3% 含む (地山)
2. IOYR2/1 黒色砂混じりシルト 粘性やや弱、しまりやや強、直徑 5 mm 程度の焼上ブロックを 3% 含む

## 2 区 SK243・244

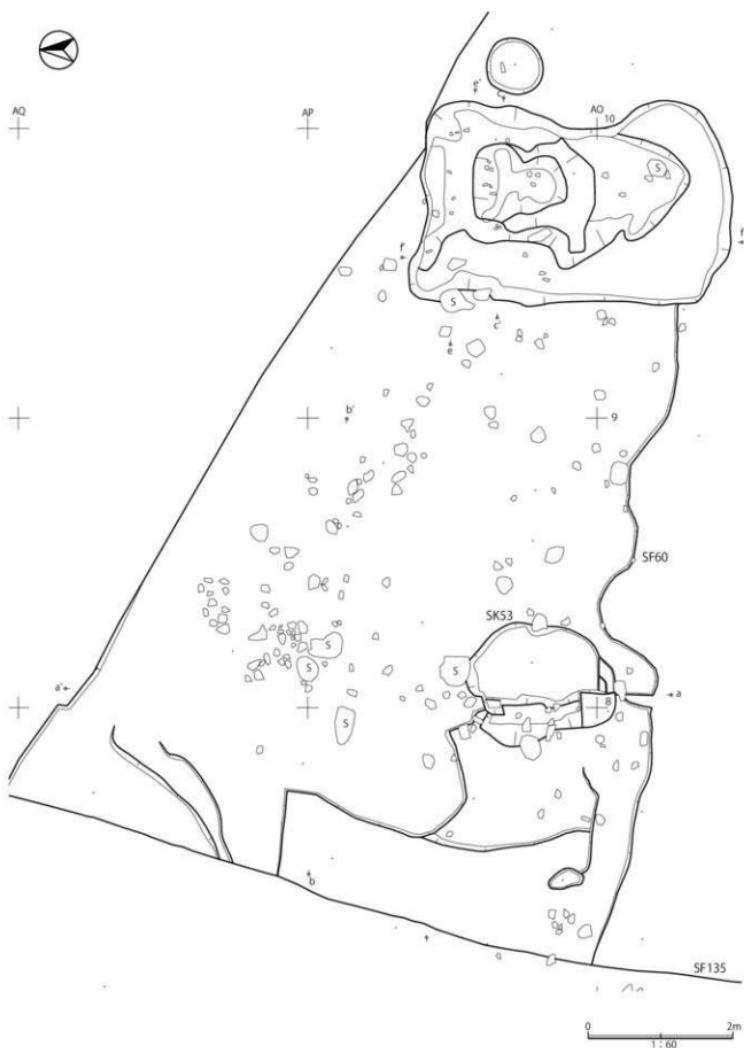
1. IOYR2/1 黒色シルト 粘性弱、しまり中、地山ブロックを 7%、直徑 1-2 mm 程度のバミス粒を 1% 含む
2. IOYR2/2 黒褐色シルト 粘性弱、しまり中、地山ブロックを 3% 含む
3. IOYR2/2 黒褐色シルト 粘性弱、しまり強、地山ブロックを 20% 含む
4. IOYR2/2 黒褐色シルト 粘性弱、しまり強、地山ブロックを 5% 含む
5. IOYR2/2 黒色シルト 粘性弱、しまり中
6. IOYR2/2 黒褐色シルト 粘性弱、しまり強、地山ブロックを 5%、直徑 1 mm 程度のバミス粒を 1% 含む
7. IOYR3/1 黒褐色シルト 粘性弱、しまり中、地山砂を 3% 含む
8. IOYR2/2 黑褐色シルト 粘性弱、しまり強、地山ブロックを 15% 直徑 1-2 mm 程度のバミス粒を 2% 含む
9. IOYR6/8 明黄褐色細砂 粘性なし、しまり強 (地山)



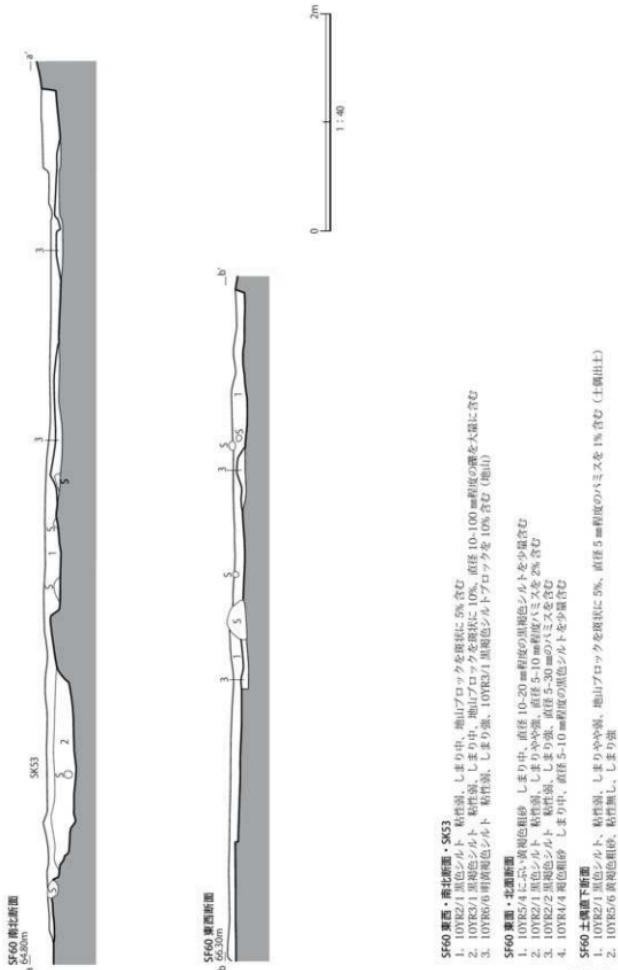
第 84 図 3 区造構配図



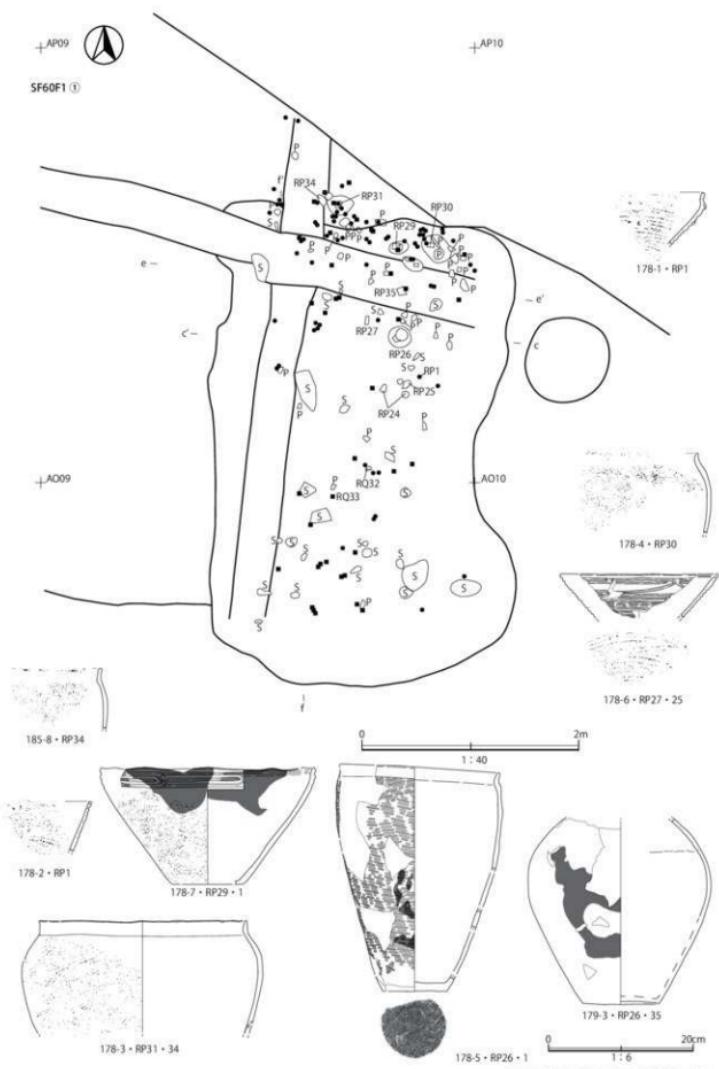
第85図 3区調査区断面図



第 86 図 3 区 SF60 平面図

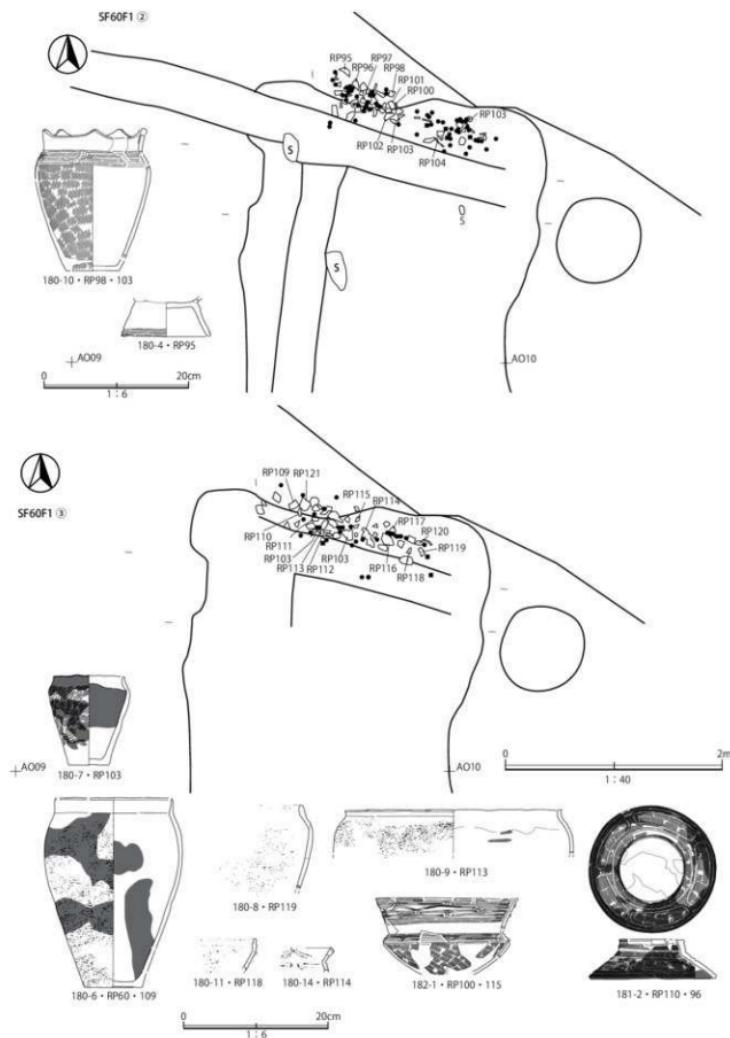


第 87 図 3 区 SF60 断面図

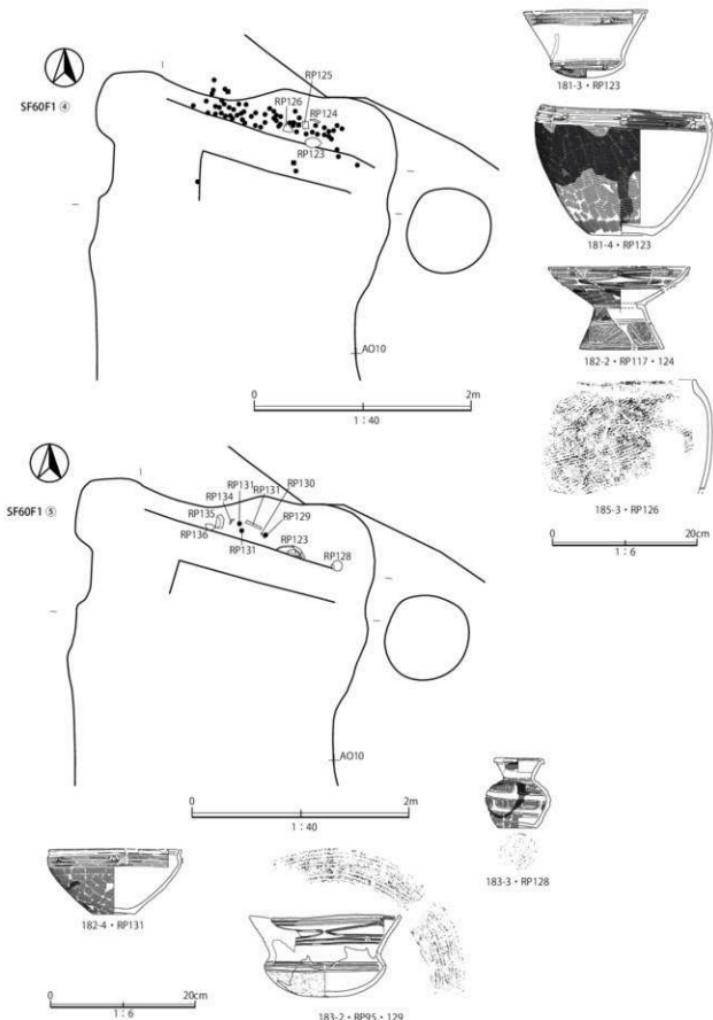


第88図3区 SF60F1①遺物平面図1

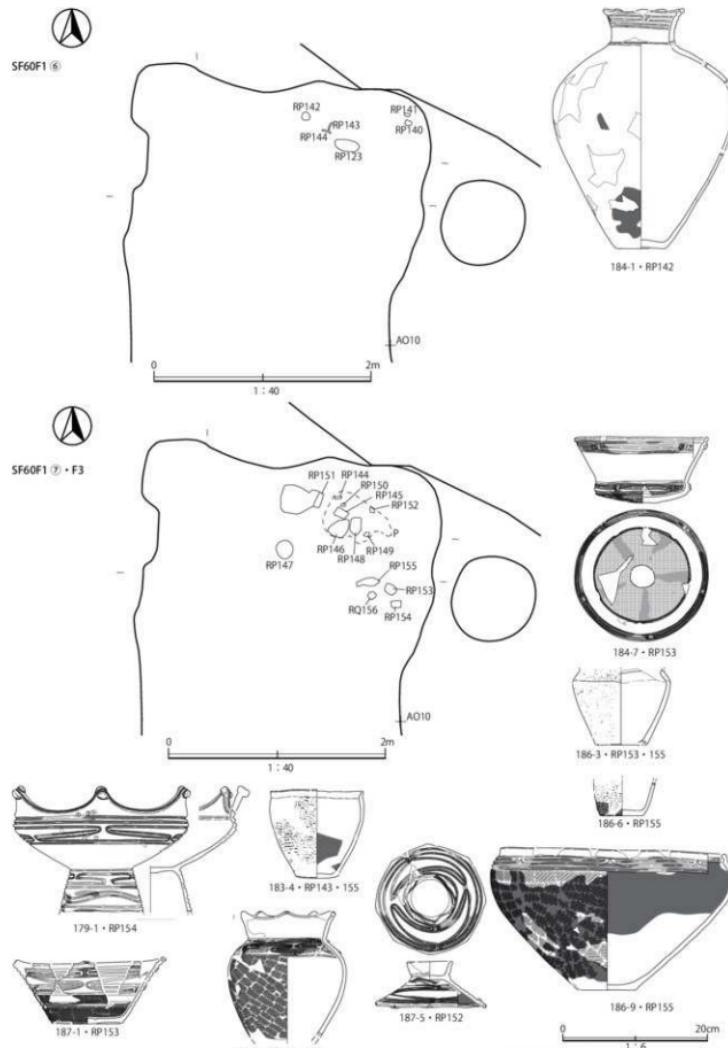
III 調査成果



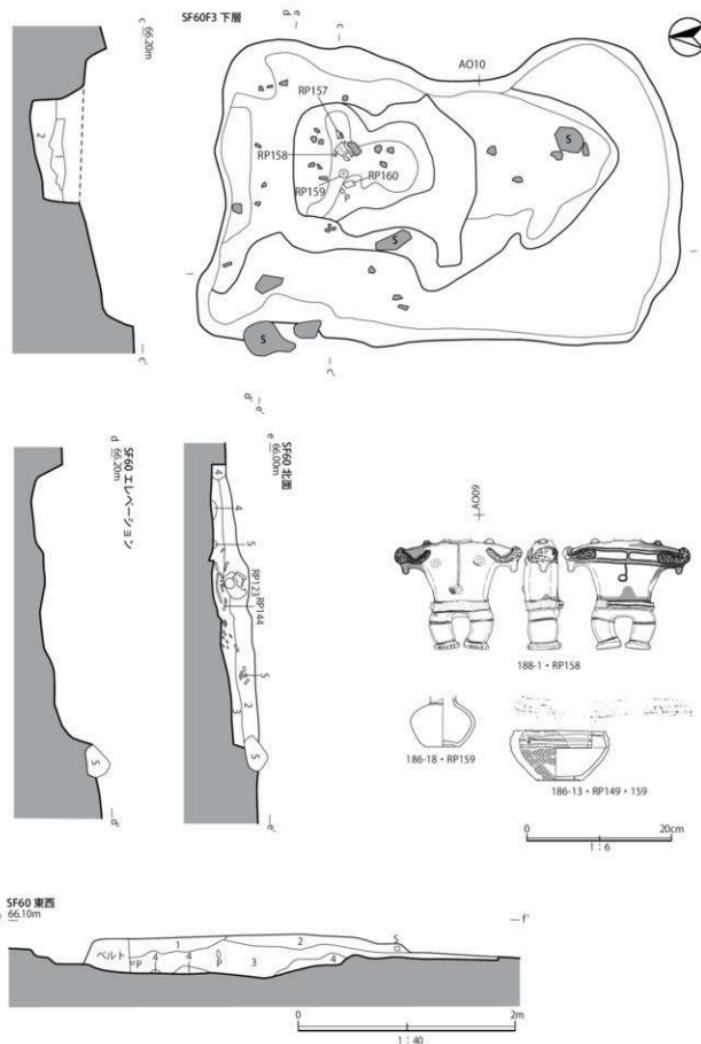
第89図 3区 SF60F1 ②③遺物平面図2



第90図3区SF60F1④⑤遺物平面図3

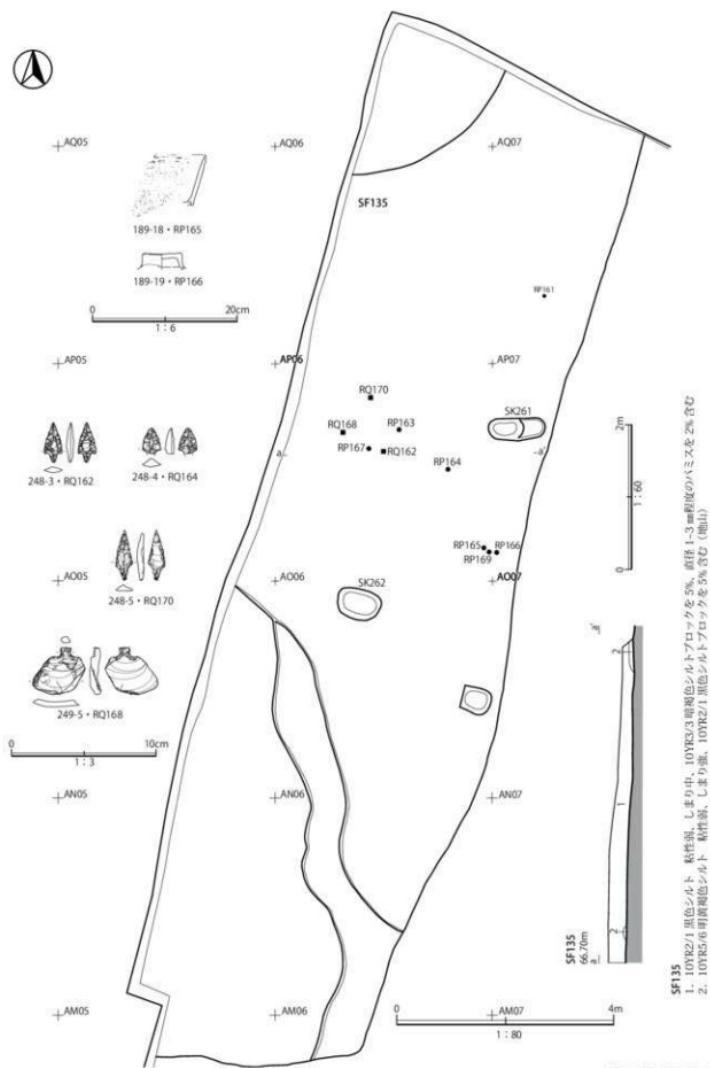


第91図3区 SF60F2・F3 遺物平面図4



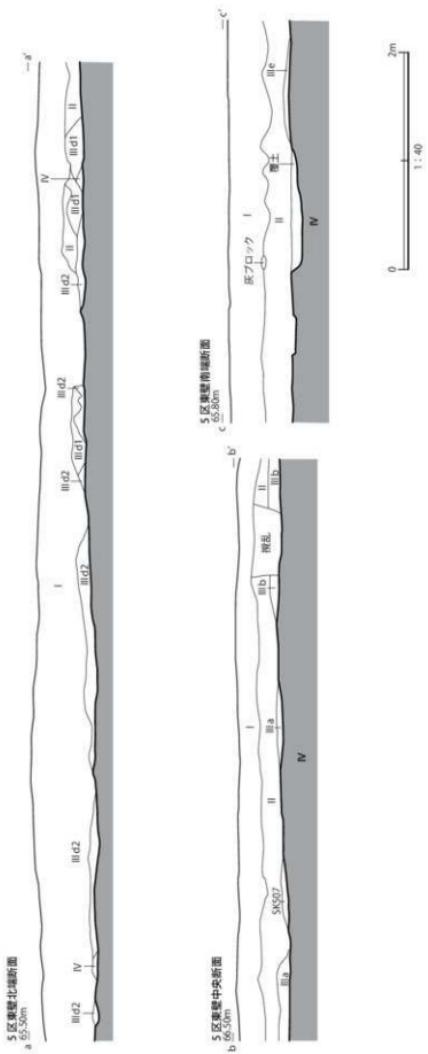
第92図3区 SF60F3 遺物平面図5・断面図

III 調査成果



第93図3区 SF135

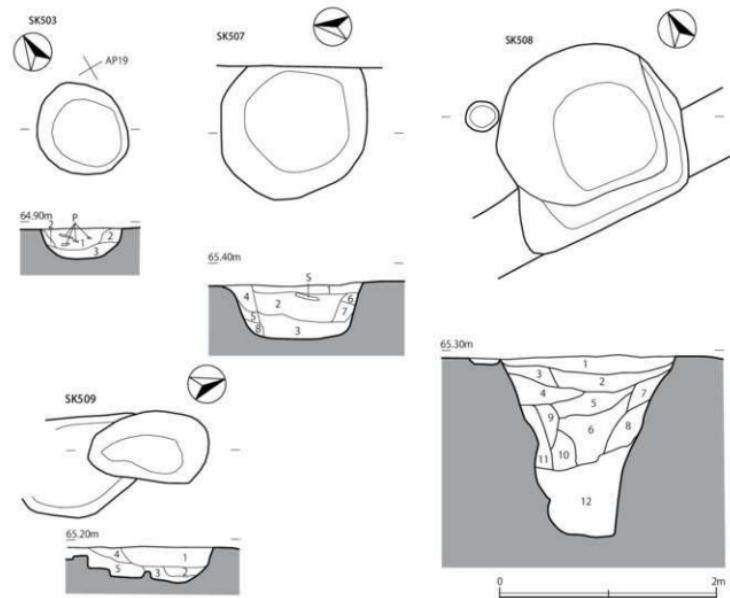
SF135  
1. IOYR21 黒色シルト、粘性弱、しまり強、IOYR3 黄褐色シルト、粘性弱、しまり強、IOYR21 黒色シルト  
2. IOYR26 明黄色シルト



**第94図 東側斜面断面図**

5区東側  
I. 10Y1/2 黒色シルト 粘性強、しまりやや強、相の現れ多く  
II. 10Y1/2 黒色シルト 粘性強、しまりやや強、10Y8/4 黏土層 (厚径5~10 mm) を1%含む  
III. a. 10Y2/3 黄褐色シルト 黄褐色、しりやや強、5 mm幅の風化層 3%含む  
III. b. 10Y2/3 黄褐色シルト 黄褐色、しまりやや強、10~30 mmの層 3%含む  
III. c. 10Y2/2 黑色砂質シルト 黒色シルトブロックを (厚径5~10 mm) を3%含む  
IV. d. 1. 黄褐色砂質シルト 黄褐色、しまりやや強、5 mm幅の風化層 (厚径20 mm) を1%含む  
IV. d. 2. 黑色砂質シルト 黒褐色、しまりやや強、5 mm幅の風化層 (厚径20~50 mm) を10%含む  
V. 10Y8/4 黑色シルト 黒褐色、しまりやや強、5 mm幅の風化層 (厚径10~30 mm) を10%含む  
VI. 10Y8/4 黑色砂質シルト 粘性やや強、しまりやや強、5 mm幅の風化層 (厚径5~10 mm) 含む  
層上. 10Y8/4 黑色シルト 黏性やや強、しまりやや強、5 mm幅の風化層 (厚径10~30 mm) 含む  
組込. 10Y8/4 黑色砂質シルト 粘性強、しまり強、黒色シルトブロック (厚径10~30 mm) を10%含む複数

### III 調査成果



#### SK503

1. I0YR2/1 黒色シルト 粘性やや弱い、しまりやや強い、直徑 5 mm の褐色礫を 2% 含む
2. I0YR3/1 黒褐色シルト 粘性弱い、しまり弱い、I0YR5/6 黄褐色シルトブロックを 3% 含む
3. I0YR4/2 灰褐色シルト 粘性弱い、しまり弱い、I0YR5/6 黄褐色シルトブロックを 3% 含む

#### SK507

1. I0YR2/1 黒色砂混じりシルト 粘性やや弱い、しまりやや強い、褐色砂ブロック (10 mm~30 mm) を 10% 含む
2. I0YR3/3 暗褐色砂 粘性やや弱い、黒褐色シルトブロック (10~20 mm) を 10% 含む
3. I0YR3/3 暗褐色シルト混じり砂 粘性やや弱い、しまりやや強い、黒褐色シルトブロック (10~30 mm) を 20% 含む
4. I0YR2/1 黑色砂混じりシルト 粘性やや弱い、しまりやや強い、褐色砂ブロック (10 mm 程度) を 5% 含む
5. I0YR2/2 黑色砂混じりシルト 粘性やや弱い、しまりやや強い、褐色砂ブロック (直徑 10 mm) を 7% 含む
6. I0YR2/2 黑色砂混じりシルト 粘性やや弱い、しまり中、褐色砂ブロック (直徑 5~10 mm) を 10% 含む
7. I0YR2/2 黑褐色シルト混じり砂 褐色砂ブロック (直徑 5~10 mm) を 3% 含む
8. I0YR2/2 黑色シルト 粘性中。しまりやや弱い、褐色砂ブロック (直徑 5~10 mm) を 2% 含む

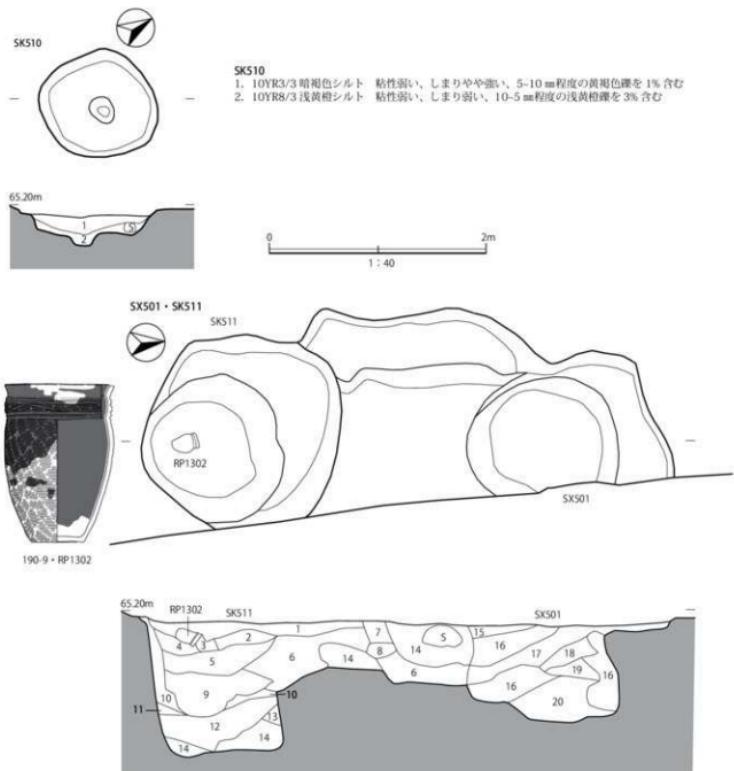
#### SK508

1. I0YR2/1 黑色砂混じりシルト 粘性やや弱い、しまりやや強い、I0YR4/4 褐色バニス粒 (直徑 5~10 mm) を 2% 含む
2. I0YR2/1 黑色砂混じりシルト 粘性やや弱い、しまりやや強い、I0YR4/4 褐色バニス粒 (直徑 5~10 mm) を 3% 含む
3. I0YR2/1 黑色砂混じりシルト 粘性やや弱い、しまりやや強い、褐色バニス粒 (直徑 5 mm 程度) を 1% 含む
4. I0YR2/1 黑色砂混じりシルト 粘性やや弱い、しまり中、褐色バニス粒 (直徑 5~10 mm) を 3% 含む
5. I0YR2/1 黑色砂混じりシルト 粘性やや弱い、しまり中、褐色バニス粒 (直徑 5~10 mm) を 5% 含む
6. I0YR2/1 黑色砂混じりシルト 粘性やや弱い、しまり中、褐色バニス粒 (直徑 5~10 mm) を 7% 含む
7. I0YR2/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱い、しまりやや強い、I0YR4/4 褐色バニス粒 (直徑 5~10 mm) を 3% 含む
8. I0YR2/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性やや弱い、しまりやや強い、褐色バニス粒 (直徑 5 mm 程度) を 1% 含む
9. I0YR2/2 黑褐色シルト混じり砂 粘性弱い、しまりやや強い、褐色砂を 5% 含む
10. I0YR2/2 黑褐色シルト混じり砂 粘性弱い、しまり中、褐色の粗砂 (3~5 mm) を 3% 含む
11. I0YR2/2 黑褐色シルト混じり砂 粘性弱い、しまりやや強い、褐色砂を 5% 含む
12. I0YR2/1 黑色砂混じりシルト 粘性中、しまり中、5 mm 程度の褐色礫を 3%、3 mm 程度のぶい黄褐色シルトブロック 1% 含む

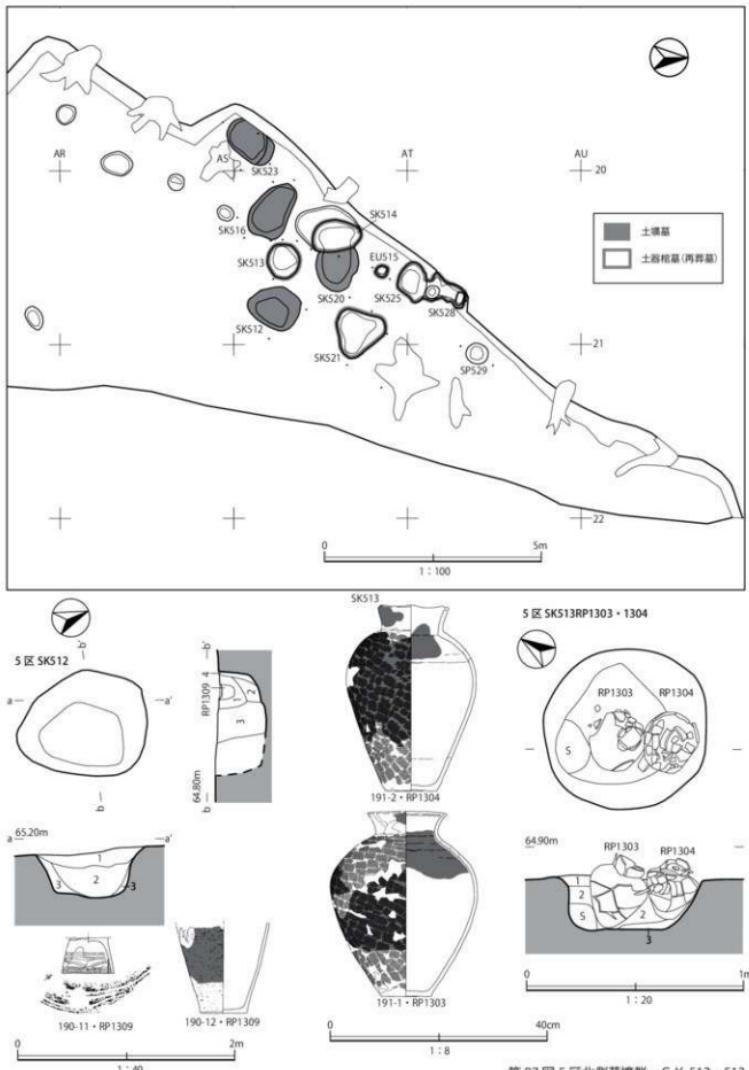
#### SK509

1. I0YR2/1 黑色シルト 粘性やや弱い、しまりやや強い、I0YR4/4 褐色バニス粒 (直徑 5 mm) を 1% 含む
2. I0YR2/1 黑色砂混じりシルト 粘性やや弱い、しまりやや強い、I0YR4/4 褐色バニス粒 (直徑 5 mm) を 1% 含む
3. I0YR2/2 黑褐色シルト混じり砂 粘性やや弱い、しまりやや強い、褐色砂ブロック (10~30 mm) を 10% 含む
4. I0YR2/2 黑褐色シルト混じり砂 粘性弱い、しまりやや強い
5. I0YR2/3 黑褐色シルト混じり砂 粘性弱い、しまりやや強い、5 mm のバニス粒を 1% 含む

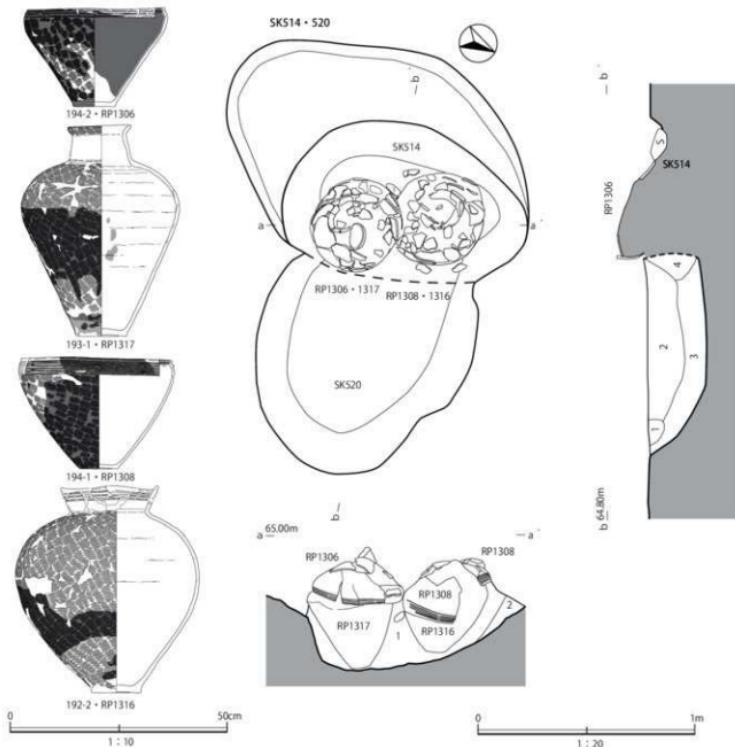
第 95 図 5 区 K 503・507・508・509



第96図 5区SK 510・511・SX 501



第97図 5区北側墓壙群・SK 512・513

**SK512 東西**

1. IOYR2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱い、しまり中、直徑 3mm 程度のに示す黄緑色シルトを 1% 含む
2. IOYR2/1 黒色砂混じりシルト 粘性中、しまり中、直徑 5mm 程度の褐色礫を 3%、10mm 程度の白色礫を 1% 含む
3. IOYR4/4 黒色砂混じりシルト 粘性やや弱い、しまり弱い、直徑 5-10mm 程度の褐色礫を 1% 含む

**SK512 南北**

1. IOYR2/2 黒褐色シルト 粘性中、しまり中、直徑 5-20mm 程度の褐色礫を 5% 含む
2. IOYR2/3 黒色砂混じりシルト 粘性やや弱い、しまりやや弱い、直徑 5-10mm 程度の褐色礫を 3% 含む
3. IOYR4/3 にぶく黃褐色砂混じりシルト 粘性やや弱い、弱い、直徑 5-20mm 程度の褐色礫を 3% 含む

**SK514**

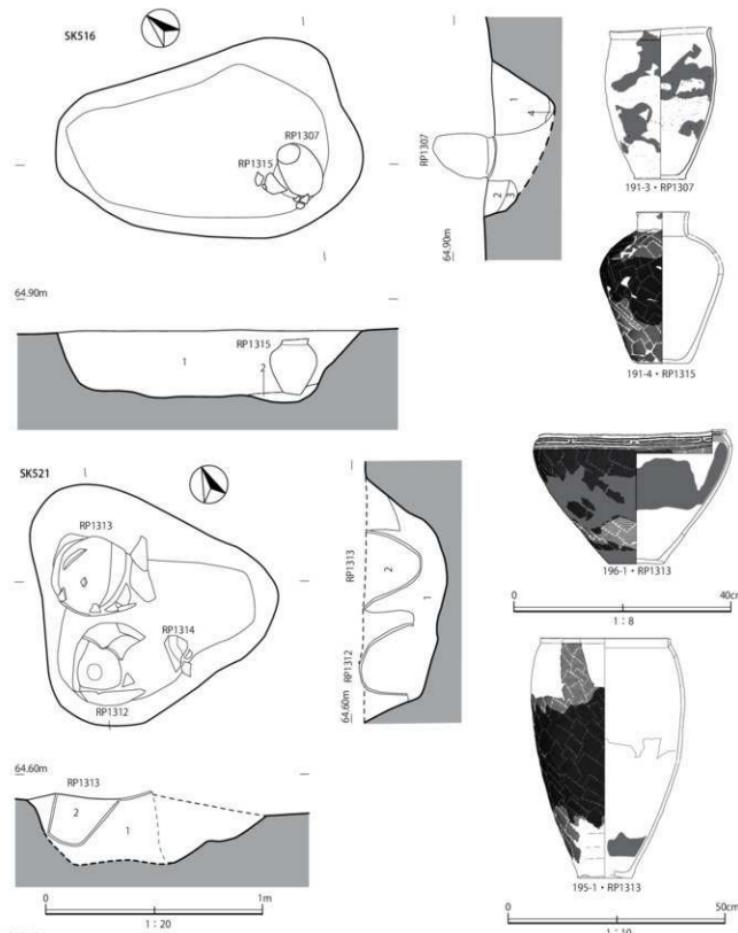
1. IOYR2/2 黒褐色シルト 粘性なし、しまり弱い、黄褐色シルト粒を微量含む
2. IOYR2/2 黒色シルト 粘性なし、しまり弱い、黄褐色シルト粒を微量含む
3. IOYR4/2 灰黄褐色シルト 粘性なし、しまり強い、黄褐色シルト粒を微量含む

**SK520**

1. IOYR4/4 黄褐色 しまりなし、地山ブロックか
2. IOYR2/2 黑色シルト 粘性やや弱い、しまりやや強い、直徑 5mm 程度の褐色礫を 1% 含む
3. IOYR3/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性弱い、しまりやや強い、地山由来の褐色砂を 5% 含む
4. IOYR2/3 黑褐色シルト混じり しまりやや強い、5-10mm 程度の褐色礫を 2% 含む

第 98 図 5 区 SK 514

### III 調査成果



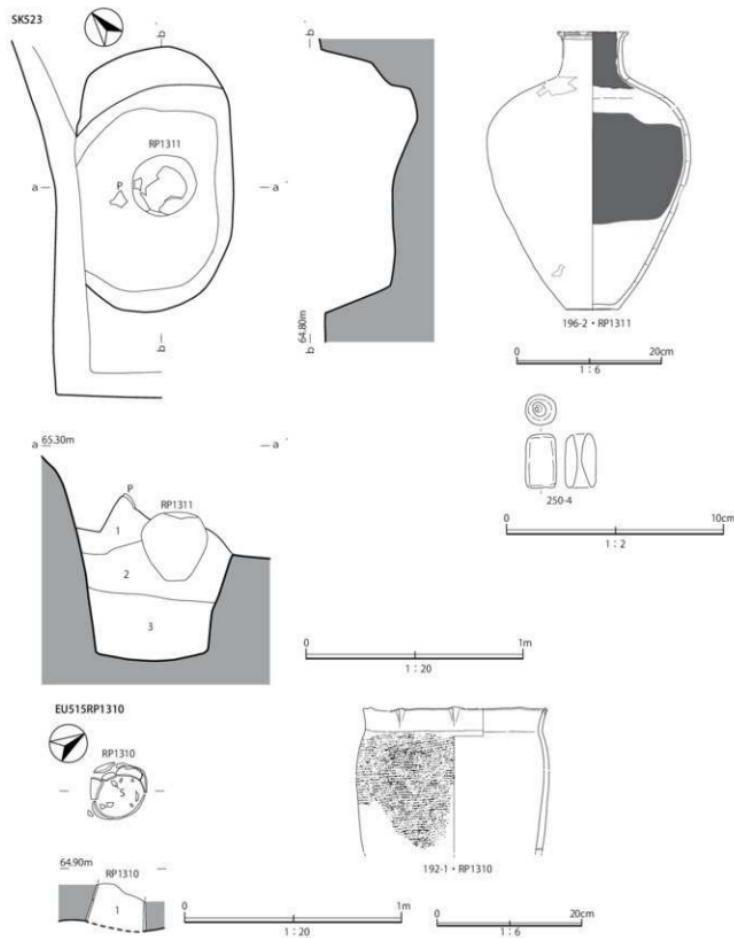
#### SK516

1. 10YR2/1 黒色混じりシルト 粘性やや弱い、しまりやや弱い、直徑 1-2 mm程度の褐色シルトを 3% 含む
2. 10YR2/2 黒褐色砂混じりシルト 粘性弱い、しまり中、直徑 0.1-0.5 mm程度の褐色砂礫を 1% 含む
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂混じりシルト 粘性やや弱い、しまりやや弱い、直徑 5-10 mm程度の褐色礫を 1% 含む
4. 7.5YR2/2 黑褐色砂混じりシルト 粘性中、しまりやや弱い、5 mm程度の灰白礫を 1%、赤色砂 (10R4/6、粘性なし、しまりなし) を含む

#### SK521

1. 10YR2/3 黑褐色砂混じりシルト しまりやや弱い 10-20mmの礫を 3% 含む
2. 10YR2/2 黑褐色シルト しまりやや弱い 粘性やや弱い

第99図5区SK516・521

**EUS15**

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性なし、しまり中、直徑 1mm以下の褐色シルトを微量含む

**SK523**

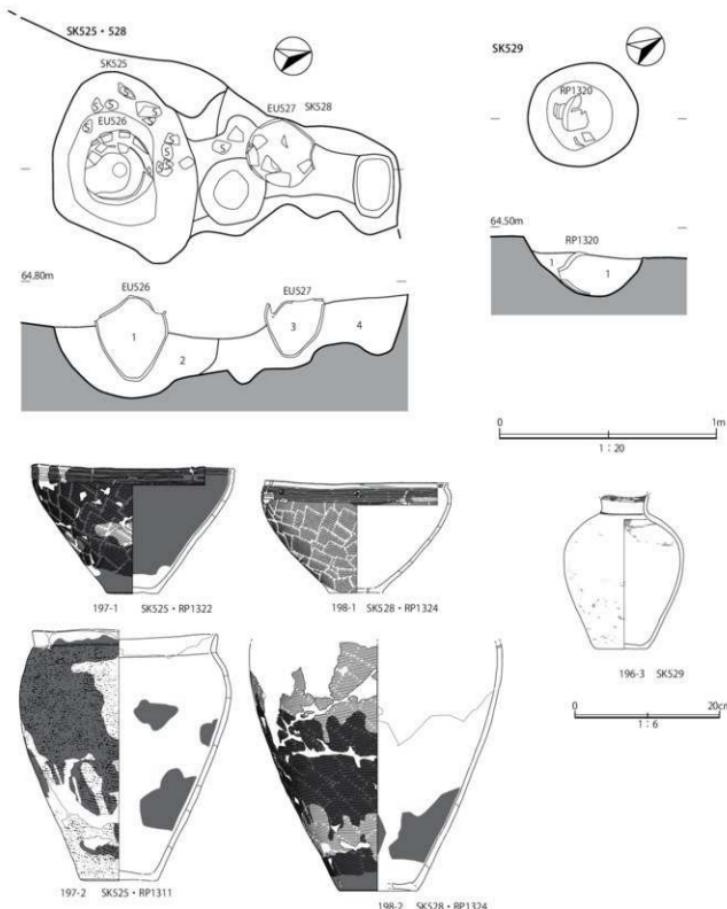
1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性や弱い、しまり中、根による複雑多い、表上の影響あり

2. 10YR2/1 黒色砂混じりシルト 粘性やや弱い、しまりやや強い、直徑 5-10mm程度のバミスを 1% 含む

3. 10YR2/3 黒褐色砂混じりシルト 粘性やや弱い、しまり強い、直徑 10-20mm程度の小礫を 3% 含む

第 100 図 5 区 S K 523 • EUS15

### III 調査成果



#### SK525 + 528

1. 10YR2/1 黒褐色シルト しまり・粘性中程度、径3~5mm程度の褐色礫を1%含む
2. 10YR2/2 黒褐色砂混じりシルト しまり中、粘性少や弱い、径5mm未満の褐色礫を1%含む
3. 10YR3/2 黒褐色シルト しまりやや強い、粘性中程度。径8mm未満の褐色礫を1%含む
4. 10YR2/3 黒褐色シルト しまりやや強い、粘性中程度。褐色砂を1%、3~5mm程度のにぶい黄褐色礫を1%含む

#### SP529

1. 10YR2/2 黑褐色シルト混じり砂 しまり中程度、径10~20mmの礫を5%含む

第101図 5区SK525 + 528 + 529